

子どもの心をゆり動かす造形教育

第39回 全国造形教育研究大会
第36回 全道造形教育研究大会

旭川大会





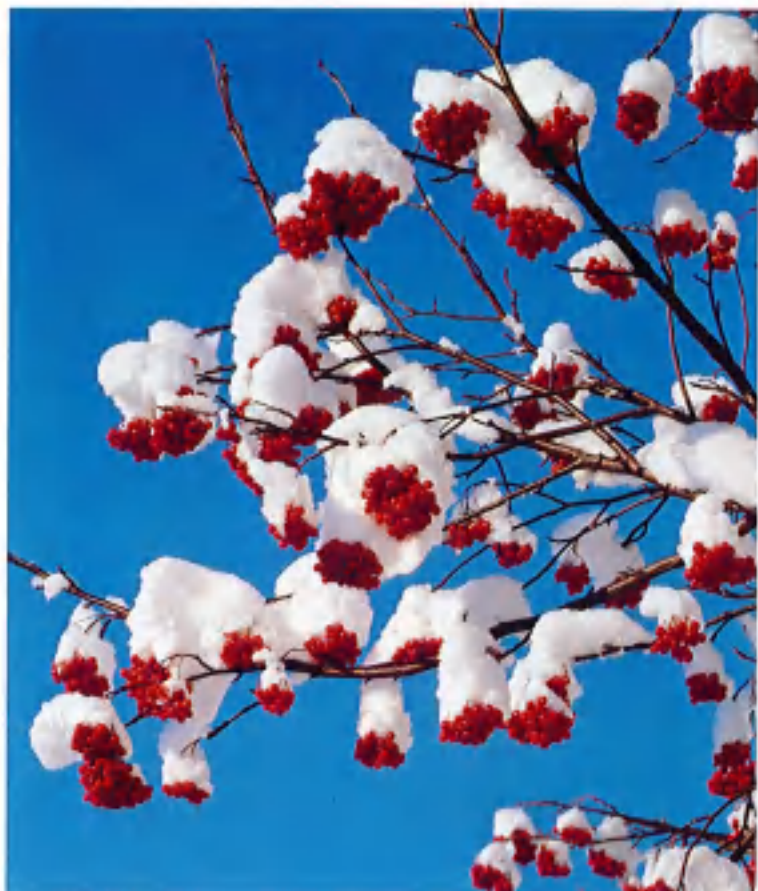
▲旭川冬まつり（メインステージ）



▲旭川市全影



◀旭川買物公園（ふん水）



▲旭橋

◀旭川のシンボル ナナカマド



▲紅葉



▲冬まつり氷像（夢の国）

◀冬まつり雪像（しらゆき姫）

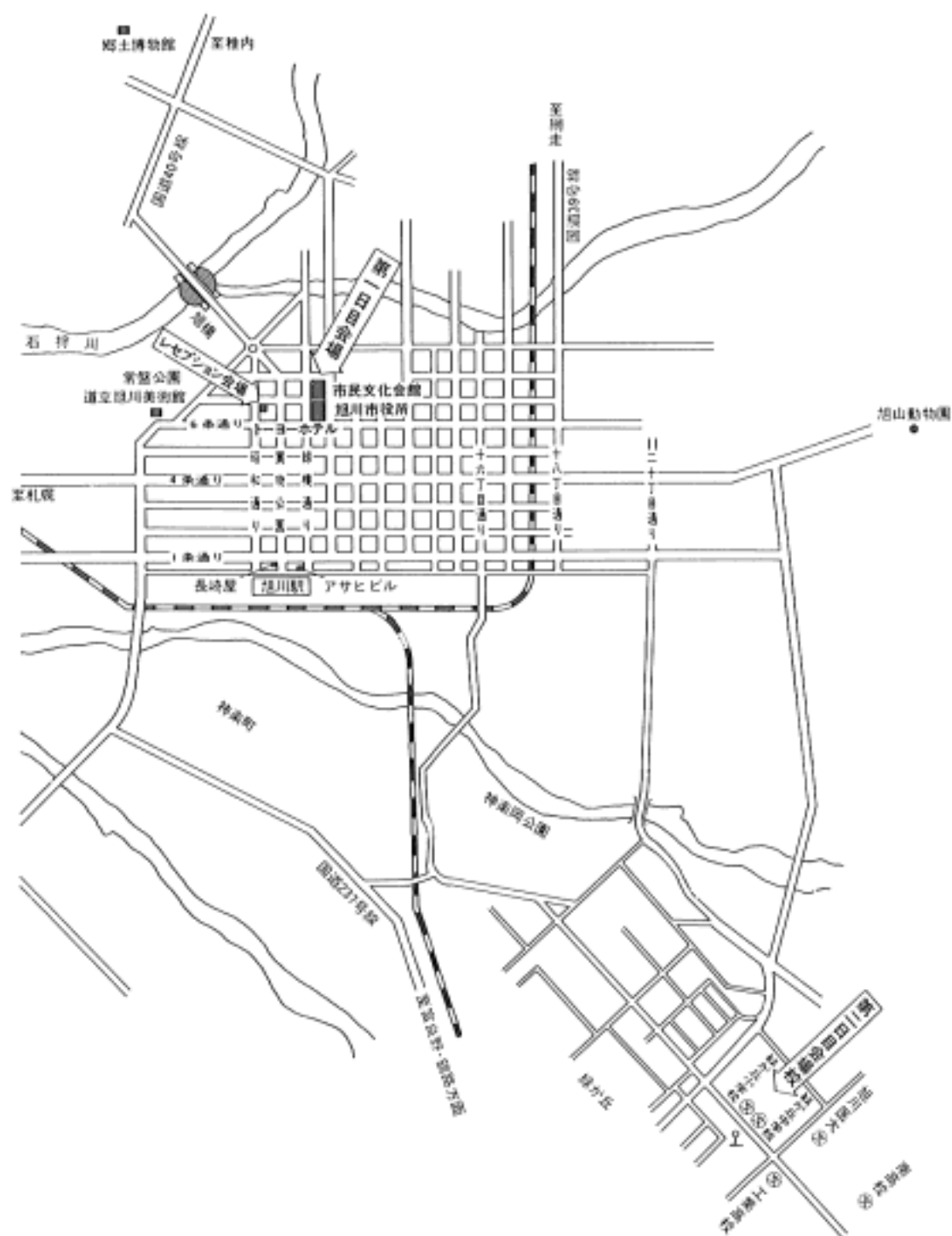


▲冬まつり氷像（野生の斗い）

— 目 次 —

○ 会 場 案 内 図	3
○ 大 会 要 項	4
○ 日 程	5
○ 換 拶	6
○ 祝 辞	8
○ 開 会 式 次 第	11
○ 研 究 の 概 要	12
○北海道造形教育連盟主題	
○旭川大会テーマ	16
○ ア ト ラ ク シ ョ ン	20
○ 記 念 講 演	21
○ 会 場 配 置 図	22
○幼稚園・小学校部会	
○中学校・高等学校・大学部会	23
○ 授 業 ・ 分 科 会 一 覧	24
○公開保育・公開授業	
○分科会 A	25
○分科会 B	26
○ 授 業 案	31
○ 分 科 会 A 提 言	81
○ 分 科 会 B 提 言	145
○ 全 国 造 形 教 育 研 究 大 会 の あ ゆ み	184
○ 全 国 教 育 連 盟 規 約	185
○ 北 海 道 造 形 教 育 研 究 大 会 の あ ゆ み	186
○ 北 海 道 造 形 教 育 連 盟 規 約	187
○ 旭 川 大 会 役 員 一 覧	188

会場案内図



第39回 全国造形教育研究大会
第36回 全道造形教育研究大会

旭川大会

1. 主催 全国造形教育連盟
北海道造形教育連盟
旭川市教育研究会 図工美術部
2. 後援 文 部 省
北 海 道
北海道教育委員会
旭 川 市
旭川市教育委員会
北海道国公立幼稚園教育研究会
社団法人北海道私立幼稚園協会
北海道社会福祉協議会 保育協議会
北海道小学校長会
北海道中学校長会
北海道高等学校長協会

3. 大会
テーマ

「子どもの心をゆり動かす造形教育」

—つくる心のひろがりと深まりを求めて—

4. 会期 昭和61年8月1日(金)・8月2日(土)・8月3日(日)

5. 会場 (1) 全体会場

●旭川市民文化会館

(校種別分科会、全国代議員会全体会、記念講演、幼小中高総合作品展)

(2) 授業・分科会場

●旭川市立緑が丘小学校……幼稚園・小学校

●旭川市立緑が丘中学校……中学校・高等学校・大学

(公開授業、分科会、全国幼児児童生徒作品展)

6. 日程

●大会第1日：8月1日(金) 旭川市民文化会館

	9:00	9:30	10:30	11:00	12:00	13:00	14:30	16:00	18:00	19:30
		受付	校種別分科会	全国代議員会	昼食	アフタヌーン	全体会	打合せ		
				受付			開会式	記念講演		レセプション
	旭川 幼児・児童・生徒作品展 (文化会館展示室) — 2日まで									

●大会第2日：8月2日(土) 緑が丘小学校(幼・小)、緑が丘中学校(中・高・大)

	9:00	10:00	10:50	11:10	12:30	13:30	15:30
幼保小中高	受付	公開授業	芸術活動	分科会A	昼食・中央講義	分科会B	閉会式
大学					分科会		
	全国 幼児・児童・生徒作品展						

●大会第3日：8月3日(日)

研 修 視 察

挨拶



大会運営委員長

柳原寿夫

北の大地に萬物躍動の季節を迎えました。全国からご参会の会員の皆様ようこそいらっしゃいました。

旭川市図工・美術部員をはじめ、北海道造形連盟会員一同心よりご歓迎申し上げます。

この研究会の開催に当っては、お引受けしてから約1ヶ年という誠に短い準備期間でございましたので、種々手落ちがあるのではないかと危惧致しております。

しかし「真心」での応接に相努めますので、失礼の段はご寛容いただきたく存じます。

私達には、ささやかながら風雪に耐えて実践してきた実績があります。それをありのままにご提示して図工・美術教育の前進がはかられればと考え無謀とも思える短期の準備期間で今日の日を迎えました。

このことは誠に光栄であると共に感激でもあります。

又図工・美術部員の結束がはかられたという付随的な効果も見逃すことができません。

今日、教育界にあっては、臨教審をはじめとして種々の課題や提言がなされております。人間が本来持っている「美しいものを愛する心」を育て、児童生徒の「みずみずしい表現」を今こそ大切にしていかなければなりません。

そのための実践上の諸課題を追求、協議し図工・美術教育の進展にいささかなりとも貢献ができれば誠に幸いです。

更に本大会を通して、図工・美術教育が豊かな心を持った人間形成のために果たす役割を一層明確にすることができればと考えております。

最後になりましたが、ご指導、ご支援下さいました多くの各機関、団体の方々に厚くお礼申し上げます。

今日、明日の2日間リラックスした雰囲気の中での研修をお願い致しますと共に、夏の北海道を満喫して下さるようお願い致します。挨拶といたします。



大会会長
北海道造形教育連盟委員長

森川昭夫

授業参観日、非行で荒れた中学校で、見事に授業が成立したのは美術の時間だけだったという話を何回か聞きました。

また、NHKの「中学生日記」というドラマで、生徒の心を暖かく迎え相談相手になっているのも美術教師であります。

これは、全国の仲間、図工、美術教師が、ひとりひとりの子どものために誠心誠意、創意をもって懸命にその指導に当たっているひとつの象徴のように思われるのです。

美しさにあこがれる心をもち、心をこめて絵をかき、心をこめて物をつくる子どもたちに荒れた言動はないでしょう。

死んだ知識の量だけで「できる」「できない」と人間を判別する学校教育の中で、どうしても知性と感性の調和のとれた、子どもの心を豊かにみかく教育が必要な時であります。

美しさのないところに愛は育ちません。美しい山、美しい街から郷土愛が育つのです。美を大切にすることは、自分たちのまわりから美しさを発見する教科を大切にしなければなりません。美術教育が一層発展充実し、百年を越す歴史と人間教育の伝統に輝く、この教科が更に光を増し、その重大さを世に広く知らしめる必要を強く感ずる時であります。

第39回全国造形教育研究大会が北海道のまん中、彫刻の街旭川で開かれます。

全国からお集まりの皆様のお力で、実り多いものになることを祈っております。

おわりに、旭川市教育研究図工美術部の皆さんの懸命の努力に感謝し、北海道教育委員会、旭川市教育委員会、各関係業者の方々の心のこもったご援助、ご激励にお礼を申しあげる次第です。



全国造形教育連盟委員長

鷹野 改 三

第39回全国造形教育研究大会が、フロンティアの地北海道旭川において開催されますことを、皆様と共にお慶び申し上げます。本大会開催に当って、準備等ご努力くださった大会委員長柳原先生はじめ諸先生、道連盟本部の先生方、後援をいただいた文部省、道市教育委員会、関係諸団体の方々に対しまして、心からの御礼と感謝を申し上げます。

本大会テーマ「子どもの心をゆり動かす造形教育」とありますように、今日の課題に真正面から取り組まれた、旭川の先生方の情熱と自持に敬意を表します。申すまでもなく、今日の教育現場は多くの問題に直面しています。子どもをとりまく環境、制度そして大人の意識も、子どもとのギャップと断そうを急速に拉げています。現況下での子どもの現実、人間疎外という言葉が空虚にひびく程、容易ならざる事態と言わざるを得ません。彼らは、一人ひとりが真に大事にされる教育を求めています。私たちは、子どもの人間性の開発を旨とする造形教育の重要性を叫び続けてきました。教育改革の抜本策が切望されるゆえんもここにありません。

子どものみずみずしい感性を回復し、表現の喜びをみだし、全体的調和、諸能力の統合的活動としての造形教育は、教育の基本的営為であろうと考えます。本大会に参加される全国の先生方が、北海道の自然にふれると共に、旭川の子どもと先生方の実践に接し、今日の造形教育の課題究明にむけて、意義ある大会となりますよう祈念いたしまして挨拶いたします。



祝 辞



北海道知事

横路 孝弘

第39回全国造形教育研究大会が、北の文化あふれるロマンの街旭川市において、「子どもの心をゆり動かす造形教育」をテーマに、盛大に開催されますことを、心からお喜び申し上げます。

最近、心の豊かさを求める気運が盛り上がり、自ら工夫して何かを作りたい、という欲求が多くの人たちの間に高まってきております。明日を担う子どもたちが、こうした作る喜びを知り、創造性豊かな人間へと成長することは、何よりも大切なことであると考えます。

本日から3日間にわたるこの研究大会に参加される皆さまには、大会の成果を地域に持ち帰られ、豊かな創造力とやさしい心を持つ子どもたちの教育をめざして、これからも一層ご活躍いただくとともに、この大会が、意義あるものとして成功されますことを、心から祈っております。

北海道は今、夏たけなわです。この機会にぜひ各地域にもお立ち寄りいただき、明治以来、開拓にたずさわった先人たちの苦難の足跡と、さわやかな緑の中に原始の姿を残す本道の自然を満喫されますことを願って、ご挨拶いたします。



旭川市長

坂東 徹

秀峰大雪の山並みを仰ぎ、清流石狩川に代表される、恵まれた大自然に抱かれた彫刻のまち・旭川市に、ようこそお越しいただきました。

全国各地の教育機関で、造形・美術教育に携わっておられる多くの先生方をお迎えして、権威のある第39回全国・第36回全道造形教育研究大会が開催されますことは、誠に名誉あることであり、36万5千余の市民と共に心から歓迎申し上げます。

本大会では、それぞれの教育現場の第一線から、豊かな人間性の涵養を目指して研究実践されておられる諸先生が、ご参加いただいている訳ですから、本市の教育界に極めて大きな影響を与えるものと確信しております。

特に本市は、我が国の近代彫刻史に不滅の足跡を残した中原悌二郎ゆかりの地であり、毎年優れた創作活動を行っている作家への顕彰の他、彫刻をたくみに生かした街づくりを進める等、芸術と文化の香り高い土地柄ですから殊の外意義深さを覚える次第です。

急激に変化し多様化する社会情勢下にあって、いじめや校内暴力等いわゆる教育の危機が叫ばれている今日、造形・美術教育の果たすべき役割は益々大きくなるものと思います。

どうか、「子どもの心をゆり動かす造形教育」のテーマの元、本大会が実り多い成果を上げ、21世紀を担う子ども達の情操の発展に大いに寄与されますことを祈念申し上げお祝いのご挨拶いたします。



文部省初等中等教育局視学官

新川 昭一

第39回全国造形教育研究大会が、「美しい自然」と「たくましい心豊かな人々」のこの北海道で、「旭川大会」として、開催されることを、お祝いし、ご関係の皆様のお骨折りに感謝しています。有り難うございます。おめでとうございます。

私達は、美術教育に生きた、各地の多くの先輩に続いて、この教科の指導を、誇り高く守り、子どもたちに、目を輝かせ、工夫させ、意欲的な子どもに育てることに努めています。また、生涯にわたって、美術文化を愛好する喜びをもち続けさせ、生活を明るく、心豊かに、人々とともに働く大切さを理解させ、それらの技能を高めさせようと、「指導の工夫」をしてきました。

本日からこの大会では、その「指導の工夫」を一層確かに力にすることで、一人一人の先生には、「旭川大会」が、記念すべき研修の旅ともなるでしょう。

本年は、10年程度に1度の、教育課程改訂の年にも当たり、「新しい社会の変化・文化の発展」などとの関係で学校教育が見直され、新聞などで報道されているように、数々の「案」も提出され、「審議」が進んでいます。我が「図画工作」「美術」教育としては、広く多くの人々に、その目的や内容を正しく知られ、また、応援していただけるように、お願いをしたいところです。

「国の基準」が、これまでの「図画工作」「美術」などの教科の輝きを増し、関係の先生方の意欲を高めるものとなるよう、その改善策に期待し、また、私達は、具体的に願望の方向などを掲げる必要もあるかと思えます。

この大会で、一人一人が元気よく、決意を新たに、そして、日本中の先生で力を合わせ、造形美術教育の充実と振興に頑張ろうではありませんか。御苦勞様です。



北海道教育委員会教育長

植村 敏

第39回全国造形教育研究大会が、全国各地から多数の先生方の参加を得て、道北の中心都市旭川市において盛大に開催されますことを心からお祝い申し上げます。

全国造形教育連盟は、早くから幼、保、小、中、高など学校教育の一貫性を志向し、造形教育のあるべき姿を求め、全国的な視野に立ちながら、しかもそれぞれの地域性を生かして研究大会を継続してこられたと伺っております。その間、多くの成果を上げ、我が国の造形教育の振興に大きく貢献してこられたところであり、その御尽力に対し深く敬意を表します。

今日、学校教育の改善にかかわって各方面から様々な指摘や提言がなされているところでありますが、21世紀に生きる人間として、広い心と豊かな創造力を持ち、自主・自律の精神に満ちた児童生徒の育成が強く求められております。

いわゆる造形教育は、充実した造形活動を通して創造的な表現製作の喜びを味わわせ、表現、鑑賞の能力を高め、併せて自然美や人間愛を大切にすると豊かな情操を養うことなどをねらいとしており、未来に生き、未来を創造する人間を育成する上で欠くことのできないものであると考えます。

このようなことから、本研究大会が「子どもの心のひろがり」と深まり」を求めて研究を深められますことは誠に意義深く、その成果に大きな期待を寄せるものであり、本大会が、地元関係者の熱意と全国各地の皆様方の期待に応える充実した研究会となりますよう祈念申し上げ、祝辞といたします。



旭川市教育委員会教育長

村田 吉雄

第39回全国造形教育研究大会が旭川市で開催されるに当たり、全国各地からお集まりいただきました多くの先生方に心から歓迎のご挨拶を申し上げます。

本会が造形教育の振興を図ることを目的として発足されてから39回を重ねられ、熱心な研究によって大きな成果をあげられておられることに対し、深く敬意を表するものであります。

本市では、昭和57～8年度文部省から「豊かな心を育てる施策推進都市」の指定を受け、心豊かな青少年の育成活動を継続しているところです。

全国的に学校現場で登校拒否やいじめの問題が増加していることは誠に遺憾であります。幸いに本市ではこれまでに深刻な状況の発生をみないでおりますのも、本市の豊かな心を育てる健全育成活動の成果と考えております。

この度の豊かな情操を養う造形教育研究大会で、幼稚園から大学までの一貫した美的情操教育の在り方を研究討議されますことは、本市の教育にとっても誠に意義深い研究大会であると思えます。

本大会では、「子どもの心をゆり動かす造形教育」——つくる心のひろがりや深まりを求めて——をテーマに、21世紀に生きる青少年の人間形成に造形教育がどのように関わっていくかを問いかけています。大会を引き受けました旭川市の研究の積み上げを基に、十分討議をつくされて大きな成果を上げられますよう心から期待します。

おわりに、本大会の運営に当たられました諸先生、運営にご支援ご協力いただきました関係各位に心から感謝申し上げます。本大会の成功を祈念してお祝いのことばといたします。



開 会 式 次 第

- | | |
|-----------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 開会のことば | 大会運営副委員長 大谷 勝 美 |
| 2. 挨拶 | 大会運営委員長 柳 原 寿 夫
北海道造形教育連盟委員長 森 川 昭 夫
全国造形教育連盟委員長 鷹 野 改 三 |
| 3. 祝 辞 | 北海道知事 横 路 孝 弘
旭川市長 坂 東 徹
文部省視学官 新 川 昭 一
北海道教育委員会教育長 植 村 敏 |
| 4. 来賓紹介 | |
| 5. 祝電披露 | |
| 6. 研究概要の報告 | 北海道造形教育連盟研究部長 金 井 秀 男
旭川大会研究部長 飯 塚 礼 二 |
| 7. 代議員会報告 | 全国造形教育連盟事務局長 鈴 石 弘 之 |
| 8. 大会宣言 | 大会実行委員長 千 葉 豊 治 |
| 9. 次期開催地大会旗引き渡し | |
| 10. 次期開催地代表挨拶 | 第40回全国造形教育研究大会
千葉県造形教育研究会会長 御 園 正 男
第37回北海道造形教育研究大会
オホーツク造形教育連盟委員長 豊 島 豊 |
| 11. 閉会のことば | 大会運営副委員長 川 島 信 也 |

子どもの心をゆり動かす造形教育

今日の教育に求められていることは、なによりも授業における人間の存在を大事にすることであります。

子どもを人間として正面に捉え、子どもが何によって、どのように変わるかを、さまざまな授業を通した事実の中で明らかにしながら、教師は子どもの変化に学び、教育する意味を問いつづけることが求められています。

子どもの変化の事実を捉えることは、深い人間理解がなければなりません。深い人間の理解は、個人の差異にとどまることでなく子ども特有の個的全体性をどう柔軟に捉え、それを強靱な動的追求の場に止揚できる力に支えられて得られるものであります。

現実におたくしたちは、日常実践の中で子どもへの理解が独断的であったり、粗雑であったりはしないでしょうか。その結果、子どもは教育という授業の中で子どもが全体として生きていたものが分解され、きづつけられてはいないでしょうか。

造形教育は、そういう現実と鋭く対面しなければならないのです。造形教育が教育として位置づけられたのは、人間の基本的な人権の尊重、とりわけ生きることへの喜びを味わい行かうがためでありました。

子どもたちがかたちを捉える力、かたちをあらわそうとする力をより高くすることは、その子の生活（生きること）をより充実したものにするることになります。

ものの姿、もののかたちは人間の心を動かします。子どもが、ものの姿をよく見なければならぬということは、かたちの中に含まれているものの動きをとらえることであります。その動きを知るということは、それがよって来たる理法を知ることであり、かつ、そのものの心を知るということでもあります。

もののかたちを知るということは「ものをいつくしむ心」であり、「ものとともに生きる心」といった人間本来の人間性に立ちかえることであります。

造形教育が、深い人間理解に重きをおくのは、そういった意味なのであります。だからこそ、いまの教育の現状に胸をいため、人間が人間として自立するための教育としての、造形教育をその原点にたつて大きな教育実践活動の流れにしないでほしいのであります。

もののかたちを描いたり、つくったりする活動は、つまり自分の捉えたものを表現して、再検討することといえましょう。物の美しさ、ものの心を感じながら自分の手法ではそれが表しきれないためにつまずき、苦しんでいる子が多くいます。教師は、先ず、そういった子を支えてやらねばなりません。それは単なる技術の、技法の伝達にとどまることではありません。

子どもたちが自分で工夫し、開拓していく姿勢をつくりあげていくことなので

す。それには、教師がその子どもの心の中にひびくものをもちあわせていなくてはなりません。学びはげますということは、そういうことなのであります。

造形活動が、ただ教科の枠の中の教材と群でとらえてはいないでしょうか。造形活動は外界との接触によって、かたちというものを通して行なわれるだけに、実用という見地から、遊びという見地から、趣味という見地からといったように、多面的にとらえるべきであります。ひろがりを求める造形活動というものはそういったものです。そういった外界の接触の驚き〈好奇心〉といったものをより一層刺激し、支え、発展させる営みが強く求められます。

さらにそれが、その子の一生を通じて続いていくものになるようにしなくてはなりません。造形活動が人間の大切な生活になるということをもっとわたくしたちは自覚し、語りつづけなければなりません。

世界の人々の造形物に接し、そのものの心にふれ、世界を見直すことになるのです。造形教育の大きなことのひとつは、このことでもあります。

造形活動が軽い営みになると、子どもは流行に支配されたり、他人のまねになったり、人にみせるものになったりします。これは、わたくしたちが心しなくてはならない現象です。

その子自信の、その子の個性的な生き方のにじみ出たもの、その子が自分自身をあらわし、それを吟味し、新たにしつづけていく活動になるようにさせたいものです。芸術家が苦しみ、努力し、ものを作るよろこびのようなものを、子どもなりに味わっていくようにさせたいものです。

いまの子の多くは、ものの心にふれ、もののかたちをとらえ、心を動かすことを忘れていて枯えてはなりません。いろいろな障害の中で、子どもたちはその心の動きをおさえているのだと考えることです。

だからこそ、子どもの部分をゆきおるといった手段にたよることなく、子ども全体（個的全体性）をゆりうごかすことを教師の姿勢にしなくてはなりません。

そこには子どもひとりひとりが、自然、人間、社会に触れ、ゆり動く息のながい活動の営みとその記録が求められます。

技術も技能も人間が心をゆり動かす生きる姿勢の中にとり入れられ発展するものであります。

このように考えてきますと、子どもをゆり動かすのですから、教師もまたゆれなくてはなりません。それは教師の変わりにつれて、子どもが変わるものなのであります。

ここに、1986年の造形教育の立場から

1. 子どもは、たえずのびている。
2. 子どもを、美の荷い手の一員としてみる。 *多岐ゆめに*
3. 子どもは、ものにふれ、道具を用い、その心にふれる。
4. 子どもは、人の喜びを自分の喜びにする。
5. 子どもの作品の、率直さ、健全さ、自然さを最も大切にす。
6. いくつもの、ふくざつな社会の中でも、美をさがし求める。
7. わたしたちは、つつましやかな心で子どものことを考え、できるだけ子どもの好奇心を押しつぶさない。
8. 子どもが、追求していく上に必要なものを子どもに即してあたえることが基礎的なものであり、基本的なものであることを自覚する。
9. わたしたちは、子どものさしたず作品のたしかな受け手になり、それを正しく送り返す。

子ども
人間

ゆきおる(-) *(-)*
↓
ゆりうごかす

画
紙

本来

ゆりうごかす
心

10. わたくしたちの考えちがいから、子どもの表現の芽をかきとってしまうことのないようにする。

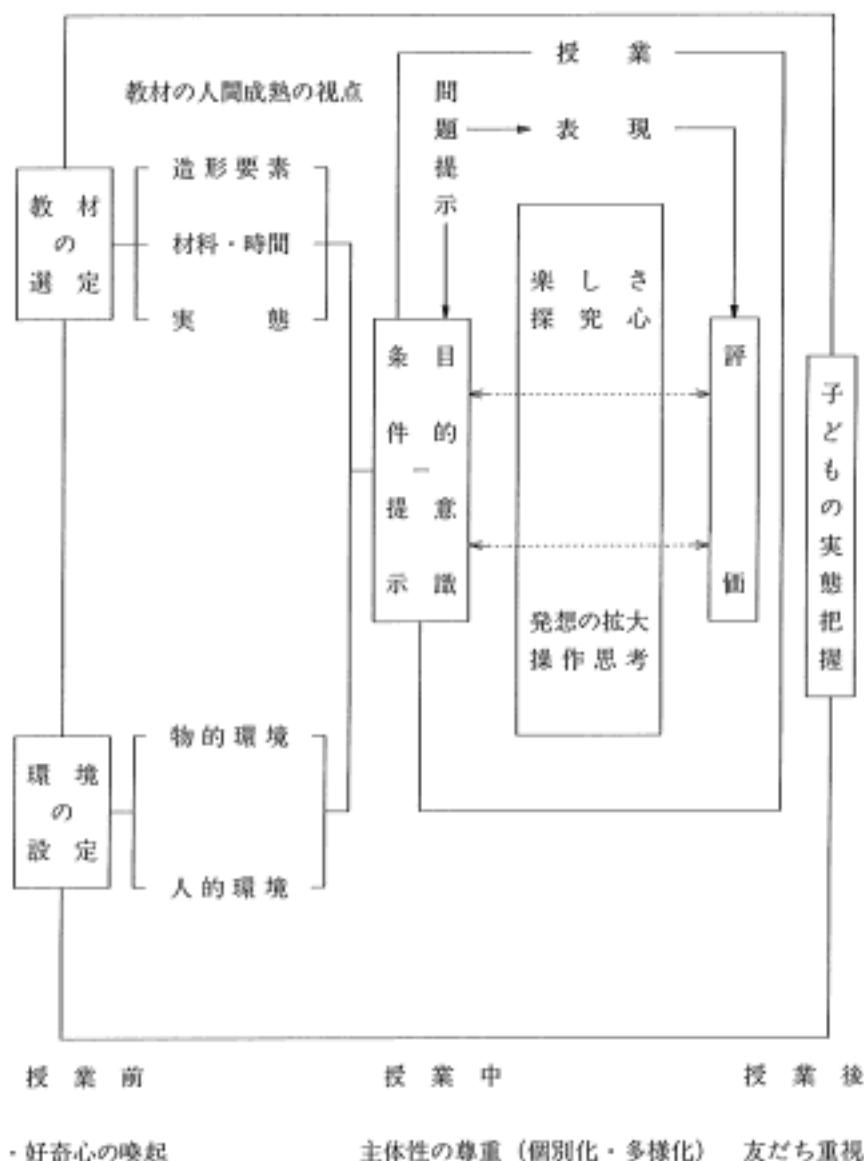
ここにかける主題は、1980年後半の主要なテーマとなることであろうし、そのことによって、戦後の美術・造形教育の運動の再評価と教師の自己変革によって造形教育の充実発展にむけて出発したいのです。

〈同じいこと〉

- ① 授業前の指導、〜 梨の源 (桐野)
- ② 表現前の指導、〜 類似-とい「提示」
思考
- ③ 表現過程の個別化、

子どもの心をゆりうごかす授業の基本として

- ゆたかな生活から、ゆっくりと表現の想を生み出す源の開拓。〔授業前の指導〕
- ひとりひとりのイメージ・造形思考に直面させる提示のくふう。〔表現前の指導〕
- ひとりひとりのイメージや造形思考に即した手だて、手順のくふう
 〈表現過程の個別化、多様化のある指導〉
- ひとりひとりの作品を通して、ひとりひとりの仕事を構造づける鑑賞と、次への意欲づくり
 〈発展を期待する表現後の指導〉



つくる心のひろがりと深まりを求めて

1. はじめに

人間性豊かな子どもの育成は、今日の教育の願いである。

子どもの持っている可能性を、その豊かな活動の全体を通して伸ばし、開花させるためには、子どもたちひとりひとりの心をゆり動かし育てていく働きかけが必要である。

子どもたちは本来、素直な心を持ち、明るく活動的である。子どもたちは、さまざまなことから直面し、見たり・聞いたり・感じたり・作ったりする中で、自分をとりまく世界を発見し、その性質や機能をおぼえ、知性や感性を深めていく。

造形活動は、子どもたちの持っている自然な造形体験として展開される活動であって、主体性を内包した活動である。その中で、いろいろな造形素材をもとにした表現活動を通して個性的な営みを活発にし、心の中にさまざまな経験を取り入れていく。造形活動がこのような意味をもったとき、はじめて子どもたちの造形活動は自発的で積極的な活動となり、自分で自己を見つめたり、更には自己を変えていくことができるであろう。このように、造形教育は人間の成長・発達を助ける人間形成の教育として重要な位置と役割を担っているといえる。

しかし、今日、子どもたちをとりまく環境には人間らしさを失わせたり、ゆがめたりする要因があまりにも多い。多様化する価値感、さまざまな規制の中で、自ら作り出したり、判断し解決していく力を見失い、受身な子どもが育っている。また、物質的な豊かさは、五感を働かせ、試行錯誤をくり返しながらか、心を動かし、頭で考え、手足や体でつくり出すよろこびを、生活の中から忘れさせようとしている。その上、すばらしい造形活動の対象でもある自然に触れる機会さえせばめられてしまっている。

このような現実の中にあって、今こそ、自らをきたえ、生きて働く力—創造する力—を子どもたちに取りもどしてやりたいと思う。

- 子どもたちは、鋭く五感を働かせようとしている。
- 子どもたちは、本当のことは見極めようとしている。
- 子どもたちは、知恵やわざをみがき、表現しようとしている。

そして、これらの取り組みを重ね

- 子どもたちは、自らの手で獲得したいと願っている。

私たちは、このような子ども像を前提に、今いる子どもたちを、どこから、どのようにして育てていくかを志向し、日々の実践を進めていく。

私たちは、造形活動の本当の楽しさを味わわせるために、子どものくらしに立ち入って心をゆり動かし、つくる心をひろめたり深めたりするすばらしい活動内容を選び出し、授業の中に組み立てていくことを願っている。

2. 主題について

子どもたちは、自分で見たこと、感じたこと、経験したことなどをさまざまな方法で表現しようとしている。造形活動は、このような子どもたちの基本的な欲求に根ざした活動であり、自らの意志と判断によって目・手・心を働かせ、つくりだし、自己を育てていく活動である。

“つくる心”は、表現過程における対象とわたしとのかかわりの中から生まれてくる。子どもと対象とのかかわりが生み出す感動をもとに進めていく造形活動は、自らみつけだし、つくりだしていく創造的な活動である。

したがって、つくる心・みつけだす目・つくりだす姿勢を育てるためには、日常的な生活の中での息の長い指導と援助が必要である。

子どもたちのものの見方、感じ方、考え方に新しい方向を持たせることは、つくる心をひろげていくことである。表現のきっかけや刺激による発想の転換は、表現欲を高めていくであろう。

そのためには、とらわれているさまざまな概念を解き放し、きまりきった考えを除去し、何事も自分で考え、判断し、選び出し、つくり出すという自主的な態度を身につけることから始めなくてはならない。

また、子どもたちひとりひとりが豊かなアイデアを持ち、創意工夫を加えながら目標に到着するために、基礎基本をふまえた、たしかな表現力を育てていく必要がある。

自分が表現しようとするものへの集中力・持続性によって生まれる姿勢や、作品を追求していく中で修正を加え発展させていこうとする制作態度は、つくる心の深まりと言えよう。このようなつくる心の深まりは、表現の質的転換を生み、次への新しい取り組みに向う意欲となるであろう。

つくる心をひろげ、深めていくための教師の役割は、子どもたちの側に立ち、心の内部に呼びかけ、表現に結びつく糸口をひき出すことである。

そのためには、子どもたちの造形に対する傾向・意欲・追求する心などに対応した適切な指導内容・方法が用意されなければならない。更に子どものつくる心をひろげ深める題材の掘り起こし、心情的要因の見なおし・造形的な要素の分析・技法の検討が必要であると考えられる。

つくる心のひろがりや深まりは、造形活動の中で子ども自身が積極的に表現をくり返し行うときこそ意味があり、そのような活動を支え進めていくきめの細かい手だてを講ずることが大切である。

3. 研究の手がかり

〈子どもたちのイメージを引きだし、気づきを大切にすると手だてを加えることにより、つくる心はひろがり、深まるだろう〉

私たちの考えるイメージとは、外的刺激を受けて、自らの内にこうあらわしたいと思いつくことであることとらえている。

子どもたちの生活が受動的であり、無感動であると同様に子どもたちのイメージもまた観念的であり、固定的であることが多い。今までの実践や研究の中でも、柔軟で生き生きとした、そしてつくりだす喜びを味わうことのできる子どもを求め、更に美しさを見つけだす目、感動する心を育てたいと願ってきたところである。

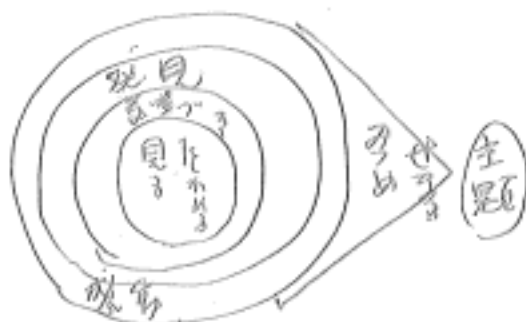
私たちは、子どもたちの“くらしに結びつく題材の掘り起こし”を進めてきたが、更にひとりひとりの子どもが自ら心を働かせて、自らのイメージをひろげ、深める実践を明らかにする必要に迫られている。題材や素材に対して造形

的要素を追求することも大切であるが、既存の概念や観念から抜け出して、新たな感動をイメージ化しようとする心情的高まりをめざすことが、更に重要なことである。

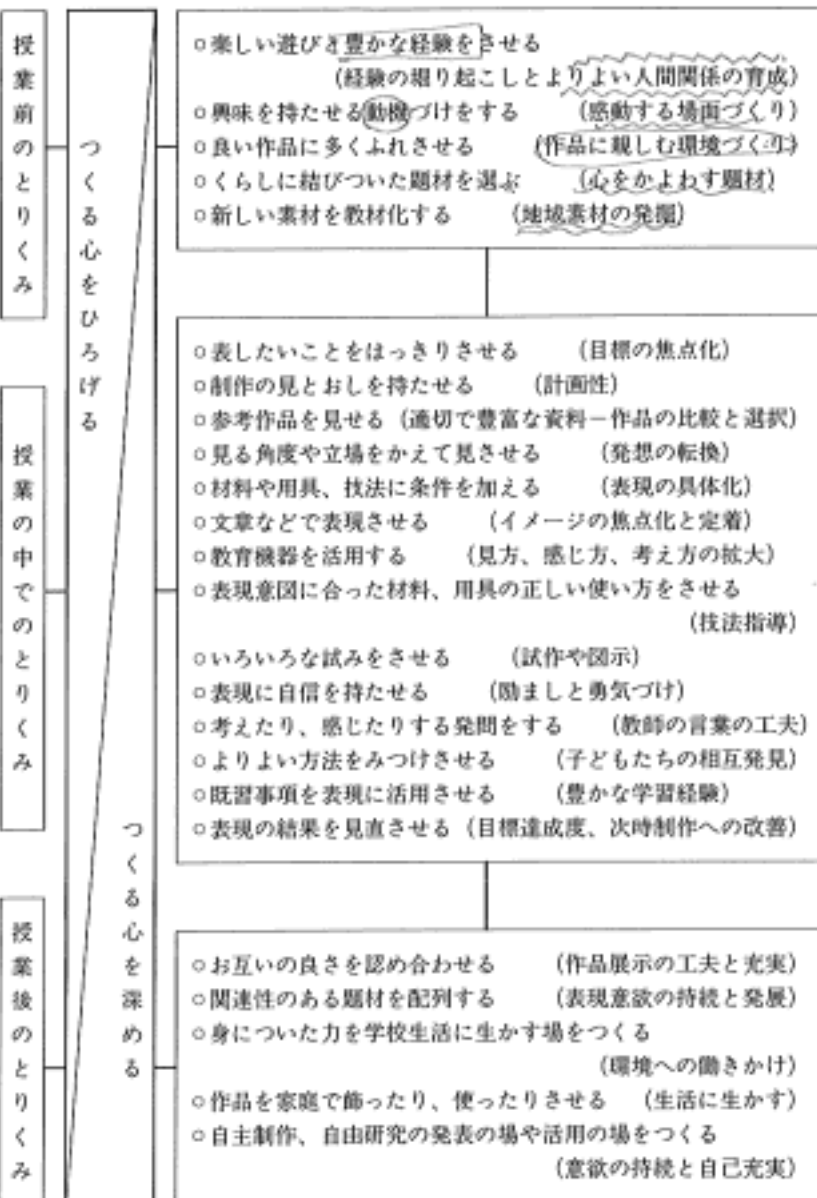
そのために五感を働かせ、気づかせていく必要があり、自らの力で獲得させていくための手だてを育てることを中心にすえていきたい。

〈気づき〉の中心となるものは、見ることであり、確かめることである。それは目に映っていることだけではなく、新たな発見をすることであり、対象に対する心の温かさであり、感動を引き起こす心の働きである。そうした心の働きを自らのものとして、更に対象をみつめ、主題に迫ろうとすることである。

〈気づき〉を大切にさせるために、授業中はもとより、授業以前の子どもたちの活動場面を一層広げてやる必要がある。限られた経験の中で十分な心の働きを持たない子どもたちに、既成の概念だけにとらわれず、それを打ち破る新たな発見のできるような経験の場や感動をよび起こすような場の設定が求められている。それは視覚的なものだけではなく、五感すべてを使った活動でなければならない。



気づきの手だて





アトラクション

重要無形民俗文化財 アイヌ古式舞踊

踊り 旭川チカップ・ニ・アイヌ民族文化保存会

代表 北海道ウタリ協会旭川支部長 川村カネト

アイヌ古式舞踊について

アイヌ古式舞踊は、北海道一円に居住しているアイヌの人たちによって伝承されている芸能で、祭祀の祝宴やさまざまな行事に際して踊られる。アイヌ独自の信仰に根ざしている歌舞で、その様式には極めて古態をとどめているものが多い。特に、信仰と芸能と生活が密接不離に結び付いているところに特色があり、芸能史的な価値が高い。

アイヌの古式舞踊は、熊送り、鼻祭り、菱の実(ベカンベ)祭り、柳葉魚(シシヤモ)祭りなどのアイヌの主要な祭りに踊られてきたほか、家庭における各種行事の祝宴の際にも踊られ、また、最近はまりも祭りなどの新しい祭りでも披露されるようになってきている。

その内容は、祭りのための酒を醸すときに歌われる「杵搗き歌」や「ざるこし歌」に合わせて踊る作業歌舞のようなものから、祭祀的性格の強い「剣の舞」「弓の舞」のような儀式舞踊、「鶴の舞」「バツタの舞」「狐の舞」のような模倣舞踊、「棒踊り」「盆とり踊り」「馬追い踊り」などの娯楽舞踊、さらには「色男の舞」のような即興性を加味した舞踊があり、また、この多種多彩な曲目もそれぞれのコタンによって伝承曲目が異なり、さらに、その舞い方に小異があるという特色がみられる。いずれも歌(ウボボ)を中心とし、踊りは輪舞(リムセ)を基本として構成されている。

旭川チカップ・ニ・アイヌ民族文化保存会(会長川村カネト)は、歌舞の講習会を行うなどして、古くから伝承されてきた文化を後世に伝えるための努力をしている。

(以上は、月刊「文化財」昭和59年2月号文化庁文化財保護部解説から抜粋)



チカップ・ウボボ (鶴の舞)

記念講演

森のメルヘンを語る

—— 造形美を求めて ——

東京大学名誉教授 高橋延清

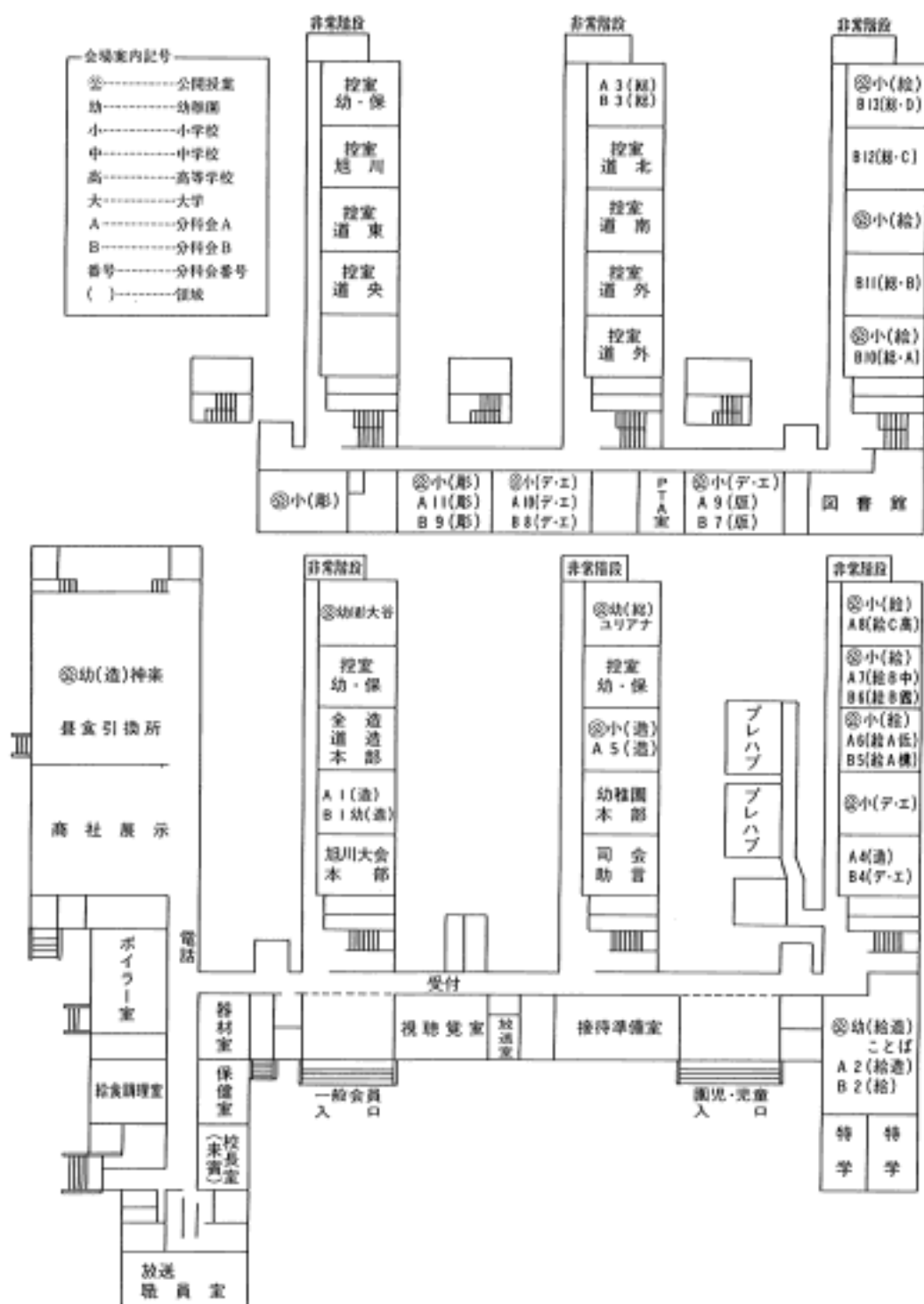


高橋延清 (たかはし・のぶきよ)

1914 (大正3)年 岩手県沢内村に生まれる。雪の研究家高橋喜平氏は実兄。東大名譽教授。1937 (昭和12)年 東大農学部林学科卒業。翌38年東大農学部助手として北海道富良野にある東大演習林に勤め、1942 (昭和17)年 同演習林林長となる。1974 (昭和49)年 定年退官するまでの36年間、自からを「どろ亀」と称し、森林研究一筋の生活を送り、天然林の施業方法を確立した。その間、東大本郷の教壇には1度も立たなかった。1974 (昭和49)年 北海道新聞文化賞、1983 (昭和58)年 第1回朝日森林文化賞など受賞。現在、緑の文明学会顧問。
主要著書『林分施業法』、『樹海に生きる』

全国・全道造形教育研究大会会場案内図

緑が丘小学校会場



公開保育・公開授業一覧

会場	校種	領域	年齢 学年	題 材 名	氏 名	学 校	掲載 ページ
緑が丘 幼稚園	幼稚園	造形あそび	5歳児	牛乳パックの家 -お家ごっこ-	西山 美智恵 伏元 百合子	大谷 谷 ひかり	32
		絵画・造形	5歳児	池の中 -水に親しむ-	岡星 かおり 藤嶋 聡子 前田 由紀子	旭川 こぼと	34
		総合	5歳児	つくってあそぼう -食つくり-	小原 啓子 高橋 由美子 大西 恵子	ユリアナ	36
		造形あそび	5歳児	遠足に行こう	飯澤 ちず 山内 悦子 新部 弥生	市立神泉	38
小学校	小学校	造形的なあそび	1	あきかんであそぼう	木村 典義	岡 岡	40
		絵 画	2	ありさんのくに	楽 岡 ひとみ	北 光	42
			3	遊びの中から (版画)	長 瀬 優	千代田	44
			③	草むらのできごと	長 田 和 代	日 幸	46
			6	嵐なし団(アサマヤク) -お話のは-	宮 崎 晃	緑が丘	48
			⑥	力いっぱいひっこぬけ -人と人とのかかわり-	新 井 好 恵	加 第 三	50
			6	わたしたちの用務員さん (版画)	伊 藤 有 為 男	神 田	52
		デザイン・工作	2	ジャンプ大会	佐 藤 修 司	近 文	54
			2	この水にと~まれ	土 屋 るみ子	千代田	56
			⑤	音の出るかべかざり	吉 野 恵美子	高 台	58
		彫 塑	6	一本の丸太から	高 野 亮	緑 新	60
			6	自由にいしばって	石 塚 広	水 山	62
		緑が丘 中学校	中学校	絵 画	1	私と友だち (版画)	品 田 潤
3	校舎・心に残る場所を描こう				加 藤 隆 六	合	66
デザイン	1			人工物からの構成	菅 原 敬 光	水 山	68
彫 塑	1			動物をつくる(ヤギ) -石こうのじかづけ-	大 槻 茂	東 光	70
	2			顔像をつくる -アワコッター-	坂 野 潤 治	春 光 台	72
工 芸	1	ウッド・クラフト	原 野 弘 尚	東 明	74		
高 校	高校	工 芸	3	自由創作「大津を作る」	西 田 武 文	弥 女 高	76
			2	照明具の制作(金属工芸-ノタルレースによる)	橋 詰 忠 晴	東 高	78

分科会 A

●内容 1. 越川でのとりくみ 2. 授業を中心とした話し合い
 ●分科会共通テーマ「つくる心のひろがりと深まりを求めて」

会場	校種	分科会 番号	領 域	司 会 者	提 言 者	助 言 者	記 録 者	掲 載 ページ
小 学 校	幼稚園	1	造形あそび	越川 札幌・平岡小 水 井 恭 子	越川・大谷ひかり幼 長谷川 秀 男	越川・拾由中 大 谷 勝 美	越川・大谷ひかり幼 吉小高 利 枝 中 島 真由美	82
		2	繪 画 ・ 造 形	越川・拓殖大 守 野 綾 子 札幌・伏古小 小 尾 豊	越川・こぼと幼 本 田 清	越川遠野遠 森 田 喜 男	越川・こぼと幼 岸 木 洋 枝 山 崎 祥 子	86
		3	総 合	越川 札幌・新和中央小 吉 田 茂 雄	越川・ユリアナ幼 老久保 小 夜 子	札幌・評論家 伊 藤 忠	越川・ユリアナ幼 大 西 恵 子 高 橋 由美子	92
		4	造形あそび	越川・教育大附属幼 大 口 章 子 札幌・深田小 鈴 本 登 夫	越川・神楽幼 飯 澤 ち ず	札幌・大谷恒大 辻 悦 子	越川・神楽幼 新 藤 悠里生 山 内 悦 子	94
小 学 校	小学校	5	造形的なあそび	上川・一の橋小 小 杉 信 雄	越川・水田小 飯 塚 礼 二	網走・富島福山小 山 宮 尚 也	越川・水田里小 宮 本 義 明	95
		6	絵画A(低学年)	越川・造形達 飯 塚 佳	越川・東町小 高 橋 貞 一	網走・愛国小 西 仁 治	越川・東光小 藤 島 アヤ子	98
		7	絵画B(中学年)	上川・東達小 池 辺 正 勝	越川・道文第一小 角 祐 雄	空知・美瑛東安小 一 戸 悠 雄	越川・青沼小 森 智 春	99
		8	絵画C(高学年)	上川・利国小 山 倉 功	越川・華光小 紙 谷 恒	上川教育局 渡 部 悠	越川・永山南小 伊 藤 久 崇	99
		9	絵 画	越川・志和小 植 本 正 昭	越川・加新小 新 井 雅 志	上川・中富本華小 萩 原 常 員	越川・千代田小 岡 村 由美子	98
		10	デザイン・工作	上川・宇美別小 藤 山 尚 明	越川・神楽小 青 柳 晴 雄	札幌・新琴似南小 佐 藤 吉玉郎	越川・豊岡小 佐 藤 洋 子	104
		11	彫 塑	越川・高台小 宮 下 林	越川・道文第二小 吉 永 一 江	空室・白鳥小 佐 藤 達	越川・神楽南小 堀 野 正 子	110
中 学 校	中学校	12	絵 画	越川・東明中 牧 野 和 夫	越川・旭二中 則 合 薫	越川由教委 大久保 正 義	越川・光陽中 鳥 本 捷 夫	106
		13	絵 画	越川・東陽中 入 井 睦 生	越川・永山南中 及 川 輝 夫	札幌・しみじみ中 坂 田 武 夫	越川・広隆中 鳥 本 淳 子	116
		14	デザイン	上川・比布中 大 西 勲	越川・永山中 大 口 肇	越川・明星中 吉 田 一 雄	越川・神居中 吉 本 博 二	122
		15	彫 塑	越川・北都中 幸 原 実	越川・旭川中 原 完	札幌・東安中 米 谷 智 夫	越川・神居中 長 野 晃 晃	128
		16	工 芸	上川・美瑛中 小 松 富 隆	越川・教育大附属中 山 塚 利 春	上川・富良野西中 伊 藤 功	越川・光陽中 菅 導 信	131
高 大 校 卒	17	工 芸	越川・電谷高 平 田 和 也	越川・安高 徳 佳 志 理 越川・伊女高 西 田 武 文	越川東海大 荒 井 善 則 上越教育大 熊 本 高 工	越川・南高 長 尾 毅 造	142	

分科会 B

・内容／各地の実践報告と交流

会場	校種	分科会 番号	領 域	分科会 テーマ	研 究 の 方 向
幼稚園		1	造形あそび	身近にある素材を生かし、つくる楽しさを味わわせるには、どうすればよいか	子どもたちの周囲には、あそびの中に持ちこんで来れる表現材料はいくらでも散在している。そんな身近にある材料の良さや特質を生かしながら、大胆で個性的な造形あそびをさせるにはどうしたらよいかを考える。
		2	絵 画	感じたこと、考えたことをのびのびと絵に表現させるには、どうすればよいか	かきたいと思う心を引き出すためには、ものに感じる心を育てなければならぬ。その感動を表現に結びつけるためにどんな配慮・準備や指導をすればよいかを考える。
		3	総合活動	子どもたちの豊かな造形表現を育てるうえで望ましい経験や活動をどうすればよいか	子どもたちの造形活動は、生活に密着したものでなければならない。のびのびとした造形表現をさせるための幅広い経験や活動を、子どもたちの興味や欲求にそって、毎日の生活の流れの中にどう構成し、組み立てていけばよいかを考える。
		4	デザイン・工作	子どもたちの夢を育てる楽しい制作活動をさせるには、どうすればよいか	子どもたちは、あそびの中で夢中になり、物を作ったり飾ったりする。子どものデザインは生活そのものであると言える。あそびや生活の中から生まれた意欲や着想のすばらしさを制作活動に結びつける配慮や手立てについて考える。
小学校		5	絵 画 A (構 想)	イメージを広げ、子どもの心を生かすことと表現させるためには、どうすればよいか	主題や印象をもとに自分なりのイメージをつまみつけていくとき、個性的で豊かな表現ができると思われる。ここでは、イメージを豊かに表現させるための発想・構想・制作過程における資料の提示・指導の手立てについて考える。
		6	絵 画 B (観 察)	対象を自分とのかかわりの中で、求め深めていく表現活動をさせるには、どうすればよいか	ものをよく見ることによって、対象の特徴や美しさを見つけ出すことができ、表現意欲を高めることができると思われる。見る・触れる・遊ぶといったことから、生き生きと表現させるための題材・表現について考える。
		7	版 画	版の特性を生かし、表現の喜びを味わわせるには、どうすればよいか	白黒のコントラスト、単純化した形による版画の表現には、共通しや個性性、そして模写強い取り組みが必要である。版画表現の喜びをより確かにするための下絵づくり、版づくりの順序における指導法について考える。
		8	デザイン・工作	子どもの夢や願いを大切に、楽しい制作活動をさせるには、どうすればよいか	遊びやくらしの中で生まれた子どもの願いを大切に、それをデザイン・制作活動にどのように生かしていったらよいか。また、デザイン・制作活動を発展させていくための題材・材料・技法について考える。
		9	彫 塑	自分のイメージを楽しく豊かに立体表現させるには、どうすればよいか	立体表現の楽しさは、いろいろな素材にふれ、多少の挫折をともないながらも、あそびの中から形を見つけだし、つくりかえていくことである。材料の特質に基づき、目・手・心をはたらかせて心を満たす量感表現をさせる指導のあり方について考える。
			総合 A (指導計画)	主体的に活動する子どもを育てる指導計画は、どうすればよいか	よい教材・題材とは何か、よい年間指導計画とは何かを子どもの側に立って考える。授業前、授業中、授業後の指導の方法、授業づくりについて考える。子どもの意欲をもちたて、より個性的な表現をうながす指導計画のあり方について考える。
			総合 B (造形的活動)	日常の生活と結びつけた造形活動をさせるには、どうすればよいか	学校生活をより楽しく豊かにするための特別活動やひとりの時間を活用した造形的活動の計画・実践について交流する。個と集団とのかかわり合いの中で、共同でつくりだす子どもの喜びや意欲をさぐる。
		12	総合 C (地域・素材)	地域環境を生かした造形教育はどのようにすればよいか	地域や風土に根ざした生活の中から、積極的に造形活動に位置づけた実践を総合し合う。子どもが熱中し、集中できる地域の教材づくりについて話し合う。
			総合 D (作品を語る)	子どもたちの、みずみずしい感性をどのように受けとめ、発展させていったらよいか	子どもの作品を誇らし、題材や指導のあり方、作品の見方について話し合う。 (発表者の先生は子どもの作品を御持参下さい)

司 会 者	提 言 者	助 言 者	記 録 者	掲 載 ページ	
旭川市教員 札幌・平岡小	今野正治 永井恭子	新潟・区委助 金田時子	札幌・遠形連 奈良・佐保坊 長谷川 伝 江 島 多賀子	大谷ひかり坊 古小高利枝 中 島 真由美	146
旭川・拓殖大 札幌・伏古小	守野綾子 小尾 尚	札幌・東条坊 水 下 恵 子	札幌・富丘小 東京・ちどり坊 佐々木 理 祖 藤 森 理 代	旭川・こぼと坊 藤 嶋 聡 子 山 崎 祥 子	147
旭川遠形連 札幌・新田中央小	岩 岡 昇 吉 田 健 雄	旭川・教育大助言 坪 井 龍 彦	札幌・豊川南坊 帯広・上賀茂保 道子・おつめ坊 鹿 島 健 良 池 田 一 郎 小 関 利 雄	ユリアナ坊 大 西 恵 子 高 橋 由美子	148
旭川教育大助言 札幌・深西小	大 口 章 子 鈴 木 持 夫	愛媛・北坊坊 東京・こひつて保 向 井 三枝子 豊 田 ゆり子	国士館大講研 札幌・東河下小 旭川・船台寺 高 橋 榮 吉 白 井 勝 美 大 谷 時 美	神 楽 坊 新 山 内 悦 生 子	149
旭川・神保小 函館・栄生小	大河内 英 明 石 井 久	札幌・西岡清小 水戸・聖徳大助小 大 場 章 子 雨 貝 義 孝	旭川・豊野小 大塚・大塚南大 青 山 清 輝 花 篤 實	豊 光 小 谷 光 本 恒 幸 東 横 東 坂 小 小 久 栄	150
和歌・中初小 苫小牧・美原小	黒 沢 謙 鈴 木 和 雄	札幌・保野西小 白根郡大野小 佐 藤 謙 雄 増 田 悦 造	滝川・東小 奈良・榎井小 早 弓 弘 行 阪 己 文 一	近 角 小 山 崎 小 伊 藤 小 久 栄	151
中富・本幸小 札幌・北陽小	萩 原 菅 良 蛭 子 信 也	旭川・北光小 札幌・北光小 札幌・北光小 流山・桂+時小 加 藤 玲 子 小 葛 良 吾 藤 泉 西 岡	札幌・月形美小 旭川・富沢小 青森・甲洋小 松 島 輝 男 川 中 嶋 信 崇	日 小 子 代 目 村 小 由美子 朝 森 子 川	153
美瑛・宇賀別小 札幌・栄穂小	篠 山 尚 明 富 田 泰	苫小牧・北光小 白根・第八小 宮 森 俊 治 渋谷 悦 子	札幌・中沼小 東京・小倉南東小 舟 着 昭 弘 小 岩 俊 俊	登 黒 日 堀 和 沢 豊 内 小 宏 小 寛 光 子	156
旭川・高台小 阿路・松山小	宮 下 林 中 島 欣 也	札幌・廣野小 花 田 正 雄	札幌・豊川小 足寄・東小 上越教育大 伊 藤 美 吉 寺 本 坂 元 宮 崎 明 指	近 古 山 本 二 水 小 義 江 明 山 本 小 義	158
富良野・豊後西小 札幌・新法小	原 良 三 鶴 賀 孝 三	札幌・唯小 東京・桜川小 伊 藤 春 彰 相 田 隆 久	石狩・紅南小 山梨・青教委 奈 良 孝 秋 武 田 好 文	青 木 明 小 明 小 祝 子 青 木 代 田 村	159
下川一の橋小 苫広・大空小	小 杉 信 雄 成 瀬 登	旭川・豊岡小 札幌・教育大助小 滝崎・西野川小 青 木 新 治 阿 部 宏 行 山 口 正 勝	十勝・住倉小 宇都宮・城山中央小 湯 川 守 忠 富 川 守 忠	北 沢 氏 水 河 光 家 山 部 小 小 英 貞 子	161
旭川・志和 松山・津水小	神 田 耕 治 堀 合 隆	旭川・東広小 新羅・上岡小 松 藤 涉 治 辺 土 名 七 子	北見・西標内小 釧路・春日野小 吉 田 義 晴 前 田 豊 克	春 山 道 鈴 光 科 文 木 小 瑞 小 茂 徳 雄	164
東通・中央小 札幌・東通小	波 辺 正 勝 伊 藤 暢 紀	旭川・東広小 深川・菊水小 札幌・白の字南小 長岡・遠川小 飯 塚 塚 礼 二 渡 渡 眞 之 夫 毛 馬 内 田 雄 輝	留萌・礼受小 東京・新谷第二小 橋 場 昌 三 森 内 富 久 志	豊 田 小 洋 子 山 部 小 洋 子 谷 山 小 洋 子	166

会場	校種	分科会 番号	領 域	分 科 会 テ ー マ	研 究 の 方 向	
緑 が 丘 中 学 校	中 学 校	14	絵 画・版 画	表現のよろこびや確かな造形能力を育てるには、どうすればよいか	対象を見つめなおし、新たな発見や感動をもとに自己のイメージを確かなものとする制作のすめ方などについて話し合う。また、題材の見直しや造形能力を高めること、表現のよろこびを味わわせることについて考える。	
		15	デ ザ イ ン	発想を重視したデザイン活動をさせるには、どうすればよいか	表現テーマにそった色や形のおもしろさや美しさを的確にとらえ効果的に表現させるにはどのようにすればよいか、生き生きとした発想を大切に指導のあり方を考える。	
		16	彫 塑	生き生きと豊かに立体表現をさせるには、どうすればよいか	たしかな量感表現をさせるためには、多角的な観察の方が必要である。材料の特性を生かし、自分のイメージを楽しく豊かに表現させる指導のあり方について考える。	
		17	工 芸	素材を生かし、楽しく豊かに制作活動をさせるには、どうすればよいか	素材を生かし、「あると楽しい」など遊びの要素を大切に題材を見つけたし、心を込めて作品をつくる活動のあり方や、子どもの生活の中に豊かに生きる指導のあり方を考える。	
		18	総 合 A (指導計画)	主体的に活動する子どもを育てる指導計画は、どうすればよいか	よい教材・題材とは何か、よい年間指導計画とは何かを子どもの目にとって考える。授業前、授業中、授業後の指導の方法、授業づくりについて考える。子どもの意欲をもちたて、より個性的な表現をうながす指導計画のあり方について考える。	
		19	総 合 B (地域・素材)	地域環境を生かした造形教育は、どうすればよいか。	地域の風土に根ざした生活の中から、積極的に造形活動に位置づけた実践を紹介し合う。子どもが熱中し、集中できる地域の教材づくりについて話し合う。	
		20	総 合 C (作品を語る)	子どもたちのみずみずしい感性をどのように受けとめ、発展させていくとよいか	子どもの作品を持ち寄り、題材や指導のあり方、作品の見方などについて語り合う。 [御参加の先生は、子どもの作品を御持参下さい。]	
	高 校	大 学	21	総 合	青年期の造形教育において発想をひろげ創造性を高める取りくみは、どうすればよいか	興味をもち意欲的に取りくむ題材とはどんなものか、その年間指導計画の構成や効果的な指導のあり方、またクラブ活動のあるべき方向など、青年期における豊かな美術的経験と指導上の配慮について考える。
			22	総 合	教員養成と教科教育の充実について	豊かな人間性を育てるための図工美術教育の果たす役割は大きい。それをおし進める道になる。教員養成の課題や教科教育の充実について話し合う。

司 会 者	提 言 者	助 言 者	記 録 者	掲 載 ページ	
旭川・北門中 七飯・太田中	宮 崎 弘 行 近 堂 俊 行	秋田・土崎中 札幌・北田中央中 大 竹 東 彦 岡 沢 邦 彦	函館・光成中 大坂・天下橋中 秋 山 修 哉 岡 崎 武 敏	光 島 忍 川 島 本 二 合 中 提 中 夫 兼	168
旭川・東光中 札幌・昭和中	川 口 裕 平 奥 野 郁 男	旭川・特啓中 東京・春江中 吉 本 博 二 宇 野 義 行	苫小牧・東中 横浜・境本中 東京・中野第三中 片 桐 亮 息 山 口 藤 幸	沼 田 旭 山 船 橋 川 野 中 官 照 明 人	170
旭川・北都中 札幌・太平中	寺 原 実 二 島 芳 二	札幌・柏中 多 田 社 一	札幌・北白石中 東京・北野第二中 名古屋・東山中央中 滝 尾 幸 一 本 上 田 善 治	旭 川 中 昭 野 中 完 児	172
旭川・聖徳中 札幌・向陽中	小 水 正 勝 加 藤 五十和	新潟・桜ヶ丘中 京都・大波中 泷 本 弘 志 上 村 さ ち 子	上川・土別中 札幌・東光中 東京・中野第一中 浅 利 泰 基 新 谷 純 雄	神 戸 東 山 土 庄 北 山 中 誠 徹	173
旭川・北門中 札幌・光成中	本 間 篤 文 荒 谷 博 文	札幌・北条中 仙台・哲立中 村 谷 利 一 名 川 正 彦	札幌・昭和中 東京・皇土堂中 三 谷 智 司 出 水 操	附 属 中 山 宮 五 十 嵐 中 利 中 一 春 之	175
旭川・東陽中 札幌・元町中	氏 本 利 光 石 岡 博 昭	苫小牧・明倫中 東京・百合中 佐 藤 公 毅 永 関 和 雄	苫小牧・和光中 愛媛・昭和中 池 本 良 三 水 口 汎	永 及 山 南 光 川 中 中 輝 夫 菅 中 信	177
旭川・水辺中 留萌・港南中	一ノ戸 義 徳 後 藤 昌 治	旭川・水山中 青森・甲府中 大 口 優 一 高 谷 幹 郎	札幌・北条中 東京・小平第三中 千葉・村上中 小 林 秀 明 滝 沢 須 藤	東 沢 本 光 田 中 中 幸 市	179
旭川・百高 北見・穂積高	川 口 幸 和 林 弘 晃	札幌・真栄高 東京・東大附属 佐 野 千 尋 大 江 秀 博	奈良・奈良高 大 石 吉 友	東 本 高 村 栄 村 勝 男	181
東 奥 大 学	上 条 雄 也	京 都 芸 術 大 学 川 村 香 之	上 越 教 育 大 学 藤 本 高 工	北 海 道 教 育 大 学 八 重 隆 良	183

●第36回全道造形教育研究大会旭川大会シンボルマーク



デザイン 鳥本捷夫(旭川市立光陽中学校)

子どもたちが無心で作品づくりに取り組んでいる姿と、北海道の屋根大雪山を旭川のイニシャルAでまとめました。



知新小学校 5年 加瀬谷 章 紀

牛乳パックの家（お家ごっこ）

指導者：秋 元 百合子
西 山 美智恵

園児：大谷ひかり幼稚園 のぞみ組
(2年保育年長：男子12名、女子15名)
(1年保育年長：男子1名、女子2名)

1. 題材について

廃品物である牛乳パックを活用しての家づくり。加えて、おふろやテーブル、椅子、ベッド、自動車なども作ってお家ごっこをして遊ぶ。それらがみんな牛乳パックで出来ていても、入ったり、乗ったりして使えると実際の家を再現するような遊びが展開されると思う。従って、生活に密着した造形活動を楽しみ、熱中しながら豊かな想像を生み、更に自ら考え、工夫することを通して創造する力を培っていく題材であると思う。

2. 学習のねらい

- ① 廃品物を工夫することにより、自分で作りだそうとすることができる。
- ② 自分たちの生活で使っている物、必要とする物を再認識する。
- ③ 牛乳パックを組み立てるおもしろさを体験する。
- ④ 仲間と力を合わせて大きな物をつくる楽しさを味わう。
- ⑤ 自分たちでつくった作品で遊ぶ楽しさを味わう。

3. 指導計画（8時間）

- ① 牛乳パックで自由に遊ぶ。
- ② 牛乳パックでゲーム遊びを楽しむ。（レンガ積み競争）
- ③ 牛乳パックをテープでつないで四角や輪の形に組み立てる。（ボウリング、スラロームゲームをする。）
- ④ 大型積み木で「お家ごっこ」に必要な物をつくり、お家ごっこをして遊ぶ。
- ⑤ 自分たちで「お家ごっこ」に必要な物を話し合い、グループで何をつくるかを話し合う。
- ⑥ グループごとで「お家ごっこ」に必要な物をつくる。
- ⑦ 作品をみんなで見て、より良い作品にするよう話し合い仕上げる。（本時）
- ⑧ 完成した作品で「お家ごっこ」をして遊ぶ。

4. 本時の学習


(1) ねらい

- 実際に入ったり、乗ったり、寝たりできる大きさにつくる。
- 安定感を考え、牛乳パックを組み立てる。
- みんなで協力し、作品を仕上げる。
- 自分たちでつくった作品の出来上がりを見て満足感、喜びを味わう。

(2) 準備

- 園児 はさみ
- 教師 クラフトテープ・両面接着テープ・セロテープ・模造紙（白・水色）・クレヨン・牛乳パック

(3) 展開

時間	幼児の活動	指導上の留意点	準備・環境
10:00	<ul style="list-style-type: none"> ○整列して教室に入って、みんなのつくった壁を見つける ○「あっ、お家だ」 ○「先生、お家に入ってもいい？」 ○「椅子がある」と言って椅子に座ってみる。 ○「げんかん」 ○「うん」 ○「あそこ、ここがいい」などと自分の思いを出し合う 	<ul style="list-style-type: none"> ○子供たちが、環境の違うところで、活動がスムーズに出来るように、事前につくった椅子2つと家の壁とを設置しておく。 ○「入ってもいいわよ。おさないでね」 	 <p>〈牛乳パックで造った壁のお家〉</p>
10:05	<ul style="list-style-type: none"> ○先生の話聞く。 ○3人グループはテレビ、椅子の2グループ。4人グループはテーブル、自動車、犬小屋、おふろ、戸棚、ベッドの6グループに別れ、お家ごっこができるために自分でする作業がはっきりわかる。 ○大きさ、安定感を考え、工夫して造る。 ○完成した作品からコーナーに置いて、座ったり寝たりしてみる ○完成した作品で自分たちの思いを出し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○みなさんは今、どこから入って来たのですか？」 ○「それじゃ、あそこが玄関ね」 ○「今、皆さんがつくっているテレビ、ベッドなどは、どこにおいたらいいかな？」 ○今までやってきたことを話し、本時の目的をはっきりとさせ、又つくる意欲を盛り上げる。 ○両面接着テープは、ハサミでは切りづらいので、あらかじめいろいろな長さに切っておく。 ○目的のはっきりもてない子、グループにとけこめない子には、個人的に教師の働きかけをする。 ○実際に入ったり、乗ったり、寝たりできる大きさ、安定感に気づかせ様子をしっかりと見ていく。 ○子供から出たことばをひろったりイメージをふくらませる。 ○自分たちの手で造り出した作品を見て感動、喜びを一緒に味わう。又、一番むずかしかった部分など話し合う。 ○次回は、自分たちでつくった作品で「お家ごっこ」をすることの楽しみをもたせて終わる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○未完成な作品 ・テレビ ・椅子 ・テーブル ・戸棚 ・犬小屋 ・おふろ ・自動車 ・ベッド ○セロテープ ○クラフトテープ ○はさみ ○クレヨン ○牛乳パック ○模造紙(白・水色) ○両面接着テープ
10:45	<ul style="list-style-type: none"> ○次時のやることをはっきりもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○子供から出たことばをひろったりイメージをふくらませる。 ○自分たちの手で造り出した作品を見て感動、喜びを一緒に味わう。又、一番むずかしかった部分など話し合う。 ○次回は、自分たちでつくった作品で「お家ごっこ」をすることの楽しみをもたせて終わる。 	
10:50	<ul style="list-style-type: none"> ○後片づけをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○協力し、手早く片づけさせる。 	

海の中 — 水に親しむ —

指導者：前田 由紀子
岡屋 かおり
藤嶋 聡子

園児：旭川こぼと幼稚園 年長組

1. 題材について

プールでの基礎的水泳指導や水遊びで水に親しみ、水の中にも興味を持ちはじめた。その興味をおはなしやうたで海の中へと広げていき、リズム表現、絵画表現を通し海への具体的なイメージを持った。自由な発想で海の中の生物、また、海の中で遊ぶ自分の姿を作りだす喜びを見つけ、それを持ち寄り大きな壁画を作ることで、その喜びをいっそう大きなものになりたい。

2. 学習のねらい

- ① 子供達の持つ海のイメージをより深める。
- ② 絵筆やローラーの使い方を覚える。
- ③ 色々な素材を効果的に使う。
- ④ 共同で一つの作品を作り上げる意欲、喜びを持つ。

3. 指導計画（7時間）

	幼児の活動	指導内容
第1次	○絵本、図鑑を見たり、おはなしを聞く。	○おはなしを通していろいろな海の中を知ろう。
第2次	○模倣・リズム表現をする。	○海の中の生物の特徴をよくとらえ、身体表現をしよう。
第3次	○海の中の生物をクレヨンで描く。また空箱を利用して製作する。	○それぞれの生物の特徴を考え製作し壁にかざったり、遊びに利用する。
第4次	○マニラボード紙に色をぬろう。	○ローラー、絵筆などの感触を楽しみながら海の世界を作る。
第5次	○海で泳ぐ自分の姿を作る。	○海の中を泳ぎ、遊ぶ姿を思い浮かべながら絵の具で大きく描こう。
第6次	○絵の具で自由に描いた生物に、目や模様を貼る。	本時
第7次	○大きな紙に波、海草を描き、生物や人物を貼り、壁画を完成させる。	

4. 本時の学習

(1) ねらい

- 海の広さ、色、深さを考え、その中で遊ぶ自分を想像し壁画を完成する。
- 出会ってみたい、遊んでみたい海の生物を作りだそう。
- 工夫し、大きく大胆な表現をしよう。
- 話をしっかり聞き、グループの仲間と協力しよう。

(2) 準備

- 園児 のり・はさみ・エプロン・事前に描いた人物
- 教師 マニラボード紙・画用紙・絵の具・ローラー・絵筆・ボンド・牛乳びんのふた・ビニールテープ・モール・ストロー・色つきマッチ棒
足ふき用の布

(3) 展開

時間	幼児の活動	指導上の留意点	準備・環境
10:00	<ul style="list-style-type: none"> ○こぼとの歌を大きな声でうたう。 ○おはなしを聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ○すんだ大きな声、力強いひびきとなるように。 ○水色にぬった台紙を示し、海の中を作ることを知らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○歌でのご挨拶 ○マニラボード紙9枚を広げ、大きさを示す。
10:10	<ul style="list-style-type: none"> ○海の中の生物を絵の具を使って大きく描く。 ○描き終えた順にローラーで液を描く。 ○画用紙に描いた生物を切りとり、目やもようをつける。 	<ul style="list-style-type: none"> ○画用紙いっぱい描くように助言する ○紙のはじからはじまで線が切れないように描かせる。 ○いろいろな素材から選び、工夫してもようをつけるようひとりひとりにことばかけをする。 (早くできた子には台紙に岩や海藻を描くよう促す。) 	<ul style="list-style-type: none"> ○12のグループごとに用意した絵の具を使って活動する。 ○部屋の中央に台紙をおき足ふきを用意する。 ○グループごとの箱に用具、材料を入れておく。
10:35	<ul style="list-style-type: none"> ○できあがった生物や人物を台紙に貼る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○のりの正しいつけ方や、自分の泳いでいる姿、海の中をイメージして貼るよう助言する。 (早く貼り終えた子はさかなつり遊びをする) 	<ul style="list-style-type: none"> ○事前に作った人物もグループの箱に入れておく。 ○事前に作ったさかなと磁石つきのさおを用意
10:45	<ul style="list-style-type: none"> ○グループごと協力して後かたづけをする。 ○完成を喜び、みんなで歌をうたう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○用具、残った材料をきれいに箱の中に入れるよう助言する。 ○ひとりひとりのがんばり、みんなの協力をみとめ、完成の喜びをもってうたう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○作品のまわりに集まりすわる。

つくってあそぼう (舟づくり)

指導者：小 原 啓 子 ：ユリアナ幼稚園 リリークラス
 高 橋 由美子 (2年保育年長 男子17名 女子4名)
 大 西 恵 子 (1年保育年長 女子1名)

1. 題材について

8月という时期的に暑い季節の為、7、8月の単元「水に親しむ」を生かした造形あそびの楽しさを味わわせる。

1人1人の特徴を生かし、また教師の刺激を加えながら、身近な廃品を利用して作ることの楽しさを味わう。

2. 学習のねらい

- ① いろいろな素材があることを知り、それらを使って工夫しながら作る楽しさを味わう。
- ② いろいろなものを水に浮かばせて、水に浮くものと沈むものについての関心を深める。
- ③ 舟づくりに興味を持ち、最後までがんばって作る。
- ④ 作った舟を浮かべて楽しく遊び、お友達のものに興味をもって見る。

3. 指導計画 (8時間)

- ① 水に浮かぶものに対してイメージをふくらませる。
- ② 身の回りにある廃品に、いろいろな素材や形があることを知る。
- ③ セロテープやホチキスなどの用具の正しい使い方を知る。
- ④ 作りたい舟の形などについて絵本や図鑑で調べさせ、作る意欲を起こさせる。
- ⑤ 作った舟で遊ぶ。(本時)

4. 本時の学習

- (1) ねらい
 - 身近な廃品を利用して、園児のイメージをふくらませて活動させる。
 - 作ることの楽しさを味わわせるとともに、遊ぶことの楽しさを知る。
 - 最後まで一生懸命やりとげる。
- (2) 準備
 - 園児 スモック、タオル、のり、ハサミ、クレヨン
 - 教師 ぬれタオル、セロテープ、ホチキス、新聞紙、画用紙、サインペン、廃品物、他
- (3) 展開

時間	幼児の活動	指導上の留意点	準備・環境
10:00	<ul style="list-style-type: none"> ○先生の話聞く。 ○舟づくりをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○舟づくりの教材についての説明とともに、意欲的に作るよう言葉かけをする。 ○廃品物を選ばせて、すぐ活動に入る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○机1台
10:35	<ul style="list-style-type: none"> ○作品完成。 ○片づけ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の名前をかかせる。 ○水あそびについて約束を守らせる。 	
10:40	<ul style="list-style-type: none"> ○舟を水に浮かばせてみる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○作品をグループごとにもってこさせて、水に浮かばせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ビニルプール(2個)
10:50	<ul style="list-style-type: none"> ○話を聞く。 ○掃りの仕度。 	<ul style="list-style-type: none"> ○今日の作品づくりについてみんなで話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○オルガン1台

遠足に行こう

指導者：飯 澤 ち ず
山 内 悦 子
新 徳 弥 世 生

園児：旭川市立神楽幼稚園 すみれ組
ばら組
たんぽぽ組

1. 題材について

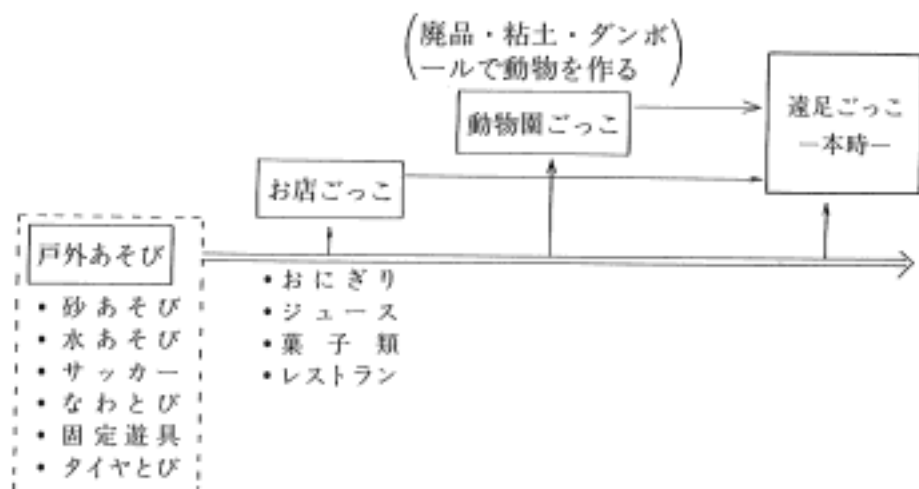
当園は1年保育（男36名、女36名）3クラスの構成である。1学級の人数が少ないので全園児が交流し合いながら遊びを広げていけるような環境を大切にしてきた。また、のびのびと自由に遊べる環境の中に製作コーナーを設け、幼児が遊びの中でいつでも自由に好きなものを作ったり、いろいろな素材に触れたりすることによって創造性を養ってきた。

5月の「おうちごっこ」から「レストランごっこ」へと発展していった遊びがきっかけで、作ることに意欲的になり、友だちと同じ目的をもって取りくんでいる姿が見られてきた。だが、個人差が大きく、遊びが長続きしない子が多い。そこでごっこ遊びを通して、自分たちで遊びを考えさせ、遊びに必要なものを作らせ、作ったもので遊ぶ楽しさを体験させ、いろいろな友だちとのつながりをよりいっそう深めていきたい。

2. 題材のねらい

- ① 友達と楽しく遊ぶ。
- ② いろいろな材料に親しみ遊びに必要なものを作る。

3. 活動の経過



4. 本日の指導

(1) ねらい

- ・友達と一緒に遊びに必要なものを作り、遠足ごっこをして遊ぶ

(2) 準備

- ・いろいろな廃品（あき箱、カップ類、ポリ容器など）
- ・接着剤（セロテープ、布テープなど）
- ・画用紙・色紙・ストロー・セロハン・ダンボールなど。

(3) 展開

時間	幼児の活動	指導上の留意点
10:00	<ul style="list-style-type: none"> ○遠足ごっこをする。乗り物、お弁当、道路などを作る。 ○話し合う。 ○遠足に行く。 ○話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○前もって、いろいろな材料を用意し、すぐ取りくめるような環境設定しておく。 ○教師も一緒にかかわりながら、材料、用具の扱い方など適切な助言をしていく。 ○ひとりひとりの工夫を認め、友達とのかかわり合いが広がっていくような言葉がけをする。 ○遊びを楽しむための約束ごとを子供からひきだす。 ○遠足あそびに参加して、みんなと遊ぶ楽しさを味わえるように配慮する。 ○今日の遊びについて気づいたことをひきだす。
10:50	<ul style="list-style-type: none"> ○片付けをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分達で使ったものを協力し合って片づけるように促す。

あきかんであそぼう

指導者：木村 典義

児童：教育大学附属旭川小学校 1年1組

1. 題材について

空缶は、子どもたちの身のまわりにいくらでもある。そして、日常のくらしの中で、ジュースの空缶やミルクの空缶を見つけると、けったり、ころがしたり、積み上げたりの形で遊び用具に早がわりする。子どもたちにとっては、ジュースの空缶やミルクの空缶などは、大きさや形が手ごろな遊び用具なのであろう。

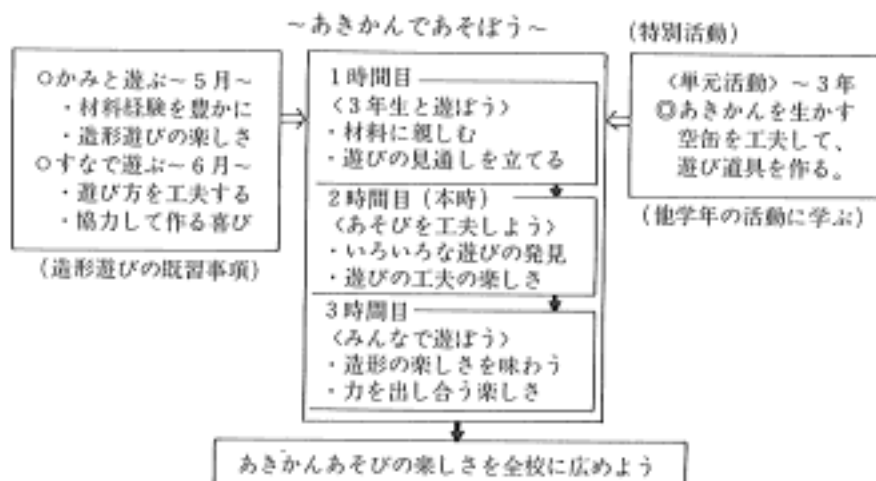
この時期の子どもたちは、場や時間、そして、何か用具があれば、無我夢中になって遊び、次々と遊びを創造していき、時間のたつのもわすれている。

このような子どもたちに、意図的に空缶を導入して、自由な活動をさせながら造形遊びに発展し、材料経験の幅を広げると共に、造形遊びの楽しさを十分味わわせてやりたい。さらに、遊びの工夫を通して、遊びから造形性への発展を願っているのである。

2. 学習のねらい

- (1) 空缶を用い、自由に遊びを工夫させることから、造形遊びのおもしろさを知り、造形活動の楽しさを味わわせる。
- (2) 空缶を並べたり、積んだり、ころがしたりすることから、構成や色彩についての体験を広げさせ、造形の基礎的能力を培う。

3. 指導計画 (3時間)



4. 本時の学習

(1) ねらい

- 空缶の大きさや色を考えながら並べたり、積んだり、ころがしたりさせることから、自ら遊びを見つけることのおもしろさと造形遊びの楽しさを味わわせる。
- 一人一人の工夫をみんなで（グループ）生かし、よりよいものをつくり上げる造形遊びの楽しさを味わわせると共に、構成や色についての基礎能力を培う。

(2) 準備

- 教師 着色した空缶 あさひも ガムテープ 30cm程度の細木
はさみ カッターナイフ

(3) 展開

	指導内容	学習活動	留意事項
導入	①材料になじませる。	①空缶を用意する。 ○一人10個程度の空缶を所定の所から、細木を使い、ころがして遊ぶ。	○遊びながら準備 ○時間の制限をして競争させる。 ○色の変化に留意
展 開	②一人一人て遊びを工夫させる。	②前時のアイデアを思い出し、空缶を工夫して遊ぶ。 ○ならべる ○積む ○ころがす ○ぶらさげる	○缶の色や大きさのちがいに目を向けさせる。 ○ひもやガムテープなどの使用について知らせる。 ○友だちの遊びのよさを認め合う。 ○グループで遊ぶ楽しさに気づかせる。
	③一人一人の遊びをグループに広めさせる。	③一人一人考えた遊びについて、発表し合う。 ○友だちのよさについてみんなで認め合う。 ○一番楽しそうな遊びをグループとする。	
展 開	④グループごとに自由遊びをさせる。	④一人一人アイデアを出し合い、よりよい遊びを工夫する。 ○リーダーを中心に遊びについて話し合う。 ○協力し合って楽しく遊ぶ。	○教師の助言は、できるだけしない。 ○缶の数とアイデアに留意。
	⑤後始末をさせる。	⑤空缶を所定の所に戻す。 ○グループごとに競争して、空缶をかたづけする。	○遊びながら後始末。
展 開	⑥次時の予告をする。	⑥学級全員で空缶で遊ぶ事を知る。	○意欲の喚起。

ありさんのくに

指導者：楽 間 ひとみ

児童：旭川市立北光小学校 2年2組

1. 題材について

低学年の子どもたちは、目の前にある物をじっと見て描くよりも、さわって遊んだりする中で、想像豊かなイメージを広げて描くことを喜ぶものである。

そこで、北光アスレチックで見かけたありたちは、地上と地中でどんな生活をしているだろうかと想像をめぐらせ、それを絵に描かせることは、イメージ豊かで表現力のある子どもに育てると思われる。

また、一人ひとりの絵を集団画にすることで、大きな画面となったことに驚きや喜びをもたせてやりたい。

2. 学習のねらい

- (1) ありの行動を観察し、地上や地中での生活のイメージをふくらませ、画面に表すことができる。
- (2) 一人ひとりの絵を台紙に貼り集団画とし、友だちの作品の良いところを見つけることができる。

3. 指導計画 (4時間)

- 第1次 ありの様子について、話し合い …………… 1時間
をする。
- 第2次 ありの地中の様子を絵に表し、 …………… 2時間 (本時分)
集団画を構成する。
- 第3次 ありの地上の様子を絵に表す。 …………… 1時間

4. 本時の学習

(1) ねらい

- アリのイメージをふくらませながら、ありが何をしているところか、よくわかるように描く。
- みんなの絵で、大きなありの国を作り、喜び合う。
- 自分が工夫したところ、友だちの作品の好きなところを話し合う。

(2) 準備

- 児童 クレパス、フェルトペン
- 教師 黒い台紙、ありの国の台紙、画用紙(8つ切)、部屋をつなぐ紙、はさみ、のり

(3) 展 開

	指 導 内 容	学 習 活 動	留 意 事 項
導 入	<p>①学習することを確認させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○今日は、ありさんのくのにの続きをかきましょう。 ○ありさんのくには、たくさん部屋がありますね。みんなは、どんな部屋を作っているのですか。 <p>②学習課題をつかませる。</p>	<p>①学習することを確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○かきたい意欲をもつ。 ○女王様の部屋 ○卵の部屋 ○食料の部屋 ○病院 ○学校 ○レストラン <p>②学習課題をつかむ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○カードで提示
	<p>ありさんたちが、へやの中で何をしているのかよくわかるようにかく。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ○カードで提示
展 開	<p>③もっとよくわかるようにするには、どうしたらよيدらうか。</p> <p>④様子がよくわかるように、かき加えさせる。</p> <p>⑤できた部屋を、大きな台紙に貼らせる。</p> <p>⑥自分で工夫したところ、友だちの絵の好きなところを発表させる。</p>	<p>③どんなものをかき加えたいか発表する。</p> <p>④発表をもとに、様子がよくわかるようにかき加える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○黒い台紙をして、自分でちぎった画用紙に描く。 <p>⑤できあがったありさんの部屋を自分で大きな台紙に貼る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○できた順番に、好きな場所に貼らせる。 <p>⑥自分で工夫したところを発表する。友だちの絵の好きなところ、工夫しているところを発表する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○一人ひとりのつぶやきも大切に ○重ねたり、かさにならないよう配慮する。 ○工夫を認め合う。
発 展	<p>⑦次時の予告</p>	<p>⑦次時の学習を知る。</p>	

遊 び の 中 か ら

指導者：長 瀬 優 児童：旭川市立千代田小学校 3年1組

1. 題材について

3年生になって、生活の活動範囲も広く、行動的になり、遊びや遊具に対する取り組みも一段と活発になってきている。そこで、日常の遊びに目を向け、感動を引き出させ、その遊びのようすが生き生きとした場面になるように、からだの動きから表現させたい。

また、表現意欲も旺盛になり、自分の考えや主張も強く作品の中に表現するようになってくる。この時期に、ものの見方、感じ方を深め、初歩的な画面構成の工夫と、紙を中心とし、材質の違った布などを効果的に使用させ、表現への関心を高めたい。

2. 学習のねらい

- (1) 遊んでいる様子をとらえ、楽しく制作活動ができる。
- (2) 中心になるものが明確になるように、画面を整理して構成する。
- (3) 質の違う材料を工夫して使い、しっかりのりづけし、刷り上がりの喜びを味わう。

3. 指導計画（8時間）

- | | |
|-----|-----------------------------------------|
| 第1次 | ・遊びの中から、かきたいことを話し合い、かきたい場面を決める。……………1時間 |
| | ・新しい版のつくり方を知る。 |
| 第2次 | ・中心になる人の動き（姿勢）をスケッチし、全体の構図をかく。……………2時間 |
| 第3次 | ・スケッチを基に、切り取り、動きのある形を工夫する。……………1時間（本時） |
| 第4次 | ・人と人、人とももの関係を考えて版づくりをする。……………2時間 |
| | ・表すものに合わせて材料を選ぶ。 |
| 第5次 | ・ていねいに刷り上げる。 |
| | ・工夫したところ、よくできたところをみつけ合う。……………2時間 |

4. 本時の学習

(1) わらい

- ・人の動きがよく表現されるよう、特に、腕や脚などのまがりを考える。
- ・かさなりを考えて切る。

(2) 準備

- ・児童 はさみ、接着剤、手拭き、新聞紙
- ・教師 紙（画用紙）、台紙、人の切り抜き

(3) 展開

	指導内容	学習活動	留意事項
導入	①前時の学習の想起 ②学習課題の確認	①前時の学習を想起する。 ②学習課題を確認する。	
	動きがよく表れるように組み立てる		
展開	①どんな動きの場面があるか出させる。 ②それぞれの動きを考えさせる。 ③人の全体の大きさ、かさなりを考え、部分の切り取りをさせる。 ④切った部分を動きのある形にし、台紙の上におかせる。 ⑤のりづけし組み立てさせる。 ⑥工夫したところを話し合わせる。	①自分の動きの場面を発表する。 ○走っている、とんでいる ○登っている。…… ②その動きに合った形を考える。 ③全体の大きさ、かさなりを考えて切っていく。 ○頭、首、胴体、腕、脚 ④動きができるように、腕や脚などのおき方をいろいろやってみる。 ○部分的になおすところがあったら切りなおす。 ⑤かりどめ的にのりづけする。 ⑥よくできたところ、工夫したところ、手直しをしたらよいところを発表する。	○人の切り抜きで工夫 ○大きさ ○かさなり ○細かなところはしない。 ○安全なはさみの使い方 ○腕、脚のまがりから強調した動きに ○次時で、布等の使用や手なおしのため ○工夫を認め合う
発展	①次時予告	①次時の学習を知る	

草むらのできごと

指導者：長田和代

児童：旭川市立日章小学校 3年習組

1. 題材について

低学年からやや親した3年生は、行動的で、表現意欲が旺盛になり、観察力も育ってきている。また、空想力をよくはたらかせ、魔法や冒険のあるお話が大好きである。

本題材では、草むらでの虫とり経験を、魔法によって空想を広げ、さらに短いストーリーを作って自分の世界を表現していくことをねらっている。ひとりひとりの子どもたちに空想させることは、3年生の子どもたちに豊かな夢を持たせ、表現力の源になると考えて、この題材を設定した。

また、描画材料としての水彩絵の具の基本的な扱いを、本題材でもさらに習熟させていきたい。

2. 学習のねらい

- (1) お話からイメージを広げていき、草むらの不思議な世界へと想像していく。
- (2) 想像したことを絵で表す。
- (3) イメージを生かした表現を大切にし、絵の具の扱いに慣れる。

3. 指導計画（6時間）

第1次——2時間

- ・導入
- ・イメージ化
- ・メモスケッチ

「草むらのできごと」のお話からイメージを広げ、自分のお話を作ってかきたい場面を決める



第2次——1時間（本時）

- ・構想
- ・下絵

自分と虫との世界を想像し、下絵にかく



第3次——2時間

- ・彩色

水彩絵の具を使い、工夫して彩色する



第4次——1時間

- ・鑑賞

友だちの作品を見て 話し合う

4. 本時の学習

(1) ねらい

- ・自分と虫が何をしているのか、描こうとする場面を生き生きと表現する。
- ・形や大きさ、見る位置を考えてかく。

(2) 準備

- ・児童 フェルトペン
- ・教師 画用紙 (四っ切)、資料、OHP

(3) 展開

	指導内容	学習活動	留意事項
導入	①学習内容の確認 ②学習課題を提示する	①学習することを確認する。 ○前時のメモスケッチをもとに下絵を描く。	
	ぼく(わたし)と虫が、どんな遊びをしているのか、よくわかるような下絵をかく。		
展開	③前時のメモスケッチをもとにして描こうとする場面の確認をさせる。 ④資料を用いて画面構成を考えさせる。 ⑤学習課題をおさえさせて、下絵を描かせる。 ⑥互いに評価させる。	③下絵にかく場面を確かめる。 ○要点をかいたメモスケッチで確認。 ④画面構成のしかたを考える ○並べ方(自分と虫の) ○大きさ ○前後の位置など ⑤下絵を描く。 ○自分と虫がどんな遊びをしているところか、よくわかるように描く。 ○形や大きさ、位置などに気をつけて描く。 ⑥友だちの絵をみて話し合う ○友だちの作品を見てまわる。 ○感想発表 ○○○さんが虫とーしているところがよくかけている。 ○虫の様子が上手だ。	○どんな遊びをしているのか、明確にさせる。 ○描くときに気をつけたらよいことに着目させる ○描いている場面から虫との会話が想像できるようにとりくませる。(個別指導) ○意欲づけのための評価努力を認めあわせる。
発展	⑦次時の確認をさせる	⑦次時に学習することを確認する。 ○まわりのものを描く。 ○水彩絵の具で色をぬる。 ○草を工夫してかく。	

底なし沼（アサムサクト）—お話の絵

指導者：宮崎 晃 児童：旭川市立緑が丘小学校 6年3組

1. 題材について

お話の絵で扱う教材は、筋が通り、心理的な描写が含まれているもの、主題内容にせまれるもの、幻想的な内容をもつもの、地域、民族においてはいくらかそのニュアンスに違いがあるという観点から設定した。

この話は、アイヌの人たちの民族的文化的に見ても貴重なものであり、場面の様子や内容も子どもに理解されやすいものであり、情景設定の中で、幻想的、神秘的な世界を絵画的イメージにおきかえられる。アイヌの人たちが、多くの自然の神々の守護をうけて、生活していたことについて理解を深め、絵画的イメージをつくりあげるところに、この題材のねらいがあると考ええる。

2. 学習のねらい

- (1) お話の中で強く感じた場面をえらび、効果的な、絵画表現ができるよう、イメージをふくらませる。
- (2) 自分のねらいにそったような画面構成をする。
- (3) 水彩絵の具の性質を効果的に生かして、混色、重色、実物の感じの表現、主題にあった主になる色調等の表現を積極的に追求させる。

3. 指導計画（8時間）

	内 容	指 導 計 画
第一 次	○お話を読み内容をつかむ ○話のイメージづくりのため資料をあつめる。 2時間	○お話の中にある条件を駆使しながら自分のイメージをふくらませる。
第二 次	○構想計画をたて、下絵がきをする。 2時間	○イメージをどう画面に定着させるか画面の構成の工夫とその能力をつける。
第三 次	○彩色する。 3時間 (本時 $\frac{2}{3}$)	○お話のイメージをふくらませるため彩色のしかたに主眼をおき、お話の主題にせまらせるようにする。 ○水彩絵の具の性質を生かす工夫をさせるようにする。
第四 次	○鑑賞する。 1時間	○絵のうまさだけでなく、どんな感じがするかといった角度から、友達の絵を見るようにする。 ○一枚の絵から、絵をかく「喜び」を感じさせてやりたい。

4. 本時の学習

(1) ねらい

- ・お話の感じが出るよう効果を考えながら彩色する。
- ・水彩絵の具の性質を生かす工夫をする。

(2) 準備

- ・児童 水彩絵の具一式 下絵
- ・教師 写真（アイヌの人） お話のプリント、アイヌの衣服

(3) 展開

	指導内容	学習活動	留意事項
導入	①本時のめあてを確認させる。 ②学習課題を確認させる。	①学習のめあてを確認する。 （意欲を持つ） ②学習課題を確認する。	
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 自分のイメージが出るよう効率を考えながら彩色する。 </div>		
展開	③下絵に彩色させる。 ④筆の動かし方によっても感じが変わることに気づかせる。 ⑤友達作品を見て話し合わせる。 （児童作品提示）	③お話の絵（底なし沼） （予想されること） <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 自分の表したい絵 </div> ○自然の美しさ。 ○おそろしさ ○きびしさ ○願い ○静けさ ○よろこび ④イメージを色によって表現する。 ⑤友達作品を見て気づいた良い所を発表する。	○水彩絵の具の性質を生かしているか。 ○どこにどんな技法を使うかを考えているか。 ○友達から良さを吸収する。
発表	⑥次時の学習についての確認をさせる。	⑥次時の学習についての確認をする。 （次時への意欲づけ）	○作品保存に気を付ける。

力いっぱいひっこぬけ —人と人とのかわり—

指導者：新井好恵

児童：旭川市立旭川第三小学校 6年4組

1. 題材について

近年児童数が急激に増え続けた本校では、遊び場の確保も難しい。そんななかで、子どもたちに人気があるのは、場所をあまり必要としない「ひっこぬき」という遊びである。鬼に引っ張られまいとして、満心の力を込めて仲間にしがみつくる者、それを何とかして引き抜こうと手足を引っ張る者。そこには普段の生活で見られぬいろいろな姿態が展開され、笑いと解放感に満ちたなかでお互いの素顔に触れることができる。

こうして遊ぶ自分と仲間の様子を描くことによって、友達との結びつきの大切さや信頼の楽しさを再認識し、より強い学級の仲間意識や心の絆が育まれることを期待している。6学年までに「体の動き」を学習しているが、ここではさらに体の様々な動きについて見方を深めさせ、人と人の重なりを考えて画面を構成したり彩色できる力を培いたい。

しかし、現状では動きのある人物表現に子どもたちは抵抗感を持っており、その表現力にも大きな個人差がある。従って、その子なりの独自のとらえ方を大切に、随時観察によって確かめさせながら遊びの様子を生き生きと表現させたい。

2. 学習のねらい

- (1) 人物の動きに対する見方を深める。
- (2) 人と人の重なりを考えて画面構成をする。
- (3) 場面の様子や感じがよく表れる彩色をくふうさせる。

3. 指導計画（8時間）

- | | | |
|-----|---------------------------------------|----------------------------|
| 第1次 | 「ひっこぬき」をしている時の自分や友だちの様子を話し合い、絵の構想を練る。 | 1時間 |
| 第2次 | 構想をもとに人物の姿態をスケッチする。 | 2時間 |
| 第3次 | 人物の配置や重なり注意到画面を構成し、下絵を描く。 | 2時間
(本時 $\frac{1}{2}$) |
| 第4次 | 場面の様子や感じがよく表れるように色調や筆使いなどをくふうして彩色する | 3時間 |

4. 本時の学習

(1) ねらい

- ・ 体のひねりや、頭の向き、手足の動きなどに注意して人物の動きを表現

する。

- ・ それぞれの人物の形、位置関係に気をつけ、みんなでからみ合って遊ぶ様子がわかるように、大まかな構図をもとに下絵を描く。

(2) 準備

- ・ 児童 画用紙、鉛筆、クロッキー用ペン、筆、墨
- ・ 教師 画板、クリップ

(3) 展開

	指導内容	学習活動	留意事項
導入	①前時の学習を確認させる。 ②学習課題を把握させる。	①前時に学習したことを確認する。 ○主に画面構成のポイントなど。 ②学習課題を把握し、自分のめあてを持つ	
	大まかな構図をもとに、みんなで「ひっこぬき」をして遊ぶ様子が表れるように下絵を描く		
展開	③それぞれの人物を描かせる。 ④画面を検討させる。遊びをさせる。	③大まかな構図をもとに、人物の様子をくわしく描く。 ○それぞれの人物の姿勢。 ○人と人との重なりやかかわり合い。 ④画面を検討する。 ○表したい様子や感じが表現できたか。 ○自分のめあてが達成できたか。	○スケッチをもとにしたたり、モデルになってもらったりして描く。 ○遊んでいる時の気持ちになって描く。
発展	⑤次時の確認をさせる。	⑤次時に学習することを確認する。 ○水彩絵の具で彩色する	

わたしたちの用務員さん

指導者：伊藤 有為男

児童：旭川市立神居小学校 6年2組

1. 題材について

6学年の児童の発達を考えると、まわりの人々やものを見つめようとする意識も高まり、かかわり合いも広がり、社会性も育ってきている。このような時期に、身近に働く用務員さんを題材としてとりあげ、働く人の姿を生き生きと感じとらせたい。

また、働く姿から、自分なりの主題を選び出させ、版画で表現させることは画面構成の学習としてとりあげるよい機会であり、5学年の木版画の経験を生かし、白と黒の効果を考えさせ、面と線をもって彫らせることは、6学年において、いっそう適切であると考ええる。

2. 学習のねらい

- (1) 表したいものを追求していこうとする制作態度を育てる。
- (2) 主題を効果的に表現するための画面構成をする。
- (3) 白と黒の効果を考えた彫りをする。
- (4) 刀の効果的な使用と刷りの工夫をする。

3. 指導計画 (10時間)

	内 容	指 導 計 画
第一 次	○学習計画と 主題の決定 (1)	○木版画の基本的な作り方を定着させる。 ○制作過程を理解させ、主題を決めさせる。
第二 次	○下絵づくり(4)	○仕事をしているようすを下絵にさせる。 ○画面の構成を考えさせる。 ○下絵にもとづき、版木に描かせる。 ○白と黒の効果を考え墨入れさせる。(本時 $\frac{1}{4}$)
第三 次	○彫り(3)	○刷り上がりの状態を頭にえがきながら、もの感じや質感など、刀の使い分けによって彫り進めさせる。
第四 次	○ためし刷りと 修正彫り (1)	○ためし刷りをしながら修正し、全体の調子をみさせる。
第五 次	○本刷りと鑑賞 (1)	○主題が効果的に表現できているか自分の作品を評価させる。 ○友達作品をみさせる。

4. 本時の学習

(1) わらい

- ・ 働いているようすがよく表れるように墨入れをする。
- ・ 白と黒の効果を考え、工夫させる。

(2) 準備

- ・ 児童 シナベニヤ合板、白コンテ、スケッチブック、筆、鉛筆
- ・ 教師 参考作品、墨汁、絵に描き入れる物

(3) 展開

	指導内容	学習活動	留意事項
導入	①学習することを確認させる。 ②学習課題を確認させる。	①学習することを確認する。 ②学習課題を確認する。	
	おじさんの働いているようすが、よくあらわれるように墨入れをする。		
展開	③自分の一番表したいところは何か確かめさせる。 ④作品例を使って墨入れのしかたを考えさせる。 ⑤版木に描いた下絵に墨を入れさせる。 ⑥友達作品を見て話し合わせる。 (児童作品提示)	③自分の一番表したいところは何であったか確かめ発表する。 ④墨入れのしかたについて考え、気づいたことを発表する。 ⑤白と黒の効果を考えながら墨を入れる。 ⑥友達作品を見て、気づいた良い所を発表する。	○版木の下絵の主題文で確かめさせる。 ○墨入れをする時のポイントについて気づかせる。 ○下絵にこだわらず新たな気持ちで描かせる。 ○努力を認め合い次時への意欲を高めさせる。
発展	⑦次時の学習についての確認をさせる。	⑦次時の学習についての確認をする。	

ジャンプ大会

指導者：佐藤修司

児童：旭川市立近文小学校 2年4組

1. 題材について

年間を通して子どもたちの遊び場となっている嵐山に70メートル級の本格的なジャンプ台が新設され、全日本ノルディック選手権大会の見学をしたことで、子どもたちのジャンプ競技に対する興味は一段と高まったようである。迫力いっぱいカンテから飛び出す選手たちを見る子どもたちの目は輝き、「はくも飛んでみたいなあ。」というつぶやきが聞こえてきた。

ここでは、このような子どもたちの欲求を、ジャンプ人形をつくり飛ばして遊ぶことによって満たしながら、身近な生活の中から遊びを見つけ、それを取り入れていく心を育てたい。

また、木質化された教室で学ぶ子どもたちは、木に対する興味もあり、スキーづくりの中で木を扱うことにより、いっそうその関心を高めていきたい。

2. 学習のねらい

- ① 定規を使って直線を引かせ、はさみで切り取らせる。
- ② つくるものに合った大きさや形を考えさせる。
- ③ つくったもので楽しく遊ばせ、さらに工夫をさせる。

3. 指導計画（5時間）

- | | | |
|-----|-------------------------|----------|
| 第1次 | テレビ視聴をしたり、資料を見ながら構想をねる。 | 1時間 |
| 第2次 | 工夫しながらつくる。 | |
| | ①ジャンプ人形をつくる。 | 1時間 |
| | ②スキーをつくり人形を立てる。 | 2時間（本時ノ） |
| 第3次 | ジャンプ大会をする。 | 1時間 |

4. 本時の学習

(1) ねらい

- ・ 定規を使ってスキーの形をかかせ、はさみで切り取らせる。
- ・ 傾きに気をつけて人形を接着させる。

(2) 準備

- ・ 児童 定規・はさみ・接着剤・ジャンプ人形・手拭き
- ・ 教師 クリップ、資料、ジャンプ台

(3) 展開

	指 導 内 容	学 習 活 動	留 意 事 項
導 入	①スキーづくりについて知らせる。	①学習内容を知る。	○資料
展 開	②前時につくった材料に自分の人形の大きさにあったスキーの形をかかせる。 ③線にそって、はさみで切らせ、先端の処理をさせる ④できたスキーに人形を立たせ、かたむきなどを考えさせながら、のりしろをつくらせ接着させる。 ⑤できたジャンプ人形を、ジャンプ台を使って飛ばせる。 ○友達の作品を観察させる	②大きさを考えながらスキーの形をかく。 ③スキーをつくる。 ④形のよいジャンプ人形に仕上げる。 ○接着のしかたによって、人形のかたむきが変わることを知る。 ⑤飛ばしてみる。 ○よく飛んでたおれない人形を見て参考にする。	○定規の扱い ○スキーの長さや幅。 ○はさみの使い方 ○立てる位置 ○のりしろの工夫 ○ジャンプ台の準備 ○手直し
発 展	⑥学習のまとめと次時の予告をする。	○感想を発表する。	

この木にと～まれ

指導者：土 屋 るみ子

児童：旭川市立千代田小学校 2年3組

1. 題材について

低学年の児童達は、非常に生き物への関心が高く、特に羽根を持ち、空を自由に飛ぶことができ、どこにでもとまることができる鳥たちに対して、憧れさえ抱いている。その関心度の高いテーマへの取り組みとして、絵画領域の中では、「おしゃれな小鳥」と題して、きれいな色で飾る活動を通し色々な描画材料でかく経験をさせた。また、彫塑領域の中では、「のって空をとんでみたい鳥」と題して、自分がのって空をとんでみたい鳥の形を想像させ、粘土を使って、その形を量感のある立体として作らせてきた。

2学年の児童には、実在する小鳥の形や色にこだわることなく、「こんな小鳥がいたらいいなあ」「野や山や空をとんだり、木にとまったらいいなあ」と各自、イメージ化した空想の鳥作りへと、造形的に転換させ、表すことへの願いや期待にあふれさせたい。発展として、ここでの指導は、各自制作した小鳥をみんなで力を合わせて作った木にとまらせるという共同作業を通して、きれいに飾らせたい。

2. 学習のねらい

- (1) 段ボール箱を高く積み、みんなで飾る、木作りを工夫させる。
- (2) 封筒・径5mmの棒・色紙等を使って、楽しい小鳥を作らせる。
- (3) 最後まででいねいに作り、飾る楽しさを味わわせる。

3. 指導計画 (8時間)

- | | | | |
|-----|----------------------------------|-------|-----|
| 第1次 | (1)学習の全体計画 | _____ | 1時間 |
| | (2)木作り | _____ | 2時間 |
| | ・木の表面の部分工夫して作らせる(共同製作) | | |
| 第2次 | (3)小鳥作り | | |
| | ・小鳥の美しさ等イメージ化させ、胴体の部分を作らせる — 1 | | |
| | ・頭や胴体に羽根等、色や形を工夫し、木に飾らせる(本時) — 1 | | |
| 第3次 | (4)小鳥を見ながら、お話作りをさせる | _____ | 1 |

4. 本時の学習

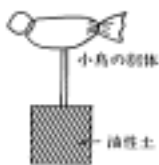
(1) ねらい

- ・色紙・画用紙等を使って、作る形や色を工夫させ、空想の小鳥を作らせ木に楽しく、きれいに飾らせる。

(2) 準備

- ・児童 色紙・のり・はさみ・セロテープ・小鳥の胴体・油粘土・手拭き
- ・教師 色画用紙・セロテープ・制作した木

(3) 展開

	指導内容	学習活動	留意事項
導入	①課題確認 ②どのように飾りつけるか話し合わせる。	①本時のめあてをたしかめる。 ②こんな小鳥を作りたい。頭、羽根、尾に分けて発表する。	○油粘土は、軸を立てる台にする。 
展開	③色や形を工夫させ、小鳥作りをさせる。 ④軸の部分を木の枝にとめてかざらせる。	③飾りつける部分を作る。 ④小鳥を木の枝にきれいに飾る。	○セロファンテープでしっかりととめる。
発展	⑤感想を発表させる。	⑤自分や友達作品を見て、感想を発表する。	

音の出るかべかざり

指導者：市野 恵美子

児童：旭川市立高台小学校 5年2組

1. 題材について

このごろ部屋の中を見回しても、木製品がずいぶん減ってきていることに気づく。子どもたちは、木切れを手にする機会も少なくなり、遊びの中で、木を削ったり切ったりして道具を作ることもしなくなってしまった。工作材料として手に入れにくい、加工しにくい、と木を避けるのではなく、様々な造形の可能性に富んだ素材と考え、木材に触れさせ、その良さや特性に気づかせたい。

ここでは、木と木を打ち合わせて音を出すという楽しさを大切にしながら、電動糸のこを使用して、すきなしくみのかべかざりを作らせたい。完成後は自分の手近において触れ、音を楽しむことができる。さらに工夫を重ねることにより、子ども1人ひとりの意欲をよびおこし、もっとこうしたい、という思いを生活の中へ広げることができると思う。

2. 学習のねらい

- ① 木と木を打ち合わせて音を出す。楽しい形のかべかざりをつくる。
- ② 手順や方法を考え、計画的に制作する態度を養う。
- ③ 材料や用具の扱いに慣れ、木工の楽しさを味わう。

3. 指導計画 (8時間)

- ・木と木を打ち合わせて音を出す物を観察し、自分のつくりたい形を考える。紙で模型をつくる。……2時間
- ・木取りを考え、板材を切ったり、表面に線彫りをしたりする……3時間
- ・手直しをしたり組み立てたりして完成させる。……2時間
(本時/)
- ・鑑賞し次への利用のしかたを考える。……1時間

4. 本時の学習

(1) ねらい

- ・音をたしかめながら、形や動く部分の手直しをし、組み立てる。

(2) 準備

- ・児童 糸のこぎり、きり、彫刻刀、ゴムひも、接着剤、部品カード、やすり等
- ・教師 電動糸のこ、参考資料等

(3) 展開

	指導内容	学習活動	留意事項
導入	①学習内容を確認させる。 ②作業への見通しを持たせる。	①本時の学習内容を確認する。 ②動かしてみても音を聞く。	○願いを確かめ意欲を持たせる。
展開	③組み立てさせる。 ④友達作品について話し合わせる。 ⑤手直し部分に気づかせる。	③組み立てる。 ④作品を見て話し合う。 ○形に動きが合っているか ○じょうぶさどうか ⑤自分の作品を見直す。	○手順よく作業させる。 ○観点をしほり話し合わせる。
発展	⑥本時のまとめと次時の予告	⑥次の学習の計画をたしかめる。	○カードを利用する。

一本の丸太から

指導者：高野 亮 児童：旭川市立緑新小学校 6年3組

1. 題材について

6年生という学年は、ものの見方や考え方がかなり客観的・複雑になり、観察力がつき、空間関係もしっかりとつかめるようになる。生活経験や素材経験が広がり、より高度な抵抗の多い題材に興味を示すようになる。

緑新小6年の子どもたちは、4年生の時、木片や小枝を組み合わせた、木の小片や草葉をつけて、虫や動物をつくり出すことにとり組んだ。5年生では、板に浮き彫りのもようを彫刻刀で彫る経験や、石の塊の中に表情のある顔や小動物を見出していく学習も経験した。

6年生になって、それらの学習のまとめとして、自然木の丸太の中に顔などの形を見出し、その形を生かしながら、自分のイメージを加えて彫ったり削ったりして、動物や人などの木彫にとり組ませることにした。木を削るという仕事は、6年生の発達段階では、なたやのみなどの大型の刃物の使用がむずかしく、抵抗の大きな題材である。また、とすれば、考えと表現が一致できず、表現意欲をしばせてしまうことも考えられる。反面、抵抗のある対象に挑戦し、困難を克服していく意欲に満ちた時期でもある。それで、あまり高度な技術を要求するのではなく、自然の形をできるだけ生かして、イメージを発展させる程度におさえたい。また、抵抗の少ない効果的な用具を用意して、安全面でも十分配慮したい。そして、木肌のぬくもりを手で感じさせる中で、自然の形の中から独特の形を見つけ出す大胆さと、最後まで見通しを立てて彫り進める計画性、抵抗の多い作業を通して「一度削ると、直すことができない」慎重さを身につけさせたい。

2. 学習のねらい

- (1) 自然木の丸太の中に、動物や人などのおもしろい形を見つけ出し、凹凸を生かして予想を立てながら、彫刻刀や小刀で彫り出させる。
- (2) 丸太の形や曲がり方を見て、どこにどう切りこみを入れ、どう彫るか、形を構想させる。
- (3) 遠く離して見たり、友だちに感想を聞いたりして確かめ、少しずつ彫らせる。
- (4) 木の彫刻と粘土による表現の違いを知り、計画的に仕事にとり組ませる。
- (5) 小刀や彫刻刀、鋸やサフォームなど木彫用具の安全な使い方に慣れさせる。

3. 指導計画 (8時間)

- (1) 動機づけ・準備 …………… 2時間・(ゆとりの時間などの利用)
 - ・教科書の作品例などから、これからとり組む作品について知り、どんな材料をどのように集めたらよいか考え、話し合う。
 - ・木彫の材料となる間伐材・丸太をとりに(拾いに)、山や川原へ行く。

- ・丸太を、木彫にとり組む大きさに切って、自分たちの使う材料をつくる。
- (2) 導入・構想 1時間
 - ・材料をいろいろな方向から見たり、木の肌に触れたりして、その中に自分のつくろうとするものを見つけ出し、構想を練る。
 - ・素材に、自分の彫ろうとするものの線をさがし出し、木どりする。
- (3) 制作・展開 4時間・本時 \times
 - ・のこぎりやサファームなどで、輪郭にそって大まかに切ったり削ったりする。
 - ・小刀や彫刻刀で、くぼみの部分を彫る
- (4) 完成・鑑賞 1時間
 - ・細かい部分を彫って完成させる。
 - ・みんなの作品を見て、表現のくふうやよい点を見つけ合い、自分の作品について反省する。

4. 本時の学習

- (1) わらい
 - ・小刀や彫刻刀で、表情や特徴がはっきり出るように、くぼみの部分を彫る。
- (2) 準備
 - ・児童 彫刻刀・小刀・古タオル・古ざぶとん・軍手・図工ノートなど
 - ・教師 木片・丸太（径10～15cm、長30～40cm）木工バイス、両刃のこ（10）サフォーム（平・丸各12）カッターソー、救急箱など
- (3) 展 開

	指 導 内 容	学 習 活 動	留 意 事 項
導 入	①構想をより確かなものとするために発表させる。 ②本時の学習課題を確認させる。	①制作カードをもとに、自分のつくりたいものについて発表したり、意見を聞いたりとって構想を深める。 ②本時の学習課題を確認する。	○制作カード ラフスケッチ ○発表者4～5人 ○カードで提示、音読させる。
展 開	③小刀、彫刻刀の扱い方について確認する。 ④鼻や凸部の浮き出し方について注意する。 ⑤仕事の進め方のじょうずな者や、彫り方の特徴的な者について発表させる。	③小刀・彫刻刀の扱い方、姿勢などについて知り、作業に入る。 ④凸部を効果的に浮き出すために、凹部の彫り方をくふうする。 ⑤友だちのいいところを認め合い、自分の作品にとり入れる技法など、もっとよくするために考える。	○古ざぶとんやぼろ布の使い方を確認させ、安全に十分配慮する。 ○発表の時は、完全に作業を中止して集中して聞く。（安全面）
発 展	⑥本時の学習について反省させ、次時の学習についての構想を練らせる。 ⑦次時予告。	⑥本時の学習について反省し次時にとり組む作業の計画や留意点について考え、発表する。	○制作カード ○発表者4～5人

歯をくいしばって

指導者：石垣 広

児童：旭川市立永山小学校 6年3組

1. 題材について

高学年は、粘土の材料経験も深まり、立体を意識的に把握したり表現したりできる段階である。

また、写実的な細かい観察力や技術的な力が高まってくるが、やゝもすると細部にこだわり、部分的、説明的な表現にとどまりがちなので、生き生きとした感じやどっしりとした塊の感じを率直に表現させ、全体の形との関係において部分をとらえさせることが大切だと思う。

5年生では、自然石の塊からイメージをふくらませ、石の形をできるだけ生かし、人の形をつくってきた。また、学校で育てているにわとりをよく観察し、大まかな胴の形を決め、首や尾のつり合い、足や首の向きを工夫して粘土でつくってきた。

6年生では、学校生活の中でかかわりの深い友だちの顔をつくることにした。人の頭部は、塊としての量を感じ、その中に微妙な変化があって主題を設定しやすい。自分自身をモデルにして、触れて確かめることができる。頭部全体と部分のかかわりを追求できるなど、彫塑の題材として適している。

ここでは、学校生活の中に、何らかの心情を感じる動的場面を設定し、テーマを与えるために、学級で計画した「うでずもう大会」に目をむけた。

高学年の時期は、精神的にも肉体的にも成長するときであり、グループ対抗試合や力を出しきって競い合うことを進んで求める時期なので、「うでずもう大会」には興味をもち、真剣に取り組むだろうと考えた。

歯をくいしばってがんばる友だちの顔には、激しさがあり緊張感がみなぎり、普段、見慣れている友だちの顔に表れた強烈な表情に驚くことだろう。そして、友だちの顔を見直したり、触れてみることで、力が入った感じや力が入っているところを容易につかみとることができると考えた。

このように主題に対する切り込みを深め、頭部を見直させ、特徴が目立つ顔をつくらせることで、構想をより豊かで確かなものにさせ、創造的な表現へと導いていきたい。

2. 学習のねらい

- ◎ 頭部全体と部分の調和を考えながら、歯をくいしばってがんばる友だちの表情をとらえさせ、粘土で表現させる。
- 制作の意図によって、心材を効果的に使い表現させる。

3. 指導計画 (7時間)

- (1) うでずもう大会をする。(ゆりの時間などの利用) — 1時間
- (2) 力を入れてがんばる友だちの顔をクロッキーする。 } 2時間
- (3) 支柱をつくる。 }
- (4) 支柱に首や頭の塊を荒づけする。 }
- (5) 全体と部分の調和を考えながら、 } 2時間
力が入った感じを表現する。 (本時分)
- (6) 部分、部分を確かめながら仕上げる。 }
- (7) できた作品を見て、表現の工夫やよい点を見つけよう。 } 2時間

4. 本時の学習

(1) わらい

- ・どっしりとした塊の感じをとらえ、全体と部分の調和を考えながら、力が入った感じを生き生きと表現させる。

(2) 準備

- ・児童 粘土べら、布、ビニール袋、手ふき、支柱
- ・教師 粘土、粘土板

(3) 展開

	指導内容	学習活動	留意事項
導入	①顔と首のつながりや量のつりあいを確かめさせる。	①首の傾きや顔の向き、顔と首の塊を確かめるための観察をする。	○粘土べらで、塊に線を入れ確かめさせる。
	②学習のわらいを確認させる。	②学習のわらいを確認する。	○カードで提示。
展開	③大まかに肉づけさせる。	③前後左右からよく見て、目鼻、耳、口などの位置を確かめながら肉づけする。	○粘土べらは使わず、指や手でつくらせる。
	④力が入った感じを大まかにとらえ、表現させる。	④力が入った感じ、力が入っているところを表現する。 ○歯をくいしばっている。 ○首すじに力が入っている ○目が大きく開いている。	○細部にこだわらず表現する。 ○机間巡視。
発展	⑤本時の学習について反省しあい、次時の学習について構想を練らせる。	⑤友だちの作品を見てまわり、感想を発表する。 ○表情がよくとらえられている作品について話しあう。 ○自分の作品について、さらに工夫していきたいところを発表する。	○制作カードに記入し、今後の見直しをもたせる。

私と友だち

指導者：品田 潤

生徒：旭川市立東陽中学校 1年5組

1. 題材について

中学生になって新しい仲間とともに数か月が過ぎ、ひとりひとりの個性や特徴も互いにわかってきているように思われる。しかしそれは外面的な見方や理解の仕方になってはいないだろうか。この題材を通して、自分とのかかわりで友だちをみつめることによって、友だちのもっている本当の良さや、すばらしさを発見し表現させたい。

単色木版画は、白と黒に凝集された表現の世界である。明暗による立体的表現を基礎にしながら単に対象を見て表現することではなく、思いを込め、心を働かせながら表現させたい。制作の過程で省略、強調などの技法も大切にしながら、子どもたちがもっているイメージを引き出すよう指導したい。

制作後、作品を交換しあい、学級としての作品集が出来た時、友だちを大切に、新たな仲間がみえるようでありたい。

2. 学習のねらい

- (1) 友だちとの話し合いや作文を通して、日頃のスケッチの中から、主題を明確にした表現ができる。
- (2) 構図、白黒の配置を工夫し、明暗による立体的な表現をし、いきいきとした表現ができる。
- (3) 材質や刀の特性を生かし用具を効果的に使用し、計画的に制作をすすめることができる。
- (4) 作品集づくり、作品交換を通して、作品・友だちを大切にできる心情を育てる。

3. 指導計画（16時間）

- (1) 主題の把握 ————— 1時間
- (2) 下絵制作 ————— 3時間
- (3) 彫り・表現の工夫 ————— 6時間（本時）
- (4) 試し刷り・修正彫り・本刷り ——— 4時間
- (5) 鑑賞・反省・作品集づくりの計画 —— 2時間

4. 本時の学習

(1) ねらい

- ・自分の主題を確認し、彫刻刀による表現を工夫して制作することができる。

(2) 準備

- ・生徒 版木・彫刻刀・制作カード・作文・スケッチブック
- ・教師 参考作品・資料・OHP

(3) 展開

	指導内容	学習活動	留意事項
導入	<p>①自分の主題を確認させる。</p> <p>②本時のねらいを持たせる。</p>	<p>①自分の作文を読み返して主題を確認する。</p> <p>②前時の制作カードにより反省点を出し合い、あわせて参考資料から本時のねらいを持つ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○前時の学習の反省。 ○鑑賞を通して自分のねらいを確かめる。 ○ねらいを制作カードに記入。 	<ul style="list-style-type: none"> ○制作カードの活用。 ○OHPの利用。 ○生徒の発表を大切にす。
展開	<p>③制作をさせる。</p>	<p>③自分にあつた刀表現を工夫し制作する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○彫る場所を決める。 ○白黒のバランスを考える。 ○刀の使い分け、タッチを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ○机回巡視。 ○本時のねらいどおり制作がすすむよう適時アドバイスする。 ○安全指導。
発表	<p>④本時のまとめをさせる。</p> <p>⑤次時も引き続き彫りの制作をすることを知らせる。</p>	<p>④本時の反省点を制作カードに記入する。</p> <p>⑤本時の反省から次時の制作の見通しをもつ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○制作カードにより反省し次時の制作の見通しを考えさせる。

校舎・心に残る場所を描こう

指導者：加藤 隆

生徒：旭川市立六合中学校 3年5組

1. 題材について

前年度は、校舎の片すみにあるもの（リヤカー、体育用具室の剣道の防具、靴箱の中のクツ、石炭ストーブなど）を題材とした。そしてそれらをたんねんに描くことによって、自分の身近なものに目をむけ、見慣れていながらも目にとめることのなかったものとの新たな出会いがあり、自分たちの生活を見つめる一視点とすることができたのではないかと考える。

今年度はさらに自分たちが3年間を過ごしてきた校舎そのものを題材とした。授業への導入として、作文による関心の呼びおこしを行い、生徒ひとりひとりの校舎とのかかわりを考えさせたが、生徒にとって校舎はその生活の大部分を占める、いわば生活の原点であろう。仲間と出会い、仲間と語り、仲間とともに成長のできる場所。校舎がどんなに古くても、汚れていてもそこには3年間を過ごしてきた仲間の存在があり、生活がある。そして様々な思い出をつくり出していくことのできる生きた器（うつわ）が生徒にとっての校舎と言えるのではないかと考える。開校から30年を経て今、六合中学校は全面改築をま近にひかえている。近い将来、姿を消す現校舎を確実に自分の目でとらえ、心にとどめていくと同時に、ひとりひとりの3年間の歩みをみつめさせる場としていきたい。

2. 学習のねらい

- (1) 校舎の持つふんいきをひとりひとりが感じとり、心をこめて描きとっていくことができる。
- (2) 自分の描き残したい場所をより効果的に表現できるように、画面構成や彩色を工夫することができる。

3. 指導計画（11時間）

- (1) 主題の把握 ————— 1時間
- (2) 鉛筆による下描き ————— 3時間
- (3) 彩色 ————— 6時間（本時％）
- (4) 鑑賞・反省 ————— 1時間

4. 本時の学習

(1) ねらい

- ・ 今までの制作の過程をふり返り、自分の描き表したいイメージをより明確にして彩色することができる。

(2) 準備

- ・生徒 作品、水彩用具、制作カード
- ・教師 参考作品

(3) 展開

	指導内容	学習活動	留意事項
導	①前時までの制作をふりかえらせる。	①自分の作品や制作カードをもとに前時までの取り組みをふりかえる。 ○描いている場所への想いなど。 ○前時の制作でねらいとしてきたこと。	○友だちの発表を聞きながら自分のとりくみを確かめる。
入	②今日の課題を把握させる。	②主題にそった今日の仕事を考える。 ○制作カードの記入。	
展 開	③自分のねらいに近づき彩色をさせる。	③今日のねらいにそって彩色していく。 ○対象への想いを深める彩色の工夫。 ○完成にむけて作品を追求していく。	○机間巡視。 ねらいに合った彩色になっているか個別指導をしていく。
発 展	④今日の制作をふりかえり、次時への見通しを持たせる。	④今日の制作をふりかえり制作カードに記入する。 ○次時への制作の見通しを持つ。	○作品の完成への意識づけを図る。

人工物から構成しよう

指導者：菅原敏光

生徒：旭川市立永山中学校 1年5組

1. 題材について

私達の身の回りには、数えきれないほどの多くの人工物がある。しかし、あまりにも日常的過ぎるのか、それらの美しさやおもしろさに興味・関心を抱かない傾向が多く見られる。そうした中からも、生徒個々が日常生活の中で見慣れ使い慣れていたたり、愛着を持っている人工物に目を向けることによって、観察の態度や方法を工夫し新しい形の美しさを発見させることが必要と思われる。更に配置や組み合わせを工夫することによって、新しい美の秩序をつくりあげることができることに気づかせたい。ただし、多くの人工物は合理的で無駄のない美しい形をしている場合が多いので、ここでは機能美の追求に主眼を置かない。部分の美しさやおもしろさ、様々な角度から見た新しい形の発見と構成美に主眼を置きたい。本題材は、秩序関係が美を形成していくことを感覚的に受けとめさせ、表現方法の基礎を培っていくことができると考えられる。

2. 学習のねらい

- (1) 素材の観察の仕方・とらえ方を工夫し描写することにより、形の美しさやおもしろさを発見させる。
- (2) 発見した形をもとに、単純化や強調等の工夫をし秩序だった美の構成を考えさせる。
- (3) 調和のとれた美しい配色をさせる。
- (4) 物の見方や伝達デザインの鑑賞に生かす。

3. 指導計画 (11時間)

(人工物からの形の発見と選択)	(事前)
(1) 観察と描写による形の再発見	1時間
(2) 単純化や強調による形の形成	2時間
(3) 画面構成の工夫	3時間 (本時 1/3)
(4) 色彩と配色計画	1時間
(5) 彩色	3時間
(6) 鑑賞と応用発展	1時間
(壁かけとして活用)	(事後)

4. 本時の学習

(1) ねらい

自分で見つけ出した形をもとにして、秩序だった美を考えながら画面への構成を工夫することができる。

(2) 準備

- ・生徒 TPシート 画用紙 セロテープ 見とり枠 カーボン紙
- ・教師 OHP TPシート 参考作品 トラペリアンブ

(3) 本時の展開

	指導内容	学習活動	留意事項
導 入	①わらいの把握 〔本時学習内容を〕 予想させる。	①前時学習内容を想起し、本時学習内容を予想する。	○OHPで前時学習内容を確認させる。
展 開	②構成のしかたの手がかり 〔変化の中にもまとまりのある構成をするにはどうしたらよいかを考えさせる。〕 ③構成の工夫 〔画用紙の枠の中で動かし、更に見とり枠を動かすことによっても効果が違ってくることに気づかせる。〕 ④構成の深化 〔自分で試みた構成から良いと思われるものを画用紙に転写させる。〕 ⑤構成の定着 〔比較検討してより良い構成を選ばせる。〕	②構成するためには一定の秩序が必要であることに気づく。 ③各自、TPシートの組み合わせを工夫する。 ④組み合わせしたものをカーボン紙で画用紙に転写する。 ⑤画用紙に転写されたものを比較検討し、どれがよいかを考える。	○OHPによる説明 〔大小の組み合わせ、角度の違い、重ねる、透過させる。〕 ○自分の構成をOHPで確かめる。 ○透過させない場合は不要な線を消す。 ○生徒作品を、OHPで写し構成決定のためのポイントを発表させる。
発 展	⑥構成決定のための見とおし 〔本時学習内容の確かめと次時学習内容のつながりを得させる。〕	⑥次時学習内容のために更により良い構成を工夫すべきところを考える。	○家庭での学習課題とさせる。 ○制作カードに記入させる。

動物をつくる（ヤギ）—石こうじかづけ—

指導者：大 槻 茂

生徒：旭川市立東光中学校 1年6組

1. 題材について

旭川市立東光中学校は、市の中心部より東へ10kmのところであり、比較的新しく拓けた住宅地である。ここから車で数分行くと田圃地帯があり、稲作を中心とした農家が散在している。そこにはいろいろな動物が飼育されており羊やヤギなどが野原や土手などで草を食べている光景をよく目にする。

しかし、今の子ども達は、日頃見慣れている動植物に興味を示さなくなっているのが現状である。そこで、身近な自然に目を向けさせ、その中から新たな発見、感動を呼びおこさせ、主体的な表現活動へと導きたい。

子ども達がよく見かけるヤギは、比較的世話がしやすい動物である。今回、ヤギの飼育を通して、子ども達とのふれあいを深めさせ、豊かな心を養い、その中から発想を広げ、楽しく生き生きとした制作活動に結び付けたい。

石こうのじかづけは、大まかな表現に適し、大きな量感や動勢をとらえさせやすい。さらに石こうの白さとヤギの白さと相まって効果的である。

2. 学習のねらい

- (1) 生徒がめあてをもって楽しく活動できるようにさせる。
- (2) ヤギの生態や動作の印象を構想豊かに表現させる。
- (3) 制作過程を理解し、計画的に作業をさせる。

3. 指導計画（12時間）

ヤギの飼育、観察、スケッチ

- | | | |
|---------------|-------|---------|
| (1) 構想を練る | _____ | 2時間 |
| (2) 心棒をつくる | _____ | 4時間 |
| (3) A 石こうの扱い方 | _____ | 2時間 |
| B 大まかな肉づけ | _____ | 1時間（本時） |
| C 仕上げの肉づけ | _____ | 2時間 |
| (4) つくり終えて | _____ | 1時間 |

4. 本時の学習

(1) ねらい

- ・構想にあった大まかな肉づけをさせる。

(2) 準備

- ・生徒 学習カード、スケッチブック、台つき心棒、前かけ、タオル、など
- ・教師 ヤギ、小黒板、回転台、石こう、石こうペラ、容器、バケツ、など

頭像を作る -テラコッタ-

指導者：坂野潤治

生徒：旭川市立春光台中学校 2年4組

1 題材について

手やからだを働かせてつくるという直接的な体験が軽視されている環境の中で、今、子ども達はものを自分とのかかわりで具体的に思考しようとする姿勢を失いつつある。このことは、すでに安易な方向ばかりに向きだがるかれらの表現活動の中に端的に現れている。

こうした子ども達の傾向を打破するには、対象をしっかりと観察させ、そのものとのかかわりを深める経験を積み重ねていくことが大切である。「深くかかわる」ためには、子どもの見る視点を明らかにし、表現のてがかりを与えてやらねばならない。子ども達は、ひとつひとつの観点をてがかりにして対象をさぐり、その中で見方、感じ方を確かめながら対象にせまる実感を自分のものにしていくのである。

本題材では、彫塑学習における多角的な観察をもとに、身近な友人をじっくり見つめさせ、子ども自身の内的な表現のねがい（自己表現）や観察の視点をてがかりにしながら自分と対象とのかかわりを追求するものである。こうした経験を通して子ども達の表現意欲と表現力の高まりを期待している。

2 学習のねらい

- (1) 一人一人のねがいのもとづき、ねばり強く学習する態度を養う。
- (2) 多角的な観察を通して、立体的表現の能力を高める。
- (3) 用具・材料・技法について理解させ、彫塑への関心を高める。

3 指導計画 (12時間)

- | | | | | |
|-----|-------------|-------|-------|-------------------------|
| 第1次 | ・イメージをつかむ | ・デッサン | ————— | 4時間 |
| 第2次 | ・心棒づくり | ・荒づけ | ————— | 2時間 |
| 第3次 | ・大まかな肉づけをする | | ————— | 2時間 (本時 $\frac{1}{2}$) |
| 第4次 | ・細部の肉づけ | ・鑑賞 | ————— | 4時間 |

4 本時の学習

(1) ねらい

- ・観察を通して、ねがいを大切にしながら、大胆な肉づけをさせる。

(2) 準備

- ・生徒 スケッチブック 新聞紙 ビニル袋 鉛筆 手ふき (手ぬぐい) ジャージ着用
- ・教師 粘土 (テラコッタ用) 支柱 ダンボール 塩ビ管 布テープ 学習カード 掲示カード

(3) 展開

	指導内容	学習活動	留意事項
導入	<p>①前時の学習内容を反省させ、ねがいを確認させる。</p> <p>②本時のねらいを確認させる。 ○大まかな肉づけの目的。 ○到達目標。 ○観察の視点。</p>	<p>①前時の学習をふりかえり、自己のねがいを再確認する。</p> <p>②本時のめあてを知る。 ○デッサンを見ながら観察の視点をつかむ。</p>	<p>○学習カード1・2・3を使用。</p> <p>○スケッチブック使用。</p>
展開	<p>③モデルの観察を通して大まかな肉づけをさせる。 ○強調部分を大胆につけさせる。 ○多角的に観察させる。</p> <p>④ねがいを再確認させる。 ○典型作品を示す。 ○スケッチブックで確認させる。</p> <p>⑤ねがいを大切にしながらさらに肉づけさせる。</p>	<p>③モデルを見ながら大づかみに肉づけをする。 ○ねがいを強調しながら肉づけをする。 ○モデルをいろいろな角度からしっかり見る。</p> <p>④ねがいを再確認する。</p> <p>⑤ねがいを大切にしながら肉づけをする。</p>	<p>○モデル交互。 ○5分交替。 ○立って制作。 ○細部にこだわらず、ねがいを生かして肉づけさせたい。</p> <p>○ねがいがよく表れている作品を数点とり上げる。 ○スケッチブック使用。</p>
発展	<p>⑥本時の学習のまとめをさせる。</p> <p>⑦次時は、ひきつづき大まかな肉づけをすることを知らせる。</p>	<p>⑥学習カードに自己評価を記入し発表する。</p> <p>⑦本時の進み具合を考えて、次時の見通しを持つ。</p>	<p>○ねがいにもとづいて肉づけがしっかりできたかを特に見つめさせたい。</p> <p>○今後の見通しをしっかりと持たせたい。</p>

ウ ッ ド ク ラ フ ト

指導者：飛弾野 弘尚

生徒：旭川市立東明中学校 1年5組

1 題材について

旭川を中心とする道北地域は、大雪山周辺に日本でも指折りの大森林地帯をひかえており家具工業がさかんである。またここ数年の間に白木の味を生かしたウッド クラフトが数多の見られるようになり手づくりの工芸品が見直されつつある。これは造形教育をすすめるうえでも大変好ましい環境であると考えられる。

「21世紀は機械文明の時代から生物文明に移る時代だ」などといわれているが生き物のもつ優れた性能を見直すことが、これからの時代に必要であることを意味する言葉とみてよいであろう。

「もめん」や「木」という言葉を聞くと、何か心がなごむのを覚えるが、それはもめんも木も、かつては生き物であった。化学繊維がこれほど発達し、また木に代るいろいろな新材料が開発されたにもかかわらず、依然としてそうしたものに離れられないのは、慣れ親しんできたなじみやすさとともに天然材料のもつ独特な性質のためでもある。

世界で白木を好むのは北欧の人達と日本人である。雪に埋もれて長い冬を過ごすにせよならなかった北欧では、穴ぐらの住まいの中で、木に触れながらふたたび木立ちの緑にめぐり合う日を待たねばならなかった。北欧のインテリアが、木の使い方で格段に優れて巧みなのは、そうした体験が生んだものであった。先人の積み重ねてきた体験の中から、木を生かしていく指針を学び取ることは重要な意味をもつ、古きをたずねて新しきを知る知恵が大切である。

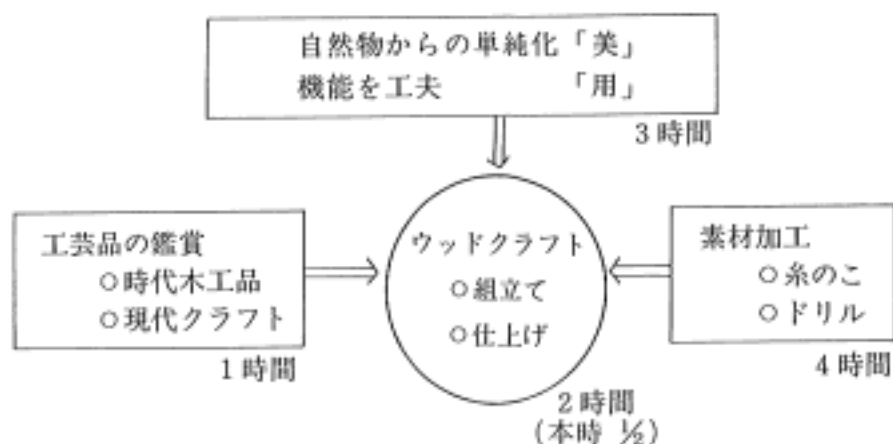
木材はどこでも身近に得られる工芸の材料で、切る、削る、彫る、磨く、組む、などの、ものづくりの基礎技法とし、目的、機能、用途に適した造形の変化を求めることができるよい素材である。

ウッド クラフトを通して生産技術ではなく生活技術を学び工芸に興味を持たせ、日常の生活用品の中においても「用と美」への反応を豊かにさせ、自分のくらしの中に生かしていくきっかけになってほしいと考える。

2 学習のねらい

- (1) 木を素材にしたクラフトに関心を高める。
- (2) 用と美の観点から日常使うものにも関心を深める。
- (3) 木を生かし、自分でつくる楽しさと、意欲を高める。
- (4) 道具の基本的な使用方法を体得させる。
- (5) 手づくりのよさと、完成の喜びを味わわせる。

3 指導計画 (10時間)



4 本時の学習

(1) わらい

- ・ 参考クラフト (工芸品) から仕上げ方法を考えることができる。
- ・ 効果的に用具を使って進めることができる。
- ・ 美しく正確な仕上げができる。

(2) 準備

- ・ 生徒 彫刻刀、布ヤスリ、
- ・ 教師 参考クラフト作品、木工用具、木工ボンド、ゴムバンド、その他の資料

(3) 展開

	指導内容	学習活動	留意事項
導 入	①参考クラフト作品を提示しどんな仕上げをするか考えさせる。	①実物の参考作品をヒントに自分のアイデアを考える。	○美しさと正確な仕上げに気づかせる。
展 開	②道具の使い方のコツをつかませる。 ○ていねいに美しく仕上げるように指導する。	②自分で体験しながら方法をつかみ創意工夫していく。	○机間巡視でコツを個人的にアドバイスする。
発 展	③仕上がりぐあいと、お互いの作品を参考にしながら感想を発表させる。	③さらに工夫することを考えながら発表する。	○特に発表がなければ教師の感想や考えてまとめをする。

自由制作「大作を作る」

指導者：西田武文

生徒：私立旭川藤女子高等学校3年

1. 題材について

土のもつ造形的な可能性をもとに自由な表現に楽しみながら、それが生活の中でもつ役割、自己表現の手段を知る。

発想・構想・表現のデザイン過程を体験し、大作完成の喜びを味わう。

2. 学習のねらい

- ① 概念や知的とらえ方を打破り、新鮮な若々しい発想をさせる。
- ② 加飾技術（絵付・スタンピング・釉かけなど）を理解させ構想を練る。
- ③ 3年間の経験したことのまとめとして制作に取り組み、成し遂げた喜びを味わう。

3. 指導計画

- ① 準備・導入
 - 1) 過去の作品例の鑑賞、技法、効果の確認
 - 2) 基本技法、土のもつ造形上の可能性・技法の応用展開
 - 3) 材料の特性を再認識させる。
- ② デザイン
 - 1) 自由ではあるが奇に流れることのないようにする。
イ、危険はないか。 ロ、制作可能か。 ハ、類似のものに比較してどこがよいか。 ニ、形態はよく練られているか。
- ③ 構想
 - 1) アイデアを3面図で表現し、デザインを再確認する。
 - 2) 欠点の補正・形態追求・土の特性を考慮する。
- ④ 計画
 - 1) 制作手順・方法を考える。
 - 2) 制作日程計画・作業計画を立て、自分自身の構想をはっきりさせる。
- ⑤ 制作
 - 1) 物をていねいに見る目よく確かめる目、その目に従って素直に動く手を養う。神経を集中させ意図する形に仕上げる。
 - 2) 作品管理・作業計画を徹底させる。
- ⑥ 鑑賞——本時
 - 1) 成し遂げた喜びを味わう。
 - 2) 自己評価と相互評価する。
 - 3) 展示

4. 本時の学習

(1) わらい

- ・ 自己の制作意図を発表させ、作品に表された本人の考え方、感じ方をそれぞれに感じとらせる。

(2) 準備

- ・ 生徒 筆記用具・スケッチブック
- ・ 教師 作業計画表・作品展示

(3) 展開

	指導内容	学習活動	留意事項
導 入	○今日の授業について	○授業内容について知る。	○各自の感想をカードによって明確にさせる。
展 開	○自分の意図したことを発表させる。	○各自作品を展示し、互いの作品を鑑賞する。 ○気づいたことをメモし、まとめる。 ○体形を整え、合評する。 記録する。	○作品に愛着をもたせ次回への作業のはげみになるようにする。
整 理	○制作時、条件を確認し、次回作品のステップとする。	○作業上の不備な点をおさえ、次回の構想へつなげ、カードへ記入まとめる。	○展示方法を考えさせる家庭での使用、父母の感想を書くよう指示する。

照 明 具 の 製 作

(金属工芸メタルレースによる)

指導者：橋 詰 忠 晴

生徒：旭川東高等学校工芸選択生 2年4,5組

1 題材設定の理由

社会が豊かになるにつれ、明るい照明、楽しい照明と好みが変わって来ている。一日の生活の中で、家族が集まる夕食と会話は、最も心豊かな安らぎの場ではなかろうか。しかし一般に家庭で使われている食堂の照明具は蛍光灯が多い。これでは赤系の色は汚く濁り、せっかくの料理や花も、まずく見えることが多い。

そこで白熱灯を使った、メタルレースによる補助照明具によって、これらを調整したならば、美しい図形から放つ光は、一層食事を引き立て心の豊かさが増すことだろう。又、将来、マイホームや、ログハウス等を作った時に使用したならば、オリジナルな楽しい空間が生まれることだろう。使用目的を考えながら楽しい照明具を作らせてみたい。

2 学習目標

- (1) 実際に照明具を作り、日常生活に見られる多様な照明具と果す役割や理解を深める。
- (2) メタルレースによる光の美しさを体験し、実生活の潤いを求める。
- (3) 限られた素材や実面積の中で、メタルレース図形を創造する。
- (4) 材質の特性を把握し、機械工具の効果的使用と手順により、計画的な製作をする。
- (5) 工具、薬品、電源、熱源の使用に細心注意し、自己のみならず他人にも危険災害を及ぼさないよう安全に気をつける。

3 指導計画 (24時間)

- 第1次 (導入) ①照明の歴史的変遷と多種多様な照明のジャンルの認識を
(2時間) 高める。
②照明様式を歴代工芸部員の作品を鑑賞しながら理解する。
- 第2次 (発想) ③限定された素材や、面積の中に調和するレース図形を創
(4時間) 作する。条件(幾何図形、フリーハンドは禁止。シンメトリー、リズム、バランス、コントラスト、プロポーション、ムーブマン、回転、求心、外心性を使用する)
点、線、面、の放光と明暗、シルエット効果を主張する。
- 第3次 (構想) ④原寸の型紙を作り、レース図形を構図する。
(4時間) ⑤ドリルによるパンチングの可能な間かく、角度の条件と制約を理解し、パンチング位置の割り出し。
⑥ポンチマークの重要性を知り、マークの深さを加減する。
- 第4次 (製作) ⑦ボール盤、スタンドドリル、ドリルを使い正確なパンチ
(12時間) ングをする。

- ⑧パンチングが終わったら、裏側に出来たバリを、ジスクサンダーで除去する。
- ⑨リベット位置を測定し、パンチングする（クラフトテープで仮止めの後）
- ⑩リベット止めと、銅ろう溶接をして、円錐形を作る。
- ⑪ひも出し、へち折り、折り曲げをして、作品の量感を出すと共に、衝突の時の安全性を考える。
- ⑫素材を酸洗いの後、研磨して金属の着色塗装法を習得する。

第5次（鑑賞）⑬燈具の組立てと組込みをして、安全性を確認。
 （評価）⑭合評会、過程をふり返り、条件に従いレース図形の創造
 （2時間）性の豊かな作品、確かな技術によって、充実している作
 品を選び、今後の使用目的を考えさせる。

4 本時の学習

(1) わらい

- ① 完成作品を各自が点灯し、限定立体条件の中で構成力を見る。
 - ② レース図形の表現力、点、線、面、明暗、シルエット効果を見る。
 - ③ リベット打ち、折り曲げひも出し技術による作品の充実完成度を見る。
 - ④ 研磨塗装技術と仕上げによる充実感、品位を見る。
 - ⑤ 使われる作品、作ってみたい作品を10点選ばせる。
 - ⑥ 選ばれた者のうち5名が、感想と将来の使用目的を述べる。
 - ⑦ 指導者が講評をする。
- ※遮光して一旦暗い教室にし、光の美しさの効果を見る。
 新世界、月の光、ノクターンの音楽が静かに流れる教室で、おだやかに平和な環境作りの中で鑑賞する。

(2) 準備

- ・生徒 各自完成作品の照明具 感想文・製作過程を通して
 ・今後使用する計画や夢を語る。
- ・教師 工芸部OB照明具様式別作品、さし込みプラグ50灯分、番号札と貼付用大シール、クラシック音楽カセットテープ。

	指導内容	学習活動	留意事項
導 入	①制作目標やメタルレース図形の制約と条件が満たされている作品の観察。	①使用されると思われる高レベルの作品を一点選び与えられているシールをつける。	○友情に流される事がなく、各組をオープンで厳正に見る。
展 開	②事前に司会の代表を選んでおく。	②支持者の多いベスト10を選ぶ。	○各組より1名の集計者が出て数をまとめる。
発 展	③選ばれた10点に特別順位を書いたシールを貼る。	③選ばれた10名の中、5名が用意していた、感想文を読む。	○時には質問、応答もさせる。

— ヌ 毛 —



西神楽中学校 2年 岩 測 敷 子

分科会 1 毎日の生活の中で、見たり、ふれたりしている素材を生かし、みんなと仲良くつくる楽しさを味わう。

助言者：大谷 勝 美（旭川）

司会者：今野 正 治（旭川）、永井 恭 子（札幌）

提言者：長谷川 秀 男（旭川大谷ひかり幼稚園）

1. 領域のおさえ

一昨年（昭和59年）北海道私立幼稚園教育研究大会、旭川大会の公開保育を期に、園内の研究主題を「一心の豊かさと、がんばる子を求めて」とし総合保育を試みた。

今の子どもは、物心両面にわたる恵まれ過ぎ、過保護からの心のたくましさ強さが無い。最後までやりぬくがんばりが無い。与えられたものでしか遊ぶことができない。人の立場のことも考えられる思いやりに乏しい。

これらのことを、いくらかでも解消し、子どものやりたいことを腹一杯やらせてやろうと、年長、年少のわくをはずした縦割構成による4グループ（体育あそび・マスゲーム・造形あそび・ミュージックベル）の保育活動を実施した。

以下「造形あそび」のみにしぼって記述する。

(1) 領域のとらえ

家庭の人的構成環境が核家族化され、一人遊びが多く、集団で遊ぶ、場と機会に乏しい。いうなれば、作られたもの、与えられたものみの遊びであって、そこには子どもらしい目を輝やかし、生き生きとした自分から働きかける経験の乏しさが目立つ。したがって道具がなければ遊べない。

一人遊びがために、相手の立場を考える必要もなく、思いやりの心も育たず、人と人との結びつきからの感動が得られず、無気力な子どもとしてしか、とらえることができない。

人間本来の姿である、生活や遊びに必要なものを、自分の手で造り出していく、子どもらしい感動と興味をもたせたい。そのために、

ア、子どもの生活に深く立ち入った、喜びと興味のわく題材（素材の活用）イ、特に、子どもの遊びと直結した道具造りに着目したい。

(2) めざす子どもの姿

子どもは、子ども仲間の生活の中で、環境の中で、もっと～をしたい。もっと～を作りたい。～になりたい。などの願いが、もりたくさん心に秘められているものである。その願いが、自分の力で工夫し、苦勞し、みんなと一しょに力を合わせて造り出した時の喜びと、感動の味わうことのできる、子どもの姿がみたい。

そのためには、

ア、自分たちのくらしや自然の変り方を五感を通して確かに見つめることができる。

イ、自分から進んで美しさに気づき、それに手をくわえ様とする。

ウ、美しいもの、すばらしいものに感動し、それを自分たちの生活に取り入れようとする。

以上のような姿が、子どもの中に芽ばえ、育ちゆくことを目指して。

(3) 生活や遊びをみつめることのできる題材（素材）

- ア、行事・四季を取り入れた壁面作り。
 - イ、童話の劇表現のための大道具・小道具作り。
 - ウ、身近な素材を生かした、いろいろなごっこ遊び。
- これ等について、次の実践のあゆみの中でふれてみる。

2. 実践のあゆみ

今までに実践してきた造形活動として、昨年度のあゆみを概略してみると、

(1) 行事・四季を取り入れた壁面製作として

- 4月——チューリップ畑 5月——こいのぼり 6月——運動会
- 7月——あじさいとカタツムリ 8月——海 9・10月——月見とトンボ
- 11月——冬ごもり 12月——クリスマス 1・2月——冬の遊び
- 3月——もうすぐ一年生、などを組単位で各教室の壁面に、年長組の共同製作として、園の広場壁面の活用。

(2) 劇遊びのための大道具、小道具作りには、自分の作った道具に満足せず、道具・教具（積木、プラポイント、マット、遊び箱）を活用しての劇表現から家ごっこにまで発展した。——（実践例 1として後述）

(3) 身近な素材（だんごボール）によるロボットの共同製作（実践例 2 後述）

なお、個人製作として、水に浮くおもちゃ（ヨット、ボート、船）
動くおもちゃ（車、おきあがりこぼし、ゴムで飛ぶ飛行機）などは、個人一人一人の満足感を満たしてやるのに、好題材であった。

特に、牛乳1ℓ入りの空パックは、廃品物として見逃してしまうものであるが、子どもにとっては、自分を思う存分自由に表現している好素材として、今回の保育指導に取りあげたものである。

3. 実践例 1

子どものしたい事を充分満足させてやるべく、総合保育を昭和59年度、60年度と2ヶ年取りくんできた。その一部、全道私立幼稚園教育研究会旭川大会で保育活動した指導案を記述する。

4才児（2年保育）5才児（1年、2年保育）混合指導案

造形グループ 年長組 男8名 女10名 年少組 男12名 女7名 計37名
指導者 秋元 百合子

1. 5月——7月の単元「造って遊ぶ」
2. 単元の見聞
 - (1) 年長・年少との縦の交流を深める。
 - (2) みんなで仲良くすることにより、造って遊ぶ楽しさを知る。
3. 本日の題材 「家造り」
4. わらい

一人一人喜んで家造りに参加し、劇遊びをしてみる。
5. 指導の経過
 - (1) 造形でやってみようか話し合う。(2) 何の劇遊びをするか決める。
 - (3) 役を決める。(4) 劇遊びのための必要な小道具を作る。
 - (5) ホールの遊具を使って家を造ってみる（本時）
 - (6) 劇遊びをする。

6. 本日の指導案

時間	幼児の活動	指導上の留意点	準備
10:00	朝会 ○開扉 仏様の歌 ○園長の話を読み ○閉扉・園歌・朝の歌・挨拶 ○はとぼっば体操 ○当番の子数珠を集める。	○ポケットからの数珠の出し入れ、かけ方がスムーズにできるよう。 ○園長の話を中心に聞く。 ○歌詞を間違いないよう助言する。 ○元気にのびのびと体操をする。	○数珠 ○レコード 行進曲 はとぼっば 体操
10:15 10:20	グループへ移動 グループの集まり ○役ごとに別れ劇遊びができるための家造りをする。 ○小道具の配置を考える。	○スムーズに移動できるように。 ○劇遊びをするための家造りのことを話して、意欲的に取り組むことができるよう働きかける。 ○家の大きさにより、家造りの材料の必要性を考え、譲り合いの気持ちが持てるように心がける。 ○家造りにとけこめない子(特に年少組)においては、個人的に声をかけてみる。 ○1グループの劇遊びをしてみる。	○お面 ○小道具箱 ○プラポイント ○木の積み木 ○カラーの積み木 ○スポンジ ○平均台 ○マット
10:55	○劇遊びをする (おおかみと7匹のこやぎ) ○みんなで造った家はどうか、話し合う。	○劇遊びを通して家の大きさ、小道具はどうか、仲良く家造りができたか。	
11:00	○おかたづけ	○協力し、手早く片づけさせる。	

実践例 2

造形グループ 年長組 年少組

1. 題材 「ロボット」(ダンボールを使ってのダイナミックな造形)
2. わらい みんなで仲良くすることにより、造って遊ぶ楽しさを味わう。子どもらしい発想や工夫を育てる。
3. 指導案

時間	幼児の活動	指導上の留意点	準備
10:20	○ロボット造りに必要な材料を用意する。	○材料や道具は、できるだけ豊富に揃え、自由に使用させる。 ○材料をみて、自分の好みのも	

<ul style="list-style-type: none"> ○相談しながらロボット造りをする。 ロボタン (7人) パーマン (7人) マシンガー ゼット (7人) ぞう (7人) ライオン (7人) ○手・足をクラフトテープセロハンテープでとりつける。 ○ロボットの形に仕上げる。 ○小麦粉で作ったのりを白い紙につけ、どんどんはっていく。 ○白い紙をはった上に絵の具で着色する。 ○廃品物の材料で細かい部分 (目耳・しっぽ、ロボットを動かす操縦機) をつける。 ○グループごとに完成したロボットを説明する。 	<p>のを選択させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○子どもの発想を大切に、子どもの考えを生かすようにする。 ○手・足・顔を胴体にとりつけるが出来ないところを一緒に手伝う。 ○仲良く造っているグループおもしろく工夫されているグループを取りあげて、作業の進まないグループへの意欲を盛りあげる。 ○実際に自分が入って、動けるロボットのおもしろさに気付かせる。 ○大きいロボットだけに、のり貼りは根気のいる作業なので、ロボットと遊べることの楽しみをもたせる。 ○はがれてこないように、のりのはり方に留意する。 ○考えて造られている部分を、みんなに紹介する。 ○おもしろく考えているところや、つけ加えたらよいところなどを話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○クラフトテープ ○セロハンテープ ○ビニールテープ ○のり ○ボンド ○はさみ ○カッター ○ダンボール ○小麦粉のり ○白い紙 ○絵の具 ○毛糸、キャラメル・石けんなどの小箱、カップヌードルゼリー、プリン空き容器、トイレットペーパーの芯
------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

4. 今後の課題

- (1) 年長組、年少組の縦割総合保育の中で、共同製作によるロボット造りをやってみたが、年少組の活動が少なく、意欲に欠けてしまう。目的意識、自分の考えを持つゆとりがないため、年長児にまかせる傾向がつよいようだ。
- (2) 子どもは動く玩具に興味をもち、自分で作った作品での遊びが魅力的である。個人作品はグループ作品とは違って、仕上がった時の「自分でやった」の満足感で喜びもひととき大きく、次の作品の取り組み方も積極的である。
- (3) 廃品物の活用は、大人には考えられない、おもしろく、工夫された作品が多く、造形を通しての子どもの創作意欲は無限のものであり、大事にしたいものである。今後の牛乳空パックの造形作品が楽しみである。

分科会 2 壁面づくり-総合保育と絵画・造形-

助言者：森 田 喜 昇（旭 川）

司会者：守 野 綾 子（旭 川）、小 尾 喬（札幌）

提言者：本 田 清（旭川こぼと幼稚園）

提 言

幼稚園の保育活動には、ともすると、次の様なマンネリ化が見受けられる。

その1. 行事中心の諸活動

「子どもの日」「えんそく」「うんどう会」「おたんじょう会」……

この繰返しが活動の主流となっている。これ等行事の意義は認めるが、それだけでは、質的な変容が望まれそうもない。

その2. お絵かきごっこと作品展

作品展には、お絵かきごっこ式の作品が綴じられていく。そこには、ハツラツとした子どもの活きた姿が見られない。みんな画一的で型にはまったものしか出来ない。

その3. 事務的なお報らせの連絡帳

幼稚園と家庭を結ぶものとして連絡帳はあるが、それが事務的に済まされていることが多く、感動場面を中味として、両方に響き合うはたらきを持っていない。

以上の様な問題点を打開していく試みとして、

- ① 主題を明確にするための「総合活動」
 - ② 子どもの活きた姿を写し出すための「壁面づくり」
 - ③ 園と家庭がはたらき合える「こどものかべ」
- を取りあげたのである。

1. 領域のおさえ

子どもの幼稚園の基本目標は「太陽できたえる体・童話ではぐくむ心」としている。

この目標を焦点化していくために、

一学期・土と水に親しむ。

二学期・秋空と童話に親しむ。

三学期・雪と日光に親しむ。

以上の主題を設定した。

(1) 総合活動と造形・絵画

各学期の主題を具体的に進める方法として、総合活動を取り入れ、その実践に努めている。

例として、

- ① 一学期「花だんといも畑」・「屋上プールとアスレチック」
- ② 二学期「秋ぞらとていぼうマラソン」・「童話とげきごっこ」

③ 三学期「雪山あそび」・「雪まつりとパーサー大会」

この活動が子どもの活力を存分に発揮させ、そして子どもの成長記録になることを考えて、主題をテーマとした壁画づくりを行なっている。

大きさは、マニラボード紙六枚半続きのもので、場所は玄関ホール正面の壁である。

(2) 幼児の活動と壁画づくり

提言に記した通り、壁画づくりの試みは、ともすると作品帳にこじんまりと取められ勝ちなお絵かきごっこから子どもを解放するものである。子どものダイナミックな豊かさを、思う存分大きな画面の上に発揮されようとするものであり、総合活動の結集した記録でもある。

述べるまでもなく、3才～5才の幼児には、絵画制作に対して、次の様な特質がある。

① 3才～4才の幼児と「壁画づくり」

自分本位ではあるが、砂場あそびに見られる様に、みんなの中でなければ安心が出来ないと言う、所属本能からくる欲求活動がある。この活動意欲を絵画表現の上でも活かしていきたい。

それぞれの個人が、思い思いの事をしていても、みんなの中で行動していると言うことによる安心感を、「壁画づくり」の基本にする。それ故、教師に、共同と言う意識が強くなり過ぎると、最も大切な、ひとりひとりのかけがえのない個性的表現を失なわせてしまうことになってしまう。

② 4才～5才の幼児と「壁画づくり」

3才～4才の心情的個人本位の表現から、体験を想起したり、観察を組み込んだ表現が可能になってくるし、テーマを持った共同作品の制作も出来る様になってくる。しかし、形に促されたり、他との関連を強調し過ぎると、造形教育の生命である豊かなイメージが損なわれる恐れがある。

とにかく、縛めると言う指導意識を捨て、はみ出しの方向にこそ向けていかなければならない。

この様な意味からも、小さな画用紙に取めるようにするお絵かきから、マニラボード紙による壁画づくりを実践することにした。

2. 実践のあゆみ

総合活動の中に「壁画づくり」をとり入れたのは、昨年からはあるが、壁画の制作それ自体を目指した実践は、昭和56年の開園当初からで、それが、私どもこばと幼稚園の保育活動の特色ともなってきた。以下そのあゆみについて記してみたい。

(1) 自由な壁画、一子どもの夢を求めた時期— S56～57

玄関ホールの正面壁と、玄関フードのガラスを利用して、年長組と年少組が交互に思い思いの作品を貼り出す程度のものであった。しかし、そこには子どもの夢を育てたいとの念願があった。

当時の作品の代表的なものとして、

- ① こばと号のふな出—入園の感激を込めたもので、こばとの船に、全員顔がのる。
- ② どうぶつえん—初めての遠足で行った動物園、いろいろな動物が折紙で貼り出される。

- ③ とんぼとひまわり—自分達が植えた「ひまわり」と赤とんぼの組み合わせ。
- ④ せんたくものとお花—ガラスの透明を利用した色紙貼り絵。
- ⑤ すてきなおくりもの—秋の「たべものづくり」から作る。気球に乗せたおくりものに夢がある。

以上の様な作品で、その反省のことばとして、

「ひとりひとりの作品を持ち寄り大きな壁面を飾ることにより、自分の作品を見てもらう喜びと共に、他の友達作品をも認める気持ちが育っている様である。今後、冬に関する制作、卒園児を送り出す作品等作っていきたい。

(S57/12, 薺鳴聡子記)

また、この閉園当初、子どもの可能性をみざして、夏の特別活動に、私が指導した、「思い出こくばん」—好きなものを落書きの如く自由に描く—と、「ひまわり」—自分が植えたひまわりが、叱咤する程大きくなったその驚きと喜びを絵にする—、これは、ひとりひとりがマニラボード全紙に、クレヨンで輪郭をとり、ポスターカラーをスポンジで塗ったものである。この試みは、観念的な子どもの絵を打破する為に貴重な経験であり、私どもの絵画制作の原点をなすものと思っている。

(※参考作品その1、S56/8制作)

(2) 行事中心の壁面—保育アルバムの一つとした時期—S58—59

自由制作は着想のおもしろさによって、楽しい作品が創られることが多いが、それを考え出すことに随分苦勞があった。その点、四季の行事をテーマにした作品は、取り組みの面では容易であった。その代表的なものとして、

- ① こどもの日の「鯉のぼり」—全園児の手型で鯉の鱗を表現する。
- ② うんどう会「赤ぐみ・白ぐみ」—色画用紙を利用した紅白帽子の顔壁面
- ③ 花火大会「こぼと花火」—花火模様をちぎり紙で工夫し表現する。
- ④ さのことおちば—秋の落葉ひろいを想起し、森の小人の童話をイメージ。
- ⑤ 雪山あそび—雪山遊びから、冬山のスキー場を想像する。

この時期は、やや着想のおもしろさ—子どもの夢—には欠けていたが、色模造紙、色画用紙、色紙等が大いに使用され、色彩表現の技術面では、豊かさが見られた。これ等作品の題名を見ただけで、当時の保育活動がアルバムを眺める様に思い出される。

(3) 総合活動と壁面—主題に根ざしたものを求めて—S60—61

保育活動が、行事中心だけに流されると、マンネリ化して発展性を失ないがちになってしまう事は、提言にも述べた通りで、ここから脱皮しなければ生き生きとした、新しい表現が出来てこない。

子どもの活力と、そのエネルギーを発揮させるために、主題を明らかにした「総合活動」と、更に、その活動を纏める立場からの「壁面づくり」に至ったことも前述の通りである。

しかし、この実践は二年目を迎えてはいるが、試行錯誤の繰返しである。壁面が立派に出来上るためには、その前提条件となっている、「総合活動」が、魅力あるものにならなければいけない。

殊に、幼児相手の活動であるから、主題意識があまり強過ぎると、子どもを圧えつける結果にもなりかねない。

のびのびとしていて、しかも、主題を内包する幼児の作品とはどんなものであろうか？。この点を模索しているのが現実の姿である。

3. 実践例

ここでは、昨年度の三学期に実践した、「雪に親しむ」保育活動の壁画、年少組の「雪まつり」と、年長組の「パーサー大会」を例として取り上げてみたい。

「雪まつり」と「パーサー大会」は、行事であっても、単なる年中行事ではない。北海道の人々、特に、旭川に住む人々が、冬の生活を楽しみ、心から雪に親しむために行なっている催しで、国際的な意義と誇りを持つものであってその感動は幼児の心の奥深くにまで浸透している。

私どもの保育主題も、その主旨に沿ったものである。

(1) 「雪まつり」の活動と壁画づくり

園庭にブルトナーで雪を盛り上げ、大きな雪山と坂を作って、雪まみれの自由遊びをさせたり、スキー、ソリ遊び等を思い切り行なう。

また、社会的な「雪まつり」の行事に併わせて、園でも「こぼと雪まつり」を計画し、雪の造形で園庭を飾ることをした。

これ等の活動を、造形、絵画で表現したのが「雪まつり」の壁画である。

以下の記録は、指導教諭の手記である。

〈具体的な目あて〉

- 年少組69名が力をあわせて一つのものを作る。
 - 実際に雪で作ったお城、雪だるま等を表現する。
 - 雪あそびをしている自分の姿を作る。
 - 特に、切り抜きの際のハサミの使い方に注意する。
- できるだけ自分で考え工夫する。

〈活動—製作—の実際〉

- 白、黄、ピンク、水色の小さい四角の色紙をたくさん用意し、全員で貼り合せてお城をつくった。
- 3才児9名は、えのぐで雪だるまを描き、形を切り抜き、好きな場所に貼った。
- 4才児は、はだ色の丸と、いろいろな色の長方形の中から一色を選び、顔と体を工夫して作った。その後、のり付けをして、自分の好きな場所に貼り、遊びを表現した。

〈特に苦勞した点、又は成果のあがったこと〉

- 雪あそびをする時、どの様な身支度をするか、子ども達から話を引き出し、ただのお人形にならない様にした点は良かった。
- 製作面では目立たなかった子が、人物にスキーを履かせる等、工夫していたのが嬉しかった。
- 自分ひとりでは、なかなか制作にとりかかれなかった子が、「自分を作る」ということや、みんなと作るという活動に刺激されたのか、進んで参加し作品を完成させていた。

(指導者、青木馨、萍嶋聡子、手記 萍嶋聡子)

(2) 「パーサー大会」を目指しての活動と壁画づくり

園庭の坂でスキーの基礎的な指導をしっかりとしてから、園の裏側にある提防用地へ連れ出す。

長距離に馴れさせるために、コースを100mから200m、更に300m……1kmまでのばして、「歩くスキー」の練習を継続する。

パーサー大会当日は、全員が、こぼとのシンボル帽子をかぶり、市当局から配布になったゼッケンを腕にして、幼稚園コースを二周し、その充実感に没り切ることができた。

この大会は、海外からの応募者も含めて13400名の多きに達した。その中の一人として参加したことは、生涯忘れることの出来ない体験であったと思われる。

以下、指導教諭の手記を載せる。

〈具体的なめあて〉

- 国際的な行事、パーサー大会に参加した経験を基に、見た事、聞いた事、行動した事を思い出して表現する。
- 共同で一つの壁面を完成させることによって、個人作品では味わうことの出来ない喜びを持つ。
- 自分が実際に参加したことを印象づける様な方法を工夫する。(ゼッケン番号等)

〈活動の実際、制作の過程〉

- 自分の体を作る。
 - ・輪郭をクレヨンで描き、顔、スキーウェア等をちぎり絵で作る。
 - ・こぼとの帽子、ゼッケン、スキー、ストックを人物につけ、自分を表現することを工夫する。
- 背景を作る（パーサー大会の会場風景）
 - ・絵の具を使って空を大きく描く。
 - ・雪の面を綿を使って表現する。
 - ・会場にあった、旗、コース、空を飛んでいたヘリコプター、観覧席等を思い出し工夫して作る。
- 自分を表現した人物をその中に貼り完成させる。
 - ・みんなと一緒にがんばった様子。
 - ・好きな場所へ好きな様に貼る。
 - ・のり、接着テープ、両紙等ではがれないようにしっかり貼る。

〈特に苦勞した点、又は成果のあった点〉

- いろいろな素材があるが、それを教師側がどの様に用意したら、より効果的な作品が得られるが、その選択に苦勞した。
- 落ちこぼれなく全員が作品作りに参加できる様その点特に配慮した。
- 子どもの自発的な発想を認め、それをどの様に作品に生かすか、具体的場面では非常にむずかしかった。
- まわりの友だちに刺激され良い意味での競争心を持たせる点では効果的特に、自分のゼッケン番号をつけた姿が貼り出され、卒園記念作品の壁面となったのは感激であったようだ。

(指導者 妻沼ゆみ、前田由紀子、手記 前田由紀子)

4. 今後の課題

(1) 原点に戻って考える—素朴な表現の再確認—

「子どもらしい絵」「子どもでなければ描けない絵」を目指してとは、よく言われることばである。

「子どもでなければ……。」このすばらしさは、どんな作品にでも出てくるものではない。黙って放っておいて創られるものでない。その一つの試みを、私自身開園当初の特別教室、マニラボード全紙の絵の指導で体験したことを思い出す。

最近の作品は、羅められ過ぎて、子どもの生きた姿が見失なわれがちであるから、当初の素朴な表現を、いま改めて見つめ直してみる必要がある。

(2) 絵画制作に対する基本理解—意識のズレの克服—

本年度は、教諭5名中3名が新任である。それだけに、子どもの作品に対する意識のズレは大きい。

- ・私自身の反省としては、意識過剰になりやすい。
- ・先輩教諭の欠陥は、マンネリ化に陥りやすい。

保育の本質は、作品の前に子どもがあり、子どもの前に教師自身の生きる姿が確立されなければならない。

子どもに溶け込み、いきいきと活動することのできる新任教諭の新鮮さを、どの様に生かしていったらよいか、このための研修が今後の問題である。

(3) “こどものかべ” への発展—園と家庭をつなぐ壁—

壁画は、園の壁を飾ったり、或は活動の記録として保存されるだけでは、子どもを育てる意味が薄れる。真実子どもの生活記録であるならば、家庭のかべとも、ひびき合える様な存在価値に上げていきたい。各家庭の“こどものかべ”に貼り出され、父母のことばが書き込められた作品が、互に持ち寄られて、“ことばのかべ”を埋めつくす。そんな壁面によっていく日を是非実現してみたい。

バーサー大会壁画写真

(※参考作品その2)



分科会 3 子どもの生きる自然な環境

助言者：伊藤 恵（札幌）

司会者：岩間 昇（旭川）、吉田 俊雄（札幌）

提言者：老久保 小夜子（旭川ユリアナ幼稚園）

1 創造力のめばえを助長させる環境づくり

人間の創造力は無限である。その創造力、創作意欲の育成はなんといっても環境である。環境の及ぼす影響が一番敏感に受けとめるのは幼児期である。その感受度の高い時期の環境づくりこそ人格形成、心豊かな子供の育成に大きく影響するのである。

人間の本性は、自分の置かれるいろいろの環境に対してアタックする性質を持っている、その性質のアタックの強弱の度合が人格形成の基盤となって、社会自立の成功者、落伍者の分となる。

人間の本性は好奇心のかたまりで知識欲旺盛である。その旺盛な意欲をより多く持っているのが幼児であるから、幼児は自分を取りまいてあるあらゆることから幼児期待特有の、なぜ？どうして？と興味を示しながら、見たもの、聞こえたもの、触れたものによって発達段階にしたがって知性や感性のめばえを深めていくのである。その大切なめばえの時期の育成によほど気をつけてやらなければ、人によっては取返しのつかない方向へ進むのも、幼児期の環境が大きく影響していかからである。

しかし、今日の幼児、子供たちを取りまいて環境は人間本来の五感を働かせ、自ら考え工夫する創作意欲、活動意欲を削ぐようなことがらがありにも多くあって、そのため主体性が育ちにくい。かつて日本の貧困時代の子供たちは、ないないづくしの生活の中でそのハンデを創意工夫で満ち創造、造形能力をいきいきと深めていた。そうした子供たちに比較すると、現代の子どもたちはいささか頼りない。それは誤った与えられすぎによって五感の活動が鈍らされているからである。鈍っている五感能力は逆境や速さに対応することができない。対応能力、それは作るよろこび、見て感動する感情、敏感な工作行動が養われていないからである。それもかつての子供たちのような逞しさが育ちにくい環境のせいであるからである。

こうした現実には、決して楽観視してはいけぬ。身近なところ、家庭の日常生活の中から、子供特有の旺盛な好奇心を素直にのぼす環境づくりを心がけて、与えすぎている誤りを反省しなければならない。

当園では早くから、幼稚園周辺が自然環境に恵まれている地の利を利用して、園外保育で四季折々に自然観察をさせている。そのため子供達の鋭い観察力が大人の見逃した珍しい昆虫や草花をみつけだしてきて、発見の興奮に探究心をわかせたり、生きものの生命の尊さ、創造の神秘さと子供なりに浸透させ、ものへのおもいやりの心、自然、草、木、石を利用しての造形感覚を育てている。

また、園外保育での自然観察の記憶を作る「お店やさんごっこ」で造形あそびをさせている。ごっこあそびでも、この「お店やさんごっこ」は園児たちにおもいおもいのものを作らせるので、子供たちは制約なしに工作する楽しさを味わう。このように作品づくりをしているときは、どの子も生き生きとしている。

「お店やさんごっこ」のお店は9～10店ぐらに分ける。それには全園児をたてわりにして年長組をリーダーに年中、年少を組ませたグループにする。約

一か月かけて作った作品を園児たちが売手で父母が買い手になる。買い手になった父母たちが、その出来ばえに驚き感心する様子を見て、園児たちは造形意欲を自然に高めている。*お店やさんごっこ*この行事も園児たちの創作意欲を深める環境づくりになっている。



2 造形意欲を集める

現代の子供たちの置かれている社会環境は自然が失われ、それに伴って子供たちの遊びが家の中へと入り一人あそびが多くなって、その一人あそびの対象が画一化された既製品のため、子供たちは作るよろこびの体験を乏しくしているのだ。そうしたものは一時的な興味を示すだけで、作るよろこび造形意欲は少しもおこらない。

このような現実には、こどもたちの発達段階で体験して覚えなければならないことを体験させていないために、ものごとへの思いやりの心、いとおしみの優しさの心などが欠け、人間本来の創作、手づくりの感動の基盤が育たず、自然に無気力、無感動、何ごとにも与えられる受け身になってしまっているから、集団遊びも出来なくなって孤独になっていく。そうしたこどもたちに、いまこそ発達段階の原点に立ち返って、子供たちの周囲に好奇心を呼びおこす環境をとりもどす、目で見て感動する心、手足、体をつかってつくりだすよろこび、創造、創作の持続の気力、ものの取扱いの愛情の心などが自然に生れてくるような環境がそこがあれば、造形意欲は自然におこってくるのである。

子供は環境に支配されやすい。水を飲みながら馬を無理に水辺に引っぱって行って水を飲ませようとするような指導は考えものである。子供たちの造形意欲をおこさせるには、子供の本性は五感を働かせ、ものごとの本体を見極めようとする好奇心の旺盛さ、手足をつかって何ごとかをつくりだそうとする造形心、そうしたこども像をよく知って、自然につくる楽しさ、興味、関心がつき、子供の本性の活動行動が自然に出せるような環境をもどしてやるのが、机上の弁だけでなく、実施していくことが大切である。

分科会 4 「楽しくあそぼう、すすんであそぼう」を造形活動に結びつける
とりくみ

助言者：辻 悦 平（札幌）

司会者：大 口 章 子（旭川）、鈴木 将 夫（札幌）

提言者：飯 澤 ち ず（旭川神楽幼稚園）

1 研究の取りくみ方

幼児はダンボールや廃品を使ったり、新聞・広告紙で好きなものを折ったり丸めたり、ちぎったりする遊びをさせると実にのびのびとした楽しい姿が見られる。入園当初から子供と一緒に廃品を集め、自由に作れるコーナーを設けているが、いろいろ想像して意欲的にとりくむ子、よろこんで飛びつく反面、なかなか思うように表現できず、途中で投げだす子、と個人差が大きい。教師も参加し、一緒に作っていくことで、しだいに、自分たちからすすんで取りくみ、遊びに必要なものを意欲的に作ったり、作ったもので遊び楽しむ姿が見られている。そこで、幼児が自主的に遊び、自分の思ったことを素直に表現したり、いろいろな友達とかかわり、生き生きと活動ができるように願っている。

2 実践のあゆみ

(1) 幼児の自主的な遊びから造形へ

ア 遊びの中で必要なものを作り、作りながら遊びを深めていく

イ ごっこ遊びを通して、いろいろな友達とのかかわりをもち、共通の目的をもって遊びを充実させていく

(2) 環境構成の工夫

ア 環境構成のおさえ

●ひとりひとりがよろこんで自主的に取りくみ、生き生きと活動できるような環境であること

イ 環境づくり

●幼児がいつでも自由に好きなものが作れるように、遊戯室の一角に製作コーナーを設ける（いろいろな素材の廃品類を種別にして豊富におく）

●一日の流れに柔軟性をもち、幼児が十分活動し、満足感を得られるような、ゆとりのある時間と空間を大切にする

●遊んでいる中で適時・材料・用具の使い方を知らせる

●作品を展示する場を作っておく

3 実践例

——おうちごっこ ——（5月中旬）

(1) 設定理由

4月入園後、不安と戸惑いを見せていた幼児もようやく安定してきて、好きな遊びを自主的に見つけ、好きな友だちと一緒に遊ぶようになってきたが、個人差があり遊びが長続きせずふらふらしている子、うまく自己表現ができない子も多い。そこで日常、子供たちから自然にくり広げられている遊びを楽しくのびのびとした雰囲気の中で遊具や教師を媒介として、全クラスの交流をさせながら、精神的安定を図り、その中で造形的な芽ばえを培いたいと考え取り上げた。

(2)わらい

- 先生や友達と楽しく遊ぶ
- 身近な材料、用具に親しむ

(3)展開

◎第1日目～第3日目

ままごと遊びが発展し、積木を使ってお家ごっこへと広がってきた。なかなか遊びの中に入れない子や、遊びが持続しないので教師も加わり3クラスの交流の場としていく。遊びの中で、使うものや食べ物を作りたいと要求してきたので廃品や用具類を設定する。品物ができてくるとレストラン、お店ごっこへと発展してきた。

◎第4日目

最初は売る人、買う人、作る人の役割がはっきりせず、子供達の間でトラブルがおきたので教師が役割を分担しあえるように方向づけをする。

自動販売機もでき、遊びがいっそう盛り上がってきた。

お金を作ってあそびに利用している子が見られるようになってきた。

◎第5日目

そこで教師側から紙とスタンプを用し、統一したお金を決め、遊びの中で使わせる。

お金に興味を持ち、どんどん遊びに参加してくる。

ダンボールを車に見立てて遊んでいる子が見られたので教師の方から、自動車作りを提案する。

◎第6日目

11台の車が完成し、それに乗って買い物に行く姿が見られてきた。同じ子ばかり乗る姿や、強い方が乱暴になってきたので、子供と一緒に遊びのルールを作る。

(ルール)

- 停留所・駐車場を決る
- 友達と交替し合う
- 運転手は免許証を持つ（免許証は教師が発行する）

(4)反省・考察

○今回の活動は10日間位継続した。始めはクラスの子同士、担任だけとのかかわりが多かったため、各コーナーを受けもった教師の位置を交替し、他の子ともかかわれるように配慮した。

○廃品を利用しての活動が始めてなので、各自作るものがまとまらないで細かい指導を要した。

○遊びの中に入らなかった子も、友達からの誘いかげや教師からの働きかけによって楽しく参加することができた。

○教師からの方向づけがないと遊びが持続しないので、ごっこ遊びを多くして友達とのかかわりを深めていきたい。

4 今後の課題

幼児ひとりひとりの興味や欲求、発達に合った指導をどうすればよいか、また教材の工夫、技法に対する教師自身の研修をさらに深めていきたい。

分科会 5 造形的な遊びの位置づけと発展を願う

助言者：山 宮 喬 也（桐 走）

司会者：小 形 備 雄（上 川）

提言者：飯 塚 礼 二（旭川市立末広小学校）

領域のおさえ

バケツの水を運ぶ子、いろいろな道具を持つ子たちが砂場へたどりつく。遊びの簡単な約束をすると、一斉に子どもたちが砂場へ入る。山をつくるもの、水を流すもの、道をつけるもの、大きな山にはトンネルができ、いつのまにか全体がつながっていく。楽しい声が聞こえ、遊びは次から次へと広がっていく。砂場は「造形的な遊び」の典型である。

(1) 遊びをつくる

遊びには、教師の指示がいらぬのである。子どもが、自分の意志によって「つくる心」を全身的な活動を通して表現している。ここには、子ども特有の柔軟な思考力や創造性が育っているといえる。

子どもたちの遊びの中には、知らず知らずのうちに身につけていく造形的な表現活動のさまざまな姿を見ることが出来る。これらの時間的、空間的表現の行為や行動の経過を、新しい造形教育の視点から見なおしていくことが豊かな人間の心を育てたいと願う造形教育の方向である。このような意味から、造形的な欲求を満たす自由な活動としての「造形的な遊び」は、単に教育内容の精選や基礎教育の視点からだけでなく、子どもの主体的な学習を保障する場、人間形成の場として見つめる必要があると考える。

(2) 遊びのきっかけづくり

造形的な遊びの指導に当っては、造形活動を始めるきっかけとなる着想の段階を重視し、子どもが自発的に「遊び始める」ことをさまたげないことである。材料との自由な出会いを基本にスタートさせることが大切である。

しかし、材料と子どものかかわりを放置しておくのではなく、より造形的な活動をもりたて、遊ぶことを通して、造形活動の基礎を耕やすはたらきかけをすることであろう。また、場所や材料の設定に当たっても、活動を見通した十分な配慮がいるであろう。

(3) 遊びの交流・発展を

造形的な遊びの考え方は、低学年で終わるという性質のものではない。遊びの形で示されているのは低学年だけであるが、高学年にも発展されるべきものである。高学年では、全体の見通しをもった、計画性のある内容として取り組まれるべきであろう。

また、造形的な遊びを通して、他の学級・学年、そして全校的な取り組みへと発展させていくことも可能である。ねらいや位置づけの上でちがいはあるが、活動としてはすでに実践している学校もいくつかある。

2 実践から

(1) 造形的な遊びの内容

活動の内容(視点)としては

- 全身的な遊び
 - 材料から思いついた遊び
 - 構成的な遊び
- に分けられるが、別々にするという意味ではなく、このような種類の活動が考えられるということであろう。
- また、具体的に造形的な遊びをさせる場合、おさえておかなければならないことは、
- どんな材料(素材)で
 - どんな場所で
 - どんな遊びをさせるか
 - どんな活動をさせたいのか
- をおさえて授業を進めていくことになる。

材 料 や 場 所	活 動 内 容
◎砂・土 雪・ねん土	○全身的な遊び ●ほる・つむ ●つくる
◎グラウンド	
◎ダンボール	○材料から思いついた遊び ●並べる・つむ ●あなをあける ●つなぐ
○あき箱・あきかん	
◎新聞紙 など	
○木の葉	○構成的な遊び
○石・つみ木	

◎子どもが意欲的にとりくみ多くの可能性をもった素材と活動

(2) 授業の流れから

○導入の部分

活動のきっかけを、意欲づけを重点として行う。すでに材料や場所がその働きをすることが望ましい。内容によってはルールは必要であろう。

「おもしろそうだ」「やってみよう」「やれるかな」「やれそうだ」「よしやろう」といった積極性が必要である。

○活動の段階

「こうしてみよう」「やっぱりできた」「こんどはこうしてみよう」「だんだんおもしろくなってきた」と自由に想像しながら集中的、継続的に自分の活動が展開されていくように留意する。

○完成の段階

造形的な遊びは、作品の完成を目的とするものでない。とはいわれるが、色や形としてその結果が活動の後に残される場合が多い。また、それを生かした発展的な活動も生まれる場合がある。したがって、「おもしろかった」という活動そのものへの喜びや満足とともに「できたぞ」という完成の喜びも十分味わわせてやりたいものである。

(3) 造形的な遊びの発展として、

低学年という枠を超えて、造形的な活動が定着しているものに「雪と遊ぶ」又は「雪像づくり」があげられる。学級単位で、たてわりグループで、全校的な活動として位置づいている。学年的な高まりや、グループ構成に合った計画的な取り組みである。

また、ひとつの素材・材料をきっかけに他の学級や学年と交流する中で造形的な遊び(活動)を展開していく例も見られる。その結果が○○集会・○○祭などとして位置づいている場合もある。

いろいろな条件でこのような取り組みがむずかしい面もあるが、ひとりひとりの子ども、そして学校全体が造形的な遊びを位置づけ、一般化していくことが望まれる。

分科会 6～9 一人ひとりの子どもに表現のよろこびを育てる、生活に根ざした題材のほりおこし

助言者：西 弘 治（銅 路）、 一 戸 信 雄（空 知）
 渡 部 稔（上川教育局）、 萩 原 常 良（上 川）
 司会者：飯 塚 強（旭 川）、 渡 辺 正 勝（上 川）
 出 倉 功（上 川）、 横 本 正 昭（旭 川）
 提言者：高 橋 貞 一（旭川東町小）、 角 邦 雄（旭川近一小）
 紙 谷 慎（旭川春光小）、 新 井 綱 恵（旭川知新小）

1 領域のおさえ

(1) はじめに

現在、子どもたちの置かれている生活の場を考えると、自然が失なわれ、コンピューターゲームやテレビの一人遊びが多く、集団遊びが少なくさらに、作られ、与えられ過ぎの感じが強い。目にする物は、画一化され、量産されたものであり、それらが無遠慮に生活の中に立ち入ってきている。

そのため、子どもらしい体験が乏しく、道具がなければ遊べなかったり、おもいやりの気持ちも欠け、無気力、無感動の子どもが増し、造形への感動も興味も示さないでいるのが現状と言えよう。

人間本来の姿であったはずの生活に必要なものを自らの手で創り出し、使うという、素朴な感動や興味をよびもどす必要があるのではないだろうか。

子どもたちは、何を考え、何を求めようとしているのか。

絵画・版画領域では子どもたちの生き生きとした感動をよびおこすためには、子どもの生活に深く立ち入っていかなければならない。

子どもの身のまわりから、発達段階を考えて、喜びと興味と関心のもてる題材をほりおこし、与えなければならぬ。

しかもその題材は、成就感のあるものであり、その成就感や喜び関心などは、次の題材でも持続していくものとして、意欲的にほりおこし、洗い出しでいかなければならない。

このような取り組みをすることで、子どもの心をゆり動かし、感情に訴え、イメージをおきたたせ生き生きと造形活動に立ち向かうであろうし、表現活動の中でのつくる心のひろがりや深まりが生まれてくると考え、研究を進めてきた。

(2) めざす子ども像

われわれは、一人一人の子どもたちが自分たちの生活や、環境を確かな目で見つめ、もっと～したい。～なりたい。～を表したい。～言いたい。伝えたいなどの願いをもち、ストレートに表現し創りだす喜びを味わうことのできる子どもの姿を願っている。

そのためには、

- 自分たちの生活や自然を五感を通して確かに見ることが出来る。
 - 自分からすすんで美しさを発見し表現しようとする。
 - 美しいものは感動し、それを自分たちの生活にとり入れていこうとする。
- 以上のような姿が、子どもの中に芽ばえ、育っていくことを目指している。

そのために、子どもたちの側に立って、生活や自然を見つめ、より直接的に子どもの生活に立ち入る題材をほりおこしてきた。



- 変えていくこと。
- 引き出すこと。

変換 ↔ 見直し

題材をほりおこし、子どもにかえしていくことで、子どもたちの願いや感動に、深くかかわっていくと考えている。

(3) 発達段階のおさえ

生活に根ざした題材を考えると、児童の発達段階や興味、地域性などをふまえ、順序だてていかなければならない。

素材や題材に接するとき、1年生から6年生までを通して、一連の計画的なねらいで追求でき、縦と横のつながりと広がりのあるものとしていきたい。

① 低学年でおさえること

- ㉗ 表現の興味や関心を主体としたものであること。
- ㉘ 児童の造形的な能力の発達からみて適切なものであること。
- ㉙ 主体的に造形活動ができ、一人一人の児童の個性が表れるものであること。
- ㉚ 体験を通じた活動が要求されること。
- ㉛ 合科的活動をとりいれたもの。
- ㉜ 次学年へ発展性のもてること。

② 中学年でおさえること。

- ㉗ 児童の興味を満足させ、次回への意欲のわくものであること。
- ㉘ 造形技法が要求され、造形活動が行えるものであること。
- ㉙ 主体的に造形活動ができ、次題材との関連性の深いものであること。
- ㉚ 計画的に題材が組み立てられ、生活との関連が図られ、生活をみつめなおし愛着のもてること。
- ㉛ 次学年や他領域との関連のもてること。
- ㉜ 他教科との関連が図られ、学習活動が展開されること。

③ 高学年でおさえること

- ㉗ 児童の興味を満足させ、次題材への意欲のわくものであること。
- ㉘ 造形的技法が要求され、条件規制の中で十分な造形表現活動が行えること。
- ㉙ 主体的に造形活動ができ、次題材との関連が深いものであること。
- ㉚ 計画的に題材が組み立てられ、生活との関連が図られ、生活をみつめなおし愛着のもてること。
- ㉛ 他教科との関連が図られ、学習活動が多岐にわたるものであること。
- ㉜ 次学年や他領域との関連のもてるものであること。

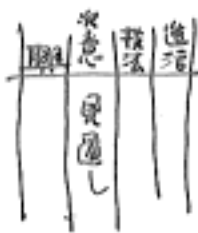
(4) 生活をみつめる題材を選ぶ 一経過一

題材を選びだすにあたり、「児童の発達段階のおさえ」であげたことはもちろんであるが、次のこともおさえなければならない。

現在子どもたちのおかれている生活の中から、

- ㉗ 学校、学年、学校行事や特別活動の中より取り上げること。
- ㉘ 遊びの中でもよりねらいのはっきりさせやすいものを取り上げること。
- ㉙ 地域行事との関連も図った題材を取り上げること。
- ㉚ 題材そのものも児童の生活につながるのあるものとし、題名を見ただけで、指導の内容や表現のしかたのわかるものであること。

これらのことを考慮することによって、子どもの発想を広げ、意欲的に表現活動に取り組むことができると考える。



A-6
7
8
9

地域 → 社会
自然

(Xをアケル)
授業? 地位 習フ
① 習フ = 1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9.

2 実践のあゆみ

(1) 研究の柱

- ア 子どものくらしの見直し
- イ 生活を見つめる題材例
- ウ 授業の実践

(2) 題材例

学 年	生 活	観 察	お 話	版 画
1	<ul style="list-style-type: none"> ○大きなあそび ○お兄さん お姉さんとあそんだ(集会) ○ブランコで高く ○すきな動物 ○わたしの先生 ○玉ころかし(運動会) ○雪がふった 	<ul style="list-style-type: none"> ○こんなことしたよ ○みつけたこと ○絵日記 	<ul style="list-style-type: none"> ○サンタクロースは 今ごろ 	<ul style="list-style-type: none"> ○すきな動物 ○ともだち
	基礎的・基本的事項	<ul style="list-style-type: none"> ○線で形をかき、興味のあることをくわしくかく。 ○たての線、横の長い線、太い線を使ってかく。 ○かきたいものをきめてかく。 ○ものの大小に気づいてかく。 ○クレヨンを持ち方(細い、色のこい、うすい) ○前向き的人物 		
2	<ul style="list-style-type: none"> ○身体測定 ○お医者さんにみてもらった ○注射されているばく ○どんな花さくかな ○雨の日 ○初雪が降った ○雪であそぶ ○音楽行進 	<ul style="list-style-type: none"> ○よこむきの人 ○そだてた花 ○見つけノート 	<ul style="list-style-type: none"> ○虫の国 ○かみなりさんは ○かきこじぞう 	<ul style="list-style-type: none"> ○ふたりでしたこと ○こんなことしたよ
	基礎	<ul style="list-style-type: none"> ○ものの形の大まかな特徴をとらえ、中心をきめてかく。 		

<p>的・基本的事項</p>	<p>○ものの大きさ（長さ）を比べて、大まかな見通しをもってかく ○かきたいものを中心に画面をくみだてていく。 ○もののある位置をきめてかく。 ○線と面を意識してかいたり着彩する。 ○同じ色にも、少しずつちがった仲間のあることがわかり、くふうしてかく。 ○横向きの人物</p>			<p>をつくる。 ○中心になるものを支えるためのまわりの表現 ○はきみによる直線・曲線のいかし方 ○インクのつけ方</p>
<p>3</p>	<p>○なわとび ○にらめっこ （昔の遊び） ○シャワー ○リュックを背おって ○つな引き ○魚市場 ○水やり ○はくと自転車 ○冬の遊び ○笛の練習</p>	<p>○見てきたこと （おまつり） （農家の仕事） （工場の中）</p>	<p>○コロボックル ○子ぐまの話 ○草むらのできごと ○読んだお話の中から</p>	<p>○したこと見たこと</p>
<p>基礎的・基本的事項</p>	<p>○全体の傾きや部分のつり合いを見てかく。 ○ものの表面の変化に気づいてあらわす。 ○画面の中心とまわりのものとのつながりを考えてくみだてる。 ○遠い近いの表現。 ○水彩絵の具の使い方 ○こいうすいを水の量、白の混ぜ方でつくる。 ○体の傾き方、姿勢の変化をみてかく。</p>			<p>○ものともとの関係を広さ、高さ、重なりでとらえていく。 ○刷りの効果を考えて、台紙・質のちがう紙・布切れの使い方を工夫して版を作る。</p>
<p>4</p>	<p>○ジャングルジム ○虫とり ○お掃除 ○七夕集会で ○冬の遊び ○冬まつり ○ふぶきの朝 ○除雪</p>	<p>○じゃがいもがとれた ○わたしのかばん</p>	<p>○キタキツネの話</p>	<p>○ぼくのしたこと</p>
<p>基礎的・</p>	<p>○形の特徴を大まかな全体から部分へとかく。 ○目の高さによって、ものの見方がちがうことをかいていく。 ○スケッチをいかした場面づくり。</p>			<p>○動いている人の特徴・感じ方を表す。 ○刀の使い方、白</p>

基 本 的 事 項	<ul style="list-style-type: none"> ○ななめ線を使った奥行き表現。 ○絵の具と水の量をくふうしてかく。 ○明・暗・色・色のちがいをあらわす。 ○白や黒の混色をくふうしてかく。 			<ul style="list-style-type: none"> 黒の効果をはっきりさせる。 ○彫り方による表現のくふう。
5	<ul style="list-style-type: none"> ○ボール遊び ○高い木にのぼたら ○うでずもう ○ゴールイン ○出番を待つ私(学芸会) ○雪はね ○スキー(スケート) 	<ul style="list-style-type: none"> ○育てた花や木(理科観察園) ○動きのある手・あやとり ○建物 ○屋上から ○じっと見つめると(空の変化) 	<ul style="list-style-type: none"> ○民話から 	<ul style="list-style-type: none"> ○動きのある手・あやとり ・うでずもう
基 礎 的 ・ 基 本 的 事 項	<ul style="list-style-type: none"> ○全体と部分の関係のある視点からみて強くあらわしていく。 ○ねらいを強調するため、ものの大きさ、位置、範囲をくふうする。 ○空間と重なりを考えて組み立てていく。 ○遠く、中ほど、近くなどの重なりを大きさ・位置・色の強弱であらわす。 ○まわりのものの色との関係、彩色の変化、ものの質感を表すくふうをする。 			<ul style="list-style-type: none"> ○白・黒の効果、主題をはっきりするように画面構成する。 ○刀の効果的な使い方をくふうする。
6	<ul style="list-style-type: none"> ○アスレチック ○町で働く人 ○楽器を演奏する友だち ○運動する人 ○修学旅行 	<ul style="list-style-type: none"> ○ぼくのかばん ○校舎の中 ○冬のナナカマドの木 ○とうきび畑 ○買物公園 	<ul style="list-style-type: none"> ○アイヌの民話から ○物語を読んでかく 	<ul style="list-style-type: none"> ○演奏する友だち ○働く人 ○人と人とのかわり
基 礎 的 ・ 基 本 的 事 項	<ul style="list-style-type: none"> ○いろいろ視点から、対称をみつけ、省略、強調がかける。 ○ものの質のちがいを線であらわす。 ○重なり・奥行き・ものの組みたてを考慮して効果的に表現する。 ○奥行きと広がりをあらわすために、地平線(水平線)をいかけた画面づくりをする。 ○主題と全体の色調を関係づけて表現する。 ○筆の効果的な使い方をくふうする。(点描、線描) ○色数を制限して全体の調子をまとめる。 ○季節感、雰囲気であらわすくふう。 			<ul style="list-style-type: none"> ○人と人とのかわりがよく表れる構図。 ○白・黒の効果を考え、主題表現をくふうする。 ○彫刻刀の彫りあいを考え計画的に仕事をすすめる。

(3) 実践例

ア、「森の中のキツネたち」(お話の絵) 4年

子どもたちに、きつねの動きのおもしろさに気づかせたり、樹木や草花など自然の美に対する関心を高めながら、絵にしたい場面の話を創作させる。そして、その話のイメージに合わせて、スケッチしたことや想像したことによって場面を構成させ、絵で表す楽しさや喜びを味わわせたい。

イ、指導計画(7時間)

第1次 学習計画、きつねの動作のスケッチ——2時間

第2次 樹木のスケッチ、下絵をかく——2時間(本時分)

第3次 彩色する——3時間

ウ、授業の流れ

①導入

- ・課題の確認……きつねが、どこで、何をしているのか、よくわかるように下絵をかく。

②展開

- ・自作の文を読む……かく場面の確認
- ・作品例を見て……画面構成の仕方を考える
- ・切りぬいた絵で構成……位置や大小の関係、重なりを考えて
- ・下絵をかく……コンテを使って、画面いっぱいのにびのびとかく
- ・作品をみる……友だちの作品をみて歩く、工夫されているところを話し合う

③発展

- ・次時の予定……次時にすることの確認

エ、授業をふりかえって

- ・かく場面の話を創作させることは、造形的なイメージをふくらませ、制作意欲を高める。
- ・心情的な面をもっと大切に作る配慮が必要であった。
- ・切りぬいた絵で構成の学習をさせたことは、造形的要素をおさえ、イメージを定着化させることにはなるが、下絵をかく時に、発想のひろがりやのびのびとした表現に欠ける面があった。

(4) 成果と課題

子どもたち一人ひとりが喜びを感じて、いきいきと造形活動に取り組むようにさせるために、子どもたちの生活に目を向け、生活に根ざした題材をほり起こし、それを授業に活用できるようにすることに焦点をあて研究をすすめてきた。

今後は、縦と横の系統的なつながりや他領域、他教科との関連をおさえるなど、より具体的なものとして、実践検討を重ねていきたい。

分科会 10 遊びをひろげくらしを楽しむデザイン・工作学習

助言者：佐藤 吉五郎（札幌）
 司会者：藤山 尚明（上川）
 提言者：青柳 明雄（旭川市立啓明小学校）

1 領域のおさえ

子どもの身のまわりは、ありとあらゆるデザインや、製品で埋まっている。それらが、さまざまな形で子どもの五感を刺激する。

大量生産大量消費、情報伝達の驚くべき発達などにより、次から次へと、速く、比較的容易にはしいものが手に入る時代である。

めまぐるしい映像や物品の渦の中で、子どもたちは、すばやく対応するすべを身につけ、順応し、生活を楽しんでいるかに見える。しかし、彼らの周辺にある、物や情報、デザインは、与えられ、しくまれたものであることを正確にとらえることができているのだろうか。たしかに、それらの中には、自分のねがいや興味に共通するものも多くあるだろうが、安易に便利さだけを求め、心の通いあいのない情報選択をしていることが多いのではないか。

自分の頭で考え、手で作り、よりよいものを完成させようとする活動を通して、物事を見つめ見きわめることのできる確かな目を養いたい。

従来、「デザイン」・「工作」と明確に分かれていた領域が、「生活を楽しむものを作る」と包括された。この意図は、表現の具体的活動を通して、子どもの夢やねがいを「つくろう。」「つくりだそう。」という心の高まりにまで育てることであろう。デザインはデザイン、工作は工作と分けられ、それぞれが細分化された内容をもつ領域では、多分に、分析的、論理的になりすぎたといえよう。

平面で表わす、絵画や版画。立体で表わす彫塑の学習。造形遊び。などのかかわりを配慮しながら、子どもの心とひびき合うデザイン工作をめざしたい。

他の領域に比べ、幅広い造形要素を持つデザイン工作の利点を生かすことにより、

- 思考のひろがりや、多岐にわたる表現手段が得られる。
- 作品を使うことで、日常生活が楽しく潤いあるものになる。
- 「工夫して作る。」という意欲づけや、質の高い思考や創意へ発展できる。

など、さまざまな効果が期待できる。

実践研究活動にあたり、次の点を考慮した

子どもたちに育てほしい心情・能力はどのようなものか

そのために

有効な題材や素材の開発・研究をどうすべきか

それらを

どう授業や活動として組織していくのか

そして

学習の成果をどの様に発展させ、次への意欲に結びつけていくか

豊かな発想をもち、試行をくり返ししながら自らの手で創り出し、造り上げる

ことの喜びを子どもたちがとりもどしてくれたらとわがっている。

(1) 育てたい子どもの姿

① 低学年

- 感じたことや考えたことを立体や平面で表そうとする。
- 初歩的な造形活動の楽しさを味わう。
- 使うものを作ろうとする。
- 思いつきを大切にしながら変化させていこうとする。
- 作ったものを使う楽しさを知る。

② 中学年

- 伝えたいことがらや、生活を楽しくするために使うものなどを工夫して作ろうとする。
- ねらいや条件に即した組みたてをしようとする。
- 材料の特性を考え、形や配色を工夫しようとする。
- 仕事の順序や方法をたしかめながら、最後まで仕事が続けられる。

③ 高学年

- 装飾や伝達機能に関心をもち、用と美の調和を考えて作る楽しさを感じる。
- 見通しを深め計画的に目的や条件に適応したものを作る楽しさを知る。
- 表現したい感じに合わせて、方向や動き・明暗や強弱などの感じが生かせる。
- 専念・追求する態度

(2) 基礎基本となることから

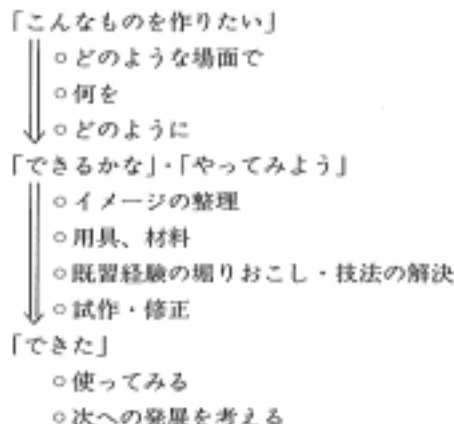
1 年	2 年
<ul style="list-style-type: none"> ○ 大小の配列。 ・横・たて・かたまり ○ 色の名まえおぼえる。 ○ 線に沿って紙を切る。 ○ 順序を考えたのりづけ。 ○ 紙の立て方。 ・おる・まるめる ○ 簡単な動かすものを作り、興味を持って遊ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ や、複雑な配列。 ・上下・左右・大小や向き。 ○ なかまの色集め。 ○ 色あいや形のちがひ。 ○ つくるものに合った材料選び。 ○ 材料に合った接着。 ○ たおれない立て方。 ・底面の広さ・高さ ○ 動くしかけに目をむけ、いろいろな方法で試す。
3 年	4 年
<ul style="list-style-type: none"> ○ 対称やくり返しの感じがわかり、生かす。 ○ 形の拡大・縮小。 ○ 色の感じで分けたり、使ったりできる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 色や形を整理して構成する。 ○ リズムのある感じを知り、生かして使う。 ○ 色の明暗、強弱を知る。 ○ 文字と絵の組み合わせ。

<ul style="list-style-type: none"> ・暖かい・寒い ○くみ立てのおもしろさを見つけて使う。 ○立体をひろげてみる。 ○力の大小によって変わる動きを使う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○つなぎ合せの工夫。 ○じょうぶな組み立て。 ○絵や図をかき、作る順序を考える。 ○制限された材料で、動きの効果を考える。
<p style="text-align: center;">5 年</p> <ul style="list-style-type: none"> ○形を発見したり、再構成する。 ・単純化・方向・動き・比例 ○目立つ配色、目立たない配色を条件に合わせて使う。 ○数字や文字の大きさ、並べ方。 ○図をかいたり、試作して、仕事の順序や方法を考える。 ○焼成に適した粘土の技法を知る。 ○力の伝わり方を考えて作る。 	<p style="text-align: center;">6 年</p> <ul style="list-style-type: none"> ○変化と統一のある構成。 ○美しく、役立つ配色。 ○全体と部分の関係を考え、色や面をつくる。 ○文字の種類に気づく。 ○木材や材料をむだなく切り、組み立てる。 ○じょうぶさと美しさを工夫する。 ○構造やしくみを図示し、計画的、効果的な組み立てをする。

2 実践のあゆみ

(1) 研究活動の方向

子どもの心をゆり動かす動機づけの工夫や手だてを考えるための取組み。外的刺激や内的啓発により、次の様な意識の流れが考えられる。



子どもの活動の一節一節でどの様な指導の手だてがあるかを見出したい。

(2) 題材・素材

ア. 題材について

子どもの日々の暮らしに根ざしたものや遊びの中から、興味と関心をもちうる題材を見出すための営みを過去続けてきた。その結果、時期、季節、環境、学校事情などにより、様々な取りくみが試みられ、それぞれ、しかるべき効果をあげている。しかし、それらを集大成して、広範囲にひろげるまでには到っていない。

旭川市教育課程による題材配列の中にも意図的に系統づけて配列はされていないが、特色ある教育活動をすべく努力を続けている。

イ 素材について

題材の重要な部分を占める、素材となる事物を模索する。様々な材料の中から種々の検討の結果「木」を中心素材として扱うことを試みた。

① 木の持つ素材としての特質

- 身近かであること
- 簡単な扱いから高度な技術要素まで含んでいること。
- 薄厚太小など多様な形状で入手できること。
- 接着・塗装などが、多様で手軽にとりつけること。
- 材料として、化学的物理的性質が安定していること。
- 季節、時期を選ばないこと。
- 難度に合わせた変形を作業として与えることができること。

② 旭川と木 「木を見直そう」

- 産業基盤の中で木製品・製材関連産業が多い。
- 学校や買物公園などの木質化による潤いの再発見。
- 先住民族による木製品や、民芸品
- 緑化行事や、21世紀の森の造成など官民一体での取組み。
- 林産試験場・営林署林務署等の公的機関
- 木工展の開催（外部団体との協賛）

③ 発達段階と木の扱い

- 低学年 —— 作りながらあそぶ。作ってあそぶ。
 - ・ 木と木材
 - ・ ブロックをつかって、積む、並べる、浮べる、組み合わせる。
 - ・ 薄木を、切る、曲げる、折る、はり合わせる。
 - ・ 細木は、他の材料の補助材としてつかう。
- 中学年 —— 目的を持って取組む。
 - ・ 簡単な加工（直線を切る・くぎでとめる。）
 - ・ 目的に合った形を見つけ、使う。
 - ・ 削る・割るなど、目的に必要な簡単な作業
 - ・ 材質の違いを知り使い分ける。
 - ・ つり合いや、飾りにも気を配る。
- 高学年 —— 利用の意図を明確にして取組む。
 - ・ 目的に合った加工
 - ・ 美しさや、実用性
 - ・ 必要な材料、材質の選択
 - ・ 曲線切り
 - ・ 重心やつり合いを考えた組み立て。
 - ・ 合理的接着、みがき、塗装
 - ・ 作図と無駄のない木取り。
 - ・ 木工用具の使い方

(3) 木ぎれに堪って——豊富な材料経験への試み。

「豊富な材料経験を」ということで、木工場、製材場、加工場の協力で、多様な形状の木ぎれを大量に与え、材料選択を自由なことから発想を広げる試みをした。旭川市内10校程度で、それも、一学級単位程の実施であったが、規格が統一された材料にしか触れたことのない子ども達は、とまどい

を見せながらも喜々として挑戦し、楽しんだ。多分に造形遊びの要素を含んだ取りくみであったが、作品として組み立てられ、完成されたものの中にはかなり独創的な制作も見られた。素材の与え方で自己啓発された例である。

(4) 授業づくりの中から。

活動の中間として、木を使い日々の生活に役立つものを作る。という目的内容で6年生の、箸づくりを授業として取りくんだ。

ア、授業をしむむために。

①個々の子どもの生活の中で、箸がどのようにかかっているかの調査をした。

②木工の経験の調査と、木工技術の経験調査をした。

③指導計画作成の過程で研究スタッフによる実技研修をしながら指導案作りを試みた。

イ、題材をとり扱うねがひ。

①二本の用材から、長さや太さ、節りを図に表し、むだなく美しく使いやすい自分の箸を作る。

②生活に役立つものを、材料を生かし、用具を適切に使いつくりあげる。

③木を扱う工作技術を身につける。

④仕上がりを見直し、節ごとに反省し、自分のねがひを満そうとする。

ウ、イメージを大切にするために。

① 事前の学習

○資料集め——民芸品・先住民族の加工品（トンコリー・イナウ等）

○事前調査——木工経験や箸の調査

② 構想を練り考えをまとめる。

○アイデアスケッチ——ラフスケッチ
修正加除

○型紙作り

○意欲づけ——完成品を使い、みんなで給食を食べよう。

エ、目的、目標をたしかなものにするために。

○制作カード

・どのような箸を作りたいか。

・全体の形

・節りをどのようにするか。

オ、自己の足どりを確かめ気づきを大切にす
るために。

○見直しカード

・途中で自分の作業をふり返り、修正を要する場合は、どこをどのように。

カ、視点をたしかなものにするために。

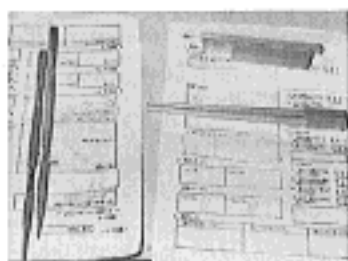
○自己評価

・ふりかえりということで節々ごとに三段階で自己評価し、思考をふくらませていく。

キ、対象を多面的にとらえさせるために。

The image shows several worksheets and cards used in the lesson plan. On the left, there is a '制作カード' (Production Card) with fields for '目的・目標' (Purpose/Goal), '材料' (Materials), and '手順' (Procedure). On the right, there is a '見直しカード' (Review Card) with a grid for '節々ごとの自己評価' (Self-evaluation by section). The grid has columns for '節々ごとの自己評価' and '気づき' (Insight). There are also some smaller cards and a table at the bottom right.

- 四方向から見たスケッチ。完成予想図。
- 模様連続性。
- 立体としてとらえる。
- ク 実用性を考えさせるために。
 - バランス・太さ・長さ・先端処理。
 - 毒性を考慮した塗塗。
- ケ 美しさを求めさせるために。
 - 持代の装飾計画・位置・形。
 - 彩色と塗塗。
- コ 努力を認め、ほげますために。
 - 感想カード
 - ・自分の作品の満足度。
 - ・友だちの作品の良さ。
 - ・学習を通して考えたこと。
 - ・使ってみての感想。



- サ 次への発展のために。
 - この学習の発展として、次にやってみ
たいこと。
 - ・遊び道具づくり——おもちゃ
 - ・日用品づくり——食卓で使うもの。
 - ・装飾品——こけし・ブローチ
- シ 授業を今後にかすために。

授業を通して、子どもたちは、箸という意外性に驚くとともに、大変興味を持った。誰でも毎日の生活の中で使っているものであるだけに、実用性一点張りの無味乾燥なものになりがちなものを、飾りのあるもの、という条件の中で興味づけをした結果、全員の子が、意欲をもって取
むことが出来た。中には飾ることに主眼を置くあまり、本来の機能をそ
こなう子もいたが、見直すところで充分修正が加えられ、結果として、
全員、自作の箸で給食をし、当初の目的を達した。

イメージをもち→ふくらませ→制作し→気づき→修正され→
完成の喜びをもつ。という一連の流れが見えた授業である。

木という材料についても、さまざま、形状、硬さ、削る道具、削り方
などを経験させることができ、充分役割を果たす素材であった。

3. 今後の発展へむけて —— 取組みを続ける課題 ——

- ① デザイン工作の営みの中で真に育ってほしい子どもの姿の模索。
- ② そのためには、いつ、何を、どの様に提供すべきなのか。
- ③ 造形遊びや、彫塑などのかかわりと、中学校へのつながり。
- ④ よりよい題材や素材の研究。
- ⑤ 木材教材の系統と他の材料との関係整理。
- ⑥ 子どもの要求に答える施設、設備・教師集団の研修。

分科会 11 目・手・心を働かせて表現する喜びを
(地域素材を生かした題材のほりおこし)

助言者：佐 伯 進 (室 蘭)

司会者：宮 下 林 (旭 川)

提言者：吉 永 一 江 (旭川市立近文第二小学校)

1. 領域のおさえ

(1) はじめに

彫塑学習は、子どもが最も喜んで取り組むものの一つであり、特に低学年ほどその傾向が強く、飽きることなくその活動に没頭する。どろんこ遊びや木片の組み合わせなどの中にも、触れたり形づくる喜びがあり、また、小石を手にするだけで視覚だけでなく、ざらざらしているなど、物の質を確かめようとする行為にまでひろがる。それらの活動の中に彫塑との深いかかわりを見ることが出来る。

こうした活動が一貫して大切にされ、持続されるべきだと思う。子どもたちは、本来、鋭く五感を働かせようとしているのであり、目で見、心を動かし、頭で考え、手足や体全体でつくり出す喜びを体験したいと願っているのである。

そうした中で、彫塑領域では、子どもたちの持っている可能性を伸長し、開花させるための手だてをさぐる活動をはじめた。

(2) 旭川市の現状

旭川市は、大雪山連峰を中心に周囲が山岳、森林地帯であり、そこから生産される良質の木材を利用した産業の中心地とし、古くから「木工のまち」とか「民芸品のまち」と言われ、優秀な家具や木彫民芸品が産出されることで全国的に有名である。

また、「彫刻のまち」と言われるほど、中原悌二郎をはじめ、佐藤忠良、加藤顕清、本郷新など数多くの秀れた彫刻家の作品を保持して、それらは、市内の公園や博物館、美術館、市役所などに展示しており、子どもたちにとって彫刻と親しむ機会や目に触れる場は多いといえる。

さらに、郊外の良い自然は、木彫素材の宝庫であり、木材、木片等を生かして立体表現できる素材が豊富である。また、粘土も身近に求めることができる。

冬には、厳しい寒さという北国ならではの気候風土を生かし、雪や氷と親しみ、それらを素材として立体表現したり、旭川冬まつりの雪像や全国氷像展での種々の氷彫刻など、すばらしい造形美に触れる機会が多い。

しかしながら、このようなすばらしい自然環境にあるにもかかわらず、子どもたちの姿はどうだろうか。マスコミによって宣伝される玩具や学用品、ゲームなど既製品化されたものがはんらんし、子どものくらしに大きく影響している。自分で材料を発見し、何か工夫してつくり出すという意識が弱まり、子どもたちのイメージも観念的で固定化されてきているのではないだろうか。

したがって、子どもたちを取り巻く現状を直視し、子供たちが本来持っている「自分で考え、自分でつくり出す」力をとり戻すとともに、感動する心や目を育てたいと願い、次のような「めざす子どもの姿」を設定し、実践に取り組んできた。

(3) めざす子どもの姿

○生活や自然に目を向け、その中から素材を自分でみつけだし立体表現でき

る子ども

- 素材の持ち味を生かし、自分のイメージをふくらませて立体表現できる子ども
- 素材の抵抗に負けず、工夫しながら、ねばり強くつくりあげる子ども

2. 実践のあゆみ

私たちは、旭川のすばらしい自然環境を子どもたちに積極的に享受させようと、子どものくらしに結びつく題材の見直しを進め、彫塑学習の本当の楽しさを知ってもらうため、地域や生活の中にある素材を取り上げてきた。

子どものくらしの中にある土、石、木、枝、雪、氷等の素材のもつ素朴な味を生かして造形する楽しさや喜びを体験させ、造形の原点に戻って、子どもたちの忘れかけていた喜びをよびおこしてやりたいと願っている。そうすることが、子どもたちのイメージを豊かにし、表現活動の中につくる心のひろがりや深まりが生み出されると考えてきたのである。

(1) 素材について

素材との出会いを大事にすることが大切である。旭川近郊で確保できる木材や粘土は絶好の素材である。しかも、単に教師が採ってきて与えるのではなく、小刀や接着剤を持って森の中に入り、自分で発見したり、工夫してつくりだす4年の授業や、学校の近くの自然林や河原に行き、自生している木を自分たちで切りだして、材料化していく6年生の取り組みも行われた。また、粘土も自分で掘り出したり、子どもたちの欲求を満足させる量を与え、量に対する感動を与える実践をしてきた。

雪や氷の素材は、学校行事や学級活動との合科で雪像づくりや氷を使った立体表現を楽しんでいる姿が各校でみられるし、子どもたち自ら雪だるまづくりをする等、生活の中に取り入れて遊ぶ姿がよみがえってきている。

これらの実践を通して、素材に対しても、今までの観点から抜け出し、新たな感動やイメージをふくらまし、新たな発見をすることで、対象に対する心温かさや感動を引き起こす心の動きがみられるようになってきた。

(2) 題材について

くらしに結びつく題材を見直したとき、児童の発達段階や興味、地域性などを踏まえ、順序立てていかなければならない。

題材に出合った時、「もっと……したい」「もっと……表したい」という意欲が喚起される題材になり得るには、子どもの心をゆり動かす動機づけの工夫や手立てが必要である。したがって、題材名を工夫したり、授業以前の活動場面を広げることにより、既成の概念をうち破るような経験や感動を呼び起こす場を設定してきた。それらの実践が「目、手、心」を働かせて表現する活動に結びつき、少しずつではあるが授業に参加する態度や意欲が高まってきたと考えられる。

(3) 制作カードについて

私たちは、実践の中で、子どもたちに本当の力を定着させるために、「制作カード」を考え、利用してきた。このカードは、

- ①目標のねらいをしっかりとつかみ、自分の作品を見通す力をつける。
- ②自己の足どりを確かめ、気づきを大切にす。

③反省や相互鑑賞により、表現の深まりや次の作品への意欲を高める。
 などがわらいとなっている。より効果的なカードの使い方やあり方を、実践を通して検証し、授業に役立てていきたいと考えている。

図 10-3-1

1. 作品のタイトル

2. 制作の目的

3. 制作の過程

日	内容
1日	
2日	
3日	
4日	
5日	

4. 制作の結果

5. 感想

(4) 素材を生かした題材例

	題 材 名	基 礎・基 本 と な る 事 柄
一 年	ねん土の大きな山 (粘土) ねん土とあくしゅ (粘土) 動物 (粘土) ならんだ氷 (氷) 雪と友達になろう (雪)	<ul style="list-style-type: none"> 楽しんで力いっぱい作る。 素材に十分親しみ、その性質を知る。 塊で大小や動きを出せる。 感じたこと、考えたことを思いのままつくる。 つくったものと話をしたり遊ぶ。 ひねり出し、くっつけながらつくる。
二 年	しっかり立つ人 (粘土) ねん土のすもう (粘土) のってみたいのりもの (粘土) 雪だるまをつくろう (雪) 氷のつみ木 (氷)	
三 年	お話を粘土でつくろう (粘土) 二人で遊んだこと (粘土) 白い雪 (紙粘土) 雪のお城をつくろう (雪) 氷をけずって (氷)	<ul style="list-style-type: none"> 感じを出して楽しくつくる。 自分の願いにあったあらわし方を工夫する。 つり合い、厚み、強さを考えてつくる。 塊の向きや動きがわかるようにつくる。 芯材を利用してつくる。
四 年	お話から (粘土) どちらが強いか (粘土) 木ぎれの虫や動物 (木) 雪の動物 (雪)	
五 年	働く人 (粘土) やわらかい石をほる (石) 大きな雪像 (共同) 氷のレリーフ (氷)	<ul style="list-style-type: none"> 表したい願いを計画的につくる。 表情や特徴をとらえてつくる。 全体と部分との関係や動きをとらえてつくる。 協力し合ってつくる。 生活と結びつけたり、工夫してつくる。 用具を利用して、効果的につくる。
六 年	歯をくいしばって (粘土) —友達の間— (粘土) 人の動き (紙粘土) 一本の丸太から (木) 大きな雪像 (共同) 氷の彫刻 (氷)	

(5) 実践例

④ 「氷のつみ木」 2年 氷 5時間

ア 題材について

子どもたちは、日常的にスキーや雪だるまなどの遊びを通して、雪や氷の素材経験を持っているし、地域や学校においても、旭川冬まつりや学校の雪像づくりなどを通して興味や関心が高く、この題材を取り上げた。

また、造形あそびなどで牛乳パックを素材とした実践例がいくつもあつた。この牛乳パックを使い氷のつみ木をつくり、積み重ねて立体をつくる活動を試み

たいと考えた。技法としては、氷を接着させることが問題と思われる。大人がつくった氷像は知っているが、自分たちでつくるのは初めてであり、意欲がわくと思われる。

イ 学習のねらい

- 氷の性質を知り（雪や粘土と比べる）
積んだり接着して立体をつくる。
- 氷を接着させる方法を生かし、計画的な
仕事をする。
- 力を合わせて大きな立体をつくる楽しさ
を味わう。



ウ 学習のながれ

①パック取りと、のりづくり

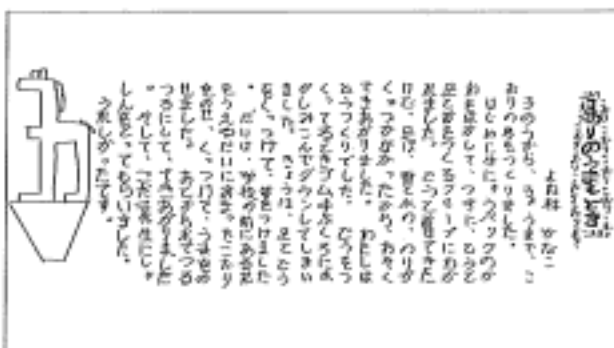
中心の部分がふくらんでいるので箱を破いて取り出す。透明ではないがつるつるして良い氷である。また、氷をつけるのり（水に雪を入れシャーベット状にしたもの）をつくる。こどもたちは、ゴム手袋、シャベルの準備をする。教師は、のこ、のみを用意する。

②部分の組み立て

足、腕、頭、胴などを2人ぐらいで組み立てていく。氷の接着面がややふくらんでおり、のりを氷の両面からつけなければならないので時間がかかる。また、持ち上げて裏返すときに失敗することが多い。

③完成と喜び

寒さに耐えられるよう、身じたくを考えたり、接着の順序や分担をもう一度確かめて仕事に取りかかった。いくつかの失敗をのりこえて作品を完成することができた。子どもは思



わず「バンザイ」を叫ぶ。自分たちが予想していた以上の作品ができ、2年生が氷の像をつくれるとは思っていなかったようであるし、他の学年や先生方からもほめられ、おおいに満足していた。

エ 反省と今後の課題

2年生としては、屋外の低い気温の中での作業は多少問題もあるが、2回くらいに分けて作業を進めれば、もっと容易であったと思われる。また、氷を接着するときにシートの上などで行えば、氷の持ち味がそこなわれなくてより良い作品ができたであろう。さらに、氷の作品を予想して、牛乳パックを組み立てながらデザインし、イメージをふくらませながら、造形への感動や喜びを体験できたと思う。そして、日頃親しみ慣れている雪や粘土と比べ新たな素材である氷の性質や美しさを感じ取れたと思われる。

この恵まれた雪、氷などの素材を、各学年の発達段階に応じて取り入れていき、新しい実践例として一層発展させたいものであり、どの子にも表現する喜

びを味わわせたいと思う。

⑧ 「友だちの顔」 氷のレリーフ 5年 3時間

ア. 題材について

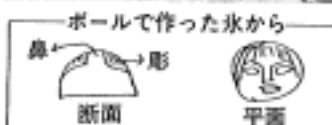
約半年間の長い冬の生活の中で、遊びと雪や氷をきり離すことができない、氷は遊びの中で、割ったり折ったりするが、造形的な遊びとしてはあまり使っていないようである。光線にキラキラと美しく輝く氷像を数多く目にしているが、氷を自分で自由につくり、氷を彫ることは新しい経験で、興味を持つ題材である。

イ. 学習のねらい

○氷の性質を知り、半立体的な顔を彫って鑑賞しよう

ウ. 反省と感想

- 氷づくりでは、透明な氷をつくるのが難しい。
- 彫刻刀で容易に氷を彫ることができる
- 制作活動に興味や関心を持って取り組んだ



⑨ 「虫をつくろう」 4年 4時間

春光台の雑木林（野外制作）

ア. 題材について

秋の野山には、落葉のほか、木切れ、小枝、木の実などがたくさん落ちている。子どもたちにとって、それらを用いて、頭、胴、足に組み合わせ、好きな虫や小さな動物をつくることは、とても楽しいことだと思われる。また、物の見方を変え、手を加えたり組み合わせることによって、単なる物体としての意味しか持たなかった木切れや小枝は、生き生きとした生命が吹き込まれ、子どもたちの創造意欲もひろがるであろう。

イ. 学習のねらい

- 木切れ、小枝などから形のおもしろさを見つけ、イメージ化する。
- 材料を工夫して組み合わせ、生き生きとした作品をつくる。
- 用具の使い方に慣れ、伸び伸びと制作する。

ウ. 学習のながれ

(事前) ○参考資料により、つくる昆虫をしぼる。

| ○材料、用具の予想

(現地に向け出発)

(諸注意) ○用具の安全指導及び材料集めにあたっての心得を指導

(材料集め) ○下草の影に隠れている枯木や小さな枝ふりに注目させる。

(制作) ○つくるものに合わせて材料を選び、つくる。

| 薄いもの(羽根)、細くとがったもの(触角)

| 細く曲がったもの(足)

(鑑賞)

エ. 反省と今後の課題



現地へ行って材料集めから始め、自然の中でつくることは、制作に対する発想の転換を呼び起こす。また、子どもたちに、物の見方、感じ方、考え方の新しい方向を示し、つくる心をひろげられると思われる。

反面、自然環境に恵まれない地域にとっては難しい題材である。さらに、小刀等を戸外に持ち出して作業を行うことに対して、安全指導の徹底も重要である。

① 「木を彫ってつくる」 6年(6時間)

ア. 学習のながれ

この学習は、木彫丸彫りのおもしろさを知る基礎的な取り組みである。できるだけ木彫りの抵抗を少なくするため、ジェルトン材という非常にやわらかい木を使った。また、なたやのみを使用しないで、小型ののこやサフォームを用意し、木工バイスでおさえるなど、大まかな形を彫り出す時の作業に工夫を加えた。

子どもたちは全体を通して、大変興味を持って楽しく学習に取り組んだ。木もとてもやわらかくて彫りやすかったし、新しい用具の使い方にもすぐ慣れて効果的に使用していた。ただ、彫刻刀は、安全面から考えると、手のささえ方や使い方の指導を徹底して行う必要がある。また、切れない刃物を無理に力で押して使う児童についても、注意する必要がある。

イ. 今後の課題

ジェルトン材は、市販の教材で $35 \times 35 \times 240$ mmの角材のため、木彫の練習には適しているが、できあがった作品は独創性に乏しい。角材よりもいろいろな太さや曲りのある、自然木の方が児童の興味や大胆さを引き出すのに適していると思われる。柔らかな自然木の教材の開発を考えていく必要がある。

3. 今後の見通しと課題

- 冬の素材である雪や氷は生活の中に入りこんでいるが、より授業の中で生かされるよう、旭川の題材として一般化し、定着させ発展させていかなければならない。
- 子どもの発達段階に合った題材集めを続け、子どもの心をゆり動かすために系統化をしていく。
- 既製の教材にたよるのではなく、くらしの中にある材料を彫塑学習に取り入れていく。

以上の事を今後の課題として、一層の研究を進めていきたい。



分科会 12・13 対象とのかかわりを深めながら、自己表現を大切にする授業のあり方

助言者：大久保 正義（旭川） 坂田 武夫（札幌）

司会者：牧野 和夫（旭川） 入井 峰生（旭川）

提言者：川 合 重（旭川市立旭川第二中学校）

及 川 輝 夫（旭川市立永山南中学校）

1. 領域のおさえ

表現活動を通して、対象の美しさを見つけ出し、感動をはぐくみ、表現するよろこびを獲得できるように育ててほしいと願っている。

中学生の発達段階は、児童期から青年前期にあつて、生活経験の拡大と共に知的な発達を伴い、客観的な考え方も進み、感情も次第に高まっていく時期にある。そのなかで、ものを関連づけてリアルに表現しようとしたり、内面的な価値や芸術的な価値を求めようとする傾向にある。しかし、対象をどう受け止めて表現していったらいいのか、自分の感性と接点をみつけられないでいるものも少なくない。それだけに美術教師の役割は重要である。技法上の問題は、表現活動において見のがすことはできないが、ややもすると子どもの内面をゆり動かす対象との出会いや感動を、われわれ教師がどう引き出し、これを受け止め、子どもになげかえすかといった指導がおろそかになってはいなかったらうか。

つくる心のひろがりや深まりを求めるとりくみは、子どもの持つ感性と自己を表現する意欲と持続性の回復である。対象とどう出会わせるかは、感動を継続されるための重要な柱である。われわれは、常に子どもの側に立ち、くらしとのかかわりの中で素材を吟味していかなければならない。子どもたちがその素材にふれて、良さや美しさを感じ、それらに深くかかわった活動をすすめることができ、教師も共感できるようなものでありたい。授業を通して、子どもたちの自己表現に結びつく想いを受け止めることのできる教師の柔軟な姿勢が求められている。

2. 実践のあゆみ

旭川市における実践のとりにくみは、昭和54年の全道造形大会旭川大会以来、くらしに結びつく題材を求めて、見たり、感じたり、考えたりといった「目や心の働き」を大切にしてきた。それは、新しい題材をさがすということではなく、子どものまわりに存在するものを見つめ直しを図ることであった。くらしの中で自分自身がどのようにかかわっているかをじっくりと見つめさせ、内面化させる取り組みをすすめてきた。そのために、観察のしごとを一層重視していった。

豊かな自然に恵まれた環境のもとで行われている写生会の活動の中でも、こうした考え方が生かされており、地域の見なおしやわらいを明確にした取り組みがすすめられている。これらの実践は、毎年2月の小・中学生の絵画・版画

の作品展に集められ、各学校における特色あるとりくみが、6年前から作品集として一冊に集録されている。この作品集は、実践交流の具体的な資料として広く活用されている。また、旭川市では、全国的に例の少ない小・中学生の版画展が図工美術教師の手で開催されており、24年間のおゆみを続けている。

(1) 想いをあたためる学習前のとりくみ

私たちは、長い間、授業中のとりくみに力を入れて実践をすすめてきた。これは当然のことであり、大切なことであるが、さらに子どもの制作する姿をとらえたとき、授業以前のあり方について考えていく必要があることに気づいた。

創造活動は、日頃から想いを練り、温めておく過程が必要であり、こうしたイメージを発酵される期間を抜きにして考えることはできない。

技法の指導も大切な要素であるが、自分でとらえたイメージを思いあたためる授業前の取り組みをさらに大切にしなければならない。これを、私たちは「出会いを大切に学習」とおさえた。授業前における題材との出会いを大切に学習を通して、子どもたちは制作の見通しも明らかになり、制作意欲も持続できると考えたからである。

授業前に、教師の側から想いをあたためるための手だてがなされることもある。それは、考えたり、見つけたり、体験させる場面をつくるためである。展示された先輩の参考作品にふれさせることもあろうし、取材や資料収集をすることも考えられる。こうした目や耳や触覚を働かせたとりくみを通して、子どもたちは、題材への予想をたて、意識化がなされ、期待感も高まると思われる。また、作文や記録をさせることによって次第に自分のイメージを明らかにすることもできる。

版画の授業で、「働く人々」をとりあげた実践がある。

地域で働く人々の姿を取材するよう夏休みの課題を出した。ひとりで、または友だちと共にスケッチブックやカメラをもってあちこち歩きまわって取材した。工場に入った時や、働く人にカメラをむけた時に取材の理由を聞かれたり、仕事の説明を受けたりする。こうした取材の過程で、それらの人々との触れ合いが貴重な体験となり、働くことの厳しさや尊さが心に残っている。取材の目を、自分の父親にむけて一緒に仕事場についていく子もいるし、旭川を離れて親の実家や親せきにまで広げていくこともある。これらの授業前における取り組みがあって、子どもの心に食いつく題材となるのではないか。

(2) ひとりひとりのイメージが見えてくる導入時のとりくみ

子どもたちが今まであたためてきた漠然としたねがいをしぼり込む段階である。ここでは、ひとりひとりが見たり、感じたり、考えたりしてきたものを大切にさせながら、その見方や感じ方の方向をはっきりさせてやる必要がある。そうすることによって今まで見えなかったものが見えてきたり、新たな好奇心や驚きが



「働く人」 3年生 木版画

わきあがってくることになるであろう。

具体的には、もっともあらわしたいものや、強く心に残ったことなどを文に書かせたり、制作カードに記録させることもある。参考作品を通して、自分の思いに合った構図や色彩やタッチ等の構想づくりをさせることもある。このようにして高まった子どもの想いを交流させて、互いの考え方を一層はっきりさせ、表現の方向を明らかにすることである。教師の発問や助ましのアドバイスが重要である。

以上のような導入時のとりくみがあって、制作への意欲や充実感をふくらませることになるだろう。また、自分のホンネを具体化しようとするであろう。子どもがこうあらわそうとする場面に追い込むことが教師の仕事であり、食いついてくる姿をつくることであろう。

(3) 実践例——授業前、導入時のとりくみ

私と友だち (木版画) 1年 (16時間)

① 授業前のとりくみ

- ・モデル(友だち)の決定
- ・スケッチ練習
- ・作文「私と友だち」

② 導入時のとりくみ

- ・本時のねらい (1/16)
 - ・前時までの活動(スケッチ)や作文(課題)を通して、友だちのあらわしたい姿を見つけることができる。
 - ・参考作品を鑑賞して、木版画の制作過程を理解できる。
 - ・制作カードにまとめ、下絵づくりの見通しを持つことができる。
- ・準備
 - ・生徒—スケッチブック、作文
 - ・教師—制作カード、O.H.P.、参考作品
- ・展開



一年 和田 佳子(木版)

指導内容	学習活動	留意事項
<ul style="list-style-type: none"> ○今まで学習をふり返らせ、今日の課題を持たせる。 ○作文を発表させ、友だちの印象を深めさせる。 ○版画の参考作品の鑑賞を通して、制作過程を理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○今までのスケッチでの制作をふり返る。 ○今日の学習内容について知る。 ○作文の発表「私と友だち」。 ○あらわしたい姿や気持ちを制作カードに記入する。 ○参考作品の印象を発表する。 ○版画とスケッチのちがいを。 ○版画制作の経験を発表し、困難 	<p>TPシート活用</p> <p>友だちの発表を聞きながら自分の考えを見直す。</p>

<p>○制作カードのまとめをさせ、今後の制作の心がまえをもたせる。</p>	<p>な点や気をつけたいところを考える。 ○版画の制作過程を理解する。</p> <p>○制作カードをまとめて、今後の制作への見通しをもつ。</p>	<p>失敗や成功の経験から制作上のポイントが発表できるのが望ましい。</p> <p>○作品集としてまとめることを知らせる。</p>
---------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------

「私と友だち」

1年8組 野上 幸子

岩出さんとは5年生の時から同じクラスでした。イラストとか絵が上手なので、5年の時に学級旗をどんなのにするか考える人に選ばれたりしていたので、すごいなと思います。岩出さんは、明るくて謙とでも仲良くできる性格です。顔も笑っている時が一番あっています。めがねをかけていて目はひとえに見える時もあるし、ふたえに見える時もある不思議な目です。右目の下にほくろがあります。

岩出さんの性格のように明るく楽しそうな姿をあらわしたいです。

「ぼくと友だち」

1年7組 田中 慶太

ぼくと山口君は、6年生のころ野球部に入っていた。山口君はショートを守っていたのでけっこう身が軽く、けっこう短気でけっこうひょうきんでした。山口君の顔の特徴は、まゆげが太くかた方の目が一えでもうかた方の目がふたえでいつごろからできたのか、ほったにできものができていて、顔の形はスポーツがりで顔のりんかくが少し四角い。

そして目がパッチリしている。山口君の家には、リキという犬がいていつも山口君と一緒に散歩しているせい少し顔もにている。

・考察

制作カードは、めあてがわかり、仕事のすすめ方がわかり、確かめができるために使用している。このカードは、題材の導入時のみに使い、このあとのカードとはわけて作ってみた。

美術科制作カード		月	日
題材名	「私と友だち」	1年7組4番	田中 慶太
1. モデルの名称	時修 美知さん	あとから書いておこう	
2. 友だちの特徴は	<ul style="list-style-type: none"> メガネをかけている かみをそばっている おでこを出している 	髪は、	<ul style="list-style-type: none"> 性格の良いところは いつ いつ こで と
3. 特に気をつけたい部分は	<ul style="list-style-type: none"> かみ型に気をつける 		
4. あらわしたい姿	<ul style="list-style-type: none"> 顔と手のやさしい感じ 		
5. 作品の感想	<p>①の図面は、眼のしわがよく出ていて、体のまるみがおかる。</p> <p>あと、手にあたっていている光の取り方が上手だと思う。</p>		
6. 今日の学習の振り返り	<p>①あらわしたい姿を見つけることができた A B C</p> <p>②水利画の制作過程がわかった B B C</p> <p>③集中して学習に取りこんだ B B C</p>		

- ① 授業前のとりくみ
- ・作文「私と校舎」
 - ・参考作品(卒業生)の鑑賞
- ② 導入時のとりくみ
- ・本時のねらい (1/11)
 - ・自分の描き残したい場所をイメージすることができる。
 - ・先輩の参考作品などから受た印象を制作カードにまとめ、発表することができる。
 - ・制作時間などを確認し、自分の制作に見通しを持つことができる。
 - ・準備
 - ・生徒一作文、筆記用具
 - ・教師一O.H.P.、前年度生徒作品、スライド、制作カード
 - ・展開

指導内容	学習活動	留意事項
○ これからの制作について知らせる。	○ 校舎に対する自分の印象を確かめる。 どんなところに六合中らしさを感じるか、作文の発表。	良さのみを肯定するのではなく、実物大の印象を引き出したい。
○ これからの制作の主題をつかませる。	○ 参考作品を鑑賞し、気づいたことをカードに記入する。 ○ 感想を発表する。 ○ 自分が描くとすれば、どんな場所を選ぶかイメージしてみる。 ○ 校舎のスライドを見ながら、さらに場所のイメージを深める。 ○ これからの制作について確認する。 気持ちや印象を大切にしたい場所の選定。	場所や彩色から、様々な反応を引き出したい。 描く場所の決定ではなく、描きたい場所をイメージさせ意欲づけをしたい。
○ 制作カードによるまとめを行い、次時の課題を持たせる。	○ 次時の活動の見通しを持つ。 ○ 制作カードで今日の学習のまとめをする。	この校舎の全面改築と、水彩画制作の最後であることを確認させる。

友だちと会える場所。友だちと話せる場所。友だちと勉強ができる場所。友だちができる場所。

なにもかも、この校舎の中でできあがっていき、私の友情もこの校舎で始まる。

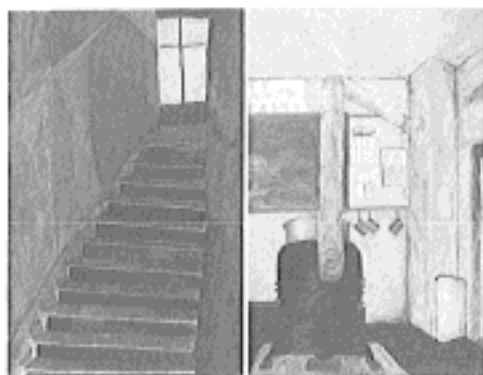
校舎の中で、たすけあいってことも分かったし、仲間がいるってことも知った。どんなにふるくても、どんなにきたなくても、ここにすれば仲間がいる。

六合中学校の校舎には季節がある。夏には日が入り汗をかいている。冬にはすきまから雪が入り寒さが校舎中に入り混じる。そして歩くとミシミシ音を出す。壁にはらくがきの消したあと。廊下の窓から、はとが見えた。

あたりは静まりかえっている。教室の前、戸を開ける。「ガラッ」と。仲間がいる。

・考察

昨年の卒業生の作文である。卒業期を半年後にひかえた3年生。まもなくこの校舎とも別れていく。こうした想いを持続させながら、厳寒期の1月の校舎内で筆を動かしていった。



美術科制作カード

月 日 () 3年 組 名氏

1-3点の参考作品をみて、気づいたことをまとめよう。

2-自分がこの六合中学校を長くすれば、どんな場所を描きたいですか。2つくらいでみよう。

3-今年の学習をふりかえり、自分がこの授業の中で学んだことをまとめよう。

4-制作カードをみて、気づいたことをまとめよう。

5-制作カードをみて、気づいたことをまとめよう。

6-制作カードをみて、気づいたことをまとめよう。

7-制作カードをみて、気づいたことをまとめよう。

8-制作カードをみて、気づいたことをまとめよう。

9-制作カードをみて、気づいたことをまとめよう。

10-制作カードをみて、気づいたことをまとめよう。

3. 成果と課題

授業前や導入時の取り組みを重視し、制作カード等による主題づくりの手だてによって、子どもたちのわがいは以前より高まり、制作意欲も持続していったと考えている。これは、描きたいものをさがし、描く手順が子ども個々のものとして、獲得できたことによるのではないだろうか。

対象をくらしに求め自己表現の充実を図ってきたが、制作カードの問題では、文章表現にこだわると負担になり、配慮が必要であるし、題材をくらしに結びつける取り組みなども今後さらに追求していく必要がある。

分科会 14 見とおしをもち、ねがいの表現できるデザイン学習

助言者：吉 田 一 雄（旭 川）

可会者：大 西 勳（上 川）

提言者：大 口 優（旭川市立永山中学校）

1. 領域のおさえ

私たちの日常生活の中でデザインは花ざかりである。現代の情報化社会の中にあって、デザインの果たす役割は大きく、またそれをしでは何事もはじまらないようにも思えてくる。私たちの視覚は、たえずいろいろな角度から刺激を受け、あらゆる映像に飽和して印象の混乱をもたらしているとも言える。

この氾濫するデザインを子どもたちは、どのように感じ、受けとめ、消化しているのかを考えると、たいへん興味のあるところであり、美術の授業においても少なからず影響が出てくるものと思われる。そうした中で、往々にして、形式の新しさが本当の新しさだと錯覚をおこしていることがあるのではないだろうか。本来のデザイン学習は、人間生活の中で美と用を結びつける分野であり、豊かな感性を養うことにあると考える。

中学生の美術科で扱われるデザイン学習は、色・形などによる構成と伝達のためのデザインとに内容が限られているから、おのずとその題材の範囲も狭められてくることになるが、もし、子どもたちのデザイン活動に大人の感覚でのデザインがそのまま持ちこまれていたとすれば、大いに反省しなければならないところである。

中学生の生活には、中学生なりの欲しがらるもの、使うものや言い分がある。それを所有し、それを造り、それを色や形で言わせることが中学生のねがいの表現であり、ここに中学生のデザインがある。私たちはひとりひとりを生かすことを中心にすえ、中学生のデザイン活動の中で子どもたちひとりひとりの持っている「ねがい」を表現させたいと考えている。中学生期は、デザイン的な仕事に大きな興味を示してくる年齢であり、取りくみ方によっては、その努力の跡がはっきり見えてくる領域でもある。デザインの学習は、自分のアイデアを生みだし、発展させ、ある種の条件をふまえながら、適切な技法を駆使し、先を見とおして計画的に表現活動をしていくには最も適した分野であり、中学生には大いに取りくませたい領域である。

2. 実践のあゆみ

私たちは、前回の全道造形教育研究大会・旭川大会（昭和54年）以来、次の視点から取りくみを進めてきた。

心と体の成長に伴い、当然、身のまわりの生活を見つめること、深めることで、より人間としてのつながりを緊密にし、自己を見つめ、自分やまわりを大切にしていこうという行動力や姿が見られてもよいはずなのに、それが次第に失われてきている現実を、私たちは、「くらしをひらく」という観点から切りこみ、題材のほりおこしを行うとともに、内容の焦点化へと研究を進めてきた。

「くらしをひらく」とは、希望や願望に結びつくことばではあるが、ただ単に

夢や未来の世界に短絡するのでなく、自分の生活とのかかわりから発する社会とのつながりの中で、物事を見つめ、考え、行動することにある。

(1) わがいの表現できる題材設定

子どもたちが題材と相対したとき、「これはいける……やるぞ」というような意欲が喚起され、方向が見える題材との対面でなければならない。単なる「ポスターの制作」とか「レコードジャケット」というような題材名を追った扱いではなく、その題材の中で「自分はこんな表現をしたい」「自分はここをふくらませたい」という意識なり、わがいやねらいの持てる具体性のある題材の与え方や投げかけをしていかなければならないと考えている。題材を設定し、子どもたちに与えるのは教師であっても、主題は生徒自らが決めるものであることを、基本にすておきたい。

しかし、中学生の段階での自己のうちだしは、なかなかむずかしく、観念的・概念的になることが多い。したがって、これをうち破るような教師側の強いはたらきかけ（刺激）が必要となってくるし、生徒が主体的に自らの発想がうち出せるような指導の手だての工夫も必要であろう。

実践例

わたしのレコードジャケット ————— 3年（14時間）

・学習のねらい

- ① いろいろなイラストレーションの必要条件を理解することができる。
- ② 見る音楽としてのレコードジャケットの機能と必要条件を理解することができる。
- ③ 既習事項を生かし、テーマにふさわしい表現方法を工夫して、総合的に表現することができる。
- ④ デザインと生活とのかかわりについて考えさせ、くらしの中に生かすことができる。

・学習のながれ

- ① 参考資料を見て、イラストレーションについて話しあう。
- ② レコードジャケットの目的や用途について考え、どのようにイラストレーションが生かされているかを理解する。
- ③ 曲名やその他の必要事項は、既成のものを使用せず、自分の曲想、自分のことばで作りだしていく。
- ④ 曲のイメージをいかに総合的に表現するか重点をおき、アイデアスケッチをくりかえす。
- ⑤ テーマにふさわしい表現方法を工夫するとともに、曲のイメージを



(300×300)

深く追求して表現する。

- ⑥ 何枚かのアイデアスケッチの中から、自分のイメージに合ったものを選び、制作する。
- ⑦ レタリング、イラストレーション、レイアウト、配色、種々の技法など、意図的に表現し、作品を完成させる。



主張するイラストレーション

3年 (10時間)

・学習のねらい

- ① 周囲の社会の事象に関心をもち、訴えたいこと、改善したいことなどを造形的に表現することができる。
- ② デザインの種々の技法について理解し、それを表現の中で効果的に生かすことができる。
- ③ 自己表現の楽しさやよろこびを知り、積極的に表現活動を行うことができる。

・学習のながれ

- ① 生徒ひとりひとりのもっている学習や生活、社会に対する不安、悩み、願い、訴えなどを作文し、テーマを見つけだし、焦点化していくとともに、表現しようとするものの内容、イメージを明確にする。
- ② ドリッピングやスパッタリング、フォトモンタージュなどのデザインのいろいろな技法を知り、それらが生かされた参考作品を見て、表現の手がかりをつかむ。
- ③ 各自のテーマにそって資料を集めるとともに、いろいろな材料・技法で実験をくりかえすことによって、イメージを拡げていく。
- ④ 自分のテーマに合った表現方法を決め、制作を進める。
- ⑤ 作品の完成を見とおし、空間の処理をも考慮し、画面構成を考える。
- ⑥ 計画性と偶然性の交錯する表現のおもしろさを味わいながら、テーマを追求し、作品を完成させる。



お金社会を批判した作品



人生の孤独を表した作品

(2) 見とおしのもてる授業づくり

私たちは、毎日の実践の中で授業のよりよい改善を求めながら、反省をし、工夫を重ねてきている。しかし、授業の構造や展開、資料の選択や提示の問題、生徒に対する発問や助言の工夫などなど、考えてみなければならないことは山積している。それらの中から、今、私たちが考えたいことは、生徒ひとりひとりに自分のねらいや願いを持たせ、自分のイメージを追求し、たしかめ、深めさせてやれる授業づくりであり、その手だてである。

制作活動には、生徒の日常生活での経験や活動など、授業以前のかかわり方も大きく影響してくるものであるが、特に授業の中では、生徒ひとりひとりの発想が生きて見える場をつくることができないかを考えていきたい。

それは、集中し自分の作品制作に取りくむ姿に結びつくことであり、生き生きとした表現活動への基礎でもある。そのためには、題材と子どもたちとの出会いを大切に、個々の発想をふくらませるとともに、制作の流れを最後まで見とおすことのできる手だてと、そのための時間を特に重視していく必要があると考える。私たちは、子どもたちに作品づくりの見とおしを持たせ、それがどの方向に進もうとしているのか、また、どこまで到達したかが確かめられる方法として、資料に示す制作カードを作り、利用を試みてきた。

この種の資料は、題材ごとに作りかえるのも大変であり、複雑になればなるほど活用されないのが常である。そうした観点から、どの領域でも活用でき、日常化できるものとして考えてみた。

児童制作活動カード

年 組 科 名

題 材 名		課 題 名		学 習 時 間		学 習 場 所				
学習のねらい		見つけたい								
材料・道具など										
日	起 止 時 間	実 施 時 間	計 画 の 進 展	今 日 の ね ら い	見 学 者 観	考 え 工 夫 した 点	考 え 工 夫 した 点	発 想 の 深 度	発 想 の 独 創 性	備 考
1		/								
2		/								
3		/								
4		/								
5		/								
6		/								
7		/								
制作を終わってこの題材や自分の作品について思うこと。						O A X で 記 入				
<small>ぬいごの顔に黒線を入れたら5分！ 自分で完成してA2より、5 4 3 2 1 10分で完成してB2以内！</small>										

授業はまた、生徒と教師との意志の疎通の場でもあり、それが基礎となって成り立っている。教師は生徒とふれあい、気もちの交流や情報の交換を大切に、必要な時には適切な助言や指示が与えられなければならないし、生徒に反応の場と時間を保障し、ともに考え深めていけるような人間関係が重要になってくる。教師のねがいと生徒のねがいのずれを、どううめていくか

が授業であると考えている。

実践例

野菜や果物からの構成

1年(8時間)

・学習のねらい

- ① 自然物の観察をとおして、美しい形、新しい形を発見することができる。
- ② 発見した形の特徴を生かして、変化と統一のある画面の組み立てができる。
- ③ 配色計画を立て、まとまりのある美しい彩色ができる。
- ④ これらの構成を生かし、伝達のデザインに発展させることができる。

・学習のながれ

- ① 野菜や果物の中から、観察の角度、位置、方法を工夫し、おもしろそうな形を見つけだし、スケッチする。
- ② スケッチをもとに形を整理して、単純化する。
- ③ 単純化した形をそれぞれTPシートに写し、秩序をさぐりだしながら並べ方、組み合わせ方の工夫をする。
- ④ 決定した構成を画用紙に描き、配色計画を立て彩色し、作品を完成させる。
- ⑤ これらの構成を、ポスター、表紙、カレンダーなどの制作に応用できることを学ぶ。



TPシートを使った構成の工夫

(3) 表現を生活に生かす

デザイン学習の基礎である、色や形の構成練習やいろいろな技法、レタリングなどは、ややもすると単なる基礎の練習のみに終わってしまい、作品の返された後は、どこかにしまいこんでしまうか見当たらなくなってしまうことがよくあるものである。総合的に表現されたデザインの作品や絵画、彫塑や工芸などは、即作品として生活の中に生かすことができるが、デザインの基礎学習の部分は、それがなかなかむずかしいものである。

私たちは、この基礎学習の指導すべき要素や練習作品を、教材の中だけで指導するにとどまらず、子どもたちの日常生活の中に、飾る、使うなどの目的で生かす手だてを試みてきた。そうすることにより、自分の作品に愛着をもち、大切に作る心や態度も育てられるものと考えている。

私のコースターをデザインする(レタリングの応用)—— 1年(8時間)

・学習のねらい

- ① 明朝体やゴシック体の特徴や書き方を理解できる。
- ② 自分の姓名の頭文字を使い、平面を構成し、コースターのデザインに生かすことができる。
- ③ 制作技法を理解し、計画的に美しい作品を作ることができる。
- ④ デザインした作品を、生活に役立たせることができる。

・学習のながれ

- ① 明朝体やゴシック体が、生活の中で多く使われている意味やその良さ、特徴などについて理解する。
- ② それぞれの書体のさまりを理解し、書き方の練習をする。
- ③ 自分の姓と名の頭文字について資料あつめをし、大きさのちがうふたつの文字を美しく書く。
- ④ 書かれた文字をそれぞれ2枚のトレーシングペーパーに写し、正方形の中に構成する。
- ⑤ 構成された文字を色画用紙に転写し、地色を生かして彩色する。
- ⑥ 台紙と枠のりづけし、完成する。
- ⑦ 完成した作品を生活の中で使用する。



(115×115)



(115×115)

3. 成果と課題

私たちの取りくみは、この大会を引き受けて以来、短い期間ではあったが、精力的に進めてきた。しかし、内容の深まりについては今ひとつのところにあり、成果として報告できる具体的なものは見当たらない。ただ言えることは、私たちのさめ細かな教材の掘り下げとその場に応じた適切な手だてを加えていくことによって、子どもたちの作品が充実していくことは確かだし、それがやがては、子どもたちの愛容につながっていくものであると信じている。

美術科における目先のねらいは容易に持てたとしても、一人の人間としてどうあるべきかという「ねがい」の持てる子どもは、美術の時間だけでつくられるものではない。他の教科学習や特別活動など日常生活のあらゆる場面で、敏感に感じられる子ども、自分の考えや意見の持てる子ども、そして物事に反応(ことばや行動)でできる子どもを育てる仕事を、全教師集団の取りくみとして進めていかなければならない。

印刷技術も進み、目新しく美しい視覚的デザインも次から次へと量産されてくる。それらの中から、何が真実なのか、何を守り育てていかなければならないのかを見きわめていくことが必要なことである。ここに美術教師の専門性を今の時代に対応させながら高めていかなければならない理由がある。

また一方では、歩みはのろくとも手仕事を大切に、そこから生まれた感動を心にとどめていきたいとも願っている。

分科会 15 新たな発見、感動をよびおこす
主体的彫塑学習をめざして

助言者：米 谷 哲 夫（札幌）

司会者：寺 原 実（旭川）

提言者：原 究（旭川市立旭川中学校）

1 領域のおさえ

(1) はじめに

生活の中でもものを作ったり、工夫したりする体験が軽視されたり、少なくなってきた現代社会の中でも、彫塑の学習では、素材に触れ、無心に手や体を使い、制作している子ども達の姿を見ることが出来る。

粘土が思うようにつかず、何回もやり直したり、からだじゅう真っ白になって奮闘している姿に本来の彫塑の学習の意義があると思う。

だが、彫塑の学習を進めていくうえで、

① 年間の題材数や時間数が少ないために、高めたり、発展させたりすることがむずかしい。

② 授業を組む時期を考慮しなければならない。

③ 施設・設備が十分に整っていないのでおもいきりやれない。

④ 材料や用具の準備に経費や時間がかかる。

などの問題が山積しているのは、旭川だけではないだろう。

わたしたちは、こういう現状の中でも子ども達に、楽しくのびのびと対象や材料にじかに触れ、顔に汗してつくり出していき喜びや厳しさを味わわせていきたいと考えている。

(2) 研究主題とのかかわり

本大会の研究主題である「つくる心のひろがりや深まりをもとめて」を受けて彫塑領域としては次のようにおさえ、そのでだてを考えてきた。

ア、「つくる心をひろげる」とは、ものの見方、感じ方、考え方に新しい方向を持たせ、ひろげていくことであり、そのためにはさまざまな概念を解き放し、きまりきった考えを除去し、なにごととも自分で考え判断し、選び出し、つくり出すという自主的な態度を身につけさせることをねがっているのだから、その具体的でだてとして、

① 授業以前での子ども達の活動場面をひろげていく。

子ども達の経験をほりおこし、それを知り、発見したり感動したりする場面をつくることである。あるいは、自然や動物とのふれあいを大切にさせ、人間愛を教えることである。

② 導入段階での対象と子どものかかわりを重視したい。

幼児期から「触れてみる」という本能的な体験を経て、わたしたちは、多くの反応を得、確かめてきた。その体験を再びよびもどし、立体は視覚によってとらえるばかりでなく、触覚においても確かめることができるものであることを気づかせたい。目の前の対象に触れ、近づき、臭いをかいたりして対象をとらえさせたいものである。

対象との深いかかわりの中から、新たな発見、感動をよびおこすことが表現活動をより主体的なものにするであろう。

③ 生活に密着した題材選びをする。

旭川では、53年度から観察表現を重視し、くらしの中に題材を求めてきた。身近な題材からすぐれた作品が生み出される場合が多いのは、対象をよく観察したり、対象と深く心を通わせたりすることができるからだと思う。

イ 「つくる心を深める」とは、自分自身の表現しようとするものへの集中力と持続性によって生まれる。作品に対し修正を加え、よりよいものへと努力を重ね、ねらいを追求する態度を身につけさせることを願っているもので、授業の中での具体的ななでだてとしておさえてみた。

① 主題を明確にさせること。

心情的な内容を立体として表現させたいという考えからいけば、対象から受けた感情や考えを表す意図を明確にさせる必要がある。また、主題を明確にすることにより子ども達は表現の方法について考えることができるのである。

最初の段階で対象から受けた感じをつかみ、いろいろな角度から観察することによって対象の持つ主体的な美しさ（最も心をひきつけるところ・印象の強いところ）を発見して、主題を決めさせていきたい。デッサンなどにより、自分の考えや発見を確かめ、構想を具体化していく。

② 到達目標を示す。

決められた時間の中で表現していくのであるから、子ども達にとっては今日のこの時間はなにをどこまでやるのかが明確になっていなければならない。授業の最初に目標をしばり、提示することが大切である。その目標を受けて制作にとりくみ、授業の終わりにふりかえって自己評価をすることになる。

③ 見通しをもって意欲的に制作させたい。

制作に見通しを持って、楽しく、意欲的に続けられるように学習カードを使わせる（自己評価表含む）。表現が継続する過程で、自己評価は制作の意図を毎時間明確にさせる意味でも、また再認識させる意味でも大切で、表現の質が高まるものになると考える。

以上のようなでだてを中心に考えてきた。

この他にも、素材のこと、資料の活用、造形要素の指導など考えられることがたくさんあるが、子ども達が本来持っているつくりたいという要求、人とは違う一人一人がつかんだものを大切に、楽しく生き生きと見通しをしっかりとってつくり出していく彫塑学習を旭川ではめざしてきた。

2 実践のあゆみ

1での「研究主題とのかかわり」をもとに、次のような確認で研究・実践を進めてきた。

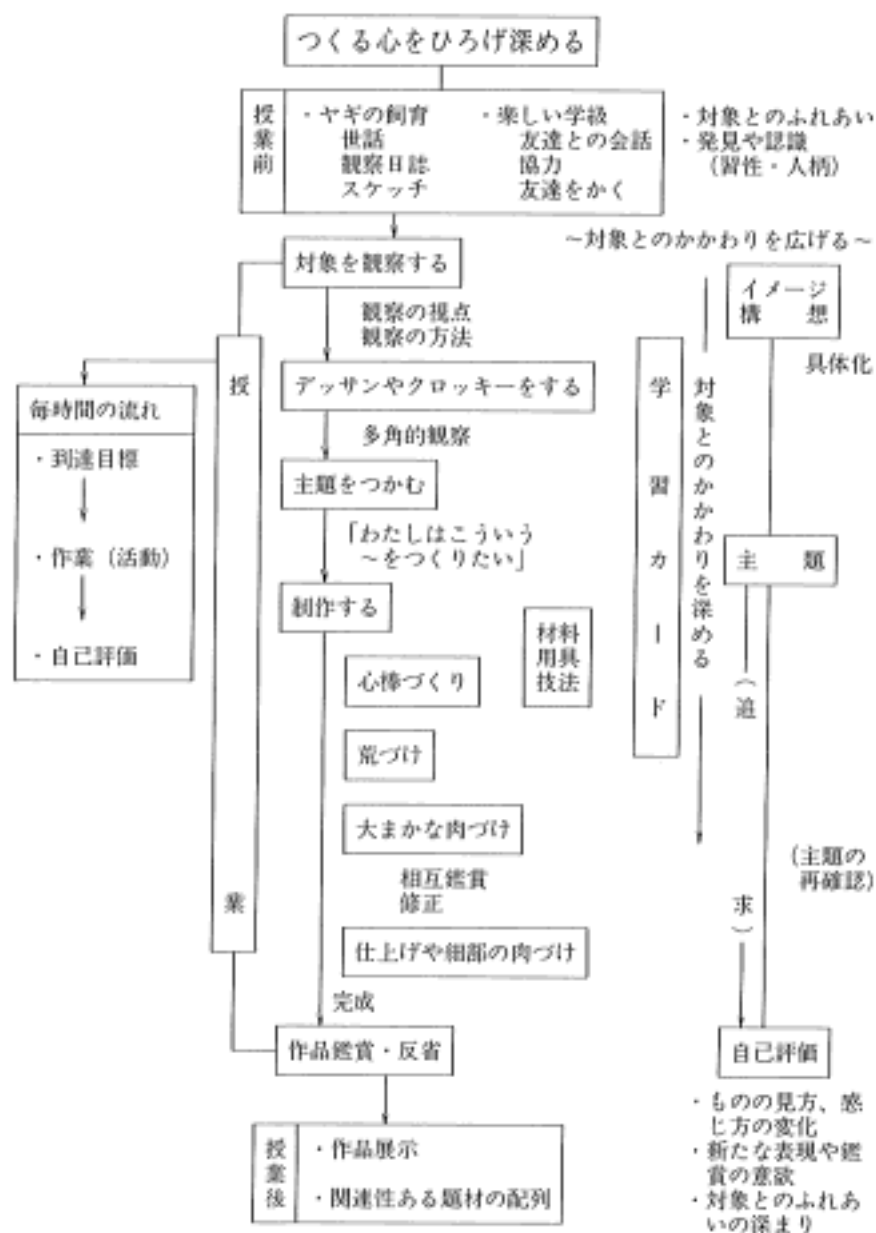
① 塑造を主に行う。

② 題材・材料は、「動物をつくる」を石こうじかづけで、「顔像をつくる」

をテラコッタ粘土で行う。

- ③ 学習カードを作成し、授業にとり入れる。
- ④ 作品はできるだけ大きくなるように心棒や材料を工夫する。
などである

(1) 指導の流れ（塑造）



(2) 学習カード

制作が楽しく自信を持って行えるように学習カードを作成した。

作成にあたってのおさえとして

- ① 全体や次時の見通しが立てられるようにすること。(計画的な仕事ができる)
- ② 毎時間の到達目標がわかり、今日の授業で何をするのかが明確になっていること。
- ③ 常に課題意識が持てるような工夫をすること。
- ④ 授業の中で気がついたり、発見したりしたことが記入できるようになっていること。

資料 学習カード (部分)

「動物をつくる」ーヤギー

美術学習カード ー彫塑ー No 1

題名

1年 組 番 氏名

【1】構想を練る

1. 到達目標

- (1) 表現したいヤギを具体的にポーズで表す。
- (2) デッサンによって構想を確かめる。

2. 飼育やスケッチから、どんなヤギを作りたいか？

*愛らしいヤギ、餌をねだるヤギ、甘えているヤギ、強そうなヤギ、空腹のヤギ、など 喜怒哀楽を感じさせるもの、印象に強く残っている場面など。

3. 2で考えたことから、どんなポーズにするか？クロッキーしてみる。

表現したい感じが強く表れる場面を思いだし、それにふさわしいポーズを描く。

*例 頭にさげる、頸をのぼす、前脚に力を入れる、目をひねる、など 体全体で考える(目、ツノ、ヒゲ)など部分的にならないこと。

4. 2、3から、それにふさわしい作品の題名をつける。

5. 自分の作るヤギのデッサンをしよう。(構想をより具体的に)

(1) デッサンをするときのめやす

- (ア) 特徴がつかみやすい方向から描く。
- (イ) 頭、頸、肩、尾、四肢などの動きに気をつける。
- (ウ) 単純化や強調の部分も考える。

6. 「構想を練る」を通して(自己評価)

	観 点	よくできた	普 通	充分でなかった
(1)	作りたいヤギを考えた	10 9 8	7 6 5	4 3 2
(2)	クロッキーが描けた	10 9 8	7 6 5	4 3 2
(3)	適確な題名がつけれた	10 9 8	7 6 5	4 3 2
(4)	デッサンによって表現したい形をつかんだ	10 9 8	7 6 5	4 3 2

【4】 作品を作り終えて

No. 6

1. 全体の学習を通して (自己評価)

	観 点	よくできた	普 通	充分でなかった
(1)	ねらいをつかんで 学習できたか	10 9 8	7 6 5	4 3 2
(2)	自分の構想が 持続できたか	10 9 8	7 6 5	4 3 2
(3)	楽しく学習できたか	10 9 8	7 6 5	4 3 2
(4)	彫塑学習で、表現上あなたが大切だと思うことを書きなさい			

2. 鑑 賞

- (1) 自分の作品について発表する。
(どんな構想をもって制作したか。でき上がった作品はどうか。)

- (2) 到達目標やねがいがよく表れている作品を選び話し合う。
(どんなところがよいのか など)

- (3) 相互鑑賞で新たに気ついたことや、自分の作品を通しての感想
を書きなさい。

「頭像をつくる」

美術学習カード

- 彫塑 -

No. 1

題材名 頭像 (テラコッタ)

2年 組 番 氏名

1. モデルから感じた直感的なイメージは？

2. デッサンの目的

イメージしたものがどこから来ているのかを、デッサンを通して追求する。

3. デッサンの到達目標

モデルを観察し、イメージを強調するようデッサンしよう。

4. デッサンの視点

前	目の位置と中心線
横	耳の穴の位置、前頭部と後頭部の出っ張り
後	後頭部と首筋の付け根の位置（確かめ）

5. デッサンを通して気づいたこと、興味を持ったことは？

6. 「私はこう言う所を強調して、友人の頭像を作りたい。」と言うねがいは？

全体を通して（自己評価）

観 点	良	い	普	通	悪	い
1. イメージをつかむ						
2. イメージを強調するようなデッサン						
3. 表現したいねがいをつかむ						
4. 友人と協力して学習できる						

3 成果と課題

- 旭川中学校彫塑領域の研究体制は、相互授業参観、題材・素材の研究、学習カードの作成など広範な内容について市内十数校の先生方で取り組んできた。
- 市販の加工粘土などがたくさん出回っている中で、テラコッタ粘土や石こうなどの素材を与えることによって、子ども達の興味、関心をうながすことができたと思う。
彫塑材についても今後施設や道具の充実と併せて検討していきたいと考えている。
- 旭川は野外彫塑に囲まれ、冬には雪まつりなどでの雪像にも触れ、彫塑に触れる環境としては恵まれているといえるのだが、より高い表現活動をうながすために、積極的に鑑賞指導を行ない、作品を見せる機会を多くとっていきたいと思う。

分科会 16 素材を生かし、楽しく豊かに制作活動を
させるにはどうすればよいか

助言者：伊 藤 功（上 川）

司会者：小 松 吉 隆（上 川）

提言者：山 理 利 春（北海道教育大学附属旭川中学校）

1 領域のおさえ

素材を生かし、「あると楽しい」などの遊びの要素を大切に題材を見つけだし、心を込めて作品をつくる活動のあり方や、生徒の生活の中に豊かに生きる指導のあり方をさぐる。

(1) はじめに

美術科の授業は、生徒一人ひとりの「見方、考え方、感じ方」から生じた発想を認めることから始まり、その発想をより確かな構想へと高めていくための教師の励ましや、参考作品、資料等による刺激を与える場面の設定は、重要な位置を占める。そのような場面を設定することにより、造形活動の計画手順・制作に影響を与え、美術に対する興味・関心を高めることができる。したがって、造形活動を通して、生徒一人ひとりのひらめきを大切にし、発想をより確かなものに導き、構想を練り、計画的に制作を進めさせるための指導の工夫は重要課題である。

生徒の実態として、他の領域に比べ、工芸学習は興味・関心が高い一方で、熱心に制作している。反面、絵画制作の過程で、全体の構成を考えて描くより、部分部分を正確に描くことが自分に適していると思っていることがある。この傾向は、長い間に培われてきたために、簡単には修正されないし、修正を指導してもよい表現とはならないことを考えることのほうが多い。むしろ、これらの特性を個性と考え、指導に生かすことの方が、生徒一人ひとりの個性や能力を大切にすることになる。工芸の学習においても、発想・計画・手順・制作に生徒一人ひとりに能力差や、特性があるのは当然である。したがって、これらの個性や能力に適合した指導を深めていくことは、より豊かな表現へと発展し、生徒の一層の興味と関心が高まると考える。また、工芸学習の基礎的、基本的な表現技法の習得を図ることによって、工芸への意欲も高まり、身近にある工芸品への関心も深まることになる。

工芸学習を通して、生徒一人ひとりが新しい感動の発見と、自己実現のための創造性の育成をねらいに、学習活動に工夫を試みた。具体的には、発想をより確かな構想へと高める個別指導の工夫や、生徒一人ひとりの意欲を高め、創造性を促す学習活動の工夫を領域のおさえとした。

(2) 研究のねらい

生徒一人ひとりが、美術科の授業を通して、手を使う技術や、感覚的な行為により、様々な造形活動を行い、造形知識、造形思考、及び造形表現に必要な創造性の拡大と技術を学び取るものである。また、より人間的な教育と、より豊かな人間性をめざすものである。中学生の時期は、一人ひとりが自分自身の生き方を思い悩む時期であり、独自の美意識の発達がある。したがって美術科の授業は、生徒の心的発達に大きな影響を与えるといえる。

以上のことから、生徒一人ひとりが、「何を、どのように表現していくか」

を主体的に探究することを主眼においた。

ア、生徒一人ひとりの個性、能力に焦点をあてた授業を進める。

- ① 生徒一人ひとりの「見方・考え方・感じ方」を大切にし、より豊かな発想で、確かな構想へと高めさせる。
- ② 自己の長所に気づかせる鑑賞の方法を工夫し、創造への意欲を高める。
- ③ 生徒一人ひとりの表現力・鑑賞力を高めるために、自己評価、相互評価観察、個別指導等を通して、「観点別個人評価カード」に記録分析し、効果的な授業への工夫を図る。
- ④ 完成までの見通しを適確にもち、自己の能力に応じた学習課題の設定をし、解決のために主体的に取り組む意欲を高める。
- ⑤ 「何を、どのように表現していくか」という観点で、課題を設定するための試行学習の場面を取り入れる。

イ、生徒相互の認め合いや、互いのよさを発見する場を設定し、美しい物に興味、関心をもたせるとともに、鑑賞力を高める。

- ① 自由な造形活動と課題設定のための時間を設定し、より深い美しさへの探究力を育てる。
- ② 生徒一人ひとりが主体的に課題を設定し、創意に満ちた計画で、造形活動が実現でき、満足感のもてる授業の工夫をする。
- ③ 柔軟な思考力を育てるために、鑑賞の観点に幅をもたせ、色々の「見方・考え方・感じ方」を一人ひとりに投げかける場を設定する。
- ④ 次へ発展していく見通しと意欲をもたせる場を設定する。

2 実践のあゆみ

(1) 研究の具体的な手だて

ア、試行学習

一定の条件（教材・時間・技法・能力）のもとで、課題をもち、その課題を解決するための見通しをもって、制作を進めていくために試行学習を設定した。この試行学習を通じて、自己の能力が向上し、教材の特性や、新しい課題も見出すことができる。これらのことから、自分に合った課題を設定し、独自の方法で課題の解決に向かうと考える。

イ、学習目標分析表の体系化

美術科の学習において、生徒一人ひとりが主体的に決断し、表現していくことは、大切な過程であり、生徒一人ひとりが表現活動に独創性をもたせ、一人ひとりが違った表現となることを理想とする学習である。そして、このことが美術科での本来の性格であると考えられる。

美術的な課題の解決を図っていく上での目標の設定（目標の分析表）は生徒の興味、関心、動機づけ、意欲的態度の形成、基礎基本的技術技能の向上に応じていける。

ウ、観点別学習状況評価カード

一題材毎に、特に顕著な行動を示す場合に焦点をあてて実践している観察評価である。これにより、生徒一人ひとりのよさを発見し、そのよさを伸ばすための手だてや、指導方法、題材の工夫を図ることができる。また、授業全体の流れから、学習指導全体の指導の適性化を図る資料に利用している。評価の本質を踏まえて、慎重な利用に心がけている。

エ、制作カード

生徒一人ひとりの個別指導の強化を実践する上で、指導の足跡が明確に

各ステップを追って示され、生徒一人ひとりの考え方や、制作の意図や変化が把握でき、継続的に使用可能な簡便な方法というのとで現在実践をしている。使用を通じて、いくつかの問題もあるが、利点をあげると次のようになる。①生徒一人ひとりの考え方が把握できる。②生徒一人ひとりとのより深い対話が図れる。③制作への意欲、完成までの工夫がなされる。④「何をどう表現するか」の疑問に答えられ、生徒自身の課題追求への姿勢が高まっている。⑤学習の成果が確認できる。

オ、個別指導の充実

生徒一人ひとりが授業の過程で、発想を深め、ふくらませていくためには時間的なゆとりと、考えを巡らすゆとりが必要である。時間的な問題は、題材の複合化、重合化を図り、ひとつの主題を多様な素材に生かすことである程度の解決を試みている。

一方、生徒一人ひとりの個性、能力の違いによる発想、構想、表現等の過程における深化を図るには、個別指導が現状では最も効果が大きい。

- ①生徒一人ひとりの能力、適性に応じた指導の観点の明確化を図る。(個人別カルテの作成と応用)
- ②自己の能力に合った課題の設定をさせ、制作への確かな見通しをもたせる。
- ③常に工夫する意欲をもたせ、正しい美的感覚を育てる。

(2) 実践例

ア、題材、第1学年、「紙を編んでつくる」

イ、実践の視点

- ① 目的や条件を明確にし、基本的な技術の習得を図る。
- ② 日本古来の紙工芸品への関心を高め、職人の知恵と技術について考えを深めさせる。
- ③ 素材の経験を十分にさせ、自分なりの課題を設定させ、制作への工夫をさせる。

ウ、指導案

- ① 題材「紙を編んでつくる」
- ② 題材について (省略)
- ③ 目標
 - ㉞ 紙と漆を使用した日本の伝統工芸品について関心を高める。
 - ㉟ 用具の基本的な使用法を体得させ、制作方法を工夫させる。
 - ㊱ 紙の特性を生かし、使い易く、編み目の美しいデザインをさせる。
 - ㊲ 塗料の特性を理解し、塗装方法を工夫し、完成の喜びを感じさせる。
 - ㊳ 自分の特質を考え、課題を設定し、自分に合った手順で制作させる。

④ 指導計画 (16時間)

- ㉞ 鑑賞(I) (生徒作品) …………… 1時間
- ㉟ 試行学習(I) (編み目) …………… 1時間
- ㊱ よこ糸・たて糸の切断 …………… 1.5時間
- ㊲ よこ糸・たて糸を編む …………… 2.5時間
- ㊳ 試行学習(II) (模型) …………… 1時間
- ㊴ 組み立てる …………… 4時間
- ㊵ カシューを塗る …………… 3時間
- ㊶ 鑑賞(II) (自己作品を鑑賞) …………… 1時間
- ㊷ 鑑賞(III) (相互鑑賞・日本の工芸) … 1時間 (本時)

⑤ 本時の学習

⑦ 目標

- ① 使いやすく、丈夫な構造で、編み目が美しく出来たか意見を出し合う。
- ② カシューの塗り方や、その他の技術上のことで工夫することや制作上のアイデアを出し合う。
- ③ お互いの作品のよさを認め合うとともに、今後の改善についても話し合う。
- ④ 自分の手で作った作品のよさを考え、日常にある生活用品に関心をもつとともに、職人の知恵と技術について、関心をもつ。

⑧ 展開(後略)

段階	学習内容	個別指導内容・留意事項
I	1. 学習カード・作品の確認をし、授業の準備をする。 2. 学習カードの今回の部分と、工芸学習について知る。	1. 各自に点検準備をさせる。 2. OHPで集計を紹介する。
II	3. 学習カードの第2学年で再びこの教材をすとしたらどうするかを記入する。 4. 学習カードの今回の事項と、第2学年での事項を発表する。	3. 今回の反省点を生かし、次への要点を考えさせ、記入させる。 4. 3～4人に、簡単に(机間巡視から発表者を幅広く選択)発表させる。
III	5. グループを構成する。 6. 班長の司会で、一人ひとりの作品について、次の観点で意見を出し合う。 ①使いやすいか ②形が整っているか ③編み目はどうか ④塗りはどうか	5. 8班に分かれさせる。 6. 鑑賞の観点をOHPで提示し、観点の良い点と、改善点についてお互いに建設的な意見を一つ一つ取り上げさせる。
IV	7. 鑑賞の観点のプリントの集計を知る。 8. 話し合いの結果を発表する。	7. OHPで集計を紹介し、グループの話し合いとの対比をさせる。 8. 自分の作品の改善に参考になったか発表させる。

エ、題材「紙を編んでつくる」について

マニラ・ボール紙を利用して、丈夫で実用性があり、しかも美しい仕上がりの工芸作品をと、長年研究してきたが、7年程前から、生徒に実際に制作をさせてきた。現在では、生徒はもちろん、家庭でも喜ばれる作品ができるようになった。

材料は、マニラボール紙とカシューとで、美しく丈夫な完成品になる。
マニラ・ボール紙を一定の幅(5mm-1cm)に切り、たて糸は、上下を

切り離さず、よこ糸をそのたて糸に編んで、裏面にボンドをぬり固め、自分の意図した小箱や、お盆、器に組み立てて仕上げる。その後にカシューをうすく、数回塗り重ねて仕上げるものである。

マニラ紙がもっている弾力性と、カシューの堅牢さと、美しい光沢、さらに、編み目の美しさがマッチして、生徒には興味、関心が高く、本校では、工芸学習をメインにして、実践している。展開図の工夫によっては形状そのものにもおもしろ味が加わり、一層の効果が期待できる題材であると考ええる。

(3) 結果と考察

ア、抽出生徒の観察から

- ① 切断する作業が苦手であるが、カシューを塗る段階になってからは、積極的に自己作品の完成に熱意が感じられた。また、完成品に満足の評価を示した。
- ② 工芸の制作そのものは嫌いであるが、鑑賞の場面では、積極的に発言をしていた。
- ③ 制作の手順が悪く、鑑賞の話し合いも参加していない。
- ④ 切断が難しく、面倒であったようであるが、編むおもしろさを感じたようである。
- ⑤ 何に使うかの目的意識がなく制作されたため、完成の喜びを感じてはいないようである。
- ⑥ 意欲的な態度ではないが、自己評価は厳しい目で、細かな指摘が多かった。
- ⑦ 作品の仕上りに満足を示し、自分の考えも積極的に発言していた。

イ、抽出生徒（7名の特徴）

- ① 多くの生徒が興味を示す題材であるが、興味・関心が低い。(①②)
- ② 授業中の私話が多く、制作態度の真剣味にやや欠ける。(③④)
- ③ 制作への工夫がなく、完成すればよいという考え方。(⑤⑥⑦)

ウ、制作カードの感想から

- ① 編むことはよいが、切断がむずかしいから嫌いである。昔からの伝統工芸品の美について気づいたことは、よかった。
- ② 作ってからの楽しさがわかった。家で使いたい。
- ③ めんどくさかったが、編みあげるとおもしろく、色々工夫してみた。
- ④ 不器用なので、工芸はあまり好きになれない。しかし、編むのは好きである。
- ⑤ 途中で計画を変えたが、思ったようにならなかった。
- ⑥ 紙でも、編んでカシューを塗ることで丈夫な作品になることがわかった。
- ⑦ 細かい仕事なので、自分としては集中できた。

エ、制作カードの自己評価について

- ① 各項とも5段階で記入させ、3を基準として、(+)方向を4、5とし、(-)方向を2、1して自己評価させた。
- ② 評価項目は次の10項目である。
 - A 意欲的に学習していたか
 - B 計画どおりに進んだか
 - C 自分の考えが生きているか
 - D 常に工夫をしたか

- E 資料・用具を活用したか
 F 自分の独創性があるか
 G 他の人のよさが発見できたか
 H 他の人に協力したか
 I 他の人の助言が参考になったか
 J 先生の指導がよかったか
- ③ 抽出生徒の傾向から、4週目(組み立て)が(-)の方向に近づき、組み立てが完成する頃に(+)に近づく。完成する7週目では、自分の作品に対する自己評価が上昇の傾向になっている。
- ④ 1週目に高い評価があるのは、初めての教材に対する興味のためであると考えられる。
- ⑤ 全体にC、D、E、Fの項目が3の段階に集中している点が見られるが、このことは、自分の要求する度合と実際の作品とのギャップを感じたためと、3週目までの切断の作業の単調さによる点が考えられる。しかし、6週目でのカシューをゆる段階でになって回復している。
- ⑥ 今回の紙工芸は、用具の正しい使い方と、基本的な技術上の指導に力点を置いて、第2学年に発展させたいと考えている。73%の生徒が、編んでつくることに興味を示した。

3 成果と課題

美術が嫌いな生徒は、20%を下回っている。工芸が他の領域よりも興味・関心が高く、40%の高い比率を示し、中でも第1学年では、53%の値を示した。生徒には、完成までの見通しがしっかりともてる工芸の学習は、制作の途中で、修正が可能で、最初のイメージから発展していく要素があるために、表現意欲も高くなると考える。特に今回の紙工芸は、生徒には新鮮な印象を与え、しかも、手づくりの本来のよさが認識されたものと思われる。そして、実際に生活に生かすことができる点が、大きな魅力になると考える。本題材の完成後のアンケートによると、第2学年では、次回の作品のイメージができていて、各自に主体的に取り組める下地が形成されつつある。

生徒の特性を生かし、楽しく豊かに制作活動をさせるためには、制作を通して、「見方・考え方・感じ方」を深め、自分の能力や適性に応じた課題を設定し、主体的な造形活動に取り組む態度の形成がされると考える。また、個に応じた指導の充実を図ることで、「何を、どのように表現していくか」を生徒一人ひとりに確かなものにし、完成までの見通しをもたせることになった。また、意欲的な態度への形成に貢献していると考えられる。しかし、生徒一人ひとりにさらに深く切り込んでいく指導の過程を今後の課題とし、生徒一人ひとりが、生き生きと学習に取り組むことを前提とした研究を深めたい。諸先生の御指導、御助言をお願いしたい。

分科会 17 青春時代の宝物として 工芸作品を制作しよう

助言者：荒井善則（旭川） 熊本高工（新潟）

司会者：平田和也（旭川）

提言者：橋詰忠晴（旭川東高等学校）

本校工芸学習の特色と願望

小中学校の工芸学習とは異り、高等学校工芸の学習は、もしかしたら一生を工芸芸術分野で命を懸やそうと云う生徒も居るかもしれない。又反面日常生活の中で、文化に親しみ、工芸美術を愛し育てる人の素地作りをしなければならぬと思えば、時代の流れを知りながら学習内容を調節する事が必要で、教師自身の意識が低下しないようにすべきである。

工芸への関心や内容を高め親しませるためには、なるべく多くの素材を経験させ、それぞれの素材の中で力量が発見させられるようにしている。（指導者は苦勞である） 2年間又は3年間継続して選択させているためでもある。

しかし出身中学により工芸学習の経験の差があまりにもありすぎ、足並みを揃え自信を持たせる意味からも、

1年目は天然素材での「やさしさ」と「素材になるまでの歴史のきびしさ」を肌で感じさせる事が工芸指導の第一歩として、木材と粘土という軟質材による経験である。（少々のやりなおしも出来るからである）

2年目は人間の知識、能力によって作り出された、人工素材である金属と七宝で、硬質で精密度の高い素材経験である。

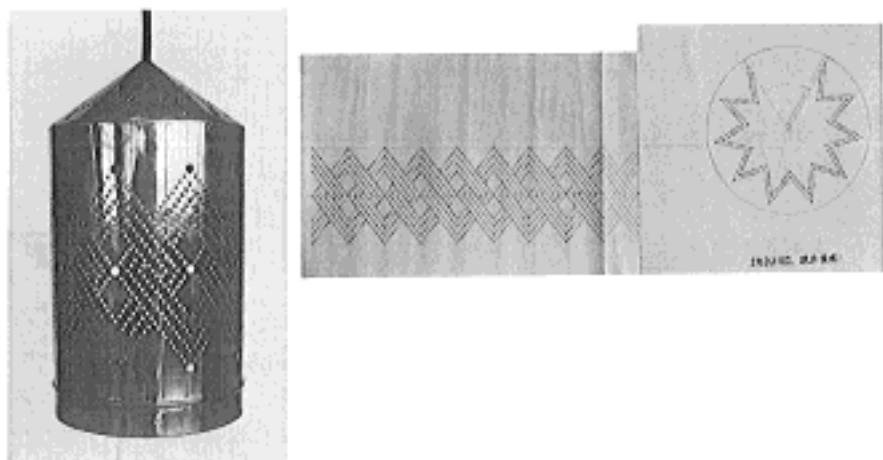
昭和50年度より本校の工芸は徹底して、高い知能と集中心、忍耐力が要求される内容で、決して息抜きや遊びの教科ではない。生徒も父母も本校工芸の情報を仕入れ、それを承知の上で選択しているのである。従って完成作品は高次元のものを願望している。陶芸では、本人が釉薬もかけ、窯出しするまでの一昼夜の期待と不安感、七宝ではサムホーム以上の作品が目前で火だるまになって電気炉（10K）から出て来る時の「祈りの心」と飛び出す感動の言葉は神聖な世界へと誘われる。それなのに生徒はきびしさの満足感と息抜きと答えるのである。

この照明具の製作も、ともすれば、すべてが市販されているもので間に合わせ、明かるければ良いと云う単純な考えで求められている照明具に対し、自らの手の中から作り出された、オリジナルの作品、そして自分の家の一角に光る芸術作品を作ろう。マイホームには絶対使えるものをもと生徒も意気込み課題に賛成しているのである。

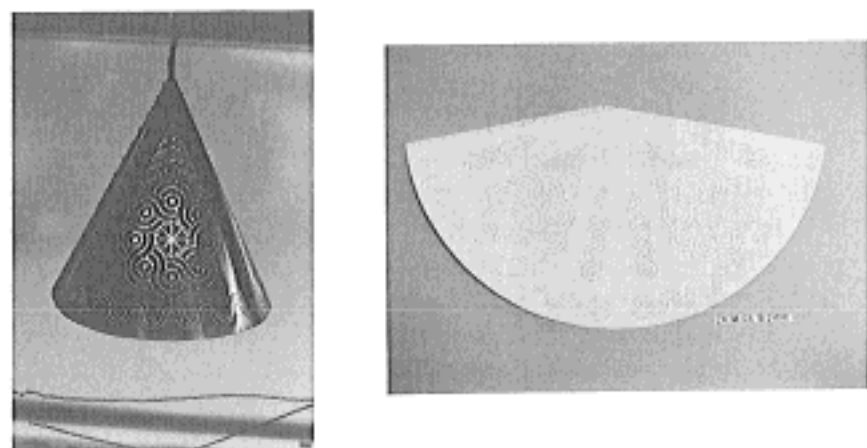
ともあれこの照明具は①綿密な設計 ②材質の理解と合理的な手段や技法と工具の使用 ③手順の読みとやり直しのきかない金属工芸素材の制約や、画一化された素材を使用しながら創造性を養う事にしたのである。

自分の宝物、将来使えるもの、中流社会人としての証しとなるものを制作する事が本校工芸選択生の意識と願望である。

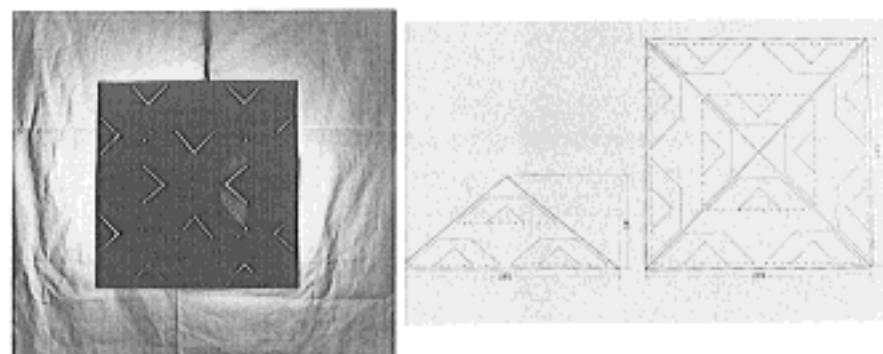
パターンI 2年 坂井俊和



パターンII 2年 田中邦明



パターンIII 2年 岩城秀実



分科会 17 校外展への取り組み

助言者：荒井善則（旭川） 熊本高工（新潟）

司会者：平田和也（旭川）

提言者：西田武文（旭川藤女子高等学校）

1 領域のおさえ

●本校における工芸のあゆみ

女子校において工芸教育を考えるとまず、危険性の少ないこと、体力をそれほど必要としないことなどが考えられる。また、本校では基本的に、芸術選択科目4教科のうち1教科を3年間を通し選択するカリキュラムとなっており、1年時2単位、2・3年時3単位の時間設定がされて、一貫した教育活動を行うことができるということで昭和58年度より工芸科が、開設されたのである。もっとも、工芸（陶芸）の全工程を限られた時間内に持ち込もうということは、予想された以上に大変なもので、当初は生徒達にもずいぶん戸惑いがあったようである。

ここで、年度をおって工芸のあゆみを表しておく。

- 昭和54年 教員の中で陶芸研究会が発足、課外陶芸教室を実施し、風神窯の片山氏の指導、協力を受ける。
- 55年 課外陶芸教室受講者有志により陶芸同好会が発足し、市内デパートにて校外展、学校祭において展示、食器販売などに取り組みクラブ活動の充実をはかる。
- 56年 同好会、部に昇格。市内デパートのロビーにおいて校外展
- 57年 美術科において、陶芸を取り入れ、3単位中2単位を工芸の授業として行い、それと同時に陶芸教室、電気炉などの設備の充実をはかる。学生美術全道展に初出品初入選をはたす。
- 58年 芸術選択に工芸科を開設し、陶芸を主として特色ある工芸教育をめざす4月市内デパート、11月市内銀行ロビーにて校外展、また学生美術全道展に出品奨励賞1点をふくめ大量入選、新ロマン派展に2点出品2点入選。
- 59年 学生美術全道展に出品し、再び大量入選。札幌市札幌アート・プラザにて校外展を開く。
- 60年 学生美術全道展に出品、出品作品全入選をはたした。また、部活の陶芸部も高文連上川支部美術展において、全道権せん2点、佳作2点を受ける
- 11月、旭川西武デパート・西武ホールにて校外展を開く。

以上のように、本校工芸科は、校外展を中心としあゆんで来た。というのは、先にのべたように、陶芸の全工程を週2～3単位では、とても消化は不可能なのである。そこで、授業内におさまきれない作業は、放課後・休み時間を使い、また、日曜日・夏休みなどの休日にも登校して、制作に向わせなければならないのである。そのためには、作品完成の充実感だけは、その作業へ向わせることは、強制的には、可能であろうが、自主的に向わせることは、難しいことであろう。校外展と言う目標の設定と上級生の取り組む姿を見ることによって自然とその姿勢が得られるのである。

また、展示によって自分の作品を、ちがった角度より評価することもでき、展示作業そのものを通し、作品の合評会にもなる。制作そのものは、個人個人であるが、展示作業は協力して行うのである。

一般の人の声によって生徒達は、作品の良さを新たに自分自身で気付かなかった点を知ったり、父母にも授業を理解してもらう機会としても、利用している。この校外展によって、授業をしめくり、次回のステップとしている。

— ヌ 毛 —

高台小学校 2年 村山由布

高台小学校 2年 村山由布

高台小学校



高台小学校 2年 村山由布

分科会 1 身近にある素材を生かし、つくる楽しさを味わわせるためには、どうすればよいか。

助言者：長谷川 伝（札幌）、江島多賀子（奈良）

司会者：今野正治（旭川）、永井恭子（札幌）

提言者：金田時子（新潟市立沼垂幼稚園）

1. はじめに

幼児にとって遊びは生活そのものです。子どもたちが主体的に遊びに取り組んでいるときには、好奇心の園まりとなり、発見し、感動し、疑問に思っ、確かめたり試そうとしたりします。遊び全体の中で感動したこと、見聞きしたことが、子どもの心の中にその子なりの楽しさとなって、疑問となって、ため込まれ、なんらかのきっかけで心が動き表現されていくと考えます。

沼垂幼稚園では、このような考え方にに基づき、造形の面でも生活や遊びの中で幼児自身が心を動かし、みずからの心が求めて表現しようとしたり、何かを造りだそうとしたり、工夫したりする姿や場面を大切にしています。

2. 造形活動を通して望む子ども像

- (1) 主体的表現のできる子……自分はどう考えた、こう思う、こんなに見えた、など。
- (2) 感性豊かな子……きれいだなあー、かわいい、楽しい、うれしい、くやしい、悲しい、など。
- (3) 創造力豊かな子……こうしてみよう、どうしたらいいかな、くふうしてみよう、など。
- (4) 自分の目で見・考え……ふしぎだなあー、こんなになってる、なぜだろう、どうして、など。

3. 生活や遊びの中での造形活動（実践例に基づく）

- (1) 自然とかかわる中で
- (2) 室内でのごっこ遊びの中で

4. ま と め

子どもは、自分の生活の中の身近なものや、興味のあるものを形の上で模倣しようとするものであり、いろいろな素材に出合ったときに、それを何かに見たてたり、いろいろに組み合わせたりして工夫しようとする姿が必ず見られます。そういう遊びの場を大切にやり、くり返し、くり返し心ゆくまで遊び込ませてやるのが、一人ひとりの心に張り合い、満足感を与え、表現や造形への意欲が培われていくものと考えます。また出来た作品に対しての良し悪しではなく、過程を重視することが幼児の心を育て人間形成に大きな力となるものと考えました。

分科会 2 感じたこと、考えたことをのびのびと絵に表現させるには、どうすればよいか

助言者：佐々木 理 温（札幌）、藤 森 理 代（東京）

司会者：守 野 綾 子（旭川）、小 尾 喬（札幌）

提言者：木 下 憲 子（千葉県鴨川市立東条幼稚園）

1. 主 題

感じたこと、考えたことをのびのびと絵に表現させるにはどうすればよいか

2. 提案の要旨

——日常実践指導の中から指導上の留意点について検討を加えたい——

- (1) こどもにとって「絵を描くことが面白く、楽しくて仕方ない」そんな心の高ぶりが絵画表現の根源的なエネルギーであるにちがいない。それが素朴な表現で、内容のおからぬ乱雑なものでも、精いっぱい表現である限り、はげましを与え、自信をもたせて表現のよろこびを味わわせたい。
 - ア・失敗の中からよいものを見つけだす指導の手だてや助言のあり方を、つかみたい。
 - イ・ひとりひとりの子どもの独自の表現を大切に育てる配慮。
 - ウ・表現をためらう子どもの中には、構想をじっと考えている場合が少なくない。
 - エ・教師は、あせることなく、子どもの構想を引き出す相談相手になってやりたい。
- (2) 日常生活経験から得たおどろきや、不思議さ、めずらしさなど、子どもの好奇心や感動をそのまま絵の中へ取り込むように配慮したい。そのための手続きについての工夫が教師にとって大変大事な指導技術になるのではないか。
 - ア・日常生活の中で、見たり、触れたり、感じとった、生の感触をそのまま絵の中に再生させる手だてを考えたい。
 - イ・歌や絵本や童話から子どもの夢や空想をふくらませはぐくんでやりたい。
 - ウ・絵を描く経験を重ねることによって、表現になれ、描くよろこびや、自信が高まるだろう。
- (3) 指導の成果を急がなくて、余裕のある指導を心がけたい。子どもの絵心を大切に、作品の出来映えにこだわることは、慎みたい。
 - ア・子どもの発想や、構想を見守るゆとりが大切だろう。
 - イ・子どもの表現意欲を高めるための工夫に心がけたい。
 - ウ・絵画表現への動機づけの工夫と環境の設定に留意したい。
- (4) 子どもをとりまく周囲のもの、あたたかいはげましや、理解が、大きな支えとなっていることを重視したい。
 - ア・子どもの理解——子どもを知ること。子どもをつかむこと。
 - イ・教師の自己研修と、相互研修
 - ウ・教師と親の協調と協力——広い意味での環境づくり。

3. ま と め

子どもを日頃からしっかりみつめ、実態把握をする。また教師自身の美的感覚を深め、技術の経験をつみあげていきたい。(以下省略)(文責・木下憲子)

分科会 3 子どもたちの豊かな造形表現を育てるうえで望ましい経験や活動をどうすればよいか

助言者：鹿島 健（札幌）、池田 一 良（京都）

小関 利 雄（逗子）

司会者：岩間 昇（旭川）、吉田 優 雄（札幌）

提言者：坪井 龍 彦（北海道教育大学附属旭川幼稚園）

1. 子どもにとっての造形活動

幼児にとって描いたり、つくったりする活動は、言葉や動作での表出と同じく、自分の心のなかにあるものを伝える手段であり、表現しようとするものがたまたま描くとかつくといい行為に出ているものである。

心にあるもの（感動や驚き）を伝えさせる時、その前に心をゆさぶり感動する生活体験を持たせ、イメージや表出したいという意欲を持たせなければならない。それが省略され、単に描く、つくるといった活動が指導されるとしたら、幼児にとって全く意味のない活動になってしまうのである。

幼児の造形活動は、つくることそのものよりも、生活の取り組みの意欲や、美しいものに感動する心など、内面操作を重視することにより、すべての活動の基礎をつくることにあると考えている。

(1) 子どもが描きたい、つくりたいと思うとき

幼児は生活の中で心を動かされ、ゆさぶられる出来事や場面に会った時その感動が驚きに近づきたい、まねしたいとする思いが、つくるなどの行為となって現われるのは前述のとおりである。

また、幼児は自分達のあそびの中で役立てたり、使いたいものが出たとき、その必要性や必然性からも描く、つくるといった行為が生まれるのである。その動機は、あくまでも子ども自身の事情によるものが好ましいことである。

(2) 教師の役割

教師は、幼児の“つくる”活動にかかわる時、単に指導や環境構成に当るのではなく、幼児が描きたい、つくりたいとする心の動きや、感情をしっかりとらえたり、認めたりすることにあると考える。

前述のところでは、子どもにできるだけ感動の機会や場を与えるのはもちろんのこと、子どもが思うままのびのびと表すことが出来るように精神解放させることや、美しさ、困難さなど内面にわたる認め、励ましをしていくことである。

また、後述の幼児の必要性で取り組ませる活動においては、創意、工夫を認め、子どもが目的に近づくための技法、ヒントの助力が完成の満足、失敗への励ましなど、共感してやることである。

幼児1人ひとり表現の仕方が違い、個性差があることをしっかりとよみとれる先生が、どんな指導力をもつ先生にも勝ると思うのである。

2 実践事例

(1) 感動や驚きから生まれたあそび……「プラネタリウムあそび」

(2) 子どもの生活経験から発展したあそび……「宅急便あそび」

分科会 4 子どもたちの夢を育てる楽しい制作活動をさせるには、どうすればよいか

助言者：高橋 栄吉（札幌）、白井 園毅（札幌）

大谷 勝美（旭川）

可会者：大口 章子（旭川）、鈴木 将夫（札幌）

提言者：向井 三枝子（愛媛県 伊豫市立北山崎幼稚園）

1. 提案理由

幼児にとって遊びは生活そのものである。そして、その生活や遊びを展開していく中で自然発生的におこる行為の一つが造形活動であると考えられる。

本来、幼児は感動したり、いろいろなイメージをふくらませた時、それを表現したいという欲求が強い。幼児が絵をかいたり、物を作ったりすることは、心の中にあるものをだれかに伝えたいとする行為であり、その中で幼児たちは自由なイメージを広げ、より新しい想像の世界をつくり出し、自分たちの夢や願いをたくして楽しんでいるのである。

ところが本園の幼児たちに目を向けて見ると、自分の気持ちを表現することができない、（好きな絵がかけない）という幼児が少なくない。特に幼稚園に入園した頃よりも現在（5歳児）の方が、その傾向が強いようである。なぜそうなったか、要因を探ってみた時

- ① 消極的な性格で自分の感情や驚きを思ったように表現できない。
- ② 周りが気になり「うまくかかねば」などの心理的な圧力がかかる。
- ③ 幼児が表現したくなるような、幼児の心を揺るがせるような感動や、てごたえのある生活体験があったらどうか。
- ④ 教師の取り組み方が、パターン化している傾向にあったのでは…。
- ⑤ 幼児が表現したいと思った時に、自由に表現できる場、時間、雰囲気があったのか…。

などが考えられる。そこで日常の遊びや生活の中で、一人一人の幼児が何を、どう感じ、考え、発展させていくかじっくりと見守りながら、幼児の心を聞き本来幼児がもっている「豊かな表現意欲」を呼び起こし、楽しくかいたり、作ったりする表現活動をさせるための配慮や手だてについて考えていきたい。

2. 提案内容

- (1) 幼児の日常の遊びや生活の中でのデザイン性の芽生え
- (2) 表現意欲を高めるために取り組ませたい活動
- (3) 楽しい制作活動をさせるための配慮や手だて
—実践事例より— 「ゴーカートで遊ぼう」
ア 活動以前の生活体験
イ 素材との関わりからイメージ化
ウ 遊びの発展と持続

3. 今後の問題点

幼児の日常の遊びを見つめていると、幼児は、場、時間、仲間があれば、次々と遊びを見つけたし、没頭している。そこでは多くの造形活動がなされ、発見や工夫、協力が生じている。しかし、遊びの発展や持続性を考えると、やはり教師の適切ななかかわりが大きく影響を与えるものである。今後は、自然発生的な遊びから造形活動へ結びつけるための教師のあり方（素材、用具の与え方、環境づくり、幼児の欲求を見ぬく教師の目など）についてもう一步ふみ込んで取り組んでいきたい。

分科会 5 イメージをひろげ、子どもの心を生き生きと表現させるためには、どうすればよいか

助言者：青山 清輝（岩見沢）、花 篤 實（大 阪）

司会者：大河内 英明（旭 川）、石 井 久（函 館）

提言者：岡 貝 義 孝（茨城大学教育学部附属小学校）

1. 提案理由

「イメージ」とは「ものやこと概念を内包しつつ、過去の知覚や印象などによって形成される心の中の像」である。それは、視覚からだけ形づくられるのではなく、聴覚、嗅覚、触覚などの具体的経験を含んでつくられている映像であり、たえず具体的な経験の中で変形されたり、つけ加えたりしながら変わっていくものであろうと考えている。

私たちの学校では、総合学習を取り入れている。それは、子どもをとりまく身近な生活の場や、自然環境、社会環境にかかわらせ、五官を通して深く考えたり、総合的に判断したりする力を養い、学ぼうとする意志力や態度など、生きてはたらく力を培うことをねらいとしている。図画工作では、イメージを豊かにし、心を育てる授業をめざして、この総合学習のものの見方や考え方を授業に取り入れたり、学校での生活体験をもとに教材を開発し、学習の生活化を考えて取り組んできた。

2. 提案内容

(1) 教材の開発について

ア 総合学習との相乗効果を図る教材の開発

① 那須山頂に立つ

5年総合学習で、那珂川の源流を調べる学習で茶臼岳に登る際、自分のマークをかいた122枚の板を柱状に組み立て、登頂記念碑として建ててくる。

イ 学校行事、児童会行事への教科としてのわかり方からの教材の開発

① 運動会を飾ろう

3～6年の児童全員で、自分のデザインした旗をつくり、万国旗の旗のかわりとしてひもにつけて運動会の当日飾る。3年は左右対称形、4年は明暗によるグラデーション、5年は運動する人、6年は名前を絵文字にして表す等のねらいが入る。

ウ 学校での生活体験に根ざした教材の開発

① ブックカバーづくり

学級文庫がいたむという児童の声をもとに、手作りの和紙をつくり、できた紙を彩色してブックカバーにする。

エ 素材との出会いを大切に、ごくありふれたものの中に素材を求める。

(2) 教材や取り組み方について

ア 子どもと子どもの心のひびきあいを育てる教材を開発する。

イ 学ばせたいことを、学びたいことに変えていくために、授業構成の中で繰り返し試す場を設定する。

ウ 子どもと子どもが授業の中で認め合い、助け合える場を設定する。

3. 今後の課題点

今までの研究を深め、自ら学ぶ力を育てるための授業構成を追求していく。

分科会 6 対象を自分とのかかわりの中で、求め深めていく表現活動をさせるには、どうすればよいか

助言者：早 弓 弘 行（滝川）、廣 己 文 一（奈良）
司会者：黒 沢 護（和寒）、鈴木 和 雄（苫小牧）
提言者：佐 藤 靖（札幌市立篠路西小学校）

気にとめておきたいこと

- (1) 教室に置いてある花を大切に育てたい気持ちから、子どもたちは、花瓶の中の水を取り替えに行く。汚れた水を捨てて新鮮な水を注ぐ姿を見ると、大変ほほえましく思うのであるが、その後には汚れた根や芽が放置されている。メダカやザリガニの飼育でもそうである。

子どもを育てる上で、経験や体験させておきたいという教育的な願いが、逆にマイナス効果をうみ出している現実には、私たちは充分留意していかなければならない。

特に、ものの考え方が多様化している今日こそ、子どもの行動を支える土壌を確かに耕し、ひとつの根でしっかりと結びつけた営みをしていかなければならないと考える。

それが、造形活動をおし進める上での重要な基盤ともなるであろう。

- (2) 「先生、じゅうろくなな（167）ページに虫の絵がでているよ。」と、誇らしげに話しかけてくる子、「山の上にはね……星がきらきら光ってお月さまも出ていたの……」という私の語りかけに、空いっぱい無数の星を描き、今にも落ちそうな大きな月を堂々と表現した子、粘り強く自分の想いを追求しながら、「あっ、そうか。」と、大事なことにふと気づいた子……

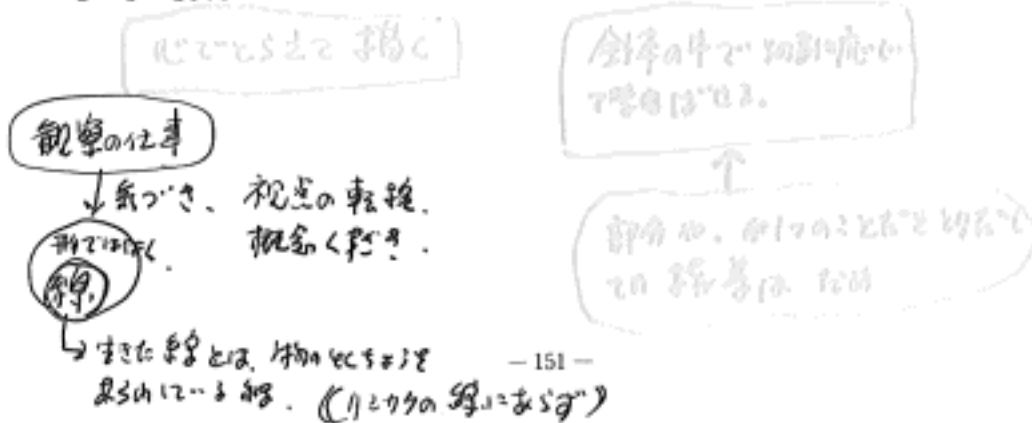
子どもたちは、私の予想出来なかったことに、たくさんの投げかけをしてくる。

子どもの心の動きを読みとっていく力を蓄えておかなければ、子どもたちは離れてしまうだろう。自分の力を高めることは、子どもの側に一步近づくことでもあるとおさえたい。

- (3) 「わあ、きれいだな。」「はくも作ってみたいな。」という、子どもの心の叫びが、造形教育に脈脈と流れている。

この素朴な人間らしい感情を、よりよい方向に伸ばしてあげたい考える。

そして、人間の心の触れ合うすばらしさ、形や色で表現していく楽しさ、美しいものを美しいとわかる心の豊かさに気づかせていきたいものである。



●小・絵B

分科会 8 対象と自分のかわりの中で、求め深めていく表現活動をさせるには、どうすればよいか

助言者：早 弓 弘 行（滝川）、辰 巳 文 一（奈良）
 司会者：黒 沢 護（和寒）、鈴木 和 雄（苫小牧）
 提言者：増 田 悦 造（群馬大学教育学部附属小学校）

1. 主題設定の理由

子どもたちは、物を見つめ描いていくとき、見つめて描くということよりも感じたことを先行させて表現していこうとする。それは心に感じたことを素直に表現しているように感じられる。しかし対象としたものと作品とのあまりの食い違いに気づき、制作途中で投げ出したり嫌気がさしたりする。これは、見つめて描く中で、対象との関わり（触れ合い）を深めていく手だてが薄れているからではないだろうか考えた。

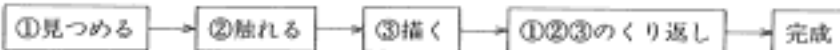
そこで、対象との関わりを、触れ合う活動ととらえ、自分の感じたことを対象の形と色を見つめながら触感をもって、立体としてとらえさせ、平面たる絵画表現の中に描かせていこうとした。

これらのことにより、子どもたちが見て感じとったことを、触感をもって確めながら、自らの表現を高めていくことができ、絵画表現の中の立体表現をしていく力を培っていくおとができるのではないかと考え本主題を設定した。

2. 実践事例 6年生 題材「自画像をかこう」

本主題に基づき、子どもたちともしっかり関わりが深いと考えられる人物画の学習を構想した。

(1) 授業としての題材の構想（全体6時間予定）



○鏡
 ○ライトによる陰影づくり } …… 手で触れ凸凹の確かめ (試行錯誤)

(2) 見るということと触れるということ

目で見ること、視覚の中でとらえたものであり、鏡の中にあるものは平面である。この平面としてとらえられたものの中の凸凹をとらえさせ、よりはっきりと表現させていくために、平面を立体として手で触れさせ、さらにそれを鏡で見つめさせていくことで、よりはっきりと認識させていこうとした。触れるということは、手の触感を通し、目でとらえたことを、はっきりと認識することになるのであろうと考えたからである。

3. 成果と課題

- 子どもたちは、自分自身を視覚のみでとらえさせていたときよりも、顔の凸凹を、認識し画面の中に表現していこうとしていた。彩色の時にも高低ということから色を選び意識して使おうとしていた。
- 平面を立体として認識し、表現を高めていこうと考えたが、平面の中の凸凹を立体としておきかえさらに平面としておきかえをさせていったため、画面の中に表現されたものは、凸凹を意識し過ぎ、心情的な面がうすくなった。

分科会 7 版の特性を生かし、表現の喜びを味わわせるには、どうすればよいか

助言者：松島輝男（札幌）、川島信也（旭川）
 中嶋崇（青森）
 司会者：萩原常良（中富良野）、蛭子信也（札幌）
 提言者：加藤玲子（旭川市立北光小学校）

1. 領域のおさえ

“つくる心のひろがり”と深まりを求めて” この大会のテーマを受け、絵画領域では、これまで継続して研究している題材群が生活に根ざし、テーマによりせまるものであるかどうか再検討をすることにした。

人間性豊かな子どもの育成は今日の教育の願いであることは言をまたない。しかし現在子ども達の置かれているくらしの場を見ると、作られ、与えられ画一化された物が無遠慮に立ち入ってきていることはいじめない事実である。そのため、子ども達の本来内包している豊かな感性が、ともすれば主体性のない片寄ったものとなってあらわれ、自らの手で創り出し、判断し解決していく力を見失っているのが現状と言えよう。

多様化する価値感やさまざまな規制の中で、子ども達は今、何を考え、何を求めているのか。子ども達の生き生きとした感動をよびおこすためには、子どものくらしに深くたち入り興味や関心のもてる題材をほりおこし洗い出していくことが必要と考える。

自らの目で見、心を動かし考え、手や足を使い五感を通し、創り出すよろこびをくらしの中にとりもどしてやりたいと思う。

2. 旭川市における版画指導の取り組み

数年前までの旭川における児童の版画作品は学年の発達段階のおさえに格差があり低学年でも高学年で扱う題材であったり、又技法や版形式についても不統一であった。そこで部では統一した見解を示し別紙の通り明かにした。

これにより、各学年の発達の段階に応じた版形式の系統や発展がおさえられ全学的に定着しつつある。又第20回絵画展、第22回版画展以後両展の作品を1冊に編集した作品集として当年度のまとめと反省、更に次年度への発展へと大きく役立ち広く活用されているところである。

ここに統一された見解にもとづき小学校5年生における版画指導の具体的実践例を資料（分科会B、小学校・版画 No.7）により紹介したい。

- (1) 自分たちのくらしや、手遊びの中から手の動きの入ったところを選び木版面にする。
- (2) 表現したいことがよくわかるように構想をねり、画面構成をする。
- (3) 彫刻刀の種類、使い方、彫りの効果を考えて版を作る。（以上3点目標）

3. 今後の課題

“つくる心の広がり”と深まりを求めて” くらしの中から五感にうったえ創り出すよろこびを育てるために、題材をほりおこし洗い出し研究をすすめてきたが、今後の課題として

- (1) より確かな表現力をつけるために、言語面からの表現もとり入れていく。
- (2) 他領域、他教科との関連を考える。

分科会 7 版の特性を生かし、表現の喜びを味わわせるには、どうすればよいか

助言者：松島輝男（札幌）、川島信也（旭川）、
中 結 崇（青森）

司会者：萩原常良（中富良野）、蛸子信也（札幌）

提言者：葛西良子（札幌市立北光小学校）

1. はじめに

3年生になると、ものともとの関係認識が進み、空間意識が立体的になってくるので、対象を複雑に表現するようになってくる。ものの動きや質感、量感の意識が高まるので、形の動きを強調し、質感の工夫、重なり、情景を豊かに表現できる。

また、3年生は、造形意欲の盛んな時期でもある。1、2で学習した紙版の黒のかたまりに、面を意識させ、はぎとったり、ひっかいたりしてつくる板紙凸版は、この期の児童にふさわしい版種だと思う。

2. 板紙凸版について

紙版は、画用紙を切り、はり重ねて版をつくるが、板紙凸版は、最初から厚い紙を使って、これにきずをつけたり、へこましたり、層をはぎとったり、切ったりして版をつくる。きずをつけたり、はぎとったところはインキがつかなくなったり、うすくつくので、つかないところは白く、うすくついたところは、白と黒の中間の調子になる。切り抜いたり、切りとったところは全くインキがつかないので白くなり、手を加えなかったり残りの部分は黒となる。

3. 題材について

3年生の題材としては、活動的な日常生活の中から、自分を中心に友人、家族、生きものなどの関係の中で主題を決めるのが適当だと思う。

私は、彼等の学校生活の中で最も生き生きと活動する場面、校庭を選んだ。そこには彼等の大好きな遊具施設もあるし、校庭の周りには大きな木がおいしげっている。そこでおいしき活動した感動を版に表わすことにした。その中から「木のぼり」「オットット橋」の二つにしばった。

他の一つの題材は、動物園に行き、でっかい動物や動きに驚いたり、喜んだりしたものを題材にとりあげてみた。

4. 下絵づくり

題材が決定した段階で、感動を主題として明確にすることが大切である。誰が、どんな遊び、動きをしたのか、その情景をスケッチさせる。人物の動きがよくつかめないところは、友達の動作化でとらえたり、人物の大きさ、動き、テーマに必要なものと必要でないものを考えて画面づくりをするのがよいと思う。

5. 版づくりと刷り

作品づくりをする前に厚紙の切れはしで、点をうったり、きずをつけたり、はがしたり、穴をあけたりして基礎練習をする必要がある。用具、材料の扱い技法になれるためである。はぎとりのあとセロハンテープで紙ほり、くずを取り除いてニスをぬる。インキを出す→インキを延ばす→版にインキをつける。これは教師が演じてみて理解させる。プレス機の使い方も仕事を分担し、共同でするとうまくいく。刷り上がりの成功感をあじわわせてやりたい。

分科会 7 版の特性を生かし、表現の喜びを味わわせるには、どうすればよいか

- 助言者：松島 輝 男（札幌）、川島 信也（旭川）、
中 嶋 崇（青森）
司会者：萩原 常良（中富良野）、蛭子 信也（札幌）
提言者：長岡 晋 郎（千葉県流山市立鱈ヶ崎小学校）

題材「校内球技大会」「サマーキャンプの日」（卒業記念制作の実践）

版の特性を生かし、共同で表現する喜びを味わわせる指導を目ざして

(1) 題材のねらい

- ア、大作を共同で製作する喜びを味わう。
イ、友だちや教師と意見を交換することにより、造形的能力を伸ばす。
ウ、作品を学校に飾ることにより、母校への愛着を深める。

(2) 指導の経過

- ・第1次 下がきをする。——12時間
下がきは各学級から自主的に立候補した児童にやらせたい。絵のうまい子、へただがやる気のある子等、色々な子ども達が集まる中での作業や話し合いが楽しいと思う。分担に従ってスケッチしたものを、版本大のロール紙に全員で根気よく描き、下がきを完成させる。
- ・第2次 転写とすみ入れ——10時間
すみ入れはあいまいにすると、彫るときに行きづまる原因となる。根気強く、ていねいにやらせたい。黒マジック、うすめた墨汁、青のポスターカラーを使用する。三色で表すことにより、全体の白黒の子想の他、彫る見通しをたてやすい。
- ・第3次 彫る——30時間（1クラス6時間）
各学級を6班に分け、リレー式に彫っていくことにより、6～7名で1枚の版木を彫ることができる。1学級1枚彫るという方法より能率的で、学年全員の作品という意識を強く持てる。製作表により、伝言をしたり、仲間意識を育てたい。
- ・第4次 刷る——5時間
学校に残すものは代表児童によって刷るが、図工の授業で各グループごと、全員が刷りを経験することが重要だと思う。紙はロール紙でもよいので、全員に感動を味わわせたい。

(3) 指導を終えて

6年の3学期に、版画の共同製作を経験し、作品を学校へ飾るという大きな思い出ができた。意欲的にとり組んだが、共同での版画作りは初めての経験だったので、教師の指導場面が多くなった。この作品の前にベニヤ1枚大位の共同製作を経験させることにより、子どもをもっと生かした指導ができるように思う。

学年全員による製作という気持ちをいかにして持たせるかが重要である。下がきも、部分の表現はできる限り全員の児童に描かせるようにしたい。作品はキャビネサイズの写真にして、全児童に配布し思い出として残せるようにする。

分科会 子どもの夢や願いを大切に、楽しい制作活動をさせるには、
どうすればよいか

助言者：舟 蕭 昭 弘（札幌）、小 岩 俊（東京）
司会者：築 山 尚 明（美瑛）、富 田 泰（札幌）
提言者：宮 森 俊 治（苫小牧市立北光小学校）

手のたくみさと、造形的感覚を育てる

かなり以前のことですが、1週間のそれぞれの曜日をヒントに、造形活動を展開してみようという、ユニークな発想が苫小牧造形研究会でいただきました。それは

- ・日曜 太陽のもと風にあそび、大空にかかわる活動
- ・月曜 夜と考えて、光の造形
- ・火曜 火を通した造形、焚き、野焼き、やさいもまでの広がり
- ・水曜 水に親しむ活動 砂浜での100mの大怪獣など
- ・木曜 木・紙を素材とする活動
- ・金曜 金属とのかかわりで、あきかんから針金まで
- ・土曜 ねん土、どろこね、大地で遊ぶ活動

というものでした。以来、さまざまな形のとりくみが進められ、考え方も定着してきました。

それともうひとつ「広がりや深まりの造形活動を求めて」をテーマに、ひとりひとりの子どもが、よろこびを持ち、確かな造形をする力を育てる深まりの仕事とさまざまな時と場に発展させて、子どもの生活にダイナミックにかかわっていく広がりや造形活動を教師のつながりと広がりの中で進めていこうと考えて実践してきました。

とくに学校行事への造形的参加、季節の造形活動、あそびの造形のとりくみが、中心として進められてきました。入学式、運動会、春夏秋冬、さまざまな場面に造形的に参加していこうというものです。

七夕集会における、かざりつけとちょうちんづくりを例にあげると

- ・光をどのように、どんな材料で囲むか
- ・光をどんなふうに、外へもらすか
- ・ローソクのたて方と安全、美しさ

などが課題となります。

囲む材料として、あきかん、すいか、紙など、いろいろ考えられますが、一連の紙による工作の発展として、紙を中心に取り上げています。単純な「光を囲む」という課題と、親しみやすい紙を素材としてのちょうちん作りは、学年を問わずよろこばれる題材です。それがやがて地域に広がり、独創的な光の造形が子どもたちのよろこびの歓声と共に夏の夜に彩りをそえていきます。



分科会 子どもの夢や願いを大切にして、楽しい制作活動をさせるには、
どうすればよいか

助言者：舟 藤 昭 弘（札幌）、小 岩 俊（東京）

司会者：築 山 尚 明（美 瑛）、富 田 泰（札幌）

提言者：澁 谷 悦 子（山形県 山形市立第八小学校）

1. 提案要旨

感動やおどろきを呼びおこす教材として、木工作は、絵画や紙工作とは違った成就感を味わうことのできる教材である。現代の子どもは、プラモデルやイラストに興味を片寄り、自ら工夫して造り出すことや、作ったものを生活の一部に取り入れて役立てたりという経験に乏しい。それだけに、本題材は、子どもの思考を活性化し、よき体験学習となることが期待される。

また、意欲的、主体的に学習活動に取り組ませるためには、まず教材を精選することである。キーホルダの製作は家族の者から喜んで使ってもらえるという期待と生活に役立つという二重の満足感が得られる教材である。また、学習過程をどう組織するかということも、技的内容を多く含んでいるだけに指導上工夫を要する点である。

2. 実践の要点

(1) 計画を立てる

工作は考える教材だと言われる。機能的な内容、装飾的な内容、技術的な内容の三点から、どこを考えさせるか着想させ、さらに、手造りの良さ楽しさに気づかせ、製作への意欲を盛りあげる。

(2) 図工カードで想を練る

豊かなアイデアや発想を十分に生かすため、自分の考えをカードに書き、学習内容を的確に把握させ、計画的に作業を進めさせ、合理的な手順とともにできあがりの寸法、美しい配色や模様で、夢のある設計図をつくらせる。

(3) 木取りをする

木取りは紙工作と違い、やり直しがきかないため、一つ一つの学習の過程を正確につかませ、刃物や用具の使い方や技法を身につけさせる。失敗を防ぐため原寸大の用紙を準備し、構想や計画を確かなものとする。

(4) 切断する

刃入れ、引きはじめ、途中、引き終わりの四段階に分けて指導する。のこぎりの角度と力の入れ具合は、練習用の板を使って何度もやらせてみる。

(5) 接合する

接着剤を多量に、必要以上につけたがるので無駄にならぬよう注意する。

(6) 着色する

水と絵の具の分量を確かめ、にじまないよう気をつけて根気よく、縁や合板の重なったところなども見落とさないで塗る。完成の喜びを味わわせる。

3. まとめ

キーホルダの製作は、家族に喜んでもらったという満足感を味わい、自分の力を試す体験学習としても適当な教材であったと思う。子どもたちは意欲的に取り組み、木工作への自信を得、次の学習へのよい手がかりができたと思う。

分科会 9 自分のイメージを楽しく豊かに立体表現させるには、どうすればよいか

助言者：伊藤英世（札幌）、寺本吉明（足寄）、
宮坂元裕（新潟）

司会者：宮下林（旭川）、中島欣也（釧路）

提言者：花田正雄（札幌市立藤舞小学校）

生き生きと立体表現させるための

彫塑指導のあり方

- (1) 彫塑学習は人間本来の活動である土いじりからくるもので、生活と共に結びついている遊びである。独特な肌ざわり、柔かくしなやかで時には冷たく、時にはぬるぬるしていろいろな形にすることができる可塑性という特性を粘土はもっている。だから子どもは喜んで活動させうることのできる教材であります。そこで生き生きとイメージ豊かに表現させる為に次の点に対しての配慮が必要である。
- (2) どの子どもも粘土は好きだと言います。その理由は簡単に作ったりこわしたりできるからです。また手ざわりからくる何とも言えない感触もあります。しかし作る意欲は盛んではあるが、興味の中心がうつりやすく一つの物に長続きしません。また「作る」ことが楽しいのであって出来た作品にあまり興味が残りません。それから個人差がはっきり表れる教材でもあります。それは技法上からくるもので、いかに小さい頃の体験が影響するかということにもなります。ですから粘土をまるめたりひっかいたりするだけで終る子どももいます。以上実際の指導からくる配慮する点を十分おさえなければ、生き生きとした立体表現にはならないと考え、子どもたち一人一人自分の目と手と体をつかって土という極めて自然な材料を使用させます。
- (3) 準備と後始末についても考えておかなければなりません。それはとても時間と手間がかかるということです。当然大人の手をかけることも必要になってきます。また作業のしやすいやわらかさに保存して管理しておかなければなりません。後始末も机の上から床下、そして自分の身の回りまで配慮してあげなければ、本当に生き生きとした造形活動はできません。
- (4) 粘土は立体として表現できる唯一の教材であるからこそ、かたまりとして存在することが重要です。ですから、小さなかたまりではなく、大きな山のような塊りからもぎとってやるようにすれば、粘土の重さ、感触がじかに手につたわってきます。また水をつけすぎるとぐじゃぐじゃになって手についてどうしようもなくなり、また逆にあまり長い時間手でこねていますと、どんどんかわいてきてひびわってきます。ですからある程度早く仕事を進める必要があります。でき上がった作品を長くもたせるには、ぬれた布をかぶせ、ビニール袋で包んでおくところまでよく保存できます。以上の点から粘土の造形活動は様々な点から条件を考えなければなりません。

分科会 10 主体的に活動する子どもを育てる指導計画は、どうすればよいか

助言者：奈良 孝 秋（石狩）、武田 好 文（山梨）
 司会者：原 良 三（富良野）、鶴賀 孝 三（札幌）
 提言者：伊 藤 善 彬（札幌市立曙小学校）

主体的に活動する子どもを育てる指導計画は、どうしたらよいか。

1. 図画工作のねらい

図画工作のもっとも大きな特性は、国語、算数のように教科書による順次性にとられないということである。だから、より以上に、その学校の実態に合った指導計画が必要となってくる。

「表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な創造活動の基礎を培うとともに、表現の喜びを味わわせ、豊かな情操を養う。」という図画工作の目標をふまえ、子どもの柔軟な感受性、豊かな想像力、自由な発想力を含む創造性や、造形的な秩序や美しさに対する直感力、造形表現の基礎的な技能と、それに伴う知識理解を高めるためには、あくまでも、児童の心情に結びついた表現意欲に支えられたものでなければならないと考える。

2. 指導計画のおさえ

(1) 題材のとりあげ

子どもが題材を主体的に受けとめ、創意を生かして学習し、子どもの意欲を満足させるものでありたいと考える。そのためには、子どもをとりまく生活環境（地域の自然、学校の施設、学校行事、学級、友だち）の中から取材するとともに、それらのことに、積極的なかかわりを持たせることによって心の耕しをはかっておく必要がある。

(2) 題材の配列

題材の配列は、学年の発達段階をふまえるのはもちろんだが、学年の1年間でも、子どもの造形的な発達からみて、造形要素や材料、用具など適切な時期に取りあげるようにしたい。前の題材で学んだことが、次の題材に応用、発展していくように組むことが効果的である。そのためには、各題のめあて、ア、心情面、イ、造形要素、ウ、材料・用具をしっかりとっておかなければならない。

(3) 他教科との関連

子どもの学習意欲や応用、発展など効率化を図るためにも、他教科との関連をあらい出し、各学年とも合科的な指導も考えたい。図工科以外での学習や、深いかかわりの中で、心情面が培われ、表現活動への意欲も高められると思うからである。

分科会 10 主体的に活動する子どもを育てる指導計画は、どうすればよいか

助言者：奈良 孝 秋（石 狩）、武 田 好 文（山 梨）
 司会者：原 良 三（富良野）、鶴 賀 孝 三（札 幌）
 提言者：相 田 隆 久（東京都板橋区立桜川小学校）

ルソーが「エミール」の中で、「人間は二度生まれる。一度目は生存するために、二度目は生活するために」と述べているように、14～15歳の思春期は人間の成長にとって大事な節目である。その節目は、その時になって突然やってくるものではなくて、それ以前に長い時間をかけて準備され、その徴候はもう小学校の6年生に現れ始める。

今まで子どもたちは、先生や親が言ったとおりに物事を受けとめ、これが正しいと言われればそれを信じ、それを実に素直に吸収してきた。与えられるものは、良いものも悪いものも全部ひっくるめて身につけて成長してきた子どもたちだが、6年生ぐらいになると、自分の考えで物事を決定したり、実行したりすることを望むようになる。この時期から後の子どもたちにとっては、自発的に取り組むように導かれた学習こそ大きな成果をあげることができるのではないだろうか。

そこで、今まで自分が行ってきたような一斉指導による授業の形態ではなく、教師が教えることをなるべく少なくして、子どもの自発的活動を励まし育てるような年間指導計画を考え、小学校6年生に実践してみた。チゼックが言うように「子どもたち自身によって成長させ、発展させ、成熟させる」ことが、私の願いである。

以下に指導計画の要点をあげてみると、

1. 1年間で7つの題材に取り組む。
 与える題材の内容は、4、5年生で学習したことの発展・応用したものとし、教師のねらいや制作過程を示したプリントを用意する。
2. 1年間で7つの題材が制作できるように、自分で計画を立てる。
 7つの題材をどのような順番で制作し、ひとつひとつの題材にどのくらいの時間をかけるかは、それぞれの子どもの計画を立てる。
3. 必要な材料・用具は、棚から自分で選んで用意する。
 子どもが自分で材料や用具を探し、それを自由に使えるような環境を準備する。子どもは、プリントを読んで作品完成までの見通しをつけ、学校で借りる物、自分で用意する物を考えて授業に臨む。
4. 制作する時は、その題材の机（あらかじめ決められている）で行う。
 その題材の制作が終わったら次の題材の机へ移動し、違う友達と一緒に制作する。
5. 自分より前に制作した友達の作品を参考にしながら、制作を進める。
 表現方法や制作の手順などでわからないことがあったら、自分から先生や友達に相談する。
6. 題材の制作が完成したら、反省表に記入し、作品とともに先生に提出して助言を受ける。

以上のような形で、1年間授業が進められる。この方法での教師の主要な仕事は、何事も子どもが自分の意志で行うように仕向け、彼自身の道を歩けるように激励することである。

分科会 11 日常の生活と結びついた造形活動をさせるには、どうすればよいか

助言者：湯川 守（十勝）、富川 忠（宇都宮）
 司会者：小杉 信雄（下川）、成瀬 登（帯広）
 提言者：青木 新治（旭川市立豊岡小学校）

1. はじめに

旭川の冬は厳しい。1、2月の気温は連日 -10°C ～ -20°C で、年に2～3日は -20°C 以下となる。積雪は、1.5mにもなる。

約5ヵ月間、旭川の子ども達には雪の中での生活や遊びがある。スキー、スケートなどを通して、雪や氷に挑戦し、楽しみ、いろいろな角度から雪や氷を知りながら、子ども達はくらしを広げている。子ども達は、雪や氷を素材としての大雪像や氷の彫刻を目にしている。又、学校では、雪像づくりなどで造りだす楽しさを味わっているところもある。

厳しい冬に負けない、たくましい身体をつくるため、グラウンドに降り積もった雪を素材に造形活動を集会の中で行う学校が相当数ある。

2. 活動のねらい

1年生から6年生までのたて割班の仲間と力を合わせて作り合うことのよさを分かり合い、雪像を通して、雪の性質を知ったり、仕事の進め方、雪の積み方を工夫して作品を造り雪に親しむ気持ちを持つ。

3. 実践例 「雪ん子集会」の実践から

(1) ねらい

ア、寒さに負けないじょうぶな身体をつくるため、集会をしっかりとやりとげるように頑張ろう。

イ、工夫しておもしろく楽しめる雪像を、たて割班みんなで力を合わせて造り上げよう。

(2) 当日までの大まかな造形活動

ア、原案づくり（児童会書記局と教師）

イ、原案検討（たて割委員会）

ウ、たて割グループの六年生が、グループ毎に集まり具体的な内容について確認し合う。

エ、グループ全体で、取り組みの内容を話し合い確認する。

オ、土台づくり（中・高学年→雪のブロック作り、積む。低学年→運ぶ）

カ、雪像づくり（大きなかたまりとして雪像へと進める。）

①低・中学年……水を利用して、べた雪にし雪像を強化する。

②高学年……それぞれの作業に少人数ずつ分かれて指導しながら作業をする。

(3) 当日

ア、完成した雪像をグループ毎に鑑賞し、工夫したところを見つけ合う。

イ、各班対抗のゲームをして楽しむ。

ウ、全校でフォークダンスをする。

分科会 11 日常生活と結びついた造形活動をさせるには、どうすればよいか

助言者：湯川 守(十勝)、富川 恵(宇都宮)
 司会者：小杉 信雄(下川)、成瀬 登(帯広)
 提言者：阿部 宏行(北海道教育大学附属札幌小学校)

羊のウンチはチョコ・ボールみたい

—ほんとうにつくるということを授業で体験する—

1. 授業でしか味わえないものをめざして

今、図工の授業に求められているものにはふたつの方向があるように思う。

そのひとつは「いつでも・どこでも・だれでもができる」という授業の一般化をめざす方向である。もうひとつは授業でしか味わえないものをめざすという特殊化の方向である。

前者はどの教師でも図工の授業が簡単に、そして効率的にできる方向をめざしている。子どもは家庭でも既習したことを活用していくことが容易であるという利点をもっている。しかし反面めんどくさくできないということは、教師にとってセットものや手間のかからぬ題材へとどうしても走ってしまう。子どもも「めんどくさい」と手間のかかることから逃げようとする傾向がみえてくる。

一方、後者の授業は学校というものの働きが多様化し、いままで社会一般のものであったものまで学習として位置付けなければならなくなった社会的要請によるものである。(たとえば、木をのこぎりで切って工作するなど)このような授業は「めんどくさい」であるが、子どもの感動は大きい。教科をこえてものをつくるという原点にかえて、人ともとの関りを体験することは、これから高一層大切なことだと考える。つくる過程が簡略化されると、原因と結果(材料と製品)が直列につながり、過程が大切にされなくなってしまうのである。

このような傾向の中で、子どもが失っていくのは、ものの持つ本質的な手ざわりやにおいといった人間の持つ感覚(五感)の中でも、もっとも根本的な感覚といえる。この感覚は視覚的な発達よりもっと人間としても図工としても大事にされなければならないところである。

このように、ものをつくるなかで省いてしまっただけではいけないものの中には、次の要素がある。●実際に体験する ●試行錯誤による理解や納得 ●つまずきからのりこえる力(挫折回復力)である。そして授業という集団の中からは、友だちや教師という他から教えられたり自分で発見していく ●人から学ぶ心である。

ものができあがる、つくりあげられるという過程は、人から人、そして心から心へという過程なのである。このことが子どもたちと共有できればと思っている。

2. 実践発表(4学年)

- ① 羊から毛をかって、毛織物をつくる
 ※4月からはじめて10月完成を予定
- ② 牛乳パックの紙で、絵はがきをつくる
 ※牛乳パックから再生紙をつくる
- ③ その他



分科会 11 日常生活と結びついた造形活動をさせるには、どうすればよいか

助言者：湯川 守（十勝）、富川 忠（宇都宮）
 司会者：小杉 信雄（下川）、成瀬 登（帯広）
 提言者：山口 正勝（神奈川県川崎市立西野川小学校）

1. 子どもとともに創り出す喜び

日常生活とより深く結びついた造形活動を考え、さらにその活動が個の活動にとどまらず、集団としての表現の力強さや喜びをどのように生み出していくかが、本分科会の重要な視点となるだろう。

発達段階から考えて、子どもに全てをゆだねていくには幼なすぎる。かといって、教師主導の計画路線に強引に従わせるのでは創意工夫、主体的活動、創造の精神に反する。両者の兼ね合い、子どもと教師で創り出す造形活動のひろばを志向したい。教師対子どもではなく、子どもと子ども、子どもと教師の協同の輪、ひびき合う感動が最優先される。

(1) 学校生活の見直し

心の豊かさ、教育の質的変換、自己実現への努力などを叫びながら、実際は、効率主義、固定化された教育課程、画一的指導のくり返しがいかに多いかを改めて問いなおさねばならない。

総合的視点を見失った学校行事、本来の精神をなくしたゆりの時間など、自らを問い直す課題は大きい。

(2) 個と集団をみつめて

個が育つと集団が成長する。集団が生き生きと活動し始めると個の伸長もまた大きい。個とのかかわりのみに目をうばわれて集団を忘れ、集団のありようのみを重視して個を見失うのであれば、豊かな学校生活は生まれない。たえず、個と集団双方の連動を意識し、同時進行を意図した教育をめざしたい。そのためのさまざまな教育的営みの中で、ごく自然に、しかも、喜びや楽しさを内包する造形活動の果たす役割と責任は重大である。

2. 創意工夫、自由な発想を色や形で表現できる充実感

子どもたちの本来もっている表現意欲は、造形的かかわりの場でよりいっそう高まり、苦勞をのりこえて完成させた後の成徳感に次の活動への原動力となる。学校生活のさまざまな活動場面を造形的視点から改めて見なおし、具体的な活動計画を練りなおすとき、造形の可能性は限りなく広がる。

(1) 体験活動を重視する

・伝統あそび ・飼育栽培 ・勤労生産などの発展として

(2) 学校行事、特別活動、集会活動などのとりくみ

・造形まつり ・七夕集会 ・歓迎集会 ・お別れ集会など

(3) 地域社会との関連の中で

・敬老の日 ・勤労感謝 ・地区別子ども会など

※上記の具体的実践の中からいくつかを紹介し、本分科会に参画される先生方とともに、交流を深め、子どもたちの個性的で力強い造形活動のありよう、喜びに満ちた姿などについて考えたい。

分科会 12 地域環境を生かした造形教育はどのようにすればよいか

助言者：吉田 義晴（北見）、前田 豊克（神戸）

司会者：神田 耕治（旭川）、堀合 隆（松山）

提言者：松藤 浄治（旭川市立木広小学校）

大分以前の映画であったが、人間の創った文明の高度の発達で人類自身を滅ぼしてしまうと言った節書きのものを見たことがあった。詳しい内容についてはさておいて、我々の現在の生活は便利さや効率、利潤などを追求するあまり、物事が細分化し分業化され、その結果として生活に必要な物はほぼ商品として準備される事となった。我々はただそれを買う事によって生活を維持する事が出来る様になり、手作りの持つ温かさや優しさの文化は、衰退の一途をたどる様になって来た。又、買うという便利さは、作るという意欲の芽を脅かす事にもなって来た。物事が断片的になり、途中経過は省略され、いわゆるブラックボックス的なものが多くなって来た。みそ汁の味は朝の子供の寝床の中に聞こえてくる母親の調理の音と一緒に、そのうまさが増加される。料理の中にも親子の対話がある。その母親の肩代わりをした商品がなんと多いことか。

子供達は自分の手で物を作る事をいとわない。個人制作でもグループ制作でも、お互いに助け合い、励まし合って作っている。特に工作においては完成するまでの過程が他の活動と比べると、内容が大変多岐にわたっている。材料、用具、作業の段取り、加工技術、時間、造形性、協力体制、費用などがあり、かなり抵抗もある。制作過程の中に多くの工夫と努力と根気が必要であり、既習の経験も大いに生かさなければならぬ。部分と全体を見る力や洞察力も要求される。又、作品を日常生活の中に生かす事により、その喜びは実生活の見直しへと発展していく。部分から全体へ、受身から能動へ、適応から創造へと工作はこれらの精神活動をかきたててくれる優れた内容を持っている。さらに、これらを作る材料として我々の身近にある木材がある。私は以前から図工科で木材をどの様に活用させたらよいかを考え実践して来た。児童の発達段階、加工能力、作業時間、費用、時期など授業を成功させるためには色々な条件が重なり、仲々満足できるものができなかった。その問題の一つに木材の硬さがあった。加工する工具も少なく、その上さび付いたり劣悪状態の中で木材を加工する…何とかならないものかという事で、加工しやすい棒状、板材、経木、薄皮、さらに地元の林産試験場において紙まで試作していただいた事もあった。さらに、教材という事で、ポプラやドロの木まで提供いただいた事もあった。しかし、材質や供給の見直しなどの問題があり教材にはならなかった。又、地元の木材業者において、木の中心部が抜けた物や無数の穴のあいたものもいただいたが、活用するまでには至らなかった。

ある時、少し硬い木材で授業をした事があった。子供にはとても抵抗があった様だ。しかし、みんなよく助け合いが頑張って作品を完成させた。あとで感想を聞いてみると、苦勞して完成したので大変うれしかったとの事であった。硬い木材ただけに、成就感も大きいものがあった様である。木材はあたたかさ、美しさ、加工や接合などの面から教材として優れたものを持っており、今後も教材として積極的に活用していきたい。又、木材としてばかりでなく、樹木として、森林として我々が忘れかけていた自然のたくましさや、優しさを見なおす点でも良い教材となろう。

分科会 12 地域環境を生かした造形教育はどのようにすればよいか。

助言者：吉田 義晴（北見）、前田 豊克（神戸）
 司会者：神田 耕治（旭川）、堀合 隆（松山）
 提言者：辺土名 ヒデ子（沖縄県那覇市立上間小学校）

1. 提案理由

「郷土の格調高い伝統工芸であるびん型のよさを知らせ、それを受けつぎ、守り育てていくという心を養うと共に、郷土文化への誇りをもたせたい。」という意図をもって、教材化して進められてきたびん型教材である。

びん型の特徴と教材内容について児童なりに理解させ、単なる模倣にとどまらないように留意すると共に、児童の自由な発想を大事にしたい。

びん型が郷土の中で生まれ育った背景や先人の偉大さにふれさせると共に、現代っ子の目と心でとらえ、各自のアイデアを積極的な姿勢で表現させるにはどうしたらよいかについて考えてみた。

「かざるもの」としてのびん型作品でもよいが、その発展学習として、個人文集の表紙にし、意欲的な表現活動へもっていきたいと考えた。

2. 提案内容

- (1) 豊かな発想を育てる指導について
 - 資料集め（家庭にあるもの、図書館利用）
 - 図案のスケッチ（見たことをもとにして、想像したこと）
 - 色調
- (2) 子どもが意欲的に活動していくために
 - 学級経営の工夫
 - 根気強く学習する態度を養う
- (3) 技法や手順の指導の工夫
 - 用具の取り扱い
 - 工程、手順を明確にする
- (4) 材料用具の収集と開発、準備について
 - 図工備品として計画的に購入
 - 用具の整備
- (5) 国語教材（作文）と関連した指導
 - 作文指導の充実
- (6) 教師の研修
 - びん型……実技研修
 - 製本の仕方

3. 今後の課題点

- (1) 図案は複雑な形を整理し、単純化や強調して新しい形を構成する段階で、速った児童が見受けられた。
- (2) 豊かな表現をさせるための材料用具やその使い方
- (3) 製本は図書備品（製本用カッター）を借りるので司書の協力が必要である。

分科会 13 子どもたちの、みずみずしい感性をどのように受けとめ、発展させていったらよいか

助言者：橋 場 昌 三（宿 萌）、森 内 富久志（東 京）
 司会者：渡 辺 正 勝（風 連）、伊 藤 暢 紀（札 幌）
 提言者：飯 塚 礼 二（旭川市立末広小学校）

1. 子どもの絵

子どもの絵には見る人の心を和ませてくれる魅力がある。子どもの絵のすばらしさは、興味、関心にうらづけられた集中力、持続力に支えられた自分の心情を画面に定着させていることであろう。描きたいこと言いたいことをズバリと表現する低学年の絵、積極的な子どもらしい考え深さ、細やかさとやさしさが描かれている高学年の絵は、見る人の心をうつであろう。

2. 見る人によって異なる子どもの絵

絵は見る人によって評価に違いがあり、子どもの絵ではそれが一層大きいといわれている。絵を描く子ども、指導する教師、第三者として選ぶについて考えてみたい。

(1) 上手、下手を問題にする子ども

いい絵、よくない絵といった見方はないようであるが、上手か下手かという基準で子どもは絵を見てしまう。本もののように色、形が描けていればより高い評価を受ける。作者のねらいは別に、自分と比べたときの技術のちがいに目が向き、いろいろな角度から学習するが、この見方はあまり変わらない。

(2) 子どもの絵を作品として選り分ける第三者

子どもの絵を見る観点が、芸術的な要素をどれだけ含んでいるかとか、子どもらしい良い絵、悪い絵といった基準で選り分ける第三者的な立場である。これらの基準も人によって違いが大きく、教育的な基準とはなり得ない場合が多い。しかし、この第三者的な評価が定着し、指導者ですら展覧会の評価を自分の評価より高いものと信頼している傾向もある。

(3) 絵を描くことを通して成長を願う教師

子どもに絵を描かせることによって、その成長を願っているわけだから、絵を描くことが人間形成に役立つものであってほしいという点では一致している。子どもが何を描きたかったのかを考え、絵にあらわれている子どもの心情をよみとっていこうというのが指導者の方向である。指導者はある目的に沿って期待をもって指導し、出来あがった作品を見る。人によって絵に対する考えが異なるだけ作品の見方にも違いが出て来る。この違いをどう発展させていけばよいのだろうか。

3. 子どもが絵を描くことで育てること

子どもが絵を描く動機は、絵を描いて遊びたい(描く楽しさ)、何かを絵に描いて知らせたい(伝えたい)、ものを正確に描き写したいといったことでありそれらがかかわり合って作品にあらわれているのである。

子どもの表現しようとする心をたしかめ、それを発展させるために、子どもの作品をどうよみとるかを共通のものにしていきたい。また、そのよみとりが子どもの絵を描く楽しさを一層高めるよりどころになることを願っている。

分科会 13 子どもたちの、みずみずしい感性をどのように受けとめ、発展させていったらよいか

助言者：橋 場 昌 三 (留 萌)、森 内 富久志 (東 京)
 司会者：渡 辺 正 勝 (風 連)、伊 藤 暢 紀 (札 幌)
 提言者：渡 辺 貞 之 (北海道深川市立菊水小学校)

現代の子供達の多くが絵を描くことが嫌いになっているという。そういう現実の中でどのようにして子供達に生き生きとした絵を描かせるのかということは、最も今日的な課題でもある。

絵を描かない或いは描けない子供は「描く気がない。ことが根元的な原因になっている」ということが指摘されている。創造活動でその最大のエネルギーでもあるこの「描く気。がない」ということは、致命的なことであろう。そこで私は、この「描く気。をどのようにしておこされるか」ということを実践研究の指針にしてみた。

●描く気がおきないという要因になっているもの

1. 描く行為がいつもと同じでマンネリ感を持っている。
2. 表現行動が、表現したいことと結びついている意識がない。
3. 表現することが、おもしろくない。

こうした要因は、私達教師が子供に対して表現要求が多すぎたこと、高すぎたことによっておきたのではないだろうかと思う。絵は上手に描くが、絵を描くのは好きじゃないという子が意外に多いのはこのあらわれであろう。例えば、描けないのは、描く技能が欠けているのだから技能を教えることで解決するのではないかという考えがある。確かにできあがった作品は一定のレベルにあるかに見える。しかし何かしら足りない。それは子供のエネルギーである。壊れるようなデリケートな感性である。私は表現技能というものは主体的な創造行為の中で必然的に要求されて高まるものが技能であると思っている。

「先生、ここんとこまっすぐ切るのにすごくゆっくりゆっくりやったよ。そしてたらはら、こんなにまっすぐになったよ。切れるかと思ってドキドキしたよ。そしてたらこんなに長くなったよ」紙工作のにがてだった子が息をつめて、こうしたいという目的にむかって行動し、成功した時の喜びの詩である。この詩の中に創造するとはどういうことなのか、技能とは何なのかということが言いつくされているのではないだろうか。

●実例 「たくさんのお花を画面いっぱい描こう」小学校2年 4時間

みんなを持ちよったたくさんのお花を金魚鉢やびんに投げこんで、その中から自分でかいてみたいと思う花をたくさん描こうという題材である。大きなテーブルいっぱいに雑然とおかれた色とりどりの花は視覚的にもリラックス、エキサイトしてくる。

「ゴチャゴチャになってもいいよ」「筆もパレットもつかわなくていいよ」「手やティッシュをつかってもいいよ」「ゆかがよごれちゃってもいいよ」「となりの人がつくった色をもらってもいいよ」等、今まで「だめ。にしていたことを「いいよ。にした。

できあがった作品は子供のエネルギーがあふれてみるからにダイナミックでありながら、不思議にデリケートな感情も表現されたと思う。

分科会 14 表現のよろこびや確かな造形能力を育てるのには、どうすればよいか

助言者：秋 山 修 世 (函 館)、間 鍋 武 敷 (大 阪)
 司会者：宮 崎 弘 (旭 川)、近 堂 俊 行 (七 飯)
 提言者：大 竹 東 (秋田市立土崎中学校)

1. はじめに

「確かな造形能力で育てるために」

小学校で習得してきた多様な描写力や表現力をもつ生徒にとって、一つの方向にむかって、より確かに描写表現するという事の一つに、対象の中により確かな、より具体的な見方ができる観点を発見し、それを契機に今まで以上の造形表現行動を体験する事もあるのではないかと考える。

無意識的・未分化的な表現活動が、意識的・目的的な表現行動になってくる過程は、知的な面から明らかになってくるようである。描画よりデッサン・工芸に関心のあることから明確である。描画指導において、合理的な図法等の応用から入ることが、知的好奇心のある生徒には効果的であると思われる。

また、知的な発達は観察の力の発達をも意識する。対象を多角的・積極的に観察できる態度を身につければ、対象へ働きかける感覚は鋭くなり、表現内容は豊富となり、表現のよろこび、完成の充実感が増すものと考えられる。

2. 実践と考察

- (1) 題材名「一本のびんを描こう」第1学年(絵画)
 (2) 題材設定の理由

観察とは、主として知覚と集中力の問題であると思われる。知覚は子供の発達に伴い、次第に精度や精度を増してくるものであり、これに強い好奇心に基づく集中力が加わって、観察力が構成されてくると考えられる。

中学1年時になると、児童期における無意識的表現欲求が、より分化した造形欲求となって表れてくる。その最も端的な例は空間表現を意識的に求めてくることではないだろうか。また、物体の量感とか、構造とかに対する関心も表れてくるようである。しかし、この時期の観察は物体の形状を自分から構造的に把握するところまで達していない。比較的簡単な形の器物などから次第に構造的な観察が可能になるように指導すべきと思ひ、中学最初の製作に本題材を設定した。

- (3) 指導内容 …… 別紙プリント

3. 今後の問題点

- (1) 観察画の意義と指導法について

ア この題材で、何をどう見させて、何を明確にしていけばよいか。
 イ 感性を育てるという面で、観察画では具体的に何を考えたらよいか。
 ウ 観察をとおしての感覚的な色彩指導をどうすればよいか。(対象固有の色調にこだわりすぎて、生徒の感情を殺してはいないだろうか。)

- (2) 系統的な観察画の考え方

ア 本題材をどのように発展させたらよいか。
 イ 生徒の内面的要求をどう満たしたらよいか。

- (3) 作品の類似化・画一化の問題

分科会 14 表現のよろこびや確かな造形能力を育てるには、どうすればよいか。

助言者：秋山修世（函館）、間鏡武数（大阪）

司会者：宮崎弘（旭川）、近堂俊行（七飯）

提言者：岡澤邦彦（札幌市立屯田中央中学校）

1. 木版画の指導の目標

木版画は、版づくりにおいて、対象のとらえ方にきびしさが要求されることや、制作の過程が、刷り上がるまで確かめられないという困難さがある。一方彫刻刀で版木を彫る時の感触や、どこを彫りどこをのこすかの選択にともなう緊張感、また、版の形が瞬間に再現される刷りの中に、おもしろさや、完成のよろこびが感じられる題材である。形をとらえる力、材料・用具の特性に気づく力、適した技法で表現する力を高める中で、そのような版画特有のよろこびを、感じさせたい。

2. あらかじめ用意されるべき事柄

版画の経験の少ない生徒には制作の途中では刷り上がりの子想がたちにくい。そのため、下絵づくりにまごついたり、彫りの適確さを欠いたりすることもでてくる。そのため構想に入る前に、次のことが必要であると思われる。

- (1) 参考作品を見せ、さまざまな対象のとらえ方が可能であることに気づかせ作者の心情や、技法についても知らせる。
- (2) 彫刻刀の種類がちがいによる、彫りの感触のちがいや、彫りあとのちがいを刷りあとのちがいを知らせる。

3. 発想、構想、制作において

えのぐをぬり重ねるのと異なり、版木を彫りながら形をつかんでいく作業は、形をとらえる上において、きびしさが要求される。抵抗感のある素材を、どう彫りあげていくかを決める瞬間には緊張感をともなわなくてはならないが、また、適切な使い方によって、自由な表現が可能であるという彫刻刀の特徴も忘れてはならない、生徒はより孤独な状態に自らを置いて、対象と自分が版をとおしてどうかかわっていくかを決定していかなくてはならない。そのためは、

- (1) 下絵づくりに、筆圧の変化に対応できる用意をすべきである。
- (2) 木版画特有のカッチリとした形態や、明暗のコントラストが、予想できる下絵づくりでありたい。また版木にうつした形をもとに、彫りの計画を十分練ったうえで、彫り始めることが大切であり、ひとりごとの感動の中で、計画の変更、修正も加えられながら、版づくりをすすませたい。
- (3) 刷りの持つ、おどろきやたのしさを大切にしながら、刷り上がった一枚の版画の中からも、自己評価がすすめられるように配慮させたい。

4. 評価について

木版画においては、制作過程のつらさが、刷りによって、一度に、よろこびに転ずることが期待されるが、表現のよろこびにひたるのみでなく、各過程の成果を評価し、制作の記録にまとめることが大切であると思われる。また木版画をとおして、生徒がどのように対象とかわっていたかを、それぞれの過程で確認する手だてを持って、指導にあたるのが、重要であると考えられる。美術の授業においては、生徒の生活の他のどんな瞬間よりも、大きな感動と、表現の満足感が期待されなければならない。木版画においても同様である。

分科会 15 発想を重視したデザイン活動をさせるには、どうすればよいか。

助言者：片桐 勉（苫小牧）、山口 亮一（横浜）
 武藤 忠春（東京）
 司会者：川口 裕年（旭川）、奥野 郁男（札幌）
 提言者：吉本 博二（旭川市立神居中学校）

1. はじめに

情報社会と言われ、生徒達をとりまく環境はずいぶん大きく変わってきている。特にテレビや雑誌による情報提供は豊富な知識を与え、数々の商品や、資料が数多く出回っている。この現実から美術科における生徒の実態を探ってみた。自らが削り出し、喜びを味わうことのできない子、制作に計画性、持続性のない子、友から学ぼうとしない子、身の回りの美しさに感動しない子、美術図書や美術・工芸展に関心、興味を示さない子、友達のを盗んで使用し、又平気で貸してやる。自分の物を大切にしない子等である。これらのことを十分把握し、目標、題材、領域等の指導計画を吟味しなければならないと思う。

生徒達は、削りたいのである。制作したいのである。それぞれの領域における表現意欲を喚起させるためには、造形活動を通して、生徒達が自信と感動、生き生きと目を輝かし、歓声を身体全体で表現できる授業の組み立てを教師自らが頭に描いておくということである。従って2時間の授業が時のたつのも忘れて、スムーズに流れることを願いつつ、様々な授業を構築しなければと考えている。

(ア) 教師と生徒の間に意が通じている授業

(イ) 何をやったかがわかる授業

(ウ) 何か新しいものを得たという満足感のある授業 この3点を重視した制作活動の多い授業の設定が必要と思われる。

2. 実践から —レタリングの応用—私のコースターをデザインする

1年のデザイン学習のねらいは、色や形による構成と伝達のためのデザインができることである。今の生徒達は前記した様な課題を持っている反面、素晴らしい適応性を持っている。文字に至っては、形体や色感についてもものすごく敏感で、模倣力も備えている。レタリングの基礎から始めた訳であるが、明朝体ゴシック体の特徴や形体の美しさを、粘り強く取り組み習熟、その発展題材として、会得した文字の形体の美しさを生活にいかしてみようということ自分のイニシャル2文字の構成をさせてみた。

この授業では指導過程を重視し、コースターの機能、目的、条件を基に、それらを満たし目的物を発想させ、制作に挑んだ。多種多様なアイデアが生まれたことからデザイン学習の価値があるといえる。たくさん出されたアイデアを目的に応じて比較検討して、作るもの一つを選択する決断力、次に制作の計画、そして制作、完成させた作品を使用し、更に新しい形の発見や修正を加え、デザインの制作の喜びを味わうことの表現活動を定着させたいと考える。

デザインの活動が単なる技能の習熟の学習だけでなく、苦勞した作品を身近なくらしの中に生かす力を育てていきたい。

指導過程の例



分科会 15 発想を重視したデザイン活動をさせるには、どうすればよいか。

助言者：片 桐 勉 (苫小牧)、山 口 亮 一 (横 浜)
 武 藤 忠 春 (東 京)
 司会者：川 口 裕 平 (旭 川)、奥 野 郁 男 (札 幌)
 提言者：宇 野 義 行 (東京都江戸川区立春江中学校)

1. はじめに

日本には美しい四季がある。季節に応じた色の移り変わり、自然の恩恵は私たち日本人に古来より豊かで感受性にとんだ心を育ませてきた。ところが今日の状況はどうであろうか。都会にはコンクリートのビルが建ち並び、テレビや印刷物からは様々な情報、色彩が送り出され、店頭には四季の区別なくものや色があふれている。この現実生きる私たちは、これらに目をそむける事は不可能であり、あふれるばかりの人工の色やものと数少ない自然の色やものの中に子供の感性を育ておぼならない。ともすれば無機的となりやすい色と形の構成においてデザインの基礎学習を考えると、どうすれば色や形に「美」を感じ感性を育てられるだろうか。そこで今回、身近な季節感を表わす自然物、人工物を取り起し色と形の構成をさせ、伝達のためのデザイン、カレンダーの製作をさせることで考えみたい。

2. ね ら い

- (1) 季節感を表す自然物、人工物を観察し、その中に新しい形や色の美を構成する秩序を発見させる。
- (2) 形の特徴、秩序を生かし単純化による構成と配色をし、伝達のためのデザインとして、カレンダーを製作させる。

3. 内容 (10時間)

- (1) カレンダーの説明
 参考資料、スライド等説明の後、自分の生まれた月の季節感を表わす自然物、人工物をことばであげさせ、それにふさわしい資料をさがす。
- (2) アイディアスケッチ
 季節感を表す資料から自分にふさわしいものを選びスケッチブックに単純化する。さらにそれを構成しておもしろいものを考えさせる。
- (3) 色彩計画
 イメージを正確にするため、色見本 (トータルカラー) を使い季節感を表す配色を考えさせ、図がらと日付けのレイアウトをする。
- (4) イラストボードへの製作
 ポスターカラー使用の注意、筆の使い方等、個別指導をふまえて作品化。
- (5) 鑑 賞

4. 考 察

自然の移り変わりからくる季節感を感じないのか、意識が薄いのか、ありふれたものが出る中、いかに発想までを指導するかが問題となる。又、ただ美しいだけではなく、どれだけおもしろいものができたかも大切だ。色見本の使用は視覚を通して確認させる意味で効果があったと思う。

分科会 16 生き生きと豊かに立体表現をさせるには、どうすればよいか

- 助言者：滝本 章一（札幌）、尾上 治（東京）、
鶴田 善久（名古屋）
司会者：寺原 実（札幌）、島 界二（札幌）
提言者：多田 紘一（札幌市立柏中学校）

1. 彫塑学習のねらいから

彫塑学習のねらい「立体としての美的直感力や想像力を育て、それを率直に表わす能力や態度を育てる」に近づけるために、つぎにあげるような事柄について考えてみた。

イ. 材料や表現方法の面から

彫塑材料として

- 製造材料（粘土、紙粘土、合成粘土、石膏など）
- 彫刻材料（木、石、樹脂系彫刻材、石膏など）
- 構成材料（板材など）

が考えられるが、これらの材料を使って生徒にどのように立体把握させ、イメージ作りから表現へ結びつけていくかを考えなければならない。材料の特性は立体造形上の量感や空間把握のしかたの違いにも関連してくる。

同じ彫塑作品とはいっても、製造のように付けたりとったりしながら作り上げていくものと、塊材を彫って自分のイメージに迫る作業とでは、想像や表現過程での洞察力や技法上の手だて、抵抗感などかなり違った働きがあると言われており、題材とそのねらいを決めていくときに、これらの特性をよく吟味してかかる必要があると思われる。

ロ. 生徒の実態から

授業の中で取り上げる題材として「野菜など身近なものをつくる」「人物の動きを手早くつくる」「头像や手」「動物」「抽象・立体」等々があるが、立体の持つ量感、動勢の比例関係などを生徒に感じ取らせたり、発見させ、表現させていく最良の手段としての題材を選び、材料と技法の吟味を行って、豊かな洞察力や創造力を発揮させたい。そのために、生徒の持っている美的直感や想像の力を生かして制作に結びつかせることができるように、生徒の感性や関心度、技能の準備性などから検討を加えていくことが大切なことと考えている。

ハ. 学習環境（施設設備などの面から）

彫塑教材を扱う場合には、材料処理や作品管理等の問題があり、制作場所をはじめ施設設備の整備活用が学習効果に大きな影響を与えることを考え、十分に検討して整えていかなければならない。

ニ. 題材のめあてや学習の進め方と視点（札幌の実践経過から）

題材のねらいと学習過程での基本的指導事項を明らかにして、生徒の感性や想像力を引き出し、表現能力を高めるための手だてを考える上から、生徒の情意面、認知面、技能面のどこに深くかかわっているのか、また、それをどのような手だてを構じて引き出していったらよいかを、教師の働きかけと生徒の側の変容とを照らし合わせて見取っていこうという取り組みを手がけている。各校の実践を持ちよって検討しあい、その成果をまとめ上げる計画でいる。

分科会 17 素材を生かし、楽しく豊かに制作活動をさせるには、どうすればよいか

助言者：浅利 泰基（上川）、新谷 純 鑽（札幌）

工 藤 裕 功（東京）

司会者：小木 正 勝（旭川）、加藤 五十和（札幌）

提言者：渡 木 弘 志（網路市立桜が丘中学校）

工 芸 「ノッカーをつくろう」

1. 指導のねらい

- ・ノッカーとしての用途を考え、豊かに発想し楽しく使えるものを製作させる。
- ・ノッカーとして動く機構を理解し、計画的な手順や方法によって製作できる態度を育てる
- ・材料の特性を生かし、用具を適正に使用して意欲的に製作させる。

2. 指導の計画

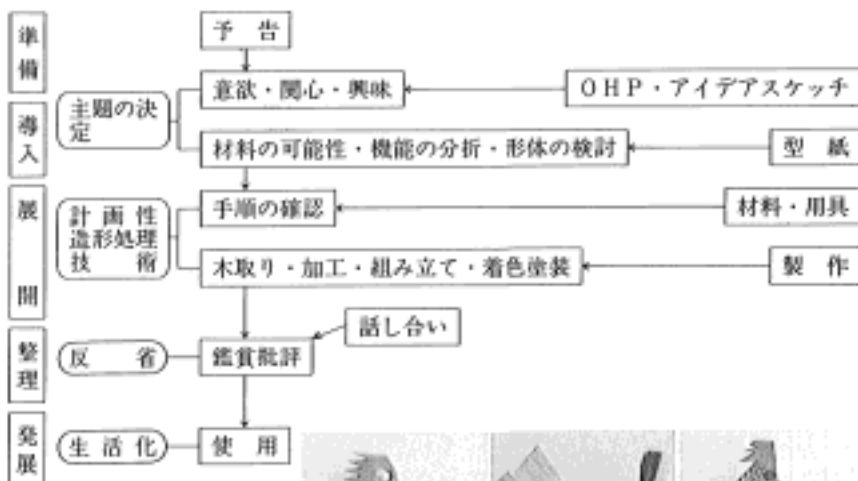
(1) 指導の順序と時間配分

- | | |
|------------------------------|-------|
| ①参考作品や資料をもとにして、ノッカーの機構を理解させる | } 2時間 |
| ②アイデアスケッチで構想を練らせる。 (OHP) | |
| ③画用紙で型紙をつくって試作させる。 | |
| ④計画に従って木取りをさせる。 | } 5時間 |
| ⑤必要な箇所にあけたり、彫刻をして仕上げる。 | |
| ⑥装飾的な効果を考え、フェルト、ビー玉等も使ってみる | |
| ⑦完成作品を鑑賞、批評させる。 | 1時間 |

(2) 材料、工具、資料

かつら板大 (220×84×13) 小 (180×84×13)、木ねじ 4 本、ボルトナット、画用紙八つ切 1 枚、その他(フェルト、ビー玉等)、彫刻刀、サンドペーパー、電動糸のこ盤、電動ドリル、OHP、参考作品や資料

3. 指導の過程



分科会 17 素材を生かし、楽しく豊かに制作活動をさせるには、どうすればよいか

助言者：浅利泰基（上川）、新谷純輔（札幌）

工藤裕功（東京）

司会者：小木正勝（旭川）、加藤五十和（札幌）

提言者：上柿さち子（京都市立大淀中学校）

1. 生徒の実態について考える

- (1) 発想が貧弱（個性的でない）で、大胆さ、創造性に欠ける。
- (2) 学習意欲が低調で、主題追求の持続（力）に欠ける。
- (3) 学習準備や製作にとりかかるのに時間がかかる。

2. 発想を豊かにし、主題をもたせる

- (1) 美術ノート活用の工夫を考える。

美術ノートを持たせることにより、多様なアイデアスケッチを描かせ構想を練らせる。

- (2) 基礎的な事柄を定着させ、それを生かした活動にするための美術ノートの活用を考える。
- (3) 資料作品やアイデアスケッチ、連想により既成概念を除去する。
- (4) 個性的な発想が生まれるように、生徒の会話（話し合い）を大切にする。
- (5) 美術教室の雰囲気づくりに工夫を凝らし、植物や水生動物（魚）を飼育栽培し、スケッチや構想に役立たせる。

3. 用具などを使う貴重な経験を通して他教科では味わえない充実感を得させる。

- (1) 製作に興味を持たせ、製作を通して何かを考えさせる。

例 電動糸のこ、ドリル、ろくろなどを使って不安、恐怖を興味、試みへ高め駆使しようとする欲求を培う。

七宝焼は焼けるまでの楽しみと焼けた時の感動が心に深く残る

- (2) ビデオ、映画、スライドなどあらゆる機器

4. 地域の特性を生かした授業内容の構成

身近に京都競馬場があり、馬を容易に観察できるという環境を活用して馬の実物をよく見て生き生きと描かせ、馬の資料を集め工芸へ発展させる。

1 年	2 年	3 年
馬の頭部、土鈴 レリーフ（陶板） チーズカッター	馬の全身、はりこ 馬の形を入れた入れ物 レターラック	七宝 共同で植木鉢

生徒に身近なところにも美しさがあることを気付かせ、美術と自分とのかかわりについて考え美術の表現に興味や意欲をもたせると考える。

工芸学習を通してすべての生徒にそれぞれがすばらしい能力を持っているんだということに気付かせ、やる気を出させ、誰にも負けずに私にもやれるんだという自信を持たせることが、生徒の美的直観力や造形感覚を高めると考える。

分科会 18 主体的に活動する子どもを育てる指導計画はどうすればよいか

助言者：三 谷 哲 司（札幌）、出 水 操（東京）

司会者：本 間 篤（旭川）、荒 谷 博 文（札幌）

提言者：村 谷 利 一（札幌市立北栄中学校）

1. 札幌市の研究

札幌市の中学校美術部会では、研究大主題「表現のよろこびを味わわせる授業の創造」を昭和54年度に設定した。さらに昭和56年度からは研究小主題を「すじ道のわかる授業の実践」として現在研究にとりこんでおり、今年度はこの研究小主題のまとめの年度である。研究の進め方は、全市82校を3ブロックに分け、絵画、彫塑、デザイン、工芸の4領域をとりあげ、それぞれ分担している。研究は授業実践表A表、B表（資料2を参照）を作成し、公開授業と作品によって話し合い、進めている。

2. 年間指導計画

年間指導計画は札幌市中学校教育課程年間指導計画の基底があり、全市の中学校でこの基底を基本に各学校の実状に合わせて指導計画が作成され授業を進めている。指導計画作成にあたっては次の7点に特に留意し作成されている。

- (1) 創造的な喜びを深く味わわせることに重点を置き指導内容を精選する。
- (2) 小学校との一貫性に留意し、指導内容相互の有機的な関連を図り、より総合的な観点から題材を構成する。
- (3) 心象的な表現と適応的な表現、平面的な表現と立体的な表現の扱いに極端な偏りが生じないようにする。
- (4) 表現と鑑賞は表裏一体の関係にあるものとおさえる。
- (5) 第3学年における表現題材は、第1学年及び第2学年での履修内容を考慮して、絵画及び工芸に力点を置くことにする。
- (6) 内容が高度なもの、広範囲にすぎる教材は扱わないように留意し、できるだけ地域の素材や、生活に生きる教材、身近な主題を扱うようにする。
- (7) 教科書との関連を積極的に図る。（資料1を参照）

3. 研究テーマ「すじ道のわかる授業の実践」のとりくみ

このテーマは「表現のよろこびのある授業」を教師と生徒の両面からとらえようとするものである。今年度研究の記録は授業実践表A表・B表にまとめ、指導事例集の作成をめざしてとりこんでいる。

- | | |
|-----------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 教師 | <ul style="list-style-type: none"> — 基本的指導事項の吟味。（指導の手だてや工夫を見直していく） — 学習活動のあり方と流れを見極める。 — 年間指導計画。題材の系統性、発展性。生徒、地域の実態把握。 |
| 生徒 | <ul style="list-style-type: none"> — 指導と内容の基本事項がわかる。 — 学習活動の具体的な事項がわかる。（つかめる。できる。のばせる。） |

視点 基本的指導事項を指導する上での視点（窓口）を次の3点とした。

- ① 情意（心）—— 感受、意欲、態度
 - ② 認知（頭）—— 理解、構想
 - ③ 技能（手）—— 表現、使用
- （資料3により説明）

分科会 18 主体的に活動する子どもを育てる指導計画はどうすればよいか

助言者：三 谷 哲 司（札幌）、出 水 操（東京）
 司会者：本 間 篤（旭川）、荒 谷 博 文（札幌）
 提言者：名 川 正 彦（宮城県仙台市立折立中学校）

1. テーマについて

現代の子ども達をとりまく様々な社会現象が、子ども達の人格形成にいろいろな形で大きな影響をおよぼしている。青少年の非行、暴力事件などが社会問題としてマスコミをにぎわしているのもその一例であろう。このような中において、情意面の形成とその指導の重要性が強く叫ばれ、その実践が強く要請されている。それだけに、私達は、情意形成に深くかかわっている美術教育の教科としての位置づけと性格の見直しの中で、達成目標の明確化に対するしっかりした認識を持つ必要がある。

美術教育のねらいを端的に言うならば、表現及び鑑賞の能力をのばし、造形的な創造活動の喜びを味わわせながら、美術を愛好する心情を育て、体験的に美意識の基盤や創造的態度を培うところにある。私達は、この美術教育のねらいを確認し、その基本は「これだけはつけなければならない能力」という形で明確に学習目標を設定し、その達成を保障することであると考えた。

さらに、「造形活動」を「自分の様々な思いを具体的形象として実現する活動」ととらえ、「美術教育」とは「子どもと教師の人間のふれあいを基盤とした様々な造形活動の過程で豊かに自分の思いを育て、表現の可能性を探りながら具体的形象を実現していくという創造的営みについての教育」と考えた。

以上のような観点から、「質の高い造形活動」こそが「子ども一人一人の確かな物の見方、考え方、生き方を育てる活動」と考え——表現力をはたす確かな造形活動をめざして——というテーマを設定した。これは、指導と評価の一体化という角度から、「的確な目標分析と適切な指導計画に基づき、認知技能の面については達成目標、情意の面については方向目標を明確に設定した形成的評価に裏づけられた造形活動」をめざそうとするものである。

2. 実践の概要

美術科が豊かな人間性の育成にどのような役割を果たすのかを追求するためには、まず、教科の本質をとらえる角度や高い教科性を指向しながら学習目標の細分化、明確化を図るとともに、学習指導要領が示した基礎・基本事項を指導計画にきびしく構成、配列し、系統化を図る必要がある。その基盤となる指導すべき要素を的確に押さえ、精選し、マトリックス化することによって、形成的評価に対応する形成的目標の設定が具体化されると考える。私達は、これを指導計画作成の手立てとすべく、次のような手順で研究に取り組んできた。

- (1) 学習指導要領の示す基礎・基本事項の明確化
- (2) 三年間を見通した指導計画への基礎・基本事項の系統的な構成、配列
- (3) 題材毎の目標の分析
- (4) 題材毎の目標の分析をもとにした指導過程における各段階の指導すべき要素の明確化
- (5) 形成的評価に対応する形成的目標の設定

分科会 19 地域環境を生かした造形教育は、どうすればよいか

助言者：池 本 良 三 (苫小牧)、水 口 汎 (愛 媛)

司会者：氏 本 利 光 (旭 川)、石 岡 博 昭 (札 幌)

提言者：佐 藤 公 毅 (苫小牧市立明倫中学校)

1. はじめに

造形教育は人間の成長・発達を助ける人間形成の教育として重要な位置と役割を担っているといえる。子どもの生きる力をどのように育ててやればよいのか、地域、子どもの実態などの捉えとそこから考えられる造形教育の基本的考えについて幾つかを述べたい。

2. 地域そして子どもたちは

苫小牧市は掘込み港のある15万人の街である。樽前山と太平洋の間の原野に忽然と大工業地帯が……。オイルショック以後、その計画も変更せざるを得なくなってきた。本校学区は市の職住分離政策で生れた住宅団地である。持ち家と公住に分けることができるがどちらも経済理由から多くの母親がパート、仕事についている。子どもたちの部活動参加率が高いが、放課後から夕食まで面倒をみているという感もある。このように地域環境は良いとはいえないが親の教育に対する関心は高い方であろう。授業を通して子どもの特性をみていくと、用具・材料が家庭にない。たとえば金づち、ペンチがない。自然物スケッチの課題で冷蔵庫にある野菜類に限られる。版画の家族のスケッチで父親がソファで横になっているなど、生活経験が狭い。また、作品が計画的に製作できない。自分のことができない。自立性のないロボットのような子どもが多い(学校教育全体の責任か)。さらに作品が平均化している。義務的に製作する。さらに深くということが少ないなど何か変だというのが本校三年目の感想である。

3. 造形教育の基本的考え方の一編

- (1) 教材・教具、施設・設備の充実。材料、用具の準備を子ども(家庭に期待することはできない。物質的豊さはまぼろし)。教科の基礎・基本をおさえ、すべての子どもに製作の出発は同じにしてやりたい。
- (2) 子どもは失敗を経験していない。失敗を許さない環境。造形教育の中で、もっと試行錯誤の許される場面が題材、年間計画などの中でもっと必要ではないか。失敗の中から多くを学ぶはずだ。
- (3) 指導計画の中で一年では自分の周りから題材を選び絵画、彫塑表現を楽しむ、二年で目的、ねらいをもったデザイン、工芸表現で計画性、社会性を育て、三年で自分を大切に(自己表現)、主体的個別化をめざしたい。
- (4) 生活経験の貧しい子どもたちにどのようにそれを豊かにし、興味・関心を持たせ感性を高めていくかは造形教育に止まらず、地域、社会へ指導者がどのように関わっているか生き方そのものが問われる。
- (5) 造形教育は個にかえる。ひとりひとりの良さを認め合う雰囲気づくりと指導者の良さを見つけ出す技能が必要になろう。

私たち造形教育に携わるものは子どもたちに今、生きる力をどのように付けてやればよいのか、子どもの変化に気付き、21世紀に生きる力をどのように創造していかなければならないかを自戒する。

分科会 19 地域環境を生かした造形教育は、どうすればよいか

助言者：池 本 良 三（苫小牧）、水 口 汎（愛媛）

司会者：氏 本 利 光（旭川）、石 岡 博 昭（札幌）

提言者：永 関 和 雄（東京都新宿区立落合中学校）

1. 都会における地域性

「新宿」の名は、東京に住む人のみならず、日本中の人々が知っていると言っても過言ではない。新宿は一般的には「副都心」と呼ばれているが、ここに住む人々は、新宿を「新都心」と呼んでいる。数年後の都庁の新宿移転を前に、新宿は更に大きく、新しく変わろうとしている。

地域環境を生かした造形活動というと、私たちは、その地方の山から掘り出した粘土で焼物を作ったり、民話を題材にした木版画を制作したりすることを思い出しがちである。たしか新宿にもこのような題材が皆無ではない。しかし、それを指して「新宿の風土に根ざした造形活動」と言うのは適切ではないと思う。自然を生かした素材など何もないという点こそ、大都会の地域性なのである。

2. 「新宿」をテーマとした表現活動

今年、新宿は世界に向けて平和都市の宣言をした。そこで、この機会に身近な平和の意味を考え、新宿と平和を結びつけたポスターを制作させることにした。新宿は変化に豊んだ街である。近代的な高層ビル群。デパートや専門店がひしめきあうメインストリート。高級な大邸宅の並ぶ住宅街。迎賓館や新宿御苑。こうした中から、自分の目でもう一度新宿をとらえ直してみることが、地域環境を生かした造形教育につながると思った。

3. 地の利を生かした鑑賞活動

新宿の特長の一つに、交通の便が極めて良い点がある。これは展覧会の鑑賞にはとても有利である。上野（博物館、西洋美術館、都美術館など）へも、銀座へも、竹橋（近代美術館）へも電車一本で30分以内に行ける便利さである。そのうえ区内のデパートでも美術館を持っている所が多く、伊勢丹美術館、小田急グランドギャラリーなど常に話題になりそうな展覧会を開催している。

生涯教育、生涯学習という視点で美術を考えてみると、表現活動よりも鑑賞活動の機会が多いように思う。そこで社会人になってからも美術を愛好し、すすんで鑑賞活動を楽しむような人に育てるためには、中学生の時期に鑑賞活動に慣れ、その楽しみを知る、基本的な方向づけをしておくことが大切である。

本校では、生徒に見せたいような展覧会は積極的に紹介し、夏休みの宿題も展覧会の鑑賞だけにしぼっている。

4. 家庭（地域）とのコミュニケーション

学校の授業の様子や考え方を家庭に知らせ、理解と協力を求めることをねらいとして、「from 美術室」という名前の美術室だよりを発行している。この地域は、父母の中にも美術を愛好する人が多く、「from 美術室」はよく読まれているようである。昨年の夏休みに行った親と子の陶芸教室には、参加希望者が多く、会場の関係で一部の参加を断わった程で、今年は親だけでやりたいという声も出ている。地域の中の学校という観点からも好ましいことである。

これからも地域とのコミュニケーションを大切にしていきたい

分科会 20 子どもたちのみずみずしい感性をどのように受けとめ、発展させていくとよいか

助言者：小林 暁（札幌）、滝沢 秀雄（東京）
須藤 周彦（千葉）
司会者：一ノ戸 義徳（旭川）、後藤 昌治（留萌）
提言者：大口 優（旭川市立永山中学校）

1. はじめに

現在、児童生徒をとりまく問題として、自分自身に対する厳しさや責任感、根気強さ、友だちに対する思いやりや優しさなどの欠落による、非行やいじめ、登校拒否など、社会的な問題として取り上げられている現実があります。しかし、子どもたちが立派な人として成長していく基盤となるこれらの要素は、とりもなおさず、図工美術教育のねらいでもあるわけです。それだけに、その教育にたずさわる私たち教師の役割は大きいと言わざるをえません。

幸い、私たちの先輩諸氏は、関係機関の協力と援助を得てすばらしい実践を始めてくれました。作品展という事業をベースに、子どもたちの作品について語り、指導の環を広げていこうという取り組みです。

2. 実践のあゆみ

昭和38年に版画だけの展覧会として産声をあげた作品展も、毎年、旭川の小中学生が授業の中で取りこんだ作品を一堂に会して、昨年度で24回目を迎えました。また、一足遅れてスタートした児童生徒絵画展も、同様に22回目を数えるに至りました。回を重ねるごとに応募作品の数も増え、質ともに高まりを見せていますが、それにも増して子どもたちの目の確かさ、情感の豊かさに圧倒させられます。そして、そこから生み出される作品の数々には、審査に当られる先生方の良き研修・研究の場としても多くの成果を得ております。更に展覧会場での「作品を語る会」の実施や、授賞作品を一カ所に保管し、希望により学校に貸し出す等の方策で、直接指導に役立つ資料としても活用されております。この版画展が20回を迎えたのを記念して編集された「版画集」に、翌年、絵画展の作品も加えて収録し、今春第5集の発刊を終えたところです。これは単なる記録にとどめるだけでなく、各学校図書館への購入をはたらきかけ、指導資料、鑑賞資料としても広く利用されております。

3. 成果と課題

これらの取り組みが、子どもたちの励みになっているばかりでなく、子どもたちの作品そのものにはお返っていったことは確かです。表現しようとするのがらと自分がどうかかわりあっているか「主題」が明確な作品が多くなってきたこと、更に各学年での発達段階をおさえたい指導がなされているため、内容や技法にばらつきがなくなってきたということです。特に前者は、旭川市の図工美術のねらう大きなテーマであり、日常の学習活動における先生方のたゆまざる研修と指導の表れであると考えます。一応定着しつつある主題のとらえ方や表現技法は、取り組みの成果としておさえつつも、それに追従することなく、新たな実践や挑戦を試みていかなければ前進もひろがりも見られないものと考えているところです。

分科会 20 子どもたちのみずみずしい感性をどのように受けとめ、発展させていくとよいか

助言者：小林 暁（札幌）、滝沢 秀雄（東京）
須藤 周彦（千葉）
司会者：一ノ戸 義徳（旭川）、後藤 昌治（留萌）
提言者：高谷 幹郎（青森市立甲田中学校）

中学生の絵のスタイルについて

1. 絵の分類

中学生の絵にはいろいろな表現タイプがある。それを一般的な傾向、絵画様式、心理的・性格的傾向、技法上からのタイプなどから分類して見ると以下のようになる。（授業で出来た作品や宿題の作品から調べた本校生徒の作品から）

(1) 一般的傾向からの分類

- (ア)描写型……写実的で描写力、デッサン力が目につく。
- (イ)心象型……明暗、色彩表現が目立ち、ディフォルメされた象徴的形が目立つ
- (ウ)デザイン的、装飾的型……描写の仕方が図式的で様式化されたり、パターン化したりして描くくせがあり、文字や記号などを好んで描く傾向もある。
- (エ)児童画型……いわゆる子供らしい線がきを主体にした素朴、幼稚な表現

(2) 絵画様式からの分類

純絵画的表現型、構成型、細密描写型、抽象表現型、シュールレアリズム型、野獣派的表現型

(3) 技法上からの分類

厚ぬり型（油絵、ガッシュと似ている。何回も重ねてぬる。又は、はぎとる。）
薄ぬり型（透明水彩画法、半透明、点描画風、淡彩画風（俳画）、水墨画風）

※ローウエンフェルドの分類（1960年代）A視覚型 B触覚型、C、A Bの中間型又は混在型

2. 絵の分類から考えられること

- 1 中学生は一人一人が微妙に違った表現タイプを持っていること。
- 2 画面の中でも表現の方法を変えて描いていること。
- 3 型と型との中間タイプが多いこと。
- 4 生徒自身が自分のスタイルに気付いていないということ、又は意識化して描いていないこと。
- 5 水彩画だけでは生徒表現タイプを正確につかめないということ。
- 6 中学一年から二、三年と成長するスタイルは個別的で、発展もばらばらで突発的に変化することもあるということ。

3. 今後の研究（又は考えるべきこと）授業の改善として役立つために

- 1 造形要素の指導とタイプの関係
 - 2 全体と部分、変化と統一、静と動、などの造形思考とタイプの関係
 - 3 主題決定、構図、デッサン、着色、修正、完成、鑑賞の授業過程で、子供のタイプが、どの段階で一番はっきりわかるか。又その際の指導はどうあればよいのか。
 - 4 作品の評価と生徒の表現タイプの関係、又は授業目標と、タイプの関係。
- ◎ 生徒の表現様式は地域性や、与える素材によって変化するので、図式的・固定的に考えず時代性や社会性など考え授業に役立てるようにしたい。

分科会 21 青年期の造形教育において発想をひろげ創造性を高める取りくみは、
どうすればよいか

助言者：大石吉友（奈良）

司会者：川口幸和（旭川）、林弘典（北見）

提言者：佐野千尋（北海道札幌真栄高等学校）

1. はじめに

これまでの授業を通して接してきた数多くの生徒たちから、彼等もまた、生きて動いている時代と共に変わりつつあることを強く感ずる。一端をあげるならば・聞く、読むこと（つまり言葉）によって考え、理解する、あるいは概念やイメージを組立てることが不得手である……静かであるが聞いていない。
・手や体を働かせて取りくむ学習には実に熱中する……私語ひとつ聞こえない
私自身は中学校からの転出であり、生徒たちの中には中学校以来の顔なじみも多い。高校での経験はまったく浅く、試行錯誤の毎日ではあるが、反面、彼等がどのような学習体験を経てきているか、また、どの程度の力を備えて入って来ているのかがよくわかるので、それが実践上の大きな寄りどころとなっている。また、本校の場合、選択している生徒は、美術が好きだからという者が大部分であり、意欲も持っている。

2. 「描くこと」「作ること」に熱中させたい

生徒自らが自己と深く関り、自己を発見し、実現し変革していくこと、教育の原点とも言えるこのことを「描く」「作る」ことを通して徹底させ得るのが美術科であり、そうあるべきものと考えている。

そこでの教師の役割は、彼等の中からも何とかしてその意欲を掻きだし、そのことに熱中させること、そういう場面に引き入れてやることではなからうか。

そのような授業実践をしたいものと願いながら、美術Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを計画し、実践している。（計画表は別紙で見てください）

題材の選択や授業の構成に当っては、次のような事項をおさえてみた。

- (1) 生徒たちの生活観につながるものがあり、興味や関心を呼び起こす題材
- (2) 題材、技法、用具、材料などの観点から、生徒にとって未経験な要素を選択し組み入れること。
- (3) 制作上の力点の置きどころ、あるいは手掛りを明確に提示してやること。
- (4) 生徒の実態にそぐわない高度な題材や技法はさけるべきであり、むしろ平易なものであっても、その発想の展開、構想の深まり、制作あるいはそれに伴う技法上のさまざまな取りくみの中での内容や質を高める配慮をすること。
- (5) 教師自身も最も身近にいる造形する人間としての姿や態度を示すこと。

また、発想や制作意欲につなげるべく、試みとして「遊び」の要素を組み入れてもいる。

入学後初めての授業での「迷路に挑戦」、木彫キューブの制作で提示する「ルービックキューブ」「組み木玩具」「アニマル全員集会（はめ絵）」、版画による構想表現で発想の転換を試みさせる「切り抜きコラージュ」等がそれである。生徒たちは友と比べあい、競いあいながら、我知らず熱中し、その中で主題の把握、形の洗練、調和、統一、単純化といった、造形上の高度な思考や作業に取りくんでいる。（と教師は自負しているのだが）

資料、作品等持参いたしました。よろしく御批判、御教示下さい。

分科会 21 青年期の造形教育において発想をひろげ創造性を高める取りくみは、どうすればよいか

助言者：大石吉友(奈良)

司会者：川口幸和(旭川)、林弘典(北見)

提言者：大江秀博(東京都立東大和高等学校)

青年の自立を見守るべき高校教育における現状には、幾多の問題を抱え込んでいる。都市文明とか管理社会といわれる現代、青年の創造力が弱くなったといわれるようになって久しい。特に受験偏差値による生徒の輪切りの弊害(東京都美大工研では昨年度紀要で特集として取上げた。)が重なり、教育困難校といわれる学校では授業の成立以前の問題が山積みし、教師を疲労させている。このような中でも美術教師からいろいろな授業の工夫が報告されて、一定の成果を上げていると思われる。しかしさらに積極的に美術教育を深める必要があるならば、基本理念を明確にし、具体的実践を積極的、持続的に取組み、結果を吟味し、授業内容を掘り下げねばならない。

私のこの10年のささやかな実践は、「試み」が深まるまでとてもいかなかった。例えば「多様性について考え対応する」という目標で、絵画、陶芸、木彫、版画、ポスター等、コースを選んで同時進行させたり、美術館、図書館で多くの作品に触れる機会を設けたり、絵画も油彩とにかわ絵(日本画)、水彩と選択させたりした。一長一短の結果をさらに深めることの難しさは、私の努力と力量不足がまずあげられるが、効果を確実に掴むことは時間が必要であるというのも実感である。実践の研究と同時に美術教師の芸術観が問われるのはいうまでもない。戦中に生まれ戦後民主主義で育った私にとって、「芸術とは何か」、社会や個人にとって何の意味があるのかを問い直すことは避けられなかったし、青年教育の中でも、ダダ、シュール、戦後アメリカ美術についても対応が必要であった。しかし、山積みする問題の量が多すぎて掘り下げられたいとは思えない。

そして、現状の諸問題の整理と解決の難しさで失速しそうな自分を救ってくれたのが「自然の美しさ」である。そのようなわけで「自然を大切にし、学ぶ」ということを基本に置きたいと思う。表現へのアプローチはいろいろな角度があって当然で、その座標は無限であるが、自然の美しさに心を開き、愛し、学ぶことこそ「生きる」泉であり、創造の泉であると思う。具体例としては、写生に戸外に出る(昼休みと連続させ弁当持ち)10~12時間の中で少々遊んでもよい。もっといえ安全ならば池に落ちてよい。要は生活体験が創造力のもとであり、このことと表現技術の修得を統一させることである。又自然破壊、公害についても時間を設定する。クラブ活動ではここ三年程前から「自然を大切にする」という基本ラインで風景写生(美術部)、地域の林や野草の観察(園芸部)、地域の広葉樹を使って木工制作(美術、園芸部)周辺の池や川の淡水魚の飼育、観察(生物部)を始めているが、これらを連携させて初歩的な域から一歩おし進めたい。自然と直接触れる機会を多く持ち、その豊かさや厳しさを体得させ(自然の無謀さはまだまだ現代科学や文化の比ではない)、人間を深めることこそ大切な生き方だと思うし、美しい風土を造形化することを私の美術教育の出発点としたい。

分科会 22 教員養成と教科教育の充実について

助言者：熊本高工（新潟）

司会者：上条雄也（旭川）

提言者：川村善之（京都芸術大学）

提 言

1. 大学における教員養成のかかえる当面の諸問題について。
 - a. 入学試験……62年度国立大学協会のプランについて
 - b. カリキュラム……特に小学校教員養成課程における不十分な対応について
 - c. 今次教育改革への対応について
 - d. 厳しい就職事情について
2. 教科教育の充実について
 - a. 大学院の実情
 - b. 理論的研究の動向
 - c. 研究の国際交流について……INSEA
 - d. 実践面の研究について
3. 大学部会と一体である全美教（全国美術教育教員養成協議会）の活動について
4. 今後の問題点
 - a. 教員養成系大学の充実
 - b. 美術教師の研修
 - c. 教員養成に関する現場からの批判、学生の体験不足、教育実習の不徹底など

全国造形教育研究大会のあゆみ

回数	月日	会場	大会主題
1	23, 10	一宮市	図画工作教育の根本理念の討議と解明
2	24, 10	京都市	図画工作教育振興の具体案如何の協議
3	25, 9	広島市	図画工作における評価の実際
4	26, 10	福岡市	鑑賞教育、全国児童図画作品展
5	27, 10	金沢市	生活と美術、全国児童生徒図画工作・作品展
6	28, 11	大阪市	指導要領の検討
7	29, 8	仙台市	指導要領ならびに指導内容の検討
8	30, 11	東京都	現下の図画工作教育を阻むものは何か、改善策
9	31, 8	札幌市	造形教育において、つくりだす力を養うにはどうすればよいか
10	32, 10	松山市	現代日本の図画工作教育の反省と今後の方向
11	33, 10	長野市	図画工作科の本質を再検討し、今後の対策をたてる
12	34, 10	神戸市	図画教育の実情を明らかにし、その新しい建設へ
13	35, 8	神奈川県	生きる喜びの基をつくり出す造形教育
14	36, 11	別府市	いきいきとした生活をつくり出す造形教育
15	37, 10	富山市	人間づくりの造形教育を確立するために
16	38, 8	東京都	科学と美術教育、伝統と美術教育、原理と方法
17	39, 11	宇都宮市	造形教育の実践をとおして、豊かな個性を育てる
18	40, 8	東京都	第17回国際美術教育会議東京大会の内容に包含されておこなわれた
19	41, 10	盛岡市	たくましい創造力を育てる造形教育の実践
20	42, 10	新潟市	人間形成をめざす造形教育の現実的課題と解決策
21	43, 8	高知市	造形教育の今日的課題を究明し、ゆたかな感性とたくましい表現力を育てよう
22	44, 8	那覇市	造形教育を風土の中でどのようにいかにするか
23	45, 10	秋田市	ほんとうの美しさをつくり出す授業をもとめて
24	46, 10	静岡市	たくましい創造力を育てる造形教育
25	47, 11	東京都	未来を指向する美術教育は何か
26	48, 10	京都市	わが国の造形教育の今日的課題は何か
27	49, 10	和歌山市	子どもと共にあゆむ造形—ゆたかな発想をもとめて—
28	50, 10	山形市	ゆたかな心情とたくましい創造力を育てる造形教育
29	51, 6	東京都	緊迫した教育課程改訂にどう対処するか
30	52, 7	札幌市	みずみずしい中身でしなやかな子どもを育てる造形実践
31	53, 10	埼玉県	造形教育の本質にせまる実践はどうあるべきか
32	54, 10	仙台市	豊かな創造力を育てる造形活動を求めて
33	55, 7	愛知県	自らつくり出す喜びを育てる造形教育
34	56, 6	長岡市	生きているあかしの表現
35	57, 11	佐賀県	創り出すよろこびを求めて—日々の実践の中で、今日的課題を探る—
36	58, 11	東京都	独自性を見なおす—国際的視野に立った発展する美術教育の今日的課題—
37	59, 10	長野県	心おどらせてとりくむ造形
38	60, 10	奈良県	明日に生きる創造力の開発をめざして
39	61, 8	旭川市	子どもの心をゆり動かす造形教育—つくる心のひろがりと深まりを求めて—

全国造形教育連盟規約

1. (名称) 本連盟は、全国造形教育連盟と称する。
2. (目的) 本連盟は、全国造形教育の振興をはかる。
3. (事業) 本連盟は、上の目的を達成するために次の事業を行う。
 - イ 各加盟団体及び各学校種別部会間の研究の交流、その連絡を行う。
 - ロ 毎年1回大会を開き、研究ならびに必要な決議を行う。
 - ハ 目的を同じくする他の国際的機関および国内的機関団体等との研究の交換、その他の連絡を行う。
 - ニ その他本連盟の目的達成に必要な事業を推進する。
4. (組織) 本連盟は、各都道府県の造形教育をもって組織する。
5. (機関) 本連盟に次の機関をおく。
 - イ 決議機関として代議員会
 - ロ 執行機関として本部役員会
6. (代議員会) 代議員会は本部役員並びに代議員を以て構成し、毎年1回委員長召集により大会会期中に行う。代議員は各都道府県の代表5名とする。
7. (本部役員会) 本部役員会は委員長1名、副委員長2名、事務局長1名、学校種別部長各1名を以て構成し、必要に応じて委員長が召集する。
8. (役員の仕事) 委員長は本連盟を代表し会務を執行する。副委員長は委員長を補佐する。各部長は学校種別に必要な事業を推進する。監査委員は2名とし、会計の監査にあたる。
9. (役員の出任任期) 委員長、副委員長、監査委員は代議員の互選により選出し、任期は2ヶ年とする。
10. (事務局) 委員長のもとに事務局をおく。事務局の所在地は東京とし、その規定は別に定める。
11. (経費) 本連盟の経費は、加入団体の負担金ならびに事業収入、その他寄付金をもってまかなう。大会会費はその都度決定し参加者の負担とする。部会の経費は必要に応じ、別に徴収することができる。
12. (規約の発効) この規約は昭和49年10月30日より発効する。

＜申し合わせ事項＞

 1. 各都道府県団体を代表する代議員の5名は原則として、保育園、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学、指導主事、それぞれから選出し、毎年5月末日までに連盟本部に連絡する。代議員は単なる代議員会構成員であるだけでなく、連盟本部を通じて全国諸団体との日常的な研究、交流、運動等の情報交換を行う。
 2. 当分の間、都道府県の実情によっては、当該都道府県団体の希望があれば、県内地域、あるいは学校種別団体の全造連への直接加盟を認める。この場合は加盟団体毎に負担金を納入し、代議員5名を選出する。
 3. 加盟団体の負担金は、年額1都道府県5,000円(1都道府県内に2以上の加盟団体をつくるときは1団体3,000円)とする。

北海道造形教育研究大会のあゆみ

- ・第1回(札幌) 情操教育の一環として本道図工教育の進展をはかるため。
- ・第2回(札幌) 美術教育の新思潮である創造主義美術教育の諸問題について。
- ・第3回(旭川) 美術教育の指導とは何か。
- ・第4回(函館) 図画工作教育実践上の諸問題について。
- ・第5回(釧路) 図画工作教育における学習指導上の問題点の解明。
- ・第6回(札幌) 造形教育について、つくり出す力を養うにはどうしたらよいか。
- ・第7回(室蘭) のぞましい造形教育における具体的諸問題について。
- ・第8回(小樽) 図画工作学習によって児童生徒の人間性がどのように培われるか。
- ・第9回(帯広) 新段階における造形教育のあり方。
- ・第10回(網走) 本道における造形教育の実践を通して今後のあり方を見よう。
- ・第11回(滝川) 子どもたちの芸術性を育てるために私たちは何を与え何をすべきか。
- ・第12回(名寄) 子どもが生活を見つめて造形的に高まっていくために私たちはどうしたらよいか。
- ・第13回(余市) 子どもが生活を見つめて造形的に高まっていくために私たちはどうしたらよいか。
- ・第14回(札幌) 子どもの造形能力とは何か。
- ・第15回(稚内) 子どもの造形能力とは何か。
- ・第16回(室蘭) 子どもの造形能力とは何か。
- ・第17回(函館) 指導の構築を具体化する。
- ・第18回(苫小牧) 指導の構築を具体化する。
- ・第19回(札幌) 造形能力は、どのような指導によって育てられるか。
- ・第20回(旭川) ゆたかに生きる子どもの造形能力をどう育てるか。
- ・第21回(札幌) 造形能力は、どのような指導によって育てられるか。
- ・第22回(帯広) 未来に生きる子どもの造形教育(生活に根ざした造形表現をどう高めるか。)
- ・第23回(室蘭) 未来に生きる子どもの造形教育(たしかな表現力をどのように育てるか。)
- ・第24回(美幌) 未来に生きる子どもの造形教育(ひとりひとりの子どもの表現力をどう高めるか。)
- ・第25回(江別) 未来に生きる子どもの造形教育(自ら創り出す力をどう育てるか。)
- ・第26回(岩見沢) 未来に生きる子どもの造形教育(すべての子どもの造形のよこびを。)
- ・第27回(札幌) (第30回全国造形教育研究大会とかねる。)みずみずしい中味でしなやかな子どもを育てる造形実践。
- ・第28回(函館) みずみずしい中味でしなやかな子どもを育てる造形実践(すべての子どもが生き生きととりくむ造形学習。)
- ・第29回(旭川) 生き生きとしたゆとりのある子どもを育てる図工美術教育のあり方。
- ・第30回(苫小牧) ひろがりと深まりの造形教育を求めて。
- ・第31回(釧路) 創り出す心をよびおこす造形教育。
- ・第32回(室蘭) 見る、知る、感ずるそして、創りあげる喜びを。
- ・第33回(留萌) 生活とふれ合い、創る心のひろがりを求める造形活動。
- ・第34回(札幌) 知恵とエネルギーをわきたたせる造形活動(わき立つ発想・たしかな表現・つくり出す喜び)
- ・第35回(函館) 知恵とエネルギーをわきたたせる造形活動(心をこめてつくり出す子どもを育てる)
- ・第36回(旭川) (第39回全国造形教育研究大会とかねる。)子どもの心をゆり動かす造形教育(つくる心のひろがりと深まりを求めて)

北海道造形教育連盟規約

1. 名称と目的

本連盟は、北海道造形教育連盟といい、本道造形教育の振興をはかるをもって目的とする。

2. 事業

本連盟は、目的を達成するためつぎの事業を行う。

1. 研究会・講演会・展示会等の開催及び後援
2. 造形教育に関する教科書・教材・教育等の研究
3. 機関誌「北海道造形教育」の刊行
4. 他の造形教育団体との連絡提携
5. その他造形教育振興上必要な事項

3. 会員

正会員 本道幼・小・中・高・その他これに準ずる学校の教職員

賛助会員 本連盟の目的に賛同するもの

4. 組織

本部 本連盟の本部は札幌におく。

支部 本道各地に支部を置き、会員は原則としてこれに所属する。

5. 構成及び任務

1. 役員

委員長 1名 本連盟を代表する

副委員長 若干名 委員長を補佐する

会計監査 2名 会計の監査をする

2. 委員

支部委員 支部2名 支部を代表する

常任委員 若干名 本連盟の運営に当る

顧問 連盟の重要な問題につき意見を述べる

6. 選任

委員長、副委員長、会計監査は総会で選出する。

- 支部委員は支部で選出する
- 常任委員は委員長の委嘱による
- 顧問は総会において委嘱する

7. 任期

役員および委員の任期は1ヵ年とする。但し重任を妨げない。

8. 会議

- 総会 必要に応じ開催し、連盟の組織及び運営につき協議する。
- 常任委員会 役員及び常任委員をもって構成し、連盟の事業を執行する。

9. 会計

本連盟の会計は、会費・事業収入及び寄附金により執行する。

会費 正会員は1人年額1,000円を納入するものとする。

10. 事務局

- 事務局は事務局長在勤の学校におく。
- 事務局に次の5部をおく。
庶務会計・広報・渉外・研究・事業
- 事務局長は常任委員中より委員長が委嘱する。

11. 年度

本連盟の事業並びに会計年度は5月に始まり翌年4月に終わる。

規約の改廃

本規約の改廃は総会の決議による（昭和49年5月3日改訂）。

12. 附則

本連盟と接触を希望する全道各地の研究団体（美術サークル）は年額2,000円の連絡費を納入する。

第39回全国造形教育研究大会

旭川大会 大会役員

第36回全道造形教育研究大会

★大会委員

●大会名誉顧問

旭川市長

坂東 徹

●大会顧問

北海道教育委員会教育長

植村 敏

北海道教育庁上川教育局長

永田 春男

旭川市教育委員会教育長

村田 吉雄

北海道国立幼稚園教育研究会会長

岩田 純治

社団法人北海道私立幼稚園協会会長

菅原 孝悦

北海道社会福祉協議会保育協議会会長

水岡 薫

北海道小学校長会会長

井内 利道

北海道中学校長会会長

林 信次

北海道高等学校長協会会長

小林 純幸

旭川市教育研究会会長

村田 正一

社団法人北海道私立幼稚園協会旭川支部支部長

梅田 雪嶺

旭川市民間認可保育所連合会会長

中野 友作

旭川市小学校長会会長

猪股 照栄

旭川市中学校長会会長

山上 浩道

上川地区高等学校長協会会長

井上 裕司

旭川市PTA連合会会長

水本 昇三

●大会参与

北海道教育庁学校教育部長

林 安俊

北海道教育庁上川教育局次長

大屋 勝美

旭川市教育委員会学校教育部長

林 徹男

旭川市立緑が丘小学校長

横田 吉次夫

旭川市立緑が丘中学校長

小林 信夫

●大会会長

北海道造形教育連盟委員長

森川 昭夫

●大会副会長

全国造形教育連盟委員長

鷹野 改三

全国造形教育連盟副委員長

種市 誠次郎

★大会運営委員

●大会運営委員長

北海道造形教育連盟副委員長

柳原 寿夫

●大会運営副委員長

全国造形教育連盟事務局長

鈴石 弘之

北海道造形教育連盟副委員長

松島 輝男

"

秋山 修世

"

豊島 豊

"

早弓 弘行

北海道造形教育連盟事務局長

佐藤 吉五郎

	旭川市立青雲小学校校長	松 浦 正 美
	旭川市立柏台中学校校長	大 谷 勝 美
	旭川市立富沢小学校教頭	川 島 信 也
●大会運営顧問	北海道教育庁上川教育局指導主幹	大和田 俊 典
	北海道教育庁上川教育局管理課長	沢 田 尚 尚
	北海道教育庁上川教育局指導課長	林 修 一
	旭川市教育委員会学校教育課次長	青 山 弘
	北海道造形教育連盟顧問	朝 倉 力 男
	"	泉 秀 雄
	"	上 象 雄 也
	"	伊 藤 将 夫
	"	遠 藤 久 男
	"	高 橋 栄 吉
	"	辻 悦 平
	"	和 田 芳 郎
	旭川市立緑が丘小学校教頭	窪 田 規 矩 夫
	旭川市立緑が丘中学校教頭	安 部 堯 哉
	社団法人北海道私立幼稚園協会 旭川支部事務局長	伊豆田 晴 輝
	社団法人北海道私立幼稚園協会旭川支部 造形教育研究大会連絡委員長	本 田 清
●大会運営委員	北海道教育庁学校教育課小中学校課主査	青 野 昌 勝
	北海道教育庁上川教育局義務教育指導班主査	田 辺 光 保
	北海道教育庁上川教育局義務教育 指導班指導主事	渡 部 稔
	旭川市教育委員会学校教育課学務課長	三 木 稔
	旭川市教育委員会指導室主幹	遠 藤 隆
	" 指導主事	大久保 正 義
	旭川市教育研究会事務局長	阿 地 政 美
	北海道造形教育連盟庶務部部長	鹿 島 健
	" 広報部部長	伊 藤 英 世
	" 研究部部長	金 井 秀 男
	" 事業部部長	白 井 圓 毅
	" 事務局次長	船 着 昭 弘
	" "	加 藤 五 十 和
	" "	土 岐 植 次
	北海道造形教育連盟旭川顧問	小 田 栄 作
	"	森 田 喜 昇
	"	岩 間 昇 隆
	"	西 村 隆 彦
	"	小 林 福 二 夫
	"	岡 部 正 治
	旭川市教育委員会	今 野 正 繁
	上富良野町立江鏡小学校校長	沢 繁 雄

美深町立厚生小学校校長
 札文町立内路小学校校長

首藤 薫
 小嶋 与志夫

●会計監査 北海道造形教育連盟監査 一ノ戸 信夫
 " 吉田 義精
 北海道造形教育連盟会計部部長 佐々木 理温

●大会実行委員長 千葉 豊治 (聖園中)

●大会実行副委員長 四十物 明紀 (向陵小)

●大会事務局

・事務局長 波多野 恭輔 (神居東中)
 ・事務局次長 古屋 栄隆 (緑が丘中) 重山 惠 (光陽中)
 中西 清治 (西神楽中)
 ・総務部 古屋 栄隆 (緑が丘中) 杉山 徹 (啓北中)
 小倉 孝 (神楽岡小) 長尾 教逸 (南高)
 ・庶務部 重山 惠 (光陽中) 鳥本 捷夫 (光陽中)
 山科 瑞穂 (春光小)
 ・会計部 中西 清治 (西神楽中) 森 孝子 (朝日小)
 川村 由美子 (千代田小)

●研究部

・研究部長 飯塚 礼二 (末広小)
 ・研究副部長 角 邦雄 (近一小) 弘田 洋子 (豊岡小)
 、大口 優 (永山中) 及川 輝夫 (永山南中)
 ・研究部員 宮下 林 (高台小) 高橋 貞一 (東町小)
 黒沢 宏光 (聖和小) 紙谷 恒 (春光小)
 新井 好恵 (旭三小) 青柳 明雄 (啓明小)
 吉永 一江 (近二小) 大河内 英明 (神居小)
 神田 耕治 (忠和小) 木村 典義 (附属小)
 宮本 義明 (永山東小) 伊藤 有為男 (神居小)
 長瀬 優 (千代田小) 桑間 ひとみ (北光小)
 宮崎 晃 (緑が丘小) 市野 惠美子 (神居小)
 佐藤 修司 (近文小) 土屋 るみ子 (千代田小)
 、高野 亮 (緑新小) 石垣 廣 (永山小)
 、青木 新治 (豊岡小) 松藤 浄治 (末広北小)
 加藤 玲子 (北光小) 新井 絹惠 (知新小)
 根本 正昭 (忠和小) 長田 和代 (日章小)
 牧野 和夫 (東明中) 入井 峰生 (東陽中)
 寺原 実 (北郡中) 原 完 (旭川中)
 、山理 利春 (附属中) 吉本 博二 (神居中)
 川口 裕平 (東光中) 本間 篤 (北門中)
 氏本 利光 (東陽中) 一戸 義徳 (永山南中)
 加藤 隆 (六合中) 品田 潤 (東陽中)
 菅原 敏光 (永山中) 大槻 茂 (東光中)

坂野潤治 (春光台中)	飛弾野弘尚 (東明中)
川合 薫 (旭二中)	小木正勝 (聖園中)
吉田一雄 (明星中)	宮崎 弘 (北門中)
橋詰忠晴 (東高)	西田武文 (藤高)
川口幸和 (西高)	秋元百合子 (大谷ひかり幼)
篠嶋聡子 (旭川こぼと幼)	前田由紀子 (旭川こぼと幼)
小原啓子 (ユリアナ幼)	高橋由美子 (ユリアナ幼)
大西恵子 (ユリアナ幼)	飯沢ちず (神楽幼)
山内悦子 (神楽幼)	新徳弥世生 (神楽幼)

●編 集 部

・編集部長	鈴木俊昭 (緑が丘中)	工藤 齊 (青雲小)
・編集副部長	伊藤順治 (正和小)	側 香代子 (永山東小)
・編集部員	玉手稔唯 (千代岡小)	板橋正吾 (愛宕東小)
	門脇元 (東光小)	増田正子 (神居東小)
	本間慧子 (愛宕東小)	本田 隼子 (藤高)
	三上瑞代 (北鎮小)	飯野 絹江 (東光幼)
	長谷川貴恵 (ひとみ幼)	

●事 業 部 長

・事業部長	小杉正典 (北都中)	曾我部 豊 (近文小)
・事業副部長	氏家 貞 (北光小)	鈴木茂雄 (近文小)
・事業部員	太田哲嗣 (北鎮小)	松原博子 (豊岡小)
	森 智春 (青雲小)	大谷伸也 (永山南小)
	大沼勝子 (永山西小)	坂本 幸 (東光小)
	石道恵智子 (旭三小)	高橋キク (末広北小)
	鳥井アヤ子 (東光小)	菅 導信 (光陽中)
	垣内寛子 (日章小)	銀治川 明 (雨粉中)
	土屋 誠 (神楽中)	山本理絵 (つくし幼)
	五十嵐一之 (常盤中)	北浦 つぐみ (あゆみ幼)
	平田和也 (竜谷高)	
	喜多山弘子 (大雪幼)	
	山中 実 (ふたば幼)	

●会 場 部

・会場部長	関 秋 宏 (啓北中)	沢田 透 (東光中)
・会場副部長	宮川 昭 雄 (北星中)	鈴木光雄 (緑が丘中)
	中沢 晴 夫 (緑が丘小)	児玉恒子 (向陵小)
・会場部員	小田島 昭 夫 (向陵小)	渡辺ひろ子 (正和小)
	沢崎友佳理 (新町小)	菅原 茂 (高台小)
	福井洋子 (東五条小)	長谷 良 (東町小)
	羽田義正 (近一小)	伊藤久栄 (永山南小)
	阿部英子 (永山小)	小川 修二 (神楽小)
	木村悦子 (千代田小)	村住久恵 (神楽岡小)
	飯田英雄 (愛宕東小)	本田 幸市 (神楽中)
	酒井 清 (聖園中)	

山 野 昭 人 (旭川盲)	清 水 啓 造 (啓北中)
佐 藤 稔 (神居中)	長 野 晃 見 (神居中)
齊 藤 健 昭 (東 高)	佐 藤 範 夫 (旭大高)
小 柳 静 子 (せつれい幼)	平 尾 千 賀 子 (あすなろ幼)
佐 藤 公 文 (めいほう幼)	内 越 弘 子 (さかえ幼)

会場校 旭川市立緑が丘小学校

前 田 曉	越 智 昭 典	福 原 正 豊
丸 山 和 恵	浦 島 正 浩	菊 地 幸 子
佐々木 洽 子	山 川 昭 吾	野 尻 股 昭 夫
庄 司 玲 子	納 谷 佳 子	猪 股 中 憲 三
齊 藤 大 洲	古 川 実 保 子	山 岡 元 邦 久
遠 藤 敏 明	三 上 裕 愛	岡 大 森 井 睦 郎
紙 谷 亭 亨	泉 知 久 仁 夫	福 岡 信 隆 恵
宮 崎 晃 明	志 佐 藤 育 子	岡 菅 原 信 修
渋谷 英 行 男	山 本 博 志	菅 原 重 雄
高 菅 純 子	浜 田 博 志	中 齊 木 賀 生
五十嵐 幸 男	佐 久 間 街 孝 子	山 崎 木 賀 フ 康 弘
与 坂 加 奈 女	高 橋 正 明 子	鈴 伊 佐 高 平 横 千 八 小 百 合 中 山 入
道 藤 恭 可 子	長 谷 川 津 輝 陽 子	伊 佐 高 平 横 千 八 小 百 合 中 山 入
土 井 早 苗 子	関 井 浦 三 子	伊 佐 高 平 横 千 八 小 百 合 中 山 入
大 幡 惠 子	三 浦 田 智 夫 子	伊 佐 高 平 横 千 八 小 百 合 中 山 入
河 野 聖 子	松 田 智 成 子	伊 佐 高 平 横 千 八 小 百 合 中 山 入
山 上 優 子	伊 藤 高 茶 平 子	伊 佐 高 平 横 千 八 小 百 合 中 山 入
飯 塚 由 利 子	高 田 木 沼 智 美 昭 敦 佳 陽 子	伊 佐 高 平 横 千 八 小 百 合 中 山 入
浜 元 裕 子	平 沼 智 美 昭 敦 佳 陽 子	伊 佐 高 平 横 千 八 小 百 合 中 山 入
小 林 惠 子	平 沼 智 美 昭 敦 佳 陽 子	伊 佐 高 平 横 千 八 小 百 合 中 山 入
小 野 沢 久 美 子	五十嵐 井 木 内 野 子	伊 佐 高 平 横 千 八 小 百 合 中 山 入
河 部 弘 子	竹 井 木 内 野 子	伊 佐 高 平 横 千 八 小 百 合 中 山 入
坂 本 惠 美 子	酒 谷 内 野 子	伊 佐 高 平 横 千 八 小 百 合 中 山 入
木 戸 幸 子	谷 内 野 子	伊 佐 高 平 横 千 八 小 百 合 中 山 入
小 林 舞 美	鹿 野 子	伊 佐 高 平 横 千 八 小 百 合 中 山 入

旭川市立緑が丘中学校

鎌 田 和 古	伊 藤 昭 二 郎	海 藤 芳 春
梅 津 担 司	関 地 衛 幸	近 堀 勝 美
斉 藤 四 郎	畦 藤 健 三	堀 堀 常 美
木 村 隆	斉 藤 健 三	堀 堀 常 美
伊 藤 武 昭	長 岡 保 一 夫	高 古 武 荒 藤 青
鳥 田 昭 雄	久 保 井 藤 重 彰	高 古 武 荒 藤 青
小 林 武 雄	玉 井 藤 重 彰	高 古 武 荒 藤 青
森 田 イクエ	佐 藤 本 保	高 古 武 荒 藤 青
羽 柴 修 茂	橋 中 保	高 古 武 荒 藤 青
五十嵐 茂	中 保	高 古 武 荒 藤 青

岩松源宮中五長佐浦美岸八田久海	田浦訪本田嵐川木生馬上沢村保藤	秀睦純敏靜祐二裕延出昭敦孝	敏稔薰子子夫枝子子江子子江	青山和北平米今小野阿坂高中河草	戸内田川岩山田山沢部井杉田村野	惠昭英百合真和セツ喜士敬紀淳博とも	子一子美二子江郎子江子子子	高安哇松広大後芝小青富横長	橋藤内井瀬窪藤本浜柳堅井尾	英恵和裕玉佳清恵幸勝敬恵	城子薰子子栄代子子子子子子
-----------------	-----------------	---------------	---------------	-----------------	-----------------	-------------------	---------------	---------------	---------------	--------------	---------------

昭和

新刊

第39回全国造形教育研究大会
第36回全道造形教育研究大会

旭川大会

発行者 大会運営委員長 柳原寿夫
大会事務局 旭川市立聖園中学校
発行年月日 昭和61年8月1日
印刷所 株式会社 総北海
旭川市神楽岡14条5丁目

